
誰が為に、鐘は鳴る。

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が為に、鐘は鳴る。

【Nコード】

N5915Y

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーン。その片隅に『冒険者』と呼ばれる人種が集まる店『リバイベル』がある。金貨五枚で人殺しを請け負ってくれるこの店に来客が来た夜、グロウリイドーンの夜に鐘が鳴り響き、『褐色の幽霊』が現れる。奴隸、英雄、魔物……そして、王。全てをスタイアの剣が断ち斬る。「まんず、まず、斬りに行くのか」

第1章 『最も弱き者』 1

夜空を覆った雲が静かに雨を落とす。

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーンを静かに霧の中に沈め、路地をふらふらと歩く少女を叩く。

目深に被ったフードの先から水滴がしたり、その水滴の向こうに酒場の明かりが見えた。

酒場の明かりの上に立てかけられた古びた看板にはリバティベルと描かれている。

じんわりと明るい光の中から、雨を抜けて喧噪が柔らかく響く。

雨に追い立てられ人気の無くなった町の静けさの中、その喧噪が妙に暖かく聞こえた。

少女は吸い寄せられるようにリバティベルに入ってゆく。

ドアがキリキリと音を立て、鐘が鳴る。

活気がある、といえば聞こえはいい。

冒険者と呼ばれる人種が集まる酒場は大概がこんなものだ。

響き渡る下卑た笑い声に、カップが打ち合わされる音が混ぜられ反響する。

「リバティベルへようこそ」

店主が力なくそう告げるが少女は目もくれずに店の奥へと歩を進める。

店主はその後ろ姿をほんの少しだけ見つめると、また、黙々と食器を運ぶ作業に戻る。

少女はちらりと後ろを見てその姿を確認すると冒険者の背中にぶつかりながらテーブルの間を縫うように歩く。

少女の纏った汚れた外套は悪臭を放っていたが、冒険者が集まる

店では気にはならない。

むしろ、新品を誇らしげに使っているのは仕事をすれば汚れることを知らない駆け出しの冒険者と見られ、稼げる仕事を斡旋してもらえない。

だが、少女はたまたま着られる服がそれだけしかなかっただけで選んだわけでもなく、また、仕事をもらいに來た冒険者でもない。仕事が無いから泥棒をしにきたのだ。

店の中を素早く見て、獲物になりそうな人間を捜す。

店の奥で強い酒気を放ち、寝ている男が居た。

少女はその男に決めると歩み寄る。

男の腰にぶら下げられた袋を奪うと自分の懐に入れる。

男が僅かに身じろぎし、心臓を掴まれたような悪寒が背筋を走った。

だが、男がそれでも起きることなく寝返りを打つのを見て少女は胸をなで下ろしそそくさとその場を離れる。

怪しまれないように誰かを探す素振りを装い、テーブルの間を抜ける。

店の入り口まであと少しというところで、誰かに襟首を掴まれた。

「誰かを探しているんですかね？」

店主の男だった。

よく見れば、まだ若い。

がしかし、だらしなく曲がった背中と、力なく落ちた肩、どこかとぼけた顔が貧弱な印象を与える。

だけど、自分を片腕で吊り上げる膂力はそれなりに鍛えているものだとわかる。

少女の心臓が早鐘のように鳴り響き、口の奥がからからに乾く。

「少し、待って見た方がいいですよ。うちのお客さんは僕と一緒に

でルーズな人が多いからね」

店主は少女の襟首を掴んだまま、カウンター席に運ぶ。
堅い椅子に半ば無理矢理座らされた少女は、自分のやったことを
咎められるのではないかと気が気ではなかった。

「お腹も空いてるでしょう。何か食べていくといい……ラナさん。
なんか作ってくださいな」

店主は少女の隣にどっかりと座り込むと、厨房の奥に視線を走ら
せる。

厨房の奥から不機嫌そうな顔をした女性がパスタの盛られた皿を
持ってくる。

少女の前に置かれたパスタが湯気を立て、バターの匂いが少女に
空腹を思い出させた。

ここ三日、食事にはありついていない。

人の家の瓶に入った水を舐めるように飲む日々で、食事らしい食
事をしていなかった少女には安酒場の食事でも凶暴なまでに食欲を
そそられた。

危つく手を伸ばしそうになって、店主の方を見てしまう。

「おごりらしいですよ？シャモさんの」

店主の隣に、いつの間にか先程の酔客が座っていた。

「なんでえ、俺のおごりなのかよ」

未だ酔いの抜けきっていない鈍い瞳をじろりと店主に向けて酔客
シャモンはカウンターにだらしく肘をついた。

汚れた金髪に褐色の肌、無精ひげの並ぶ顎の上にけだるげな瞳が

酒気を帯びている。

「そこは、それ、なんだ。あれだ。可哀想な浮浪少女がお腹を空かせてお店に入ってきた。おじちゃん泥棒されていることに気がついてても気がつかないフリをして優しさを世知辛い世の中に伝え たつてのに、スタさんはそこから巻き上げるのかい？」

「あれ？そのお金で何か食べなさいって意味じゃなかったんですか？」

「そういう意味だけど、そこはあれだろ。こう、スタさんが温情かけて黙って何かを差し出すのが粹って奴だろっ？」

「こっちも商売ですからねえ」

「商売？商売つつったか？冗談だろ？客に飯作らせて食べてる店主に商売っ気なんかあるわけないだろうに」

店主は面白そうに笑うと Pasta にフォークを伸ばす。

店主 スタイア・イグイットもだらしなくカウンターに肘をつくとくずると音を立てながら Pasta を飲み込んだ。

「まあ、冷めないうちにどうぞ」

先程、ラナ、と呼ばれた女性がカウンターにスープを並べていく。シャモンはそのスープの中に Pasta をくぐらせてくちやくちやくと食べはじめ。

少女はそこで、ようやく、自分が施しを受けたのだと気がついた。

「ふざけんな！」

少女がカウンターを叩き、食器が浮く。

「喰え」

憤る少女の鼻先にフォークをつきつけてシャモンは低く言った。

「……立場を選べるのは強い者の特権だ。弱いモンが何言っただとここで、それがどうしたって言われるだけだ」

そう言っただけで、パスタをまったくちやくちやと食い始める。

少女の鼻頭が熱を持ち、視界を歪ませる。

少女は手づかみでパスタを口に詰め込むと、咀嚼せずに飲み込む。ひたたくるようにシャモンとスタイアのスープを引き寄せると飲み干そうとして熱さに咽せる。

「皿に足が生えて逃げるわけでもあるまいに」

スタイアは苦笑し、背中をさするがその態度が少女の癪にさわった。

詰め込むだけ詰め込むと、ラナが店の奥から冷えた果汁を持って来たのを奪い、一気に嚥下する。

飛び跳ねるように、椅子を降りると少女は店の入り口で鋭く二人を睨みつけて吠えた。

「お礼なんか言わないしお金だって返さないからね！た、頼んだわけでもないし！」

「辛い目にあってきたのは見ただけでわかる。腹が減ったら来なさい」

スタイアにそう言われて少女はぐつと鼻頭が熱くなったが叫ぶ。

「……っ、ばーか！ばーか！もう二度とこんな店来るか！」

ドアについた鐘が激しく鳴り響き、少女は再び雨の中に消えてゆく。

店の中の誰もが気には止めていない。

いや、気に止めている者も居たが声をかけるようなことはしなかった。

喧噪に紛らわせてはいるが、ここに居る誰もが厳しい中で生きている。

それらは決して、人が背負えるものではなく、自分で背負っていかなばならない。

自らの重荷に人の重荷を乗せるのは難しい。

「世知辛いモンですねえ」

何かを代弁するかのようにスタイアはそう呟いた。

ラナが新たに持ってきたエールを傾け、酒気の混じった吐息を落とす。

「……国は栄えたとはいえ、あんな子供が居るつてのはやりきれないですねえ。まだ、親に甘えたい年頃でしょうに」

シャモンは苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

「あんまし、背負い込むんじゃねえよ。全部を背負えるだけ、人間の背中つてのは丈夫じゃねえだろ。時折手を貸してはやれるが全部を背負っちゃえば、全部を背負わせようとするのもまた人間の浅ましいところだぜ？」

スタイアは苦笑する。

「僕が子供の頃は奴隷制度つてのが残ってましたよね。あれはあ

れで酷いものなんだけど……それでも生きていくだけならいいものだっただけでしょうねえ」

「解放した奴隷の受け入れ先が無いから冒険者制度なんてモンをつくったんだろう？魔物の被害が多くなったのもあったから、働く場所が無い連中に組合はおるか騎士団、教会、王立大学、国の専門機関が広く技術を解放してその対策に当たらせる」

「大人はいいですよ。いくらでも働ける。だけど、いつだって時代のあおりを喰うのは子供達なんですよ」

スタイアはそれだけ言うと、席を立ちエプロンを付ける。

「なんだよ。もう終わりかよ。付き合わないのか？」

「野郎と二人雁首揃えて飲んでも面白くないでしょうに。仕事しますよ仕事」

「ウエストグローリイロードの裏通りに新しいランパブができてな？ジェリカちゃんって娘がいいおっぱいしてんだよ。おごるぜ？」

「わかりましたよ。揉みに……じゃなかった揉みにいきましようか」

付けたエプロンをカウンターに掛けて店を出ようとするスタイアにラナが黙って袋を投げつけた。

後頭部に重い音を立てて当たった袋は地面に落ちて、銅貨を床にいくつかばらまいた。

「わおう。そっぴやシャモさんお金全部あげたんだっけ？」

「しまった！お釣り貰っておくべきだった！」

ラナは大きな溜息でもって返した。

第1章 『最も弱き者』 2

ヨッドヴァフ王国。

ヨルゲン大陸の東側に位置し北にアブルハイマン山脈、東に大海洋、南にヨシユ砂漠、西にコルカtas大樹林が存在する。

他国の侵略を受けづらい地形に守られ、広い領土を有する国で主に外洋を通じて他国との通商を行い、発展を遂げてきた。

比較的温暖な気候であり、農牧が盛んな平原地帯を含め、鉱物資源をアブルハイマンに求めることができ、豊かな国力を誇っていた。通常、他国からの侵略を受けづらい国家というのは発展しづらい。戦争は国力を疲弊させるが技術を発展させる。

国民は他国に侵略される危機感に国の軍備拡張と技術発展を許すが、平時においてはまずその生活を豊かにすることを望む。

ヨッドヴァフ王国が国同士の戦争をすることなく大国となったのには理由がある。

魔物の存在だ。

コルカtas大樹林の奥に存在する秘境やアブルハイマン山脈の奥にある『秘境』と呼ばれる未踏の地で独自の進化を遂げた動物達。これらは既知の動物らより遙かに高度な身体能力と知能を持ち、その生息域を人里に近い場所まで広げてきた。

この魔物の被害を食い止める為にヨッドヴァフ王国は軍隊を持たなければならなかったのだ。

「とはいえ、王都の騎士団ともなると暇なモンですよね」

正午の鐘が鳴って、まだ間もない時間である。

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドンの第七騎士団詰め所の騎士団長執務室のソファの上でスタイアは欠伸をした。

「なら、一つ、スタさんが部隊を率いて魔物討伐に行ってくれと助かるんだけどね？」

アーリツシュ・カーマインは騎士団に要請された任務を優先度順に選り分け、どの部隊を当たらせるかを一通り起案したものを羽ペンで海草紙に書き記すと欠伸をかみ殺すスタイアに苦笑した。

長い黒髪の上に、鋭い瞳を持つ凜々しい青年である。

職務中にも銀色の甲冑を着込む生真面目さは、隣で鎖で編んだ鎧下だけを無造作に着込んでいるスタイアとは正反対の印象を与える。

「嫌ですよ。それに、僕は準騎士ですよ？まさかよもや正規の騎士さん達を僕なんかが率いたら怒られちゃうじゃないですか」

「階級に拘るのは平時だからだよ。戦場に立てば本当に必要なのは勝つための力だけだということをみんな知ることになる。必要なら正騎士への申請をしておくが？」

「アっちゃんも酷いですねえ。正騎士になると途端に色々面倒な仕事が増えるんですよ？その上給料も殆ど準騎士と同じ。昇進したがる人の気がしれないですよ」

「準騎士はいつだって解雇できるんだ。それに、戦場に立てば真っ先に先陣を任されるのも準騎士。それはそれで楽しいさ」

スタイアはアーリツシュのしたためた書状を受け取ると、中身をチェックする。

「今が楽なら、それでいいじゃないですか」

ろくすっぽ中身を見ずに書類を返し、スタイアはまた欠伸をした。

「あなたがそのような態度だから、騎士の規律が乱れるんです」

騎士長室のドアが開き、厳しい叱責がスタイアに投げられた。

「おんや、フィルさんじゃないですか。一発やりませんか？」

「どこの国の挨拶ですか。恥を知りなさい」

スタイアが締まりの無い顔に喜色を浮かべて身を乗り出す。

フィルローラはそんなスタイアを見下すようにして鼻を鳴らした。膝の裏まで伸びた綺麗なブロンド、芯の通った目鼻筋、不機嫌に歪められてこそいるがヨツドヴァフでは指折り数えた方が早い美人だ。

教会司祭の僧衣を纏い、清楚な佇まいの芯に強さを見せる魅力を持っている。

「珍しい。来ないようだったら教会まで見に行こうかと思つてたところでしたよ。ふっふふ」

「私は見世物じゃありません。用も無いのに教会まで来られても困ります」

「いやいや、美人という神に信仰を捧げるのは立派な用件だと思いますよ？親となり、子を作り、その巡り会いを作られた神の奇跡に感謝する。どうです？一発やりたくなりませんか？」

「そんなことだから、いつまでたっても入門を許されない平信者なのです」

「だって教会の戒律ってしちめんどくさいじゃないですか」

肩で笑うスタイアにフィルローラは溜息をつく。

「して……どうしてまたこんなところに」

「いえ、教会と騎士団で合同調整中の案件についてですがタグザ隊とシルヴィア隊のいずれかを編入させたいと思いますして。アーリッシュ騎士団長のご意向を伺いに来ました」

「結論はどちらでもいい。がしかし、スタさん。あえて聞くけど、スタさんならどっちの部隊を入れる？」

「入れるつつたつて、どっちもおっぱい小さいし、僕らから比べれば子供じゃないですか。入れるに入れられませんか」

スタイアが面倒くさそうに答えると、また、騎士長室の扉が開き、物々しい騎士装束を纏った少女が現れた。

「胸の大きさと腕の善し悪しとは関係なかるうがっ！」

開口一番怒鳴りつけたのは褐色の肌に金色の髪をなびかせた聖堂騎士のタグザだ。

「おわあ！居たなら居たと言えばいいのに。全くわかりませんでしたよ。まるで、あなたのおっぱいと同じくらいわかりませんでした」

「甲冑のせいで判らないだけだっ！きちんとあるべきところにある！眼を開いて良く見てみるがいいっ！」

「神は言った。『正しき姿は見ようとする者には見えない。真に正しき姿は常に己の胸にのみぞある』」

神妙に告げるスタイアに今にも斬りかかりそうなタグザの肩を引き、氣勢を削いだのはその後ろに立っていた少女だった。

「……相変わらずですね。スタイア隊長」

「うっわ、ちっぱい二号も居たんですか」

ちっぱい二号と呼ばれた少女は怒ること無く小さく会釈する。

「この度、騎士団並びに聖堂騎士の業務統合に派遣されました。

シルヴィア分隊長長のシルヴィア・ラパットとタグザ・ウィンブルグです」

シルヴィアは緩やかに毛先の巻かれた金髪と白い肌の美少女ではある。

だが、どこか暗い瞳が冷たさを感じさせる。

「なにになに？なんでこの二人が来てるんですか？アっちゃん、僕聞いてないですよ？」

「言ってないからな」

アーリツシュは屈託なく笑うと、傳く二人に笑みを向けた。

「バルツホルドの戦い以来の聖堂騎士の勇士が今回の業務統合に加わってくれるとは頼もしい。早速だが、我が第七騎士団は現在、組織的な奴隷商の実態を把握しこれを壊滅せんとしている。奴隷の保有はいかなる理由があっても律法は許してはいない。また、君らが信仰する神も人が人を隷属させることを許してはいない。これらを滅する為に力を貸してはくれないか？」

「タグザ隊が」

タグザが前に進み出た。

「任せる。ダーツ正騎士長の指揮下に入り、委細を受けてくれ」

心得たとばかりにタグザが会心の笑みを浮かべる。

一人話題に取り残された形となったスタイアは二人の顔を交互に見つめる。

「ねえねえアっちゃん。どういうことだい？」

「騎士団と教会の保有する聖堂騎士は指揮系統こそ、それぞれ国王直下と教会と異なるけどその業務については重複するものが多い。だから統合しようという話があつてね。試験的に聖堂騎士の受け入れを第三騎士団と第七騎士団で行うことになったんだ」

「へえ、そうなんだ。聖堂騎士って女の子多いから楽しみだねえ。どおれ、どの子から手をつけようかなあ。へっへっへ」

「そうもいつてられない。既存の部隊との業務割り振りやら編入手続きで忙しくなる。それらをやりやすくするため彼女らの階級は聖堂騎士のそれをそのまま準用するから士長扱いになることが決まっているんだが」

「げげ」

タグザが得意げな顔でスタイアを見下す。

「そういうことだ。口の利き方に気をつけたまえ。準騎士殿、私はここでは士長扱いになる。準騎士と士長では間に準騎士長、正騎士と二つ階級が違ふことになる。次に私を侮辱しようものなら縛り首にしてやるからな？」

アーリツシュは苦笑し、シルヴィアに向き直った。

「シルヴィア隊は予備役として市街巡回の任についてもらうが騎士団と聖堂騎士では勝手が違うだろう。その暇そうな奴を使ってくれ」

ソファから飛び起きてスタイアが驚く。

「ひつど！アっちゃんと僕の仲じゃないか！もちつと楽しさせてくださいよ」

「だめです」

その襟首を掴んだのはシルヴィアだった。

「どうせ言われなければ働かないような人なんですから、馬車馬のように使ってやりたいと思います」

フィルローラがくすくすと笑った。

「いい気味です。これを機に勤勉に国家国民の為に奉仕するといふ騎士の大義を思い出すべきです。そうすれば神もきつとあなたの信仰心をお認めになりますわ」

アーリツシュはいたずらめいた笑みを浮かべて告げた。

「シルヴィア君、さっそくその穀潰しを連れて市街巡回に行ってくれ」

「了解しました」

「いや、ちょ、僕はこれから新しく来る聖堂騎士団からスタイル……じゃない、筋のいい子をみつくるってベッドの上で剣術指南するという重要な任務が……」

「そうですか、ならば、スタイア隊長の剣術の手ほどきをまず、隊長の私が受けてこそ他の部隊員にも示しがつくというものですね。稽古場でもベッドの上でもどちらでも倒れるまで相手をしてください」

「流石に僕もちっぱいは……」

ぐだぐだと言いつにすらなっていない言い訳を述べるスタイアの首根っこを引っ張りシルヴィアが騎士団長執務室を後にする。

「……忙しくなりそうだな」

「でも、聖騎士と騎士団がその業務を分担できれば治安維持を図る上での足りない人手についての問題は解決します」

「騎士団の権益を侵されることにより、聖堂騎士との大なり小なり衝突は起こる。今のがいい例だ」

眉を潜めるアーリツシュにフィルローラは訝しむ。

「アーリツシュ卿は業務統合について反対なのですか？」

「大いに賛成だ。だからこそ第七騎士団で引き受けた。がしかし、問題はそこじゃあない」

苦笑し、懊悩を仕舞い込むスタイアにフィルローラは一抹の不安を覚える。

「どういったことに心を悩ませていらっしゃるのでしょうか？よろしければお聞かせ願えますか？」

「この国は多くの問題を抱えている。奴隷解放戦役を経て未だ解決されない奴隷問題、広がりすぎてそれが当たり前となっている貧富の格差。それらが作る階級意識が産む差別。今はそれでも不満無くやっていける。がしかし、国家百年を案じた時、それらは全て国を停滞させ、不利益しかもたらさない」

書類に署名を終えたスタイアは一息つくとも頭を押さえて溜息をついた。

「……こういう考え方は危険かな？」

「神意に悖れば危ういですが、真に民草のことを思っただけなら、それは間違いは無いかと」

「強く、あれ、それが騎士也、か」

スタイアの苦笑はどこか悔しそうだった。

「どなたの言葉ですか？」

「スタイアの言葉だ。続きがあつてね。精神的に打たれ強ければ大概のことはどうにかなるから、どうでもいい。シンプルでわかりやすいから僕も良く使うようになってしまったんだ。彼の中じゃあ、世の中はそのくらいシンプルなんだろうさ」

「まあ」

フィルローラが驚く。

「まったく。信じられません。あの人は騎士としての秩序をないがしろにしています。ヨッドヴァフの栄えある騎士団の一員としての誇りを持って戴きたいものです」

アーリツシュは小さく、だが、はっきりと告げた。

「秩序があるから守るのではない。守るべきものがあるから規律があり、秩序が生まれる。それを正しく知り、そして行える騎士は果たして何人居るのだろうか」

「え？」

「彼の名誉は僕の名誉でもある。僕の親友の悪口を頼むから彼の居ない場所で僕に言わないで欲しい」

第1章 『最も弱き者』 3

グロウリイドーンは中央にグロウリイハイムを置き、東西南北に主要道路であるグロウリイロードが延びる。

北に工業区、東に住宅街、南に繁華街、西に商業区と区分けされ、それらを高い城壁が囲う形となっている。

城壁内部はひしめき合うように立てられた石材の建物の間を石を敷き詰めて造られた道が縦横に走り、主要道であるグロウリイロードに通じる。

ヨッドヴァフ首都が遷都する際に、区画整備され計画的に作られたことから大きくこの形を取ることとなり、それは今でも変わらない。

「だけど、その後に首都に住むことになった人は城壁の外に住むしかなかったんだよねえ」

城壁の外にはいわゆる貧民街が広がっており、人の靴の底が作った道と木材で組まれたあばら屋が乱立していた。

スタイヤとシルヴィアは貧民街に軒先を並べるマーケットを歩いていた。

「……聞いていた巡回経路と違うようですが」

首都に集まる人間でこった返す人混みは城壁内の繁華街の比ではない。

油断すれば帯皮に吊り下げた武器すら奪われそんな人の波だ。

「城壁の中なんか歩いてたって退屈でしょう?……騎士が本当に歩かなきゃならないのはいつだって外さ」

スタイアは人混みの中を楽しそうに歩いている。

「お高くとまった庭園の花より、気高く咲く野原の花の方が綺麗な場合も多々あるわけでした……可愛い子、結構いるんだなあこれが」

シルヴィアはスタイアの半歩後ろを歩きながら曲がった背中を見ていた。

「相変わらずですね」

「君もね。聖堂騎士の中ではタグザちゃんと二人、頑張ってるそうじゃないか。ユロさんから話は聞くよ」

「墓守のユーロからですか」

「信用に足る男ですよ。人は見かけによらないんだ」

「私は隊長に教えていただいたとおりのことを忠実に実践しているからです」

スタイアは渋い顔をする。

「シルちゃんは相変わらず堅苦しいねえ。もう一人のちっばいみたく多少、性格を柔らかくした方がいい。それじゃあ、おっばいと一緒に潰れちゃうよ」

「それでも大分、柔らかくなったツモリなんですが」

「おっばい？性格？」

「両方」

スタイアはクツクツと笑うが、シルヴィアは笑わなかった。シルヴィアは揺れる肩を見ながら目を細める。

「スタイア隊長はどうして、正騎士の地位を捨てたんですか？」

シルヴィアの生真面目な瞳がスタイアの背中に刺さった。

「本来、アーリツシュ騎士団長の場所に居るのはスタイア隊長であつてもおかしくはないはずです。アーリツシュ騎士団長もそれを望んでいるはずです」

スタイアは苦笑を浮かべる。

「冗談でしょう？ 僕みたいなのが上に立てば規律もクソもあつたもんじゃない。正騎士になつて女の子とのいさかいを起こせば場合によつちやその場で打ち首ですよ。おっかなくてなれたモンじゃない」

「スタイア隊長はそのような無駄なことはしない人です。私も無駄な質問をして時間を無駄にはしたくはないツモりで聞いています」

切り込むように尋ねるシルヴィアにスタイアは黙る。

僅かな沈黙の後、スタイアはもう一度苦笑を浮かべた。

「人の生き方を知ろうとすることはいいことだ。だが、君は誰かに誇らしげに語れる生き方をしていると胸を張れるかい？」

シルヴィアは難しい顔をして俯く。

「……申し訳、ありません。だけど、私には納得がいきません。私はスタイア隊長の指揮下でバルツホルドを戦い抜きました。そのバルツホルドの戦いの真の功労者が何故……」

「そんなことより、仕事でもしましょうか」

スタイアはすつと目を細めて、路地の先を見つめていた。
ぼろを纏った子供が露店の軒先から金貨を入れる籠を引ったくつていた。

「またお前かつ！この泥棒猫めっ！」

店主が怒声を上げてぼろを掴み、地面に引きずり倒すと棒を手にして激しく叩いた。

跳ね上がったぼろの中から転がり出てきたのは小さな少女だった。

「ぎゃうっ！」

悲鳴に通行人の興味が一時、そちらに注がれる。

少女は悲鳴をあげながらも、籠を奪い返される前にその中の金貨を自分の口に押し込み嚥下した。

「飲み込みやがったな！吐けっ！吐けっ！」

通行人が一様に興味を失う。

シルヴィアにもその場の雰囲気だけでそれが恒常的に貧民街で見られる風景であるということを察することができた。

「あいよー、ちょっとどいてねー」

スタイアは人混みをかき分けてすると露店の前まで近づく。

「吐けと言っているだろうが！」

見せしめ、という意味もある。

店主は怒り狂った形相で少女の腹を蹴飛ばしていた。

「騎士団ですよ。状況は見ていました。あとはこっちで引き受けますが……おんやあ？」

足下で許しを請うように平伏し、震える少女にスタイアは見覚えがあった。

「あ……」

先日、店に来た泥棒の少女だ。

「ダメだダメだ！許せばこいつらはつけあがる！もう二度と盗みを働けないように指の骨を今ここで折ってやる！」

「律法の手続きを経ない私人の懲罰は、またそれも律法の裁きを受ける行為になります。今すぐその少女の身柄を引き渡しなさい」

遅れてやってきたシルヴィアが高圧的に店主を威圧した。

「こっちは喰うか喰わねえかの商売やってんだ！壁の中の人間に関係あるかってんだ！」

憤った店主が棒を力一杯振り下ろす。

「どつかで見た顔だと思ったら　痛あつ！」

少女の顔を覗き込もうとしたスタイアの頭に棒が振り下ろされ、鈍い音が響く。

激しく叩かれたスタイアの頭が地面の上で跳ねる。
流石に、騎士に手を挙げたとなって店主が青ざめた。

「え、あ！だ、大丈夫か？」

「つあああ……頭が割れるように痛い」

店主がスタイアを抱え起こす。

「騎士に手を挙げるつもりはなかったんだ。ほ、本当だ！信じてくれ！申し訳ない」

「いあいあ、今は僕が悪い。この子、どうかで見たことがある
と思ってる。僕の知ってる子なんだ」

スタイアはじつとりと脂汗の浮かんだ顔で苦笑した。

「騎士のお知り合い？なんでまた泥棒なんか」

「一度会っただけだね。まあ、旦那さんくらいの年になればわかるでしょ？」

少女は怯えたままスタイアと店主を交互に見る。

一瞬、スタイアが目を細めて少女を見つめるが、すぐに店主に向き直る。

「まあ、旦那さん。商売つてのは一つ盗られりゃ、十売らないと元が取れない。その年じゃあ、同じくらいのお子さんも居るでしょう？何度も盗られりゃ怒る気持ちは判りますが、どうか騎士団の顔も立ててやっちゃんくれませんかね？」

店主は少女とスタイアを交互に見比べて渋い顔をする。

その一瞬を好機と取ったのか少女が地面から跳ね上がるように飛んで人混みを割って逃げて行く。

「あ、こらっ！」

店主が追いかけようとスタイアがそれを手で制す。
懐から金貨を手に取り店主に握らせる。

店主は手の中に握った金貨とスタイアの顔を交互に見比べて困った顔をした。

スタイアは起き上がるとズボンについた埃を払うと僅かに首を振って苦笑だけを残す。

店主はただ黙って、小さく会釈して店の奥に引込んだ。

シルヴィアはそれだけで自分の不手際に悔しさを覚えた。

そそくさとその場を離れるスタイアの後ろに小走りで追いつき、頭を下げる。

「……申し訳ありません。私が余計な事を言っただけに」

店主がどういった生活を営んでいるのか、少女が一体どんな生活をしているのか。

片方に偏った物の見方で発した言葉が、店主を怒らせた。

スタイアは曲がった背中越しに苦笑してみせた。

「まんずまず、騎士つてのは痛い商売だから嫌いなんですよ」
「ヘルムの着装義務を守らないからです」

第1章 『最も弱き者』 4

少女は貧民街の裏通りを右に左にと走る。

叩かれた足が酷く痛む。

泥棒を見つけたらまず足を叩け。

商売をする者なら必ず耳にする逃走防止の為の格言を忠実に守られ、少女の足は真つ赤に腫れ上がっていた。

それでも逃げなければならぬ。

騎士団が下す盗みを働いた者へ科せられる刑罰は、片耳を釘で柱へと打ち付ける。

二度までは耳を引きちぎってその場を立ち去れ、三度目は打ち付ける耳が無いから縛り首となる。

今まで、捕まっても店主から激しい打擲を受けるだけで、騎士団に捕まったことは無い。

そもそも、貧民街まで出てくる騎士が居ることの方が珍しい。

貧民街に騎士が出張るのは壁の内側に貧民街を根城とする組織的な盗賊集団を壊滅させる時くらいなのだ。

時折背後を伺い、追われていないかを確認する。

その姿が見えないからといって安心していいものではない。

泥棒が徒党を組んでいる場合、騎士の中には逃げる泥棒を仲間の元まで逃がす場合もある。

その類では無いだろうが、どちらにせよ捕まる訳にはいかなかった。

路地から路地を抜け、ひたすら走り下水道へ向かう。

首都の地下に張り巡らされた下水道は一つの迷路となっており、少女のような不法の輩が逃げ込むのには格好の場所だった。

排水を遡って逃げ込めばそこまでは誰も追ってこない。

城壁から排水路に勢いよく吐き出される下水をみつけ、排水口に駆け上がる。

排水口の縁を掴み排水口の鉄格子に飛ぶと、小さな体を鉄格子に滑り込ませる。

糞尿のきつい匂いのする排水が鼻から入るが、必死に目を閉じ、泳ぎ、下水道脇の整備路に捕まる。

汚水を吸い、重くなったボ口を捨て疲れた足取りでよろよろと歩く。

背中や足の傷口に汚水が染みてひりひりと痛む。

怪我をしている時に排水を浴びると傷が紫になってとても痛くなるということを聞いたことがある。

どこかで、汚れを落とさなければいけない。

荒くなった息を整えようとして、鼻に入った水が喉を焼いて咽せ

た。
酸欠で霞む頭に汚臭を含んだ大気を一杯に送り、それでも地上へ出る為の梯子を掴む。

東の貴族街までいけば噴水がある。

そこに飛び込んで、ざっと汚れを落としたらまた逃げればいい。そう考えながら、下水道の上げ蓋を開けた。

「ほいつかまえた」

首根っこを掴まれ引きずりあげられた。

「あ」

声にならない声を上げて、少女は自分を掴み上げた人間を見る。片手で軽々と持ち上げているのは、先程の騎士　スタイアだった。

「このっ！離せっ！離せようっ！」

「わ、わ！ばっちい！暴れなさんな！」

少女はスタイアの腕に力一杯かみつくが、堅い腕の表皮に僅かに歯が食い込むだけなのに驚いた。

暴れる少女から飛んだ汚水を思いつき顔に被ったスタイアは染みる目を抑えながら、少女を地面に降ろす。

「店主とは話をつけてきましたよ。全く、無茶な逃げ方をするもんですね。どれ」

「わ！変態！何する気だ！体売る気はないぞっ！」

「舐めても小便の味しかない子供には興味ないからどうぞお構いなく」

少女が嫌がるのにも構わず、服を捲るスタイア。

少女の背中^の表皮が破け、そこから血が滲んでいるのを見て思わず眉を潜めた。

「……破傷風が怖いですね。うちに来なさい」

「二度と行かないって言っただろ！」

「なら、選^びなさい。騎士団で律法の裁きを受けるか、僕に従^うか。シャモさんが言ったように、強い奴だけが与えることを選^べるんですよ」

スタイアは少女を黙らせると、帯皮に吊した畳まれた外套を広げ少女に被せた。

騎士が雨天時の巡回に使う綿でできた外套で、所属する騎士団の紋章が刺繍されており買おうとするとそれなりに値段のするものである。

汚水が染みこむのを全く気にせずスタイアはそれをすっぽりと被せたのだ。

「ようやく、追いつきました」

がちゃがちゃと重い鎧を鳴らし、シルヴィアが追いつく。
荒い息を整えながら生真面目な瞳をぶつけてくるシルヴィアに少女は身を縮める。

「騎士団に連れて行くのですか？」

「このままじゃばつちいからね。うちの店で風呂に入れますよ」

スタイアはそう言って少女の手を引く。

「……その後はどうなさるおつもりですか？」

「さて、どうしましょうかね」

「騎士団では少女といえ律法の裁きを受けます。教会で保護するのが最善の策と思います」

スタイアは歩きながら揺れる。

「だろうねえ。王国律法は事情があつたとしても容赦なく裁いやうからねえ。教会主導の聖堂騎士が扱えば情状にあわせた酌量つても図ってくれるしねえ。アっちゃんもそれを考えて聖堂騎士との業務統合を受け入れたんだろっねえ」

「……わかつてらしたんですか？」

「騎士団つてのは男社会です。でも、世の中には優秀な女性も多い。がしかし、優秀な女性が台頭するのを好ましく思わない人達も居る。比較、女性が多く登用されている聖堂騎士が騎士団と混ざれば契機にはなる、という見方もできますしねえ？」

シルヴィアは黙った。

スタイアの言ったそれが騎士団と聖堂騎士の業務統合の本当

の目的だからだ。

だが、それでもシルヴィアは騎士団が手を伸ばせない領域で誰かを助けたいと思えるだけの若さを持っていた。

「寄る辺なき者に対して、教会は寛大です。その少女は我々が保護します」

「教会で保護して、シルちゃんがずっと面倒を見てくれるんですかね？」

スタイアはどこか底冷えするような声で呟いた。

「え？」

「罪を犯す少女を騎士団と合同で聖堂騎士が保護し、更正に導く。確かに、それは美談となりますし、それが望む形ではあるんですけど、それが最も望ましい。シルちゃんが使命感に燃えるのもよく理解はできる。応援も手助けもしてくるでしょう。ただ、果たしてそれが正解かどうか。間違いだったときに君は責任を取れるんですかね」

少女は自分の手を引く騎士の中に恐れを感じさせる何かを見つけた。

シルヴィアは自分の考えのどこが間違っているのかを考えている間に、その答えをつきつけられた。

「三日後には教会からこの子は居なくなってますよ」

突きつけられた結論に、シルヴィアは納得しかできなかった。教会は保護し、修道院で自立できるまでの生活と教育は面倒を見る。

ただ、望んで抜け出す人間を追うことまではしない。

がしかし、シルヴィアが僅かに見ただけでもこの少女の逃走の仕方は異常だった。

執念、といえるようなものを持っている。

「強い人間は選ぶことができる。それくらいには強い子ですよ。この子は」

少女は汚水でぬめる手を強く握る騎士の手の大きさに初めて気がつき目頭が熱くなった。

シルヴィアは自分が聖堂騎士であり誰かを救える立場にあり、その本質を見抜けなかった未熟さに唇を噛んだ。

「……私は、また間違っていたんですね」

「間違えるのは誰だっと思っていることだし、この子も間違えてる。僕のこと果たして正しいのかと問われれば正しいとは言えない」

少女は黙って、スタイアの言葉に耳を傾けていた。

「スタイア隊長。では、何が正しいのですか？」

「知らないよ。ただ、でも、規律も秩序も人が作ったものならば、その人をないがしろにしちゃあいけないと僕は思うだけですから」

シルヴィアは立ち止まると、小さく一礼した。

「……もう一度、あなたの下で学ばせてください」

「嫌ですよ面倒臭い……それに、いつまでも誰かにすがって生きていける訳ではないでしょう？ 何度も失敗して自分で覚えて行けばいいですよ」

スタイアは苦笑すると遠くにリバイベルの看板を見つける。

少女が顔を上げると、シルヴィアはどこか優しげな笑みで少女を見ていた。

「シルちゃん、申し訳ないけどアっちゃんに寄り道してから帰るって言うておいてくんないかな。帰るってあれだよ？騎士団に帰るって意味じゃないからね？」

「サボり了解」

公衆浴場ではなく風呂という設備を設けている場所は一部の貴族を除いて、そう多くあるわけではない。

高級宿や人気のある安宿に備え付けてある場合もあるが、公衆浴場での湯浴みが庶民としては一般的であり、そうそうお目にかかれるものではなかった。

そういった意味で、リバティベルはヨッドヴァフ中を探して唯一、風呂場を持つている酒場となる。

元来は向かいの宿屋『海洋亭』が客室を拡張する際に一階部分の食堂を取り壊し、食堂を別棟としてはじめたのがリバティベルの始まりであり、今でも続く慣習である。

海洋亭には増設できる場所が無いことから、リバティベルの裏に浴場を作った為に酒場でありながら風呂を持つという経緯に至る。

とはいえ、四方を板で囲い、石材を並べて作った浴槽に湯を張るだけの簡素な代物だ。

店主が趣味で並べた植木がいささか他の公衆浴場と違い、屋外で風呂に入っているような趣にさせるが、仕切りの向こうに見える外壁が景観を著しく悪くしていた。

湯が張られたばかりの浴室で、ラナは黙って少女の体を洗っていた。

少女の体にはいくつもの傷があり、そのうちいくつかは黒ずんだ跡になっているものがあつた。

少女はラナを警戒しながらも、されるがままに体を洗わせているうちに、ラナがとても丁寧に体を洗ってくれることに気がつき、気を許した。

張り詰めていた緊張の糸が解け、痛みと眠さが意識の中でよみかえる。

「ねえ……」

おずおずと漏らした吐息に乗せた言葉が喉の奥にからみつく。

「……本当は嫌じゃないの？」

「何が」

「あたし……くさいから」

「くだらない」

「……あたし、牢屋に入るのかな？」

「そんなことはしないと思う」

「なんで？人のもの盗んだのに？」

「まっとうな泥棒には手ひどいことはしないわ。スタイアは」

スタイアの振る舞いは、少女を騎士団に連れて行くことはしないだろうと確信させるものがあつた。

少女の頭に湯を被せ、熱いタオルで顔を拭いてやりながらラナは考える。

この少女は、とても聡明なのかもしれない。

自分のしていることが社会的に悪いことであることを認識している。

まともな教育を受けられない中で、自分の行為が悪いと認識できるのは相手がどのような被害を被るか想像できるからだ。

盗まれた相手が困るということを十分に理解しているのだ。

追い詰められた人間というのは自分の事で精一杯になる。

飢えと寒さに迫られる毎日の中、生きる糧を奪った相手の痛みを共感できるというのは易しいことではない。

ラナはしばらくしてから、言葉を継いだ。

「疲れたでしょう？」

無遠慮に頬を押し上げるタオルに瞼を細め、少女は湯と違う物が零れるのを隠した。

少女はそれでも必至に肩に力を入れてか細く応える。

「あたしより、辛い子もいるもん」

ラナは眉を潜めてほんの少し、考えた。

「……誰か、助けたい人が居るの？」

少女はタオル越しにラナの手のひらに鼻を押しつけ、小さく頷いた。

「……一緒に暮らしてた子。名前は無い」

名前が無いのは親が居ないからだ。

親が居ない子供は往々にして孤児院に引き取られるか、奴隷として誰かに売られるか。

そのいずれにも当てはまらない場合、浮浪児として生きていく為に盗みを働く。

盗みを働く子供達の間では、捕まった時に仲間の名前を言わないように名前が無いままにしているのだ。

いや、当然のように呼び合うための名前はある。

だが、それは決して誰かに知られることはなく、墓に彫られることもない。

それが、彼女やその周りの人間の当たり前なのだ。

「人さらいに捕まって、売られちゃった。お金、持っていけばかえしてくれるって言ってた」

ラナはそれでようやく合点がいった。

非公然だが泥棒にも秩序がある。

金を持つている相手から、自分が困らない分だけ盗む。

貧しい時代を経験しているヨッドヴァフの住人はそれくらいであれば許容する。

それを越えて大きく仕事をする、スタイアのような騎士もその取締を厳しくするし、なにより、それで飢える者もでてくるからだ。そうになると、同業者からも相手にされなくなる。

当然、少女もその理を知らない訳が無く、少女の体に残る傷跡にはその理を無視した証拠である。

「その子は、もう、戻らない」

ラナは言い切った。

少女が驚き、ラナを見上げる。

「あなたが買い戻すまでに、その子は奴隷として生きていかなくちやならない。安い額ではないのなら、その子は奴隷として生きていく方法を覚えてしまう。あなたが買い戻して自由にしてあげても、染みついた生き方は変えられない」

少女は緩みかけた心の糸を張り直して、顔を背けた。

「それでも、やるもん！」

「できるわけない。奴隷一人の値段がどれくらいのものか知っている？」

「……金貨二千枚、いくつか数えられないけど、たくさんだって話は知ってる」

それは明らかな嘘である。

金貨一枚あれば贅沢をしなければ一月は生きていける額である。
金貨二千枚とは貴族の邸宅が造れるくらいの値段である。
だが、しかし、彼女にはそれが全てだった。

「今、どれくらい持つてる？」

「金貨一枚……今日盗んだものだけど……」

「諦めなさい。それが嫌なら、頑張りなさい」

ラナは淡々と応えた。

ラナが言ったことは事実の一つではある。

しかし、買い戻すと決めた少女の代わりに金を出せる訳ではないし、出してはいけない。

そして、その現実は一層厳しくてもやると決めた人間にしかできないことであることをラナは知っていた。

少女はラナの手から逃げるように浴室を出ると一人で体を拭いて新しいシャツに身を包んだ。

第1章 『最も弱き者』 6

「んー、可愛いな」

「ほら、やっぱり可愛いでしょ？」

リバティベルのカウンターでごろつくスタイアとシャモンは風呂から上がり、服装を整えた少女を見てエールの杯を傾けていた。

今まで一度も可愛いと言われたことの無い少女は、赤くなって俯く。

「最初見た時は泥臭いガキだと思ったけど、風呂入れば変わるモンだな」

「泥被って髪もばさばさだからわからなかったでしょうけど、目鼻筋も整ってるしい線いくんじやないかなーとずっと思ってたんですよ」

「これはこれでなかなかそるモンがあるじゃないか」

「でっしょう？たまにゃーロリータ趣味も悪くないでしょう？」

「でもよースタさん。ロリって実際どうなんだ？ぶっちゃけ入らないだろ？」

「そりゃあ、そうでしょう。むしろ入っちゃったら逆に僕らのも子供サイズってことになっちゃうからそれはそれで哀愁をびんびんに感じちゃいますよ」

「そっか、感じちゃうのか。びんびんに」

「感じちゃうんです。びんびんに」

既に大分酔いが回ってきているスタイアとシャモンは一斉にげらと笑い出した。

下品に笑う男達を少女が怪訝そうに見つめる中、ラナは溜息だけつくと、厨房でヨブ鹿のステーキに火を通す。

表面に火を通すと、ヨルクマトンのチーズをたっぷり肉の上のせ、オーブンで溶かすとその上から常時煮込んであるソースを掛けて、副菜を盛りつける。

ポタージュのスープとパンを添えてトレーに乗せると、カウンタ―で待つ少女にそれを振る舞った。

「……私、お金無いよ？」

「食べなさい」

ラナはエプロンで手を拭くと、シャモンとスタイアのエールのグラスを下げる。

鼻をつくチーズの芳醇な香りと、肉汁のはねる肉の濃厚な甘い匂い、もうもうと湯気を上げるポタージュの匂いが少女に空腹を思い出させる。

少女はラナとスタイアの顔を交互に見る。

スタイアはようやく少女に気がつき、小さく頷いて促した。

少女は何も言う暇も無く、かぶりつくようにフォークとナイフでステーキに挑みかかる。

獣のように食べる姿を見かねたラナが肉を切り分ける横で、スープの熱さに少女が咽せる。

思わず、笑ってしまいそうになるような味を堪能し、喉に押し込む度に腹の底に落ちる感覚を覚える。

皿を舐めて最後のソースの一滴まで食べ終えて、余韻に浸る少女だったが、やがて、思い出したかのように厳しい顔つきを取り戻し、カウンターから離れた。

「おや、もういくのかい？」

少女の様子に気がついたスタイアは酔いの回った瞳で少女を見つめた。

「うん」

少女はスタイアに向けて大きく頷くと鼻を鳴らす。

「ここにはもう来ない」

少女はきつぱりとそう言い切って口のすり切れた袋から金貨を手取る。

それを力一杯、スタイアに投げつけて未練無くドアを開けてグロウリドーンの街の中へ消えてしまった。

スタイアは受け取った金貨を指で弾くとポケットの中に仕舞う。

「スタさん。そいつぁ賄賂って奴じゃないのかい？」

シャモンは苦笑する。

「へっへ。いい仕事でしょう？」

スタイアはシャモンの冗談に乗って苦笑した。

「しかし、いいのかい？行かせちゃって」

「貧すれば鈍する。あの子は利口ですよ。ここに長く居たら、自分を支える物がなくなっちゃうってことに気がついたんでしょ」

「で、今の生活に逆戻りだ」

「さあ、どうですかね？あの様子じゃあ、何か思いついたみたいですし、そりゃあないんじゃないですかね？お腹いっぱいになつて少し休むと、どうにかいい考えつてのは浮かんでくるモンなんですよ」

「……見越して飯喰わせたのか」

「手を貸して甘えっぱなしになる人間は容赦なく切り捨てますよ僕は。とてもじゃないけど、他人の人生背負い込めると思える程、自惚れてはいませんから」

スタイアはそれだけ言うとカウンターを離れる。

「でも、いちおう、虫を飛ばしておきましたよ」

「……へえ、ユロの野郎が珍しく昼間に居ないと思ったらそういう理由かい」

ラナがスタイアの外套を手渡し、スタイアは手早く外套を羽織る。

「сойじゃま、夜遊びしてきま」

そのまま店を出ようとしたところ、スタイアはドアを開けたところで誰かとぶつかる。

転びそうになったスタイアを支えたのは黒い僧衣を纏った偉丈夫だった。

「大丈夫か」

「おや、噂をすればなんとやら　ユロさんじゃないか」

浅黒い顔を戸惑いに彩る偉丈夫　ユロからは土の匂いと、僅かな腐臭がする。

シャモンは酔った眼を細め、ユロを見つめると、ユロは思わず目を逸らす。

「……墓堀が昼間から出歩くなんざ、珍しいと思っただよ」
「そういうときも、ある」

ユーロはぼそぼそとか細い声で応えると、カウンターに座った。

「つきとめた」

「あんだって？」

「ビリハム・バファ―伯爵が教会から預かった身よりの無い子供を貴族の間に奴隷として斡旋している」

シャモンは酔った頭で色々と考える。

ユーロは結論からまず話す癖があり、それがしばしば人の誤解を誘う。

それは本人も気にする悪癖だ。

「奴隷制度は何年も前に廃止されてんだぞ」

「だが、おかしい」

「そりゃそうだ。律法で禁止されたことを律法を決めた貴族が破ってるのはおかしいことだわな」

「売られていく人数と、集められた人数が違う」

そこでシャモンは眉を潜める。

スタイアは笑って応える。

「……奴隷を売買すること自体は問題じゃあないんですよ。そうしなければ生きていけない人だっている。シャモさん、僕らはそういう時代の人間だったでしょう？　だけど、問題は、その奴隷をどのように使っているかが問題なんですよ」

スタイアの目は笑っていなかった。

シャモンはひとしきり顎を撫でて考え、しばらくして大きな溜息をついた。

その瞳からはもう、酔いが消えていた。

「……今夜にも、鐘は鳴るかね？」
「鳴らしましょうかね」

第1章 『最も弱き者』 7

グロウリイドーンの東部には貴族街が広がる。

爵位を得た者達は治世の要職につき、この場所に邸宅を構えることを一つのステータスとしている。

政治の要となるヨッドヴァフ騎士団、聖フレジア教会、貴族院、枢機院といった建造物は全てこの東区画にあった。

少女は夜でも街灯が灯され、視界の効く町並みを小走りで歩き、一つの邸宅を見上げた。 ビリハム・オファー伯爵の邸宅である。

グロウリイドーンの建築当初に構えられた邸宅は高い外壁に囲まれた二階建ての石材で組まれた邸宅である。

少女は荘厳な門の前で、執務を終え邸宅に帰宅するビリハムを待ち受けることにした。

宵が深まる頃、邸宅に馬車が乗りつけ深緑のチュニツクに身を包んだビリハムは戻ってきた。

随伴する召使いが門の横に佇む少女を見つけ、怪訝な顔をする。

ビリハムも少女の思い詰めた表情を見て、怪訝な顔をしたが、すぐに用向きを尋ねた。

「この時分にいかが用件ですか？」

「……家を追い出されました。どこか、働かせてくれる場所を探しています」

ビリハムは少女を値踏みするように頭の前からつま先まで眺めると、召使いに小さく耳打ちすると寛容に頷いた。

「それであれば、力になれることもあるだろう。中に入って、ゆっくりと話を聞かせて欲しい」

少女は小さく頷き、ビリハムの後続き邸宅に招かれた。

外壁の内側には豪華な庭園が広がっており、家を取り囲むようにゲッケイの生け垣が広がり、庭木として植えられたスマラグが道の脇に並べられている。

シャンデリアのある広いホールを有した邸宅に入ると、ビリハムは少女を客室に招くように召使いに指示した。

召使いは僅かに頭を下げると少女の手を引き、地下室へ向かった。石壁で支えられた地下室はどこか冷たく、灯されたるうそくの明かりがぼんやりと揺れていた。

「あの、どこへ……」

召使いは何も応えず、少女の手を乱暴に引くと、地下室の一室へ乱暴に放り込んだ。

少女は冷たい石床に尻を打ち、小さく悲鳴を上げるが、召使いは冷たい眼差しを向けたまま扉を閉めた。

がちやりと鍵のかかる音がして、少女は地下室に取り残される。

「待つて！お願い！一つだけ教えて欲しい！」

地下室を立ち去ろうとした召使いの足音が止まる。

少女は扉に駆け寄り、精一杯の声を上げて尋ねる。

「恵雨の月の初めの頃に、金色の髪をしたあたしと同じくらいの子がここに来てるの！その子が今、どうなってるのか！それだけ！それだけでいいから教えて！」

召使いの靴が石床を叩く音が大きくなり、やがて扉の前で止まった。

「知っているのね？」

召使いはどこか冷めた声でそう尋ねた。

「……うん。多分、私も奴隷として売られる。それは、わかってる」

しばらくの間、召使いは沈黙していた。

「その子なら、よく覚えてる。体の弱い子だった。勤めに耐えられず、すぐに死ぬとわかっていたから誰も買わなかった」

「じゃあ！まだ、ここに居るの！？居るのね！？」

召使いは答えない。

少女はその沈黙に別の意味を受け取った。

「……うそ」

少女の頬にすつと、一筋の涙が差した。

震える喉が嗚咽を零しはじめ、膝が力を無くしはじめる。

今日まで少女を支えてきたものが、ふと目の前から無くなり、少女の肩に疲れがどつと押し寄せてきた。

自分を慕ってくれただけの少女で、何をしてくれた訳でもない。

辛くても、生きていく事を互いに誓った。

その少女の前では、彼女は強くなければならなかった。

だが、もう、そんな必要も無い。

そうなったとき、少女はただの少女に戻ってしまったのだ。

「扉の鍵は開けておくわ。落ち着いたら、逃げなさい」

召使いの声はどこか、疲れていた。

少女は疲れた中、ただ、どこかで触れたことのある良識だけで尋ねた。

「……どうして、そんなことしてくれるの？」

「私にはこんな生き方しかできませんから」

召使いはそれ以上、何も言うことなく足音を遠ざけた。

暗い石壁に囲まれた部屋で少女は体を横にしていた。

今まで張っていた緊張の糸が全てほぐれ、生きていく意味を無くした少女は最早、立ち上がる気力も無かった。

それでも覚える空腹に鬱陶しさを覚えながらも少女は冷たい石床に顔を擦りつけた。

振り返れば、空腹と痛みだけが自分を生かしてくれた。

名前も無く、ただ一度も満足に腹を満たしたこともなく、飢えと寒さに耐え、最後はこの地下室で病死したと考えると、とてもやりきれなかった。

かつて仲間だった者も、彼女から離れていった。

弱い者は淘汰される。

足も遅く、体も弱く、何一つ、彼らに貢献できなかった彼女は、生きる為に彼らの食事を減らさなければならぬことから切り捨てられた。

それは、受け入れなければならない現実であることは知っていた。彼らもまた、ただ一度だって満足に腹を満たしたことが無いからだ。

自分を慕い、自分のようになりたいとかつて言ってくれた少女を鬱陶しいと思ったことは何度もあった。

だが、無くして初めて、自分がその弱い少女に支えられて強くあったことがわかる。

人は自分の為に卑しくなれるが、貴くあるのはいつだって他人の為だ。

流れに、身を任せよう。

少女は諦めて身じろぎする。

「ごきげんよう」

ビリハム・バファアは穏やかな笑みで少女に声をかける。

少女は床に寝そべったまま、動かなかった。

「君は、いつぞや私が保護した少女の知り合いみたいだね」

少女は答えない。

ビリハムは続ける。

「どこまで知っているか知らないが、それはよくないことだ。人は誰しも秘密を持っている。秘密は誰にも知らされず、伏されているからこそ大切なのであって、それを吹聴してまわるのはとてもよくないことだ。もちろん、私は君がそのようなことをするような人間ではないと知っているし、信じている。だけど、わかって欲しい。人は誰しも臆病で、私も残念ながら臆病な人間なのだ。そこで、私は君とその秘密を、そう……なんといったらいいのか、共有したい。お互いに秘密を持つのだ。そうすれば君は私の持っている秘密を深く知ることと私を信じてくれるし、私も真に君を信じることができる。その秘密は君の知っているあの子、そう、あの子だ。とても可憐な子だ。金色の豊かな髪をして、とても優しい眼差しをしている。あの子もまた、共有してくれたものだ。どうだろう？私とその秘密を共有してくれないだろうか？」

長々と喋るビリハムに、少女は僅かな違和感を覚えた。

「……生きてるの？」

「誰が、そのような悲しいことをいったのかわからない。メラージェンが言ったのであれば彼女にも、正しく、伝えねばならない。それは私が彼女を引き受け、彼女の生きる道を示さなければならぬ身分にあるが故の義務だ。だが、問題はそこじゃあない。君はひよっとして勘違いしているかもしれないが、そう、あくまで勘違いしているものと思って尋ねるが、その子が殺されて……いや、フレジアの光に祝福されたと思ってはいないかね？だとしたら、悲しい私は大いに悲しい。その誤解をどうか、私に解かせてくれはしないか？どうだろう？」

ビリハムの言葉には嘘は感じなかった。

だが、どこか狂気に触れた危険さを少女は既に感じていた。

少女はゆっくりと身を起こし、気だるげだが、それでもしっかりと応える。

「会わせて」

第1章 『最も弱き者』 8

少女はビリハムに連れられ、地下室よりさらに地下へと連れてゆかれた。

まるで少女を逃さないようについてくる召使いの顔がどこか、悲しげに見えた。

そこは古い下水道の一画で、穿たれた壁にしつらえられた鉄格子があつた。

明かりが灯らず、薄暗い地下道の中に少女は嗅いだことのある匂いを僅かに嗅いだ。

糞尿の、匂いだ。

ビリハムが持つ燭台の光では良く見渡せないが、鉄格子の奥で僅かに首をもたげる様子が伺えた。

人だ。

「歴史は、変わった。私は理解に努めている」

ビリハムは唐突に語る。

「世界には賢き者とそうでない者の二種類の人間が存在する。賢き者はそうでない者を導き助ける使命がある。これを高貴なる義務という。それは正しく果たされなければ、ならない。なぜなら、賢き者もやはり、そうでない者たち無くしては生きてはゆけないからだ」

少女は黙って聞いていた。

「もし、世界が賢き者だけとしたら、そこには石工も居なければ農奴も居ない。そうなれば家を失った賢き者達は寒さと飢えで死

に絶える。だから、賢き者はそうでない者達を導き、彼らがより豊かな生活を送れるように導かねばならない。私は賢き者として導かねばならない。そうして、世界はよりよく回っていく」

長く続く地下道の雰囲気が僅かに変わった。

「人は増え続ける、そうなれば賢き者に対してそうでない者の数の方が増える。そうなればそうでない者達は少ない日用の糧を互いに奪い合うようになり、争いが起きる。我々賢き者は彼らにどうやってその日用の糧を与えるか、そのみに苦心しつづける」

鉄格子、ではなく、鉄の扉が穿たれた石壁を塞ぎ、石壁には無数の爪痕が刻まれていた。

「奴隷制度、それは生まれながらにして持たざる者を救う一つの方法ではあった。がしかし、時が進み、やがて彼らが富を得ると彼らは賢き者達が行った事に対し異を唱え始める。果たして、そこにあった彼らの生活の保障というものを理解することなく声高く訴えるのだ。我々に自由を、誇りを、と」

重々しい鉄扉が激しく揺れた。

中で尋常ではない悲鳴が響き、地下道が揺れた。

だが、ビリハムはそよ風でも吹いたかのような微笑を讃え、続ける。

「賢き者はその言葉を真摯に受け止め、喜ばなければならない。それはそうでない者達がようやく自分らが食を得るただけに働くことから、生きる意義を求め始めたからだ。賢き者として彼らの非難を甘んじて受け、そして、彼らに求めるものを与えなければならぬ」

少女は生ぬるい風を受け、恐怖がつま先から昇ってくる感覚に身を震わせる。

「そこで、賢き者達が作ったのが冒険者制度だ。力なく、知恵なきものに、力と知恵を与え、人に害為す存在を駆逐するという使命を与えた。その存在が経済に新たな需要を与え、その需要を中心に世の中が回りはじめる」

やがて、地下道がとぎれ、燭台は小さな祭壇を浮かび上がらせた。床にびつしりと描き込まれた魔術文字と陣。

祭壇の上の天秤に乗せられた心臓と青銅。

そして、壁一面に貼り付けられたタペストリーに打ちつけられた

「きゃああああああっ！」

それは、大まかに形容するなら、蜘蛛だった。

剛毛に覆われた節くれだった八つの足を持ち、大きく膨らんだ腹を持つ。

ただ、腹は二つあり、その真ん中に大きく膨らんだ尾を持っていた。

腹は薄い皮膜で覆われており、青い体液が透けてみえていた。

律動する腹部には苦悶に彩られた人の顔が浮かんでは消え、髪の毛が揺らめいている。

腹を繋ぐ胴体には百足のようには節があり、いくつもの腕が生えていた。

だが、それは昆虫のような節くれだった腕ではなく、人間のそれと同じ腕だった。

いずれも形はばらばらで、上腕が異様に長かったり、中指が伸び

ていたり様々な腕の形をしていた。

豊かな乳房を揺らし、その上には首が3つついていた。

一つはフクロウの頭だった。

愛らしい瞳で瞬き、少女を見て小首を傾げている。

その隣には禿頭の男の首があった。がしかし、これは生気を失いだらりと舌を垂らして白目をむいている。

その隣にだ。

少女が探していた面影があった。

「おねえ、ちゃん？」

うつろな瞳を向け、それは震える声でそう発した。

見れば、節くれだった腹の殻が破れ、そこに口が現れていた。

「酷いっ！なにこれえっ……ああっ！ああああっ！」

少女は半狂乱になって叫んだ。

ビリハムは淡々と告げた。

「魔物、という生き物が居る。一般的には自然発生しえない生物全般を指す言葉だ。その起源は太古に遡るもので、その当時の記録は手に入れがたいものとなっている。我々は理解に勤めなければならない」

少女には最早、ビリハムの言葉は届いていなかった。

「はじめは、怖いかもしれない。だが、大丈夫だ。君もきつと、理解してくれる」

最悪の想像以上の、現実を突きつけられ、少女は崩れ落ちる。

膨れた腹がぼこりと人を産み落とし、産み落とされた人の上半身が弾ける。

弾けた上半身から葉が開き、茎が伸びるとムウムウと可愛らしい鳴き声を上げながら花が咲いた。

それらはすぐにしほみ、僅かな青銅を残して跡形もなく消えてゆく。

少女はそのおぞましい光景に膝を折る。

「メラージェン、儀式を執り行おう。銀のナイフを」

召使いがビリハムに紫の布で包まれたナイフを手渡す。

すぐのような目つきで見上げる少女に、召使いは僅かに苦悶の表情を見せるが、すぐに能面を作った。

少女は知っている。

それは、人が人を捨てる時の表情だ。

少女と、目の前にいる彼女がかつて、仲間から向けられた顔だ。

「やだっ！やだっ！やめて！怖い！いや……いや！いやあああああ
あああっ！」

銀のナイフを手にしたビリハムはとても悲しそうな顔をする。

「それはとても悲しい。私は秘密を打ち明け、彼女はあそこで君を待っている。なのに、君は我々を受け入れてくれない。それは、とても悲しい」

「違う！絶対違う！人じゃない！あ、あんた人じゃないよ！なんで！なんでこんなことするの！なんで！ああっ！あああッ！」

壁にうちつけられた化け物の腕が伸び、少女の細い腰を掴んだ。振り向けば、とても悲しそうな顔で少女を見下ろしていた。

「……おねえちゃん、ごめんなさい。わたしが、ぐずだったから。わたしが、やくにたたなかったから。でも、おねえちゃんだけはちがったよね？ずっと、ずっといつしよにいてくれたよね？おねえちゃん、わたしうれしかったよ…おねえちゃんが、おねえちゃんだけがわたしにばんをくれた。わたしはしってるもん。おねえちゃんが、おとなにたたかれてとってきたおかねでわたしのくすりをかってくれたことも。いたかったよね？でも、おねえちゃんは、なにもわたしにいわなかった。わたし、ないてばかりでちゃんと、ありがとうつていえなかった。ごめんね？おねえちゃん」

魔物となった少女は、自らの口を開き、掠れた声で言った。

「こわいよ、さびしいよ。おねえちゃん、いつしよに……いてほしいよ」

おぞましい腕が少女の頬を撫で、指先が割れ、生えだした舌が少女の頬を舐める。

「やあああつ！いやあああつ！」

少女は泣きじゃくり、自分を掴む腕を力一杯叩いた。

粘液で滑りやすくなっていた腕から細い腰を捻り、抜け出した少女を見て、魔物の頭となった少女はとても悲しそうな顔をする。

「うああつ！あああ！あああああつ」

少女は後ずさりながら、その視線から目を逸らして泣き叫ぶ。
ビリハムはその少女の肩を掴み、優しく微笑んだ。

「怖いのは、最初だけだ。あとは、もう、何も思い悩む必要は無い」

鋭い痛みが足に走った。

ナイフが太もみに刺さり、ビリハムが押し込むだけで膝にかけて開いていった。

「アアアッ !ッ !」

首から脳天を貫く鋭い痛みで悲鳴を迸らせ、少女はのたうち回る。血を飛び散らせ、這うようにビリハムや魔物から離れようとする。悲しそうに見つめる少女に途方も無い罪悪感を覚える。

「いやあああ……っ！もう、いやあああっっ！なんでなんだよう！おかしいよ！なんでこんなひどいことされるの！あたしがあ……あの子があ……なにشتっていうんだよばかああっ！ああああっ……」

少女は泣きながら、ビリハムを見上げた。

その後ろでは魔物となった少女が悲しそうな顔で自分を見ていた。躊躇されることなくナイフを突き立てられた太ももが熱く燃えるような痛みを訴えている。

少女は逃げるように這い回り、石床にべつとりと血を引きずる。

ビリハムは這って逃げる少女をじっと見つめていた。

やがて、少女は諦めて、俯いたまま、嗚咽を零すだけになる。

ビリハムはそこでようやくナイフを振り上げ

「これはいささか、やり過ぎのようだな？」

凜と空気が震えた。

闇の中から、声がしたのだ。
ビリハムは闇の中に瞳を向ける。

「何者かね？」

「我々が何者か？何者でもない。大いなる世界の意思の流れにより我々は常に、影に潜み寄り添ってきた」

「……まさか、ファイダーイーの手の者か？」

燭台の炎が次々と消える。

祭壇が真の闇に包まれ、声だけが不気味に響いた。

「全ては調和の上に成り立ち、天秤はどちらに傾いてもいけない。お前は天秤を傾けすぎたのだ」

「私にセトメントを受け入れよというのかね？」

「……残念ながらファイダーイーの意思はない。だが、覚えておくがいい。ヨッドヴァフには警鐘を鳴らす者もいるのだ」

ビリハムはマッチを擦り、燭台に火を灯す。

ぼんやりと浮かぶ闇の中に、小さな　そう、本当に小さな人影が浮かびあがり、ビリハムを冷酷な笑みで笑っていた。

それは人間にしては小さく、両の肩から伸びる透き通った羽がどこまでも不気味に美しかった。

「ごきげんよう伯爵。いずれ、ニンブルドアンでお会いしよう」

掻き消えるように人影が消え、祭壇の燭台が再び灯りを取り戻す。そこに、少女の姿は無かった。

「……ふむ」

ビリハムは思案して、告げた。

「メリージェン、バルメライ達に仕事だと告げなさい。よもやフイダーイーが我らに翻意するとは思えないが、念には念を入れる必要がある」

第1章 『最も弱き者』 9

少女は気がつけば、屋敷の外に居た。

さきほどまで見たものがまるで、悪夢のように思われた。

だが、ざっくりと裂けた足が現実であつたことを痛い故に証明している。

ぼんやりとした意識を引きずり、それでもこの場を離れなければいけないという意味だけで歩きはじめた。

屋敷が騒がしくなり、物々しい鎧を着込んだ兵達が庭に現れ始める。

痛む足を引きずり、見つからないように逃げはじめた少女は、やがて、痛みを足をもつらせて転ぶ。

這つてでも進もうとして、途中で、諦める。

最早、帰るべき場所も、達すべき目標も無いのだ。

最後に見た、彼女の無惨な姿だけを思い浮かべる。

「くふっ……ウウッ……ウウッうう……」

力の無い者はあやつて、強者の玩具として弄ばれる現実に悔しくて泣いた。

握った拳が地面を叩き、赤く腫れる。

ぼたぼたと零れる涙が舗装された道を濡らす。

「悔しいか？」

何者かが少女に語りかける。姿は、無い。

「誰っ!？」

嗚咽を引きずりながら、噛みつく勢いで尋ねる少女に声は応える。

「虫の囁きだ。この通りを真っ直ぐ行つて、突き当たりを左、ずつと行くとリバティベルという店がある。この時間ならば、請け負ってくれるだろう」

リバティベル。少女は聞き覚えのある名前に、僅かに怪訝な顔をした。

「何を言つてるの？」

「金貨五枚。それで、お前の代わりに殺してくれる。だが、ゆめゆめ忘れるな？殺すことを選択したのはお前だということをな？」

ぞくりと背筋が寒くなる。

ビリハムを殺せる。

そう思えるだけで、少女の心の中に暗い愉悅が広がってゆく。

自分たちを玩具にした男に制裁を加えなければならない。

少女は痛む足を地面に叩きつけ、歩き出した。

夜も更け、人も捌けたリバティベルは静かに闇の中にその店を佇ませていた。

少女がウエスタンドアを開けると、チリン、と小さな音が鳴った。店の中の照明は落とされ、暗い闇に包まれていた。少女は臆することなく店の中に進んだ。

「こんな夜更けに、誰でしょうかね？」

聞き覚えのある声がどこことなく冷たく聞こえた。

マツチを擦る音がして、燭台に火が灯った。

テーブルの上に置かれたろうそくが、背中を丸めて炎を見つめるスタイアを浮かび上がらせる。

「おや、まあ、可愛らしいお客さんだこと」

緊張した面持ちの少女をスタイアは柔らかに、どこか恐ろしい笑みで迎えた。

「……殺したい奴がいるの。ここで頼めば、殺してくれるって言うってた」

スタイアは苦笑する。

「仕事の依頼かい？」

ぼんやりとした光の中に、シャモンとラナの姿が浮かび上がる。

「……嬢ちゃん、銭は持ってるのかい？金を持ってるようにや、見えんのだが？」

「今は、無い。けど、今殺して欲しい」

シャモンはテーブルに足をかけ、背もたれに体を預けると鼻で笑った。

「……ダメだ。殺すということは殺されても文句は言えない。そんな仕事を引き受けるのに金を後払いにされれば、死に神に渡す手間賃も払えない。帰れ」

シャモンは冷たく言い切った。

「……そうだね、金貨五枚。それすら用意する覚悟の無い人の仕事は、受けられない」

スタイアは柔らかな笑みでそう告げた。

少女は言葉を継げない。

なぜなら、そのスタイアの瞳はどこまでも笑っていないかったからだ。

しばらくでゆく意思に、少女は肩を奮わせる。

うつむいたつま先に滴る血を見つめ、意を決して前に進み出る。

「私を買って!」

少女は唾を飲み込み、続けた。

「……体を買ってもいい、奴隷として死ぬまで使ってもいい。私を買って、そのお金にして」

シャモンはひとしきり少女を眺めて鼻を鳴らす。

「金貨四枚」

少女は何を言われたのか一瞬、わからなかった。

「自分にどれだけの価値をつけたのかわからねえが、てめえの価値は金貨四枚だ。それ以上は出せたモンじゃねえ」

「そんな!」

「甘えンな。金貨四枚でも充分に高いくらいだ。今のてめえにそれだけ稼げるだけの道が他にあるってか? ああ?」

少女は俯く。

奴隷で売られる人間の値段は、確かにそのくらいの値段なのだ。理解している。だけど、少女はどうにもならなくて、叫んだ。

「あんた達にはわからないけど、あの子と私は仲間だった！親に捨てられて、気がつけば修道院でパンも食べられずに働かされたの！逃げ出した時には、あの子は病気で拾われた仲間達にも厄介者にされてた！私しか、あの子を助けてあげることができなかった。けどね、結局、あの子は多分……助けられないんだっ！」

語る少女の瞳に、大粒の涙が浮かぶ。

「……神様を信じている訳じゃあないけど、あの子は悪いことは何もしてない！化け物にされる理由なんて、どこにも、無いんだよお！お金が足りないなら私を殺してくれても構わない！だから、あいつを殺して！ビリハムを殺して！お願いだからっ！あの子を助けて！もうやだ！こんなのやだ！どうして！どうして！いつもいっつもいっつも私たちが酷い目に遭うの！弱いから？子供だから？そんなのってあんまりだよ！」

泣きじゃくる少女をスタイアも、シャモンも冷たい瞳で見つめていた。

「殺してやるう！全部、全部殺してやる！ビリハムも！あんたもあんたもだ！そうやって私たちが辛い目に遭ってるのを見て楽しんでるんでしょ！その顔をぐちゃぐちゃにして殺してやる！絶対、ぜったい！ぜったいに殺してやるんだから！」

少女は叫び、その場に膝を折る。

「うあああああああつ……ああつああつ……あああ……」

少女の慟哭が、静まりかえった店の中に響く。
ろうそくの炎が揺れ、その中で皆の顔が一樣に曇った。
そんな中、スタイアが苦笑して大きく背伸びをした。

「……わかった。引き受けよう」

泣き叫ぶ少女にそう告げる。

シャモンは冷たい眼差しをスタイアに向ける。

「……スタさん。そいつあ、ちよつと甘くねえかい？」

「甘いですかねえ？」

「命のやり取りつてのは、情じゃねえ。仕事だ。それに、辛えだの酷えだのでいやあ、そんなモンは誰だって同じだ。俺もお前さんも奴隷やらされてた時に通ってきたことじゃねえか。びいびい泣いたくらいで命取られるとしたら、取る方も取られる方もたまったモンじゃねえ」

スタイアは笑う。

「知ってるよ。知ってるとも。だから、僕が、金貨四枚で彼女を買おう……ラナさん」

ラナは溜息をつき、金貨を四枚テーブルに並べる。

「……身請けして金貨四枚。だけど、一枚足りない」

ラナが初めて口を開いた。

スタイアは懷から金貨を一枚手に取る。

「じゃあ、これで丁度でしょうや？」

スタイアは指で弾き、泣きじゃくる少女の前に放った。

「それで、五枚だ」

少女は泣きながら、目の前に落ちた金貨を見つめ、スタイアを見上げた。

「おいおい、そいつぁ……」

「盗つてきたモンだって金は金、これでいいでしょう？ シャモさん」

シャモンは鼻を鳴らす。

スタイアはあらためて尋ねた。

「……さて、お嬢さん。殺しの仕事の依頼かな？」

少女は金貨を拾い上げ、テーブルの上におずおずと置く。

チン、と澄んだ音を立てて金貨がテーブルに乗った。

少女はぐずる鼻をぬぐい、嗚咽が混じる声で絞り出すように応えた。

「……はい」

ラナがそれを見届けてから金貨を盆に載せた。

「……確かに、金貨五枚、お預かりしました。お客様、どなたの死をご希望ですか？」

ラナは恭しく少女に頭を下げる。
少女は、涙を振り払い、力強く告げた。

「ビリハム……バファアー！」

ラナはハンドベルを鳴らす。
幾度も、幾度も、何かを告げるように鳴らす。

「承りました」

ラナは少女に頭を垂れると、盆をテーブルの上に載せる。

「……引き受けて下さる方は一枚、お取り下さい」

スタイアが一枚取り、シャモンが諦めたように一枚を弾き袖に滑らせる。

闇の中から、ぬっと現れた巨体　ユーロがいかつい手で一枚引き、ラナが一枚。

そして、少女の首元からひらりと人影が飛び、金貨の上に降り立った。

「人が悪いな。スタイア」

「人殺しで金取るような人が善人な訳ないでしょうに。あなたには言われたくないですよ。パーヴァ」

「私の方が人が悪い、と言うのか？残念、私は人ではないからな？」

小さな人　パーヴァリア・キルは不敵に笑ってみせて少女を見つめた。

金貨を小さな足で踏みつけ、光の中に消すと羽をはためかせ、闇に消える。

スタイアは空になった盆を手にし、顔を隠すと穏やかな声で言った。

「さて、じゃあ、いくとしますか」

ラナが差し出した褐色の外套を受け取り、羽織ったスタイアの顔は少女が見たことがないくらいに厳しかった。

「まんず、まず、斬りに行こうか」

バルメライ・ガンズムはいわゆる、冒険者である。

武器の携行を許され、戦士ギルドで訓練を受け、様々な仕事を仲介されて受ける。

ビリハム・バファアの邸宅に集まったパーティの中にはバルメライの知った顔もあれば知らない顔もあった。

上司の不祥事で軍人としての職を失ってから冒険者に身をやつし、年月を経たバルメライはベテランと言って差し支えない経験を積んでいる。

ビリハム・バファアの邸宅警備に非常招集を受けたこの日、バルメライは嫌な予感がした。

仕事をする際には事前に、色々なイメージをしておく。

そのイメージは実際には違うのだが、概ね、イメージとかけ離れた事態には遭遇しない。

逆にイメージと大きくかけ離れた事態というのは危険なのだ。

だが、バルメライはその日、異常に集められた護衛の数と不穏な雰囲気になだならぬ危険を感じた。

「……賊からの犯行予告があった。嫌がらせの可能性もあるが、一応、念の為に警備をしてもらう。くれぐれも抜かりのないようにな？」

そう告げたビリハムの無表情が隠す恐怖も、また、いつもの仕事とは違っていた。

今夜は確実に何か起こるのだろう。

「しっかし、ま、ただ、金を払うのが惜しいからって夜の夜中に呼び出しますかね」

警護を雇うだけ雇って何も起きない場合もある。

その場合でもしつかりと彼らは給金を戴くが、むしろ、何かあることの方が少ない。

なので、招集を無意味にかける依頼主も居る。

「さあな。だが、一応、仕事だからな」

バルメライは若い冒険者にそう苦笑混じりに告げると、庭を回った。

莊厳さを醸し出す庭園にはものものしく帷子を着込んだ冒険者が立ち回っていた。

冷たい空気に身震いしながら配置箇所の確認を終わり、戻ろうとする。

遠く、遠く、遠雷のように鐘が鳴っていた。
聞き覚えがある。

「なんだ、この鐘は」

近くに居た若い冒険者が応えた。

「たまーに、鳴るんですよ。知ってますか？これ、幽霊が鳴らしてるんですよ」

「幽霊？」

「見た奴が居るらしいんですよ。血に染まったぼろぼろのロープを着た奴が鐘を鳴らしながら歩いてるんです。追いかけても追いつけないでいつの間にか消えてるらしいですよ」

このようなもやま話は、冒険者をやっていれば事欠かない。真面目に相手をするような話ではないし、話した方も信じては

いない。

バルメライは鼻を鳴らして、邸宅の中に戻った。

邸宅の周囲、内部に配置された警備の数は少なくはない。

賊が侵入したとして、何ができるわけでもないだろう。

だが、しかし、バルメライにはそれでも、嫌な予感しかなかった。

邸宅のビリハムの私室の廊下から、外を眺める。

「まさか」

庭の中に、血だらけの幽霊が立ち、バルメライを見上げていた。

深まる闇の中、月明かりだけが差し込む。

吹き抜ける風がぬるく、肌を撫でてゆく。

闇に紛れたスタイアは一度だけ、ビリハムの邸宅を見上げると音も無く歩く。

そのスタイアを追い越し、シャモンが駆ける。

垣根の回りを巡回する警護を見つけ、身を屈める。

シャモンは垣根の影から、影へと身を滑らせ距離を詰める。

まだ若い警護の兵はスタイアの姿を見つける。

そうして、向けられた背にシャモンは駆け寄り、腕を伸ばした。

後ろから現れた手に口を塞がれ、鋭い手刀が腰に刺さり、腰骨を握り、砕かれる。

脳天へ駆け上がる痛み悲鳴を上げてても誰の耳にも届かず、痛みが意識を焼き切り絶命する。

悲鳴を上げる暇すら無く崩れた警護の兵をうち捨てる。

巡回中の他の兵がシャモンの姿を見つける。

「誰だ？」

疾風の如く駆け寄り、シャモンは巡回兵の首を抱える。

「シャモン。地獄の獄卒にそう伝えてくんない」

短く答えたシャモンが首を折る。

ごきりと鈍い音が響き、あらぬ方向へ曲がり、こと切れる。声を聞きつけ、兵がわらわらと集まってくる。

「……畜生を喰らわねば生きていけぬ人もまた、畜生。賢しく腹を空かすか、愚かに腹を満たすか。中庸なり難し、ねえ」

シャモンは誰に言うわけでもなく呟くと、闇の中を飛んだ。

夜空に翻る外套の裾にまだ若い衛兵の顔が驚きに染まり、伸びた足が鼻を砕く。

倒れた兵の喉を踵が踏み抜き、仲間をやられた兵が手にした槍を突き出した。

突き出された槍を脇に抱え上げ、放り上げると腕を伸ばし、胸から心の臓を抜き取る。

追いつがる血飛沫を翻り躲し、恐怖に立ちすくむ兵の頭に五指を突き、頭蓋を穿つ。

血の一滴すら自分の手を汚さぬ早業をやったのけ、地面に転がる死体を眺め、シャモンは静かに合掌した。

「往生せえよ」

堂々と中庭を歩くスタイアを見とがめた衛兵はそれぞれが獲物を

抜き放つ。

スタイアは意中に納めず、歩を緩やかに邸宅へと進める。

その堂々とした佇まいに不気味さを感じた衛兵はおそろるおそろるスタイアを取り囲み、一斉に獲物を繰り出す。

スタイアが僅かに踏み込み、白刃が閃いた。

大きく踏み出して奮われた剣が、槍、剣、鎧などはじめから無かったかのように荒々しい軌跡を描き、スタイアの正眼に収まる。

スタイアは歩を緩めることなく、歩き向かってくる衛兵を次から次へと切り伏せる。

折れた槍や剣が宙を舞い、その後を追って首や血飛沫が舞う。

褐色の外套が血を浴び、黒ずむが、スタイアは一向に意に介さない。

正面の敵に剣を突き込んだ次の瞬間。

背後から短刀を抜き放ち飛びかかる衛兵にスタイアは完全に背後を取られる形となる。

銀の短刀がスタイアの首筋めがけて打ち込まれる瞬間、その衛兵はもの凄い力で上空に飛ばされた。

見ると、腰に鎖が巻かれていた。

グロウリイドーンの夜景を見下ろし、眼下のビリハム低の庭に巨軀を黒衣に包んだ男が立っていた。

背負った棺桶を掲げ、落下する自分を納めるものと判った時、既に視界は暗転していた。

蓋を閉じられた棺桶が地面に突き立てられ、鎖が巻き付く。

中から蓋を開けようと力を込めるが、びくともしない。

黒衣の男　　ユーロが棺桶を背負い、巻き付けた鎖を力一杯引き絞った。

ぎりぎりど鋼鉄の棺桶がひしゃげ、中からばきばきと骨の折れる音が響く。

それでもなおやめることなく鎖を引き絞ると、棺桶が二つに割れる。

おびただしい鮮血が迸り、棺桶の中から肉片が転がり出す。スタイアは振り返ることなく邸宅の中に歩を進めた。

庭での騒動を聞きつけた衛兵はこぞつてホールでスタイアを迎え撃つ。

二階に配置された衛兵は全て弓を持ち、正面ドアを開けたスタイアに矢を構えていた。

一斉に射られた矢に、動じることなく、スタイアは剣を正眼に構えたまま進む。

矢はスタイアに届く前に、その剣に悉く打ち払われた。肉厚の剣はまるで盾のようにやじりを滑らせる。

怒号を上げて斬りかかる衛兵の腹を尻ぎ、滑るように邸宅を進むスタイアに雨のように矢が降り注ぐ。

矢を射る衛兵はいくら射ても当たらないスタイアを幽霊のように思い、恐怖した。

幽霊は僅かに二階を見上げると、二階で弓を持つ衛兵達が一人一人崩れ落ちる。

小さな人影がするりするりと各人の首筋に毒を塗った針を刺しているのだが、階下の者は目の前の血だらけの外套に身を包んだ死神が邪法を使ったものとし映らない。

後ずさりし、逃げまどう衛兵の背中に剣を振るい、スタイアは進んだ。

「名のある者と見た。伺おう」

ただ、状況の成り行きを見ていたバルメライだけが長剣を構えスタイアに対峙した。

その背後にはビリハムが怯えきつた顔で立っていた。

スタイアは正眼に構えた剣の切っ先をバルメライに向ける。

「死ねば糞の詰まった肉袋だけが残るじゃないですか。それだけで十分でしょう？」

バルメライは何故か、スタイアに奇妙な親近感を覚えた。

多くの死を見てきた者だけが理解できるどうしようもない現実。

バルメライは長剣を掲げ、体を開く。

スタイアは正眼の切っ先を後ろに下げ、足を下げ体を開いた。

どちらも自分の一撃に自信が無ければ、できない剣術である。

先に動いたのはバルメライだった。

踏み込み、突き込むように剣を伸ばしスタイアの額を割りにゆく。さらに体を開き背を向けたスタイアの剣がまっすぐにバルメライの剣を滑った。

剣が火花を散らし、バルメライの剣が根本から切られる。

スタイアの背中に覆い被さるようになったバルメライは懷から短剣を手にし振り上げ、そこで動きを止める。

スタイアの脇から伸びた剣がバルメライの心臓を貫いていた。

切れたフードがはらりと落ち、自らを打ち倒した赤い髪の剣士を最後に見た。

捻られた切っ先がぎりぎりとし心臓を破り、バルメライはことごとくた。

剣を引き抜き、振り返ったスタイアはバルメライの首を刎ね、あいた手は目の前で開かれていた。

銀翼の兜から零れる赤い髪の剣士はバイザーの奥に眠たげな瞳を鋭く細め、ビリハムを見上げていた。

「ビリハム・バファア、故あってお命頂戴いたします」

「……バルメライを討ち取るとは。いやはや、感服する。フィダラーのセトメント」

「ファイダーイーは国益に殉じない不逞の輩を闇に葬ることをセメントに託す。さて、ビリハム卿は国家万民に害なす政を成しているのでしょうか？」

「ふむ、世俗を知らぬただの賊とは違うようだな。君は全ての真実を知って、それでいて私に剣を向けるのかね？」

「幾ばくかの真相は知ってましようや」

ビリハムは残虐な笑みを浮かべた。

「なれば、当然、これも知っていような？」

スタイアの足下の石床に亀裂が走り、割れる。

床を割って伸びた巨大な足がスタイアの頭に振り下ろされる。

スタイアは地面を転がり爪を裂けると、今まで居た場所に深々と爪が刺さる。

追って振り払われた爪がスタイアの体をすくい、宙に高く放り上げた。

壁の上で跳ねた体が大理石の床に叩きつけられ鈍い音がした。

よろよろと起き上がったスタイアが見上げたそれは、蜘蛛のような、女人のような魔物だった。

「……魔物、ですかい」

目を細くして呟いたスタイアは冷たい眼差しでビリハムを見た。

「飼育するには少々高価な餌が必要だね。楽ではないよ」

「……でしようねえ」

「必要があるから行っただけの話だ」

「がしかし、いささかやり過ぎたんじゃありませんかね？」

魔物が酸を吐き出し、あわせて爪を振るう。

スタイアの剣が爪の上で滑り、跳躍し翻った身が酸をかわす。爪の上につま先をかけるとスタイアは駆け上がる。

オン、と空気が震え、浮かぶ青白い炎が揺らめきスタイアを舐める。

剣で炎を切り払い、頭めがけて疾走したスタイアは一刀の下、切り捨てようと剣を振り上げたがそこで躊躇した。

泣き咽ぶ少女の顔があったからだ。

「……おねえちゃん、ひどいよ……どこにいったの……？」

横殴りに振られた腕がスタイアの体を壁に激しく打ち付ける。ビリハムは鼻で笑い、スタイアを見下ろした。

「所詮、生まれが違えばまた生き方も違う。持てる者の義務を果たせば、持てる者のみが得られる権利もある。義務と権利、これらが人の世を形作る。義務を果たした者のみが権利を得られ、得られた権利を使い、より持てる義務を果たさねばならない」

よろよと起き上がったスタイアは目の前の魔物を細く見つめた。

「権利にも是非があるでしょうや……人が人をないがしろにしていい程、偉くは無いでしょう」

魔物は悲しげに慟哭を放ち、スタイアに爪を振り下ろした。

剣で受け止めたスタイアの体が沈み、受け止め切れず床を転がる。

「いくら吠えたところで、結果のみが残る。貴様は死ぬ。私は明日からもまた、登城せねばならん」

ビリハムは倒れ伏したスタイアに告げ、襟を直した。

「それでは、私は別宅で寝させてもらう。後始末はせいぜい、騎士団にでもやってもらおうでしょう」

立ち去るビリハムの背中を見つめ、スタイアは起き上がる。

魔物は悲しげな瞳をスタイアに向け細く吠えた。

「やれやれ、死ぬるかね、本当に」

息の根を止めんと振り下ろされた爪との間に、割って入る影があった。

「……死ぬにはちよいと、早いんでないかね？」

「シャモさんか」

シャモンである。

シャモンは振り下ろされた魔物の腕をがっしりと受け止め、スタイアを庇うように立っていた。

「しかしまあ、酷いことする奴も居るモンだね。まだ、ちっちゃい女の子じゃあないか。色々やりたいことや食べたいものもあったろうに」

ぎりぎりとなわむ魔物の腕を押さえ込むシャモンの腕が僅かに震えていた。

魔物の力をほんの、ほんの僅かに逸らしながら押さえ込んでいるからだ。

「こうなれば最早、生きてはおれまいさ。堪忍しとくれよ…堪忍

しとくれよ」

「シャモンさん」

「スタさんや、人が死ぬのは浮き世の非情だ。堪えるしかあるめえよ。だがしかし、だからこそ、俺らは精一杯生きねばなるめえよや。らしくもねえ同情して急ぐのは筋が違いやしねえか？」

抑えきれなくなった爪がシャモンの脇下から伸びてスタイアの足下に刺さった。

スタイアはのろのろと起き上がる。

「……そんな風に、見えますかね？」

「暖かい飯でも喰おうや。喰えない奴らの分も含めて」

シャモンが苦笑し、スタイアが苦笑で返した。

スタイアの剣が閃き、爪を断ち切った。

「シャモさん、あとは僕が斬る」

「任せる」

シャモンを下がらせ、魔物と対峙したスタイアは剣を正眼に構え、両手で掴む。

「……ビリハムをつけて下さい。追って始末します」

「あいよ。虫とラナが追う。苦しまずに逝かせてやってくだせえ」
「承知」

スタイアはそれだけ告げると、頭上で剣を回した。

魔物の爪が一斉にスタイアに襲いかかる。

スタイアの腕の中、白銀が閃光となった。

振るわれた爪が閃光に触れた矢先、吹き飛ばように切り飛ばされ

る。

切っ先は、ゆるやかだった。

歩を進めるスタイアに魔物が炎を吐く。

その炎すらゆるやかに切り裂き後ずさる魔物にスタイアは歩を進める。

「バンシヨケ・ンセイ・シチュウラ・イケン……リョウンの剣、早く収まらず、遅く非ず、荒ぶる訳もなく、また穏やかにならず、理は無く人が斬るのみ。絶剣だな」

澄んだ綺麗な音を立てて、スタイアの剣が爪を切り裂いた。

「しかし、スタさんはいささか無欲すぎる。いや、俺が下衆なだけか」

シャモンは苦笑してスタイアに背を向ける。

スタイアは微笑を浮かべて魔物に歩み寄る。

足を切り飛ばされた魔物は支えを失い体が傾いだ。

それでも闇雲に足を振るう魔物の最後の足を、スタイアの剣の切っ先が滑った。

「……あ……あ……う……」

全ての足を失い、大理石の床に倒れ伏した魔物の中央、少女が声にならない声を上げる。

「よく、頑張った」

少女は首を振り、泣きそうな顔でスタイアを見上げる。

「大丈夫だよ。彼女は強い、あとは、僕が背負おう」

少女は泣きながら、薄く笑った。

「辛かったろう？お疲れさん」

第1章 『最も弱き者』 11

屋敷を後にしたビリハムは馬車を走らせると、その行き先を見届けてから歩き始める。

「メリージエン……滞りは無いな？」

「はい」

このような時の為に用意された別宅は三つ、調べれば容易に場所はわかる。

そのいずれにも逃げたように見せてビリハムは水路を船で下った。ゴールデンドーンは湖面に簡易だが港を持ち、そこから水路を利用して各地との物流を行っている。

本日の事件が明るみに出ればしばらくの間は追求を免れない。事後処理を行うだけの時間が欲しかった。

「アカデミアには白夜の月までには顔を出すように伝えておけ。あと、連中の身元も洗い出しファイダーイーと協議のうえ、しかるべき措置を依頼せよ」

「了承しました」

「いささか、私も彼らも度がすぎたようだ」

僅かに腐臭をはらむ水路に浮かべられた小舟を漕ぐ船頭はビリハムを見ようともしなかった。

知らなくていいことを知らないでいることは、彼の知る処世術だからだ。

「真実を知れば、驚くだろう。がしかし、叶わぬまま、彼らも死んでもらう」

暗がりの中、水路を下る小舟が橋の下を潜った。
暗闇がほんの一瞬、舟を覆った。

「どちらまでお出かけですか？」

メリージェンの首が無かった。

赤黒い血を船底に溜める侍従の死体にビリハムは目を見開いたまま、動けない。

その傍らには褐色のローブを返り血で染めたスタイアが立っていた。

船頭は悲鳴を上げて水路に飛び込み、泳いで逃げる。

一人になったビリハムは固唾をのみ、初めて自分が死ぬ恐怖を覚えた。

「き、貴様、生きていたのか……あれを、どうした？」

「斬りました」

ぶら下げた剣が如実に答えを語っていた。

「貴様、誰に雇われた！ワッケイン伯爵の手のものか！」

「しがない、冒険者でございますよ。あなた方の作られた」

「何が望みだ？金か？地位か？」

「前者にございますよ。金があれば何でもできます。人の身を買
い、踏みにじっても金という免罪符があれば許されましょうや？」

「ならば、貴様の満足する額をくれてやる！これでどうだっ！」

ビリハムは懷の袱紗をスタイアに投げつける。

スタイアの頭にぶつかり跳ねた袋から、金貨がばらばらと飛び散り、水路に沈んだ。

「それじゃあ、いささかお代が足りませぬ」

スタイアは剣を掲げ、ビリハムに詰め寄る。

「いくらだ！貴様の雇い主は私の命にどれほどの値段をつけたのだ！」

船尾まで後ずさり、うろたえるビリハムの肩から腹へ、白刃が走った。

「……金貨五枚」

二つに裂けたビリハムの上半身が水路に落ちて水しぶきを上げた。崩れ落ちた下半身を冷たく見下ろしスタイアはポケットから出した金貨を弾いた。

「畜生には高すぎる値段だろうよ。地獄への渡し賃だ。せいぜい、悪魔によろしくやってみてくださいや」

アーリッシュ卿が知らせを受けてビリハム邸に赴いた時には既に物事が終わったあとだった。

「鐘の音？」

遠く鳴り響く遠雷のように聞こえる鐘の音を訝しみながら、邸の包囲を固める。

「騎士団長！邸宅敷地内にはビリハム卿が個人的に雇われた私兵と思われる者達の死体と……その……」

シルヴィアからの報告を受け、アーリツシュは眉を潜める。

「なんだ？」

「巨大な魔物の死骸がありました」

「魔物？」

「はい……」

シルヴィアはそこまで告げて顔を歪ませる。

「……わかった。封鎖を厚くし一般人を近づかせるな。まだ、他にも居ないとも限らない。邸宅内の探索はシルヴィア小隊と私の直轄部隊で行う。実戦経験の有無で随伴者を選べ。くれぐれも油断するなよ」

大きな戦役をぐりぬけてきたアーリイの手配は見事なものだった。

邸宅に入った矢先に、目に入った魔物を見上げアーリイとシルヴィアは眉を潜める。

「……ガルガンチュアン……なのでしょうか？」

「ラルミア……とも言えないか」

「どういう……ことなのでしょうかね？」

「わからない……だけど、魔物がこのグロウリドーンに居るといふのは由々しき事態だ。それよりスタシアはどうした？」

「招集の鐘を鳴らしても来ないようでしたので迎えをやりましたが、不在でした。一体、どこに行ってるのでしょうか？」

「さあな。おおかた、女でも買いに行ってるんじゃないかな。い

つものことだ」

アーリイは溜息とともに零した言葉を恥じた。

「失礼」

「いいえ、おそらくその通りなのでしょうから反論しようがありません」

シルヴィアはそう言って苦笑した。

「それとも、女性の前では不謹慎と思われました？」

「意地悪だな。そういうところはスタイアそっくりだ」

「ありがとうございます……引き続き、探索をいたします。あと、これを」

シルヴィアに手渡された書面に目を通しアーリッシュは眉を潜める。

「これは？」

「邸宅内に先行して入った部下が見つけた書面です……奴隷の売買記録の他に」

「ブラキオンレイドス？……ふむ」

「これは……ゴーレムか何かでしょうか？」

方々に散っていく部下を見送り、アーリイは一人、ホールで魔物の死骸を見上げる。

鋭利な刃物で切り飛ばされた爪の切断面、そして、頭上から真っ二つに割られた少女の体。

いずれも並大抵の腕ではない。

「……いずれにせよ」

アーリツシュはこの日、初めてこの国の裏側に触ったのだった。

リバティベルは冒険者の集まる酒場である。

冒険者という夢のある言葉の裏には多くの凄惨な現実がある。

「……リヴィウルの野郎、死んだとさ。魔物討伐隊に参加した
はいいが、当初の見立てよりやつこさんの数が多かったらしい。撤
退する犬車に轢かれて真つ二つだそうだ」

「ツケ、支払って貰ってなかったのに」

「人生そんなモンだろうよ」

店内に広がっている喧噪の傍ら、シャモンとスタイアはカウンタ
ーで静かに話していた。

喧噪は、明日を知らない現実の怖さを乗り越える彼らなりのやり
方の一つなのだ。

「人生つてのは細い糸みたいなモンだよ。緩ませば風に吹かれ
て飛んでいく、迷えば絡まる、張り詰めれば切れる。一体どれだけ
の紐が無事に伸びきるかね。生きていくのは、難しい」

「一本じゃあ切れるからよって紐にするんでしょうや」

スタイアはそういつて店の中を目を細めて見回した。

給仕するラナに今日の稼ぎを自慢する男の下卑た笑い声に僻むヤ
ジが飛んでいた。

ラナは苦笑すらせずたすたと厨房に戻ってゆく。
間もなく喧嘩が始まった。

「ラナさんのヒモやってるスタさんが言っなら間違いないねーわな」

シャモンとスタイアはクツクツと笑いエールを傾けた。

「ちよつと！そこ、昼間っから飲んでないで働く！スタさん！さつき騎士団の人来てたよ！仕事サボるな！あとシャモンさん金払え！銅貨四枚！」

甲高い声が店の中に響く。

可愛らしい服に身を包んだ少女が喧嘩の後始末をする為のモップを携えていた。

革ベルトを巻いた首もとで鈴がチリンと澄んだ音を立てる。

「……スタさん、結局、この娘、面倒見ることにしたんか？」
「これで随分、いい拾い物をしたんですよ？なにせ銭勘定にはうるさい」

「スタさんも銅貨四枚！」

「ええ！僕も払うんですか？」

「当たり前！身内だからって容赦しないかんね！」

かしましくまくし立て、店の中を走る少女に二人は苦笑する。

「糸クズでも集めればいずれはぬくい服にもなる、か」

シャモンが呟き、少女が振り返る。

「シャモさんなんか言った！聞こえてるよ！」

「お前さんの服、可愛いなっつたんだよ！」

「お世辞言っても銅貨四枚だかんね！」

ヨッドヴァフの片隅にある酒場、リバティベル。
そこは、冒険者が集まる店である。

第1章 『最も弱き者』 11（後書き）

第一章、御読了ありがとうございます。

ご意見、ご感想などあればどうぞよろしくお願い致します。

閑話 登場人物 用語解説（前書き）

長編に渡ることとなり、登場人物や用語の解説を章毎に追って行います。

特段に読まなくても大丈夫なように作ってはおりますが、ゆっくりと整理されたい方のために作りました。

閑話 登場人物 用語解説

登場人物

スタイア・イグイット

騎士団の準騎士でありながらリバティベルの店主。

赤い髪、曲がった背中、どこか飄々とした青年。

過去に奴隷だった過去を持ち、いくつかの大きな戦乱を経験している。

ラナ

リバティベルの女将。

銀色の髪、赤い瞳というヨッドヴァフでは見ることもない風貌の美女。

いつも不機嫌そうな謎の多い女性。

シャモン

リバティベルに入り浸る酔客。

ぼさぼさの金髪に褐色の肌を持つ気だるげな瞳が特徴。

皮肉めいた箴言を吐く温情家。

アーリツシュ・カーマイン

第七騎士団の団長でありスタイアの良き理解者。

長い黒髪の中に、鋭い瞳を持つ凛々しい青年。

スタイアと共に大きな戦役に従事していたことがある。

フィルローラ・ティンジェル

聖フレジア教会の司祭。

膝の裏まで伸びた綺麗なブロンド、芯の通った目鼻筋のヨッドヴァフでは指折り数えた方が早い美人。

教会と騎士団の業務統合の調整役をしている。

ダグザ・ウィンブルグ

聖堂騎士長の一人。

褐色の肌と金色の髪の活発で直情的な少女。

業務統合で第七騎士団に出向してきた。

シルヴィア・ラパット

聖堂騎士長の一人。

金髪の巻き毛と白い肌のどこか冷めた少女。

業務統合でダグザと共に出向してきたが、過去にスタイアの指揮下で戦役に参加した経験がある。

ユーロ

教会の墓堀。

浅黒い顔とざんばらに伸びた黒髪、漆黒のコートの偉丈夫。

口数が少なく、結論から先に物を言うしゃべり方は人に誤解を招く。

用語解説

リバティベル

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーンの外れにある冒険者達が集まる酒場。

ヨッドヴァフ王国

ヨルグン大陸の東側に位置する王制国家。

北にアブルハイマン山脈、東に大海洋、南にヨシュ砂漠、西にコルカタス大樹林が存在する。

グロウリイドーン

ヨッドヴァフ王国の首都

中央に王城グロウリイハイムを置き、東西南北に主要道路であるグロウリイロードが延びる。

北に工業区、東に住宅街、南に繁華街、西に商業区と区分けされ、それらを高い城壁が囲う形となっている。

城壁内部はひしめき合うように立てられた石材の建物の間を石を敷き詰めて造られた道が縦横に走り、主要道であるグロウリイロードに通じる。

冒険者

奴隷制度が廃止され、広く技術解放を行った国の各機関から技術を習得し生計を立てている者の総称。

だが、正確には定職につけない浮浪者の蔑称の意味で使われることの方が多い。

奴隷

金銭で売買され、所有権を他人が持つ人間を指す。

現在でも非合法取引を行っている者があり、また、冒険者として自らを救済する術が無い者も奴隷として甘んじている。

閑話 登場人物 用語解説（後書き）

章を追うことに判明した設定を追加し、このように設けていきたい
と思います。

第2章 『鉄の理、英雄の果て』 1

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーンの片隅にリバティベルはある。

冒険者と呼ばれる人種が集まり喧噪を響かせる、あまり品のいい酒場ではない。

「でも、お昼は結構、身なりのいい人が来るんだね？」

給仕の少女が客をつぶさに観察しながら店主に尋ねた。

「コックの腕がいいんですよ。たまーにお忍びで貴族の娘さんとかもやってくるんです」

厨房で店主であるスタイアが珍しく包丁を握っていた。

「それをスタさんが逆に食べる、と」

「タマちゃん、僕もそこまでやったらおっかない人に食べられちゃいますよ」

「おっかない人ってラナさん？」

タマと呼ばれた給仕の少女はにやりといやらしい笑みを浮かべる。店の奥でテーブルを拭く女将が静かに店主であるスタイアを見つめていた。

「……怒ってらっしゃる？」

「怒ってない」

「だって？よかったねースタさん」

「やれやれ」

タマはやりこめた喜びにくるくると回る。

短いズボンにシャツを着てサスペンダーで止めているその身形は、男の子にも見えなくは無い。

まるで犬猫のようにつけられた鈴つきの首輪と、夏になるというのにつけられた厚手の手袋が印象的だ。

子供らしい愛らしく利発的な顔が客に元気を与える。

チリンと澄んだ音を立ててドアが開く。

「いらつしやいませ！」

タマが明るく声を上げると、客の顔もほころんだ。

「スタさんは居るかな？」

常連の客は店主をスタさんの愛称で呼ぶ。

カウンターに腰掛けた青年は一目見て、貴族の出とわかる綺麗な身なりをしていた。

タマはその中にほんの僅かに厳しいかげりがあるのも見逃さなかった。

「スタさん、お客さんだよー？」

だが、客に立ち入ることをしないのも商売に必要なことである。

「……おんやあ、アっちゃんじゃないか。今日は当直司令じゃなかったっけ？」

その客はスタイアが所属する第七騎士団団長のアーリッシュ・カイマイン卿だった。

「昼休みくらい、自分の好きな場所で昼食をとってもかまわないだろう？」

「随分と遠出してきたねえ。どれ、東方のコンルウから面白い物が届いてたんだ。ちよつとこさえてみましょうかね？」

「あの、灰色の細長くて塩っぱい、ソーヴァとかいう奴かい？」

「残念、似て異なるけどウドウンという奴だ。僕はソーヴァの方が好きだけど、これもなかなかイケるんだ」

スタイアはスパゲティパスタよりは太い白いパスタみたいなものを鍋で湯がく。

ほどなくボウルに盛られた白い麺がカウンターに現れる。

「あの黒いスープは無いんだ」

「魚を日干しにして削ったものと薬味をさつとまぶして、生卵を載せたらさつとシヨユをかけて食べるんですよ」

「なんだか、気持ち悪いな」

「下町の食べ物らしいですからね」

「いただきます」

ボウルを手にとると、肘をカウンターに載せ、フォークで乱暴に絡めると音を立てて食べ始める。

タマは一見して、貴族らしくない振る舞いに見えたが、料理の姿形からしてこの食べ方の方が堂に入っていると見えた。

「いいね。最近、暑くなってきたからこういう冷たい食べ物美味しく感じる。僕らから見れば一見してグロテスクだけど、なかなかどうして。塩っからいスープに魚の日干しの香りが載って、卵の甘さが引き立つ。薬味が生臭さを消して青さがふつと香るあたり、芸術だね。それに、これ、麦で作ったパスタかな？腹持ちもよさそ

うだし、コンルウって国は下町ですらこついったものを食べてるのか」

「さすがわかる人はわかってくれるねえ。出した甲斐があるモンですよ」

「……こつというのが好きなのは手間がかからないからだろ？」

「へっへっへ。わかります？楽しんで旨くて無駄が無いってのはいいことですよ」

スタイアは満面の笑みで答える。

アーリツシュは掻き込むようにウドゥンと呼ばれる料理をたいらげるとボウルをカウンターに戻した。

「これも、足りなければ二杯目かな？」

「それがイキと呼ばれる食べ方だそうで」

「貰おう」

ボウルを下げるタマがオレンジの果汁をサービスで出すと、アーリツシュはそれを舐めながらその後ろ姿を見る。

「……元、泥棒かい？」

「タマちゃんですか？ええ、そうですよ。よくわかりましたね」

「鈴にしろ、手袋にしろちよつとおかしいからね。犬猫じゃあるまいし、首輪に鈴なんて奴隷そのものだし、かといって、手袋なら指が自由なものを使わなきゃ不便だ。染みついた盗癖を抜くのにあいつた手袋をつけさせているんじゃないかってね」

「……わかつちゃうモンですかね」

「誰が見ても、とは言い難いが不自然に過ぎる」

アーリツシュは苦笑する。

「アっちゃん、本当に昼飯だけ食べに来たんじゃないんでしょう？ 昼休みつたってそうそう時間があるわけじゃないんだし、本題切り出してよ」

「その時間をくれる為にわざわざすぐ食べれるような物作っておいてよく言っ」

スタイアとアーリッシュは苦笑しあうと続けた。

「まだ、ビリハム邸の事件を気にしてるのかい？」

「ああ、賊の侵入と片付けるには不審な点が多すぎるんだ。邸宅内の物には何も手をつけられていないし、護衛は魔物にやられたのではなくて明らかに人間の手によって殺されている。邸宅に残された魔物と邸宅地下に建造されていた祭壇は何の目的で作られたものか。わからないことだらけだ」

「ビリハム卿が奴隷売買をしていたことが明るみに出て、そつちのスキヤンダルが大きくて事件そのものが隠れたことが気に喰わなさそうだね」

「ビリハム卿が何者かの手によって殺されたかは僕にとって問題じゃあない。問題は魔物がグロウリドーンに居たことの方が重要なんだ」

「へえ」

スタイアは洗い物をする手を僅かに止めた。

「戦で僕ら騎士が戦うのはいつだって最後なんだ。それまでに多くの調略が行われて、勝てるとなった時、初めて大義名分の為に軍を出す。完全に勝てるという状況にならない限り、兵は出せない。それは犬死にという奴だからね」

「負けるとわかってるのに兵隊出すのもそれじゃあおかしい話になる。それなら戦争は起こらないですね」

「滅ぶ国家の矜持、食べさせて貰った人への血での贖罪、負ける側も綺麗に負けなければならない。個人の感情を抜きにして、戦わずして滅んだ国の民が長く生きられることは少ない。恨みというのはそれだけで相手の国への釘になる」

「なるほど、占領されても無下に扱えば酷いことになるぞって話ですか」

スタイアはニコニコしながら相槌をうった。

「数はそのまま力になるからね……っと、スタさんは話が上手いからはぐらかされる」

アーリツシュは軌道がそれた話を元に戻す。

「魔物がグロウリドーンに居るということは、彼らがヨッドヴァフに調略をしかけていると見るべきだと僕は言っているんだ」

「魔物が？冗談でしょ、彼らは社会的な生き物じゃあないはずだよ。どちらかというと獣に近い」

「そうじゃない可能性もある。いや、むしろその可能性の方が強いと僕は思う。僕ら人間より知性の高い魔物が存在したっておかしくない」

「なんでまた」

「そうでなければ、自分らに害をなす人間の集まるグロウリドーンには近寄らないし、ましてや内部に入ろうとは思わない。人間と共生できる獣しか、人の住む町では生きていけないからさ」

アーリツシュはそこまで言ってスタイアを見上げた。

スタイアはしばらく考えてから言葉を続けた。

「本質は得ていると思っていい、がしかし、本件には関係無いよ」

「そうか」

アーリツシュはどこか落胆して肩を落とした。
入り口のドアの鈴が来客を告げる。

「おんやまあ、フィルさんじゃないですか。珍しい客もあるモンですね。僕に会いに来たんですか？そのままベッドに行きましょうよ」

「昼間から不謹慎な」

「昼じゃなければOKですかっ！いやっほうっ！」

「そういう問題じゃありません！アーリツシュ卿にお話したいことがあつて探していたところです。こんな場末の飯場で昼食をとられていらっしゃればよからぬ噂を立てられてしまいますわ」

フィルローラは店内をぐるりと見回して怪訝な顔をした。

ラナと目が合うが、ラナは素っ気なく目を逸らすと店内の掃除に戻る。

「丁度いい。フィルさんもウドウンを食べていませんか？スタさんがコンルウから取り寄せたモノなんだが、暑気払いにはいいものだよ」

アーリツシュがボウルを掲げると、フィルローラはいよいよもって怪訝な顔をした。

「……信じられません、巢の中でのたくうホワイトワームみたいな食べ物美味しいだなんて」

「残念だ。スタさんはこう見えて結構、料理が上手なのに」

「奴隷やってたときも、兵隊やってたときも飯だけは作らされましたからね」

スタイアは自嘲気味にそう言う。と厨房に引っ込んだ。

「それで？相談事というの？」

「あの……こちらで話されるのですか？」

フィルローラはしきりにスタイアを気にしている。

「構わない。こういう場所でああいう人間だ。聞いて貰っていた方が何かと知りたいことについて気に止めておいてくれる。それとも、僕が信じている友人を君は信じられないというのかな？」

「ですが……」

「それに、昼の休憩時間帯まで仕事をする熱心さは感心するが、僕は休むツモリでここに来ていてね。まだ、デザートを食べていない」

「そんな……」

厨房を楽しげに見ているアーリツシュの姿にフィルローラが絶句する。

厨房ではスタイアがそのデザートを作り始めているところだった。丁度、その時、シルヴィアが店のドアを開いた。

「……おや、アーリツシュ卿ですか」

「君も昼食かい？」

「いえ、私は自炊しておりますので……食後のスイーツでもと」

シルヴィアはためらいなくアーリツシュの隣に腰掛ける。

「……シルヴィア聖騎士、あなたも？」

「タグザの分も頼まれまして。常連となっております」

「ですが、教会の聖堂騎士、それも聖堂騎士長のあなたが自ら進んでこのような場所に……」

「スタイア隊長のスーツは結構、有名ですよ？ フィルローラ司祭はスタイア隊長がお嫌いのように」

シルヴィアに言われ、デザートを運んできたスタイアが苦笑する。

「品行方正に生きているはずなんだけどなあ……ほい、どうぞ」

皿に載せられていたのはスタイアが作ったとは思えない綺麗な花だった。

黄色の花びらが黒い小皿に映える。

「練り菓子をちよいと刻んだモンだけど、どうだい。なかなかイケるだろう？」

「ボサラタージュの花ですか。綺麗ですね」

シルヴィアがほおばるのに習ってアーリッシュもフォークで花びらを刻む。

「……砂糖菓子、だかはらりと口の中でほどけるこの食感」

「ほのかに香る、青っぱさは……ミントですか？ いや、でも、花の香りが」

「練り菓子の素材については勘弁しておくれい。ただ、隠し味はオレンジの皮を絞った汁でもって香りをつけて、ミントを混ぜただけさ。種明かしをすればなんのこたあないですよ」

いたずらをバラす子供のような顔つきで語るスタイアには目もくれず、二人は砂糖菓子をフォークに載せる。

ラナがそつと紅茶を添える。

あまりにも幸せそうにほおばる二人の姿に、フィルローラはフォークを伸ばす。

「さて、お楽しみのところ悪いがフィルさん。今、第七騎士団で捜査中の魔物の事件の話じゃないかな？」

「……え、あ？はい！」

意地悪そうなスタイアの笑みに一瞬たじろぐも、咳払いをして座り直す。

スタイアはそんなフィルローラを面白そうに見ながら先を続けた。

「この王都で夜な夜なか弱い女性や子供を狙い、魔物が襲いかかる。とりわけ、今のところ大事に至る前に巡回中の騎士によって駆逐されている現状だけど、出所が問題だって話だね」

「……朝礼にも出られないのによくご存じで」

「ウエストグローリーロードの酒場の女の子達の間じゃあこの話で持ちきりだからね。帰るに帰れないからお持ち帰り！って僕にとっちゃあ美味しい状況なんだ」

「……っ他人の恐怖につけ込んでそのような振る舞い、恥ずかしくないのですか！」

憤るフィルローラに苦笑で返し、スタイアはアーリッシュを見る。

「……しかし、いつまでも放っておくわけにやあいくまいさ」

「そうだな」

フィルローラはもう一度、咳払いをするとアーリッシュに向き直る。

「第三騎士団のオズワルド卿にお話をお伺いしましたところ、魔

物自体はいずれも危険性は低いものの、繁華街を中心に出没するそうです。雨の日は特に出る傾向が強いとか」

「ふむ」

アーリツシュは砂糖菓子を口の中に押し込むと、考える。

「何者かが何かの目的でもって意図して行っている、と見るべきか」

「やはり、そう思われますか」

「目的まではわからないが……いずれにせよ、放っておけるものでも無い。魔物討伐から帰ったダッツ小隊を巡回の編成に組み込んで警戒を厚くする。フィルローラ司祭は聖堂騎士と騎士団の編成についての調整を図って下さい」

「心得ました」

アーリツシュは一度、スタイアをちらりと見る。

「スタさん、今日の昼に時間は空いているかい？可能であれば、訓練時間を設けたい。我が隊から殉死者を出すのは忍びない。厳しくやって欲しい」

「僕が？冗談でしょう。おそれおおくも僕は準騎士ですよ。正騎士や聖堂騎士長が居る中で僕が出張っちゃ成り立つものも成り立ちはない」

「騎士は強くあらねばならない、そう言ったのは君のはずだが？」

「そりゃそうでしょう。騎士は戦うのがお仕事ですからね。戦えなかったらお仕事になりませんでしょうに」

「なら、戦えるようにして欲しい。長い平和で誰もが死ぬことを予想していない」

「ダツさんに頼む方がいい。魔物討伐を積極的に引き受ける彼らの部隊は練度が高い上に、強い人が多いからね」

「だからこそ、彼らを巡回に回す。いつ遭遇されても彼らならば死ぬようなことは無い」

「ふむ。確かにそっちの方がいいか……」

スタイアはひとしきり考えてから、もそもそと菓子の残りを口に運んでいるシルヴィアの肩を叩いた。

「んぐっ！」

「シルちゃん、任せた」

「はい？」

「元、スタイア隊の実力、存分に発揮しておくれ」

「……なんだか、嫌な役回りをやらされているような気がしないでもないです」

「騎士団と聖堂騎士団の合同運用には未だ反感を残す者も少なく無い。その中でも聖堂騎士団に女性が多いというのがみんなの思いだよ。なら、その女性騎士筆頭の君が実力を振るうことで誰しもが女性は戦えるものだと知ってくれる。これはチャンスだよ」

「という言い訳で、面倒事を私に押しつけるわけですね。いいですよ。やりますよ。ただし、後で酷い目に遭わせますからね？」

「やったね！これで、楽できる！」

スタイアは小躍りしながら喜び、そそくさとエプロンを外す。

ラナが渡したチェインメールに袖を通してながらうきうきとしながらヘルムを被った。

アーリツシュが怪訝な顔をする。

「……スタさんが昼から仕事をするツモリでいる」

「聖堂騎士団の夜巡組には十分注意するようにあとで言っておきます」

スタイアが苦い顔で笑う。

「あのねえ！お金の出ない仕事なんてするわけないでしょうに！ちよつとばかり人に会う約束があるからこうしてめかしこんでるんじゃないですか」

フィルローラが怪訝な顔をする。

「……また教会の修道士をたぶらかしたのですか？」

「聖堂騎士の若い子かもしれません」

「どこぞの貴族の令嬢かもしれない」

「どれも外れ、大学に顔出すんです。怪しい身なりじゃ入れるような場所じゃないんできちんとした身分をたてれる格好が必要なんですよ！」

皆がそろいもそろって、怪訝な顔をした。

「学術に励む子女をその毒牙にけるツモリですか？」

「女子の生態の学術的考察とか言い訳を並べるんですね、わかります」

「大学はちよつとなあ……僕もフォローしようがない」

「酷い言われようだ！僕だって真面目だった時期があるんですよ？その頃には学士号だって取って、未だに大学の名簿に名前を残して貰ってるんです。その時の恩師に会いに行くのになんだってここまで言われるんですか！」

フィルローラが驚いてアーリツシュを見る。

「本当なんですか？それ」

「大学での不祥事はね。騎士団と管轄が違っしツテも無いから何

かあったときは本当にフォローできない」

「じゃなくて、スタイアさんが学士号を取ってらっしゃったって話です。学吏ならともかく学士といえは何らかの成績を修めない限り、取れるようなものでは……」

「ん？スタさんは教授になる一歩手前くらいまでは行っただけが？」

スタイアが大きな溜息をついた。

「まあ、その前に色々と悪さしたのがバレちゃいましたね。学士号を取り上げられて学吏に落とされた訳です」

「女癖が悪いからだ」

「……やっぱり、女性がらみで問題を起こしてるんですね」

シルヴィアがしみじみと頷く。

「今日は昔の女に会いに行くんですか？」

「恩師に会いに行くんですよ」

スタイアが視線を巡らせた先で、タマがラナからカバンを背負わされていた。

「似合ってるじゃないか」

「……本当に行くの？」

「勉強はしておきなさい。知識が知恵になった時、生きていく最大の助けになる」

不安そうな顔をするタマの頭にスタイアは手を載せる。

「じゃあ、ラナさん、後は頼みます」

「はい」

そのまま手を繋いで店を出て行った。

見送った三人は互いに顔を見合わせる。

「あの子はスタイアさんの子供ですか？」

「……最近雇った給仕だという話ですが」

フィルローラとシルヴィアにアーリツシュが答えた。

「違うね。実の子供じゃあないよ。スタさんは自分の子供を作れない人だからね」

「え？」

「……一度、死ぬことを覚悟した人間は自分が生きていなければならない責任を避ける。だから、あんなにも真面目なんだろう」

アーリツシュがスタイアを見る目にどこか寂しさを覚えながらも、フィルローラは胸の中がちくりと痛む。

「私、また、無神経なことを言いました？」

「スタさんは思ってるより、律儀だよ。だけど、もう少し、仕事に身を入れてくれると僕が助かるんだけど……かなわない、か」

敵う、叶う、どちらの意味で言ったのだろうか考えながらシルヴィアは溜息をついた。

ラナが溜息をつきながら呟いた。

「……皆様、お時間の方はよろしいので？午後を告げる鐘はとつくに鳴っておりますが」

「「あ」「」

第2章 『鉄の理、英雄の果て』 2

ダッツ・ストレイルはいわゆる典型的な冒険者あがりの騎士だった。

商家の五男で家業を長男が継ぎ、次男、三男が支店を継ぐ。

四男は学業を修め、父のツテでアカデミアに学士として在学し研究に勤しむ中、末弟であるダッツにはわけてやれる財産もなく、また学業で身を立てられる程、世間のゆとりもなかった。

自由闊達、といえば聞こえはいいが放蕩を繰り返し勘当同然のまま首都で日払いの仕事を繰り返すうちに槍を持つことを覚えた。

いくつかの戦乱に冒険者として参加し、その功績を認められ騎士団に取り立てられた経緯を持つ。

「……平和なモンだよな」

遠征を終えて帰隊してみれば、自分の預かり知らぬうちに聖堂騎士団が騎士団の詰め所を出入りしている状況である。

スタティア、アーリツシュらと生粋の戦場を見てきたダッツにはそれが平和を覚えたヨッドヴァアの姿に見えた。

「ダッツ正騎士殿、それは聖堂騎士団に対する侮蔑か？」

ダグザが喰ってかかるように言った。

「バカにされて当然だ。女子供に槍持たせて戦わせようって考え方が平和だっていつてんだよ」

血筋にたよらず、腕一本でのし上がった冒険者あがりの騎士はおしなべて容赦は無い。

「無礼な」

「遠征には遅参する。参上したとしてもろくすっぽ役には立たない。礼なんかで飯が食えると思うな」

「三日の行軍は予定の範疇です。遅参とは……」

「一日で走れ。一日休め。三日目で死ぬ。それが三日の行軍の意味だ。悔しければスタイアに槍をつけてみる。そうしたら認めてやるよ」

ダッツは鼻を鳴らすと、アーリツシユの待つ騎士団長執務室の扉をくぐった。

「今帰ったぞ」

礼を取らず、ソファにずしりと身を沈める。

偉丈夫、とまではいかないがそれでも鍛え込まれた体躯に乘られたソファが軋みをあげる。

「やあ、おかえり。早速仕事だよ」

「市街地での魔物出没事件。少し、聞いた。うちの部隊を自由に使ってくれ」

「頼もしいね」

「仕方があるめえよや。死なれても困るンだから」

ダッツは大きく息をつくと、緑に逆立つ毛を撫で上げた。

「……しかし、王都の中で魔物騒動とはね。一体何してんだか」

「仕方あるまいさ。外敵からのとりあえずの侵略は無くなった。平和になれば剣や槍は必要がなくなるからね」

「問題は誰が最後に槍を放すかだよ。俺はごめんこうむるね」

「そういう人を人は英雄と呼ばなければならぬ」

つかれた笑みで笑うダッツにアーリツシュは答えた。

「アーリイお前はどう見る？」

「王国内部の犯行だろう。魔物が単独で潜入ルートを持っていると見るのはいくら平和に浮かれる王国といえど、ありえん」

「問題はどつから運ばれてくるか、だな。心当たりは？」

「それはダッツさんの方がたった今しがた終えたばかりだから詳しいだろう？」

ダッツは苦笑する。

「捕獲した魔物は生態調査のため、アカデミアに搬送される。あるいは処分の為に教会か……だがまあ、どちらにせよアカデミアの管理下になる。まっとうに見るならそこからだ」

「騎士団とアカデミアは独立関係にあるからまさか、疑いをかけて調査に入るわけにはいくまい」

「そういうところはスタさんに任せようぜ？スタさんだって放つてはおくまいさ」

「そうだね……そうか、そういう……」

アーリツシュはアカデミアへ赴いたスタイアの思惑にようやく思い当たる。

「……だけど、問題は誰が何のためにだよな。趣味、にしちゃあいささか度が過ぎる。ビリハム・バファア邸の惨殺事件にしたってそつだ。あれだって結局のところ犯人の目的がわかつちやいない」

「そうだね……わからない」

アーリツシュは筆を走らせる手を休めて大きく息を吐いた。

「僕らは平和を手に入れたが、その代償を今、求められているのかもしれないな」

「今、じゃない。近い将来だろう?」

ダッツはそれだけいうとソファからのろろと身を起こした。

「休まないのか?」

「オズワルド卿に挨拶してくるよ。討伐隊編成の時に大分苦心してもらった。俺のような小物にも目をかけてくれるいい人だよ」

「そういえば、彼は……」

「そう、冒険者上がりさ。冒険者上がりはどうしても肩身が狭い。だからこそ、色々と心を砕いてくれるのさ。そうでもない俺達みたいな奴らは生きていけない」

アーリツシュは眉を潜める。

「……魔物出没事件にかかる鎮圧数はオズワルド卿の率いる第三騎士団が頭一つ抜いてるね」

「王宮近衛騎士の選抜も近いからな。力は、入るさ」

「王宮近衛騎士の選抜?」

「おいおい、騎士団長。てめえの出世のことぐらい気にかけてけよ。ロウ・ヴェルハスト卿が退役するから騎士団の中から近衛騎士を選抜するって話だ。出世欲が無いのは騎士として美徳だがいきすぎるとそいつあ少し、鼻につくぞ?」

アーリツシュはつまらなさそうに鼻を鳴らす。

「昇進か、スタさんじゃないけど、昇進すると面倒な仕事ばかりだからな」

「楽もできんだぞ? 本当は」

アカデミアはヨッドヴァフ東区に巨大な敷地を設け、まるで天を突くような槍のようにそびえ立つ塔となっている。

ヨッドヴァフが秘蔵する知識の全てがこのアカデミアに集約されている。

「スタさん、来るなら事前に連絡をくれるべきだ！」
「やあ、イシュさん。元気そうだなによりです」

アカデミアのホールでスタイアを迎えた濃緑のローブを着た教授がスタイアと抱擁した。

単眼鏡を載せた瞳からは若さと才気が溢れている。

イシュメール・スタークラックはスタイアが学士としてアカデミアに存在した頃の友人である。

「スタさんが来るなら適当な調査を名目に陰気臭い書物庫から出てラナさんに会いに行けると思っていたのに！あそこでだらしく飲むエールが最高にウマいんだ」

「そいつあ、また折りを見て招待しますよう。今日はまたちよつと込み入った件で、クロウフル・フルフルー大師星に会いにきたんですよ」

「あのクソじじいに？」

「そのクソじじいに」

イシュメールが怪訝な顔をしたのを見て、タマは少なからず緊張した。

「ちよいと、この子の師事を頼みたくてね。取り次ぎをお願いで

きませんかね？」

「ふむ……それはやぶさかじゃあない。がしかし、あのじいさんの眼鏡にかなうかね？偏屈で意地が悪く、とてもじゃあないがお嬢さんじゃあ耐えきれるような……」

話を聞くにつれ、タマは緊張に身を固くする。

往來を行く学士の殆どがどこぞの貴族の出とわかる身なりをしており、自分がどこか場違いな人間のように思えてもきた。

恥ずかしさに俯き、スタイアの服の裾を握る。

そんなタマの頭をそつと撫でる手があった。

「イシユメール。誰がそのクソじじいかね？」

「うわおういつの間に」

タマが見上げると、そこには老爺が立っていた。

白く縮れた頭髪を後ろでまとめ、シワだらけの眼で弟子を睨み上げながら唇をもごもごとさせている。

「スタイアもスタイアじゃ、来るなら来るでひとつ知らせを持ってくるのが礼儀というものだが……なるほど、利発そうな娘じやのう。これならば知らせを入れる方が面白く無いというものだな」

「お久しぶりです、クロウフル大師星」

スタイアは恭しく頭を下げる。

「壮健そうで何より。儂はつくづく思うのだが、イシユメールのような根性無しよりお前さんのような奴に残って貰いたかったのだかね？しかし、仕方あるまいや。歩むべき道は幾多にあれど進む足は二本しかないのがまた人というもの」

「師匠こそ相変わらず」

「うむ。どれ、ここで立ち話をするのも面白くない、儂の部屋に行こうか」

老爺　クロウフルはそう告げると指を振った。

振られた指から燐光が零れ、光が渦を描いて扉を作る。

クロウフルがその光の中に歩み入るのに続き、スタイアが入り、タマはおずおずとその後ろをついてきた。

光を抜けると、そこは巨大な本棚がまるで砦の防護柵のように並んだ書庫だった。

タマは一通り周囲を見回すとクロウフルに尋ねた。

「おじいさん、今のは何ですか？」

「ほっほう？ 気になるかね。スタイアなれば最初は気押されて尋ねることをしなんだ。だのにこの小さなお嬢さんはこの技を知りた」と見える」

「はい」

タマは小さく頷いた。

「これはだね？……魔法という技だよ？」

クロウフルはいたずらをあかす少年のようなきらきらした瞳でささやいた。

「遙か昔、幾度となく星が巡り今になる前、大地はおるか空を支配した民の叡智が産み出した技術。空を飛び、星を掴み、夢を渡り、すばらしい明日を創る助けをする。それが魔法だ」

クロウフルはタマの周りに燐光を弾けさせて笑みを浮かべる。
タマはその光を触ろうとして、すり抜ける手をしげしげと見つめ

る。

「凄い！」

「ほっほっほ！お嬢ちゃんも一生懸命勉強すればワシなんぞより立派な大魔法使いになれるとも」

「でも、おかしいね。魔法が使えるのに、どうしてお金持ちじゃないの？」

「私がかね？古い先短い余生を暮らせるだけのお金はあるとも」「魔法が使えるなら、一杯お金盗めるのに？」

スタイアがあわてて、クロウフルは面白げに笑った。

「それは流石に思わなかった！そうか……ワシは泥棒をすれば大金持ちになれたのか」

「……タマちゃん、ダメでしょうに」

スタイアがたしなめるがタマは眉根に皺を寄せて思ったことを口にする。

「でも、お金は生きていくのにとっても大事だよ？それがいっぱいもらえるのにいっぱいもらわないのはへんだよ」

クロウフルはタマの頭をシワだらけの手で撫でながら続ける。

「ときに、お嬢ちゃん。お嬢ちゃんは今、何で生きておる？」

「スタさんにお金で買われて、働いて食べさせてもらってるから」

「うむ、うむ。だが、よく、そう、もっと、よく考えてみようかの？スタイアはお金でおぬしを買ったが、買わなくてもよかった。じゃあ、なんでお主を買おうとしたのかね？」

「……優しいから」

タマは少し恥ずかしそうに答えて、スタイアの裾を掴む。

「もし、ワシが泥棒をしてお金を盗んだとしよう。だが、盗まれた人間はワシを許してはくれまい。ワシはたくさんのお金を手に入れるがたくさんの敵をも作ってしまう」

「あ……」

タマは理解して眼を輝かせた。

「お金がなくても、生きていける……んだ！」

クロウフルはタマを抱き上げ、伸びきった髭をこすりつけるようにほおずりする。

スタイアは一步下がり、クロウフルに頭を下げた。

「凄い！私、ずっとお金がないと生きていけないと思ってた！すごい！すごい！」

今までの自分の常識を覆され、新しい発見をしたタマの驚きようは大げさではあったが、それも理解できる話ではあった。

スタイアはもう一度小さく頭を下げると眼を細めた。

クロウフルは横目でスタイアを見ながらタマを降ろし、満面の笑みを浮かべた。

「スタイアよ。子供はいいのう、とても素直で賢い」

タマは自分の手のひらを見つめながら興奮さめやらぬ顔でスタイアに何かを伝えようとしたが、スタイアの顔を見るなりすっと冷静になった。

「スタさん！あたし、ちょっと探検してくる！」

「迷子にならないようにしてくださいな」

「うん！」

元気を装い飛び出すタマを見送り、スタイアは小さく息をつくときろウフルに向き直った。

クロウフルはいつまでもタマの背中を見つめていた。

「本当に、賢いな。あの子は」

「ご迷惑をおかけいたします」

「お主やイシュメイルのような人間を見るたびに自分が老いたと感じるよ。伝えながらにして学ぶ日々じゃ、あのような子に教えられることを喜ばねばならぬ」

クロウフルは指を鳴らすと、床から椅子を産み、腰掛ける。

スタイアも椅子に腰かけると、二人は黙って向き合った。

しばらくの沈黙の後、クロウフルは呟いた。

「ビリハム・バファアはよく学ぶ男ではあった」

「やはり」

「欲望は何かをなしえる力ではある。がしかし、身に余る欲望と力は己を滅ぼす。そして知ること引き返せぬ道も、存在する。果たして、誰がそれを御していると知れるのだろうか……そうして、落ちるのだよ。魔道に」

「魔道……ですか」

「そう言える程、ワシも歳を取った。口さがないといえればそれまでだが、生きることが恥を重ねることだ」

クロウフルはそう告げて大きく息を吐いた。

「……ヨッドヴァフを拓くには多くの血が流れた。オーロードから流れた民は魔物の溢れるこの地に押しやられ、数多くの戦をしなければならなかった」

「栄光戦争……百年前の話ですね」

「初代ヨッドヴァフは聖剣グロウスクラッセと退魔の鐘を携え、この地を平定し魔物をこの地の奥深くへと押し込めた。その地がヨッドヴァフだ」

「百年前に首都が交易都市オーロードからヨッドヴァフへ移った経緯ですか？」

「その当時を知る由はあれど、真実を知るとは叶うまい。我々は今の時代を生きているのだから」

「我々は、今を生きている、ですか」

スタイアは小さく呟き、苦笑した。

「私は勉強が苦手です……どうにも、こちらに傾いてしまっていますね」

スタイアは腰に吊した剣を叩く。

「流転千景、雨夕晴朝、また風も命脈を惜しみ、構えと言います」

立ち上がり、丸めた背中をクロウフルに向ける。

「スタイア……お前は何を知ったのだ……」

第2章 『鉄の理、英雄の果て』 3

マリナとアンネは姉妹ではない。

がしかし、身寄りを亡くし娼婦として生きる道を互いに選ばされ、形だけの姉妹となる。

それが奴隷としての境遇ではある。

「アンネ、あなたは何故そう、身なりがだらしないの？」

マリナは妹のアンネをしかりつけ、アンネは怯えるようにつつむく。

「あの……お掃除してて、その、ごめんなさい、お姉ちゃん」

娼館、とはほど遠い、場末の酒場の片隅で店を閉める手伝いをしていた時だ。

「だから、あなたには買い手がつかないの。タダ飯を喰らうだけの娼婦なんてお店にとっては要らないのも同じよ？」

「でも、掃除してて、ちよっと汚れてしまつて……でも、その」「口答えは要りません。すぐに替えてらっしゃい」

彼女らは酒場の客を相手にし、買い手がつけば一夜共にする娼婦だ。

娼館のようにそれを目的として来た相手をする立派なものではないが、奴隷として売られた身としては生計を選んではいられなかった。

アンネが帰ってくるころには店を閉じる仕事は終わっていた。

「あの……お姉ちゃん、その……」

「本当に仕事のできない子ね。お客にちやほやされるのは若いウチだけだと思いなさい。支度をしたなら帰りますよ?」

厳しい姉に従えられ、アンネはしぶしぶ頷いた。

客の居ない日の彼女らには自由になる収入は無い。

それは苦しい生活には違いなく、そういう身上であることは奴隷である以上、仕方がない。

だが、その生活が決して彼女らにとって悪い訳ではない。

「……スタイアさん、今日も来ませんでした」

「ああいう人を当てにするのはおよしなさい。帰ったらクローゼットを点検なさい。虫が湧いていたら承知しませんからね」

帰宅する道すがら、マリナはアンネをたしなめる。

店の用意した仮住まいではあるが、二人にとっては家のようなものだ。

いつもなら、夜が明けてから帰路につく二人だが、客の居ない日は早くに帰ることができる。

繁華街のある西側のグロウリイストリートの裏側には多くの娼館が存在する。

彼女らはその少し怪しげな雰囲気を通りを慣れた足つきで歩く。

酔った勢いで繰り出す若者や、うらぶれた身なりの男が一夜限りの夢を求めて彷徨っている。

それらを背中に流し、戻る彼女らの心は僅かながらに浮いていた。早くに眠ることができるからだ。

がしかし、その日はその幸運がかえって仇となる。

「あれ、なんだろう?」

仮住まいまでの道すがら、人がまばらとなるのはどうしようもなかった。

だが、いつもとは違う雰囲気を二人は敏感に感じ取り訝しむ。妙な生臭さに満ちていたからだ。

生理的な欲求を相手に商売することから、生臭いのは慣れていたが今まで覚えたどの匂いともつかない匂いに二人は眉を潜める。

「なに、あれ？」

アンネがマリネに尋ねるがマリネは首を傾げる。

建物の壁にうずくまるようにして黒い影がぴちゃぴちゃと音を立てていたのだ。

物もらいが店の残飯をさらって食べている光景は二人も幾度となく見てきた。

がしかし、それにしても異様であった。

残飯にしては糞尿のような刺激臭も混じっているし、それが口にくわえているものはロープのように長く、薄い桃色をしていたからだ。

アンネが恐る恐るそのヒモを覗いたとき、それと眼があってしまった。

眼が一つしかなかった。

「ひいあ
」

悲鳴を上げようとした頭が、無くなっていた。

勢いをつけて転がるアンネの体から追って吹き出た血が石を敷き詰めた道に叩きつけられる。

「あ、あ
」

マリナはそこまできてようやく、客の話した噂話を思い出した。

グロウリイドーンに出る、魔物の話だ。

足が震え、アンネを助けなければいけないと考え、それがもう手遅れであることを知る。

錯乱し、顔を手で覆うが眼はしっかりと魔物の口で潰されていくアンネの頭を見ていた。

自分と同じ赤い髪が魔物の口から跳ね、先の別れた舌先に絡んでいる。

「ひい……あああつ！」

声の限り叫んで、走り出す。

魔物はぎよろりと一つしか無い瞳をアンネに向けると、六本の足を器用に動かし追ってきた。

自分の遅い足では追いつけぬと知った魔物は背中から二対の羽を生やすと羽ばたかせる。

マリナは振り返り、夜空に血を滴らせながら飛翔する魔物を見てしまった。

「ギユルウウ……オオオウウ……」

喉の奥から発せられた咆哮に押されるように魔物がマリナに飛びかかる。

足で肩口から組み伏せられ、まだ、アンネの髪飾りが残る魔物の口がマリナの眼前で広がる。

「いやあ！やあつ！たす……助けてっ！いやああああつ！」

もがくマリナを魔物は無理矢理に押さえつけるとその牙を振り下ろそうとした。

「ああ、あああつっ！」

「一斉射ッ！続けて包囲っ！かかれっ！」

飛翔したボルトが魔物の頬を貫いていた。

伏せ撃ちの態勢から打ち上げられたクロスボウのボルトが魔物をマリナから引き剥がした。

ガシャガシャと鎧の響く音が聞こえたと思った時には、マリナは抱え上げられていた。

マリナの見つめる魔物との間に騎士団の紋様が入った鎧が割り込む。

それらは魔物を囲むと、手にした槍を突き立てた。

「ギアアアン！ギャン！」

槍ふすまにされても、まだ生きている魔物は悲しげな声で泣く。

「油断するな！止めを早く！」

そう告げたのは第七騎士団所属のアーリツシュ卿だった。

身長ほどもあるクレイモアの刀身の根本を掴み、槍のように突き出して魔物を貫く。

その横から振り下ろされたハルバードが真っ二つに魔物の体を押しつぶした。

「……大丈夫、ですか？」

シルヴィアは腕の中でがちがちに震えるマリナにそう尋ねた。

「あ、ああ？あ？……あの、アンネを助けてあげなきゃ……あの

子、グズだから何もできなくて……でも、良い子なんです……あの、アンネを」

「落ち着いて下さい」

「アンネを助けてあげてください！助けてあげなきゃいけない子なんです！まだ、一人で生きていくことのできない子だから、厳しくしなくちゃいけないんです！早く！お願いします！」

「残念ですが、落ち着いて下さいっ！」

シルヴィアはマリナの頬を張り飛ばす。

マリナは全身から力を無くし、嗚咽をはじめた。

「アンネ……ああ……アンネエ……」

シルヴィアは悲しみに泣く娼婦を見下ろしながら、何も言えずに側にしか居れない自分の弱さを恥じる。

こんなとき、スタイアはなんと声をかけるだろうか考え、全てを能面のような無表情の下に押し殺し、淡々と任務に逃げる。

「……怪我は無いようだな」

「はい、ですが……」

「生きづらい時代だ。仕方があるまい」

そう言いきったアーリツシュに驚きを感じるが、その顔に苦悩があることを見て知ったシルヴィアは静かに頷いた。

「……アーリツシュ、第三騎士団の到着だ」

魔物を真つ二つにしたハルヴァードを肩に担いだダッツが顎で示す。

道の奥を抜き身の剣を手にした第三騎士団の紋様の入った騎士達

が駆けつけてきた。

「む……」

先頭を走っていたのは騎士団長の勲章を持つ、第三騎士団長のオズワルドだ。

四十を過ぎた落ち着きのある巨軀に、色の褪せた使い込まれた金の鎧を身に纏っている。

手に握られた抜き身の剣はがっしりとした合戦用のもので、相当の手練れであることがその所作の一つ一つから伺えた。

「アーリツシュ卿か」

「オズワルド卿。今し方、状況は納めました」

「第七騎士団は騎士団長自ら見回りに参加するのか」

「……命を張らねばならぬ時に指揮官が前に出られぬ臆病者では誰もついて来てはくれはしません。それが平和というものです。第三騎士団こそオズワルド卿自らが前に出張らなければならないとは」
「それが平和だ。平和な指揮官は生き延びて汚名を背負って部下をより多く救うより自ら死んで誰かの代わりになった方が尊ばれる。そんな矜持はいい。それより」

オズワルドはアーリツシュの向こうで泣き崩れるマリナを見つめ、眼を細めた。

「……遅かったか」

「はい」

うなずき返したアーリツシュは剣を背負うと深く溜息をついた。

「ガルフォ、バーメラ、死体の検分と搬送を手伝え。手厚く葬っ

てやれ。カチスは第二班に連絡して予備巡回に当たらせる。メッツとウエグンは俺とこのまま予定通り巡回を続ける」

オズワルドは手早く指揮をするとアーリッシュの肩越しに泣き崩れるマリナをもう一度だけ見つめる。

そのまま背中を向けて去るオズワルドにアーリッシュは自分と同じ強さを感じた。

「……ダッツ。オズワルド卿は信用に足る人のようだな」

「冒険者上がり、といえば聞こえはいいが、辛い時代を生ききているのは確かだ」

「だけど、忘れてはならない。誰かの思惑のせいで悲しむ人が居る」

アーリッシュはいつまでも泣き崩れたままのマリナを見てそう呟いた。

「おかしいとは思っていたが、本当におかしいぞこれ」

イシユメールはアカデミアの地下で帳面をめくりながら呟いた。

「研究用の素体として捕獲した魔物の引き渡しは受けているが、用途不明のまま逸失している魔物の数が、ちと、多いな」

シャモンは隣で燭台を手にながら帳面を厳しい目つきで見ている。
た。

「大学の管理ってのはそう杜撰なものかね？」

「ズサン？」

「だらしのねえって意味だい」

「……うんにゃ、ナンバリングしてある魔物を研究目的と部署を明らかにして申請してそれから搬送計画を立てて引き渡す。その際に大師星まで決裁を取らなければならないから管理としては十分過ぎるほど厳重さ」

「ふむ、なら、何がおかしい？」

「……カミをあがめるな、現実を見る。大師星の格言だ。洒落てるだろう？ 神様や書物に書かれていることより、目の前で現実に起きていることの方がよっぽど正しいって意味だ。僕は大師星付の助手として業務をしているけど、これだけの魔物が搬送された現実は見えないよ」

「おいおい……」

「噂は聞いていたし、スタさんやシャモさんが来て確信が持てた。だがしかし、こいつは少々、僕の手に残るな」

イシユメールはそう呟くと、懷から煙管を出してくわえる。

「……ことは大学の信用問題だ。大学の信用失墜はそれは即、国の信用にも関わってくる。問題追及の手が回れば、大学長はおろか国王すら巻き込んで諸外国から説明責任を問われるだろうさ」

「……魔物を研究していることについてか？」

「魔物の研究自体は他の国でもやっているから、それが責められる咎にはならない。がしかし、その管理体制の甘さというのがアカデミアの他国への影響力に大きく響く」

「そんなものなのか？」

「学術というのは真実を探求する術だが、人間というのはわからないものに対しては暫定的な答えを求める。じゃあ、その暫定的な答えについてどの答えを採用するか、それが権威というものだ」

「要するに、金か」

「そうだ。真実つてのは金を生み出すし、金がかかる。アカデミアの運営や維持にも金がかかるし、アカデミアが解放した技術や論文が金を生む。錬金術とはよく言ったモンだよ。紙を練り回して金を生む。そいで自分は神気取り。学術という信仰も随分と薄っぺらいモンだよ」

「そりゃあ、おめえさんの言葉じゃああるめえ」

「よくわかるね。スタさんの言葉だよ」

イシユメールは鼻で笑うと帳面をめくる手を閉じた。

「……さて、どうしたモンかね。真理がなくとも世界は回る。こいつをブチ上げてアカデミアをぶっ壊すかい？陰気な書庫暮らしとおさらばするのも悪くは無い」

「真理が無くても世界が回るなら回すにこしたことは無い。そもそも人が生きていくのに真理なんて必要あるめえよ」

「僕を否定される含蓄のある言葉だね」

面倒くさそうに告げたシャモンにイシユメールは苦笑して答える。

「がしかし、これで死んだ人が居るのも忘れちゃなるめえよや」

「僕の方は師匠にこの件を報告して管理体制を見直す。いや、僕が管理を行おう」

「……できるのかい？」

「師匠とて嫌とはいまいさ。僕は天秤がどちらに傾いているのか、知ることのできる人間だ。そして、鐘が鳴るようであれば教えくれ」

イシュメイルはそう言って、机の上に別の図面を広げた。

「何だい、そりゃあ？」

「師匠が設計した魔導兵器さ。何でも対魔物用の決戦兵器らしい」

書き殴られた数字を見るに、小さなものではないことはわかった。

「……大星槍？星でも落とすのかね」

「アカデミアの魔物研究は他の国に追従を許さないくらいに進んでいる。まあ、管理がそのズサンという奴でもわからないくらいにはね？」

イシュメイルは広げた図面の数字に迷うことなく数字を加える。

シャモンはその様子を怪訝に見つめ、尋ねた。

「難しいことをしてるんだな」

「難しい訳ではないよ。問題は衝撃時における環石の精錬率の問題だ。これは多くの情報を積み上げて最も効率のいい数字を知らなければならんだが……逆に、知っていればどうということは無い」

「簡単にわかるモンなのか？」

「……簡単じゃあないさ。人間にはね。だから一生懸命勉強する」
意味ありげにイシュメイルが笑い、シャモンはそれ以上の追求を止めた。

シャモンは気だるげに身を起こすと大きく溜息をついた。

「しっかしアカデミアって黴と辛気くささしかねえのな。若いのにこんなところに詰め込まれてたらしなびちまいそうだ」

「だろう？ 僕の個人的な研究で異性の体とその動向、そして正しい交渉の仕方についてというテーマがあるんだが、その研究に少し協力しちゃいけないかね？」

二人は下品な笑みを交わす。

「……いくかい？」

「いくとも！」

「なんでこんなことになってるんですかねえ」

王城の訓練場で木槍を手にスタイアは面倒くさそうに呟く。

訓練場では聖堂騎士と騎士団の若手が訓練用の槍を激しく打ち合わせていた。

第三、第四、第七、第八騎士団から警備に振られていない面々が集められ、聖堂騎士団を交えた、合同訓練が行われている。

「スタイアッ！ 訓練中に余所見とは随分と余裕だなッ！」

タグザがスタイアに槍を勢いよく突き込むが、スタイアは槍の切

っ先を柄の上で滑らせていなす。

何度も突き込むが、跳ねる穂先がその穂先を逸らし、払えば止められる槍にタグザは苛立ちを隠せない。

「くそっ、こんのおっ！」

「大体、合同訓練参加だなんて、今更戦争があるわけでもあるまいし」

「恐れ多くも王が視閲されているのに、なんという不埒な。その性根叩き直してくれる」

突きからすくい上げるように払い、石突きによる払いと棒術のよくな変化をつけてタグザの槍が飛ぶ。

「わわっと、危ないですねえ」

スタイアは最後の払いを危つくこめかみに受けそうになり、よろめく。

「隙ありいつ！」

よろめいたスタイアの腰をタグザが足蹴にしようとするが、スタイアはよろめいた足でその臍を横から蹴飛ばし、タグザの頭を槍の柄で叩いた。

「貴様っ！愚弄しおってからにい！」

「まぐれ当たりを怒られてもなあ」

スタイアにからかわれ、力一杯槍を振り回すがスタイアは悉く受け流す。

その隣でダッツと槍を合わせるシルヴィアが見ていた。

「……羨ましいです」

「ダツさんから習うべきこともたくさんありますよ。もっぱら剣なんか振り回してる僕よつかよっぼどいい練習相手……ととと」

「貴様の相手はこの私だッ！」

シルヴィアと槍を合わせているダッツがおもむろに槍を肩に担ぎ、いたずらめいた笑みを浮かべる。

「シル、どうせだから二人がかりでやっちまえ」

「え？」

「スタさんも随分と余裕かましてくれてるから、二人でコテンにしてやりやあいじゃねえか」

「いいんですか？」

「いいとも。できるならな？」

これを聞いたスタイアはあわてる。

「ちょ、ダツさん、一体なんてことを。僕の専門は剣であつて槍じゃないんですよ？ケガでもしたらどうすんですか」

「いいじゃねえか。遠征で疲れてるんだよ。サボってた人に頑張ってもらわにや割りに合わない」

「僕の方も割りに合わないですよ！」

スタイアが悲鳴を上げるが、横からタグザは容赦なく槍を振るう。

「いいだろう！ならば私たちに勝てば貴様の言うことを何でも聞いてやるう！その代わり負ければ一生私の犬にしてやる！」

「何でも言うことを聞いてくれるんですかね？」

「騎士に二言は無い！」

「じゃあ、一発やらせてもらってもいいってことですね、ひゃっほう！」

「なっ！」

タグザが一瞬つんのめる。

「でも、待てよ？ ナイチチ族の子とやっちゃうと一族の掟で結婚しなくちゃならないとかあったような……んーそれは一生ものの問題だなあ」

「シルヴィア！ こいつの息の根を止めるぞッ！」

「そういうことなので、失礼ながら」

タグザの槍をいなすスタイアに横からシルヴィアが突きかかる。聖堂騎士団には聖堂騎士団同士での連携を行うための槍術がある。同期であるタグザとシルヴィアは共に槍を学んだ仲であり、その連携についても深く習熟していた。

一方が正面から打ち込めば、もう一人は即座に横から突き込む。それが避けられれば、正面がさらに追いすがり突き込み、もう一人は足を払う。

タグザとシルヴィアが繰り出す槍を前に、スタイアは顔の笑みを深くした。

「やれやれ、人が悪いなあもっ」

スタイアの腕の中、槍がめぐるしく走る。

切っ先で穂先を払ったと思えば、石突きで柄を弾く。

眼にも止まらぬ早さで回ったと思えば、二本の槍を同時に絡める。スタイアを中心にシルヴィアとタグザが周り、激しく槍を突き込むがスタイアは一步も下がることなくそれらを全て受け払っていた。

「こん……のお！」

タグザが力任せに槍を打ち付け、肩から押し込むが、スタイアは腕一本の力で押し返す。

稲妻のように早くシルヴィアの槍がスタイアの胸に突き込まれるがスタイアは僅かに引いた石突きの手でそれを受け止めた。

好機と捕らえたタグザが更に押し込むが、逆にスタイアに押し返されてよろめく。

「ダッツさんが怒るのもわかるなあ、うん。女の子はやっぱり戦場に出るべきじゃあないね」

「バカにしたなッ！女でも戦場に出られることを思い知らせてやるっ！」

上流貴族の出であるタグザは憤慨して、カ一杯槍をスタイアに振るった。

上段で受けたと思った槍が受け止められる寸前に縦に軌跡を変えてスタイアの手元で回った。

身をよじって槍を避けたスタイアの腕の中で回った槍がシルヴィアの槍を払ったと思った次の瞬間、木槍が鋭く伸びた錯覚をタグザは覚える。

ヘルムをつけた額を鋭く突き込み、伸びた切っ先が引き戻され、ヘルムの上で嫌な音を立てる。

鋭く引かれた槍が、再度シルヴィアの槍を打ち払った時、タグザは自分が切られたことを知った。

一瞬、惚けた次の瞬間、シルヴィアの腹に伸びた槍が鎖帷子の上を勢いよく滑り、幾重にも翻り、胸、首、額を鋭く撫でていった。

「……負けました」

肩で息をするシルヴィアが穂先を下げて、軽く一礼をした。
その首を再度、撫でるように切ってスタイアは笑う。

「戦場じゃ負けを認めた相手をぶった斬るのが仕事ですよ。目を閉じたりしちゃあ、だめだ」

「失礼し……礼もクソも無いんでしたね」

シルヴィアは穂先を上げ、構えを解かずに下がるとようやく槍を納めた。

タグザは放心から戻り、憤りに顔を歪めると槍をつきつけた。

「い、今のは急に二人でかかったから調子が合わなかったただけだ
！も、もう一度」

「……二回戦目ありますか？うつひょう」

突きにかかるタグザを制し、鋭い一突きがスタイアの眼前に突きつけられた。

ダッツの槍だった。

「そんなら、俺とやろうぜ？スタさんとは久々だから手加減はし
ねえぞ？」

「ダッツさんとやってもなあ……さっき疲れたからとか言ってたく
せに」

そう返すスタイアだが顔は笑っていた。

どちらとも穂先を下げると、瞬時に弾けた。

スタイアの槍が疾風となってダッツの首に伸び、ダッツの槍が一直線にスタイアの胸を捕らえる。

どちらも身を振り僅かに先を逸らすと、スタイアは弾かれたように後ろに下がる。

そのスタイアを追って繰り出した槍はシルヴィア、タグザのそれより遙かに強烈で、槍の柄で滑らせたスタイアの頬を弾けた木くずが切った。

スタイアは槍の柄を拳で弾き、足蹴にして折ろうとするが、それより早く踏み込んだダッツが頭突きをスタイアの額にくれていた。スタイアはよろめきながらもダッツの喉元に柄尻を抉りこませるが、ダッツは怯むことなく引き戻した槍の柄でスタイアを押し倒す。

「だありやああつ！」

「はっ！」

地面を転がるスタイアに裂帛の気合いと共に、雷光のような突き込みを見舞うが激しい音が鳴り響き木片があたりにはじけ飛んだ。地面に寝たまま振るったスタイアの槍が、ダッツの槍とぶつかり、互いに弾け飛んだのだ。

「やったと思っただがなあ」

「まだまだ。僕も頑張れますよう？」

まだ続ける気にいる二人にタグザとシルヴィアは驚きながらも何も言い出せずにいる。

シルヴィアはスタイアにしろ、ダッツにしろそういった人間であることを知っていた。

互いのいずれかが死ぬまで争うのが戦いで、その戦いを行うのが戦場というものなのだ。そういった戦場で生き抜いてきた人間は自分の獲物が無くなったとしても戦う術を持って相手が死ぬまで戦うのを止めない。

本気の殺意を笑顔の中に隠しながら、楽しそうに打ち合う二人はシルヴィアから見て異常に見えた。

スタイアの槍がめまぐるしく回り、ダッツに伸びる。

ダッツは訓練用の鎧の厚い部分でその穂先を滑らせ、必殺の一撃をスタイアの額へ伸ばす。

スタイアの首が巡り、ヘルムで滑らせるとあいた左手をダッツの喉に延ばした。

ダッツは額を打ち付け拳を止めるとにやりと笑った。

「えげつねえなあ？このチンカス野郎」

「お互い様でしょうに？逆むけ馬野郎」

弾かれるように二人の槍が走り出す。

激しく打ち合わされる槍同士が木片が弾け、晴天の空に弾ける。

一見でたらしめに見えるが力一杯打ち付けられる木槍はそれぞれが必殺の一撃でもって振るわれている。

「なんだ……型も何も無い子供のチャンバラではないか」

「いえ……おそらくは木槍で殺すならあの形になるからだ」と

タグザの疑問にシルヴィアが分析を述べた。

「シルヴィア嬢の見立てが正しいな。だが……二人とも遊びすぎだ」

いつの間にか現れたアーリツシュが楽しそうに二人を見つめていた。

「アーリツシュ隊長、その、自分は……」

「スタさんに随分と弄ばれたそうじゃないか。いや、これからかな？」

「っ！……その！あの！」

アーリツシュに似つかわしく無い下品な言動にタグザが赤面する。

「冗談だ。がしかし、スタさんの得手は剣でダツさんの得手は槍だからなあ。こいつはスタさんに少々分が悪い」

シルヴィアが難しい顔をする。

「……木槍での形であれば五分に見えますが」

「木槍は槍だ。剣として使えば、僕の方がスタさんより得手なんだがね？僕の得手はトゥーハンドットソード……槍と剣の間だからね」

そう言われてシルヴィアはもう一度、よくスタイアの動きを見直した。

一見、槍を扱っているように見えるが、その実、動きの多くは剣のものに見える。

片手で柄半ばを掴み、振り下ろす様などはまさしく剣のそれで、突き込む際に左手こそ添えてはいるものの、それも剣の突きと間合いだった。

ダツツはスタイアの突きを跳ね上げた穂先でいなし、石突きで打ち上げると、後退しながら穂先を背後の地面に突き立てる。

スタイアが横殴りに払うがダツツは槍を使い大きく跳躍するとスタイアの背後を取った。

「とお……りゃ！」

振り下ろした石突きがスタイアの肩を激しく打つ。

が、同時に振り戻したスタイアの木槍がダツツの腹に激しく突き立てられた。

「今のは俺の勝ちだろう」

「いあいあ、相打ちですよ？」

明らかに肩を痛めたスタイアだが、不敵に笑うと木槍を構え直す。

「僕もそろそろ本気を出しますかね」

「よく言っぜ」

スタイアの腰が深く沈み込み、槍を大きく後ろに引く。

ダッツが合わせるように正面に槍を構えて腰を引く。

シルヴィアはお互いが本当に必殺の一撃を放つ姿勢に入ったものだと思われる時には既に終わっていた。

スタイアの姿が一瞬、掻き消え激しい衝突音がした。

ダッツとスタイアの立ち位置が逆になっており、二人は槍を突き抜いた姿勢で立っていた。

「……やれやれ」

スタイアとダッツが苦笑して構えを解く。

互いの槍が柄の半ばから折れていたのだ。

「ずりーぞスタさん」

「ずるいのは僕の専売特許ですからね。遠征の話があったときには真っ先にダッツさんに振りましたから」

何をしたのかシルヴィアやタグザには理解できなかった。

「……シンハツハーキイ。以前にその理論を聞いたことがあるが……スタさん、あの域まで高めていたのか」

アーリツシュの顔は笑っていたが目は笑っていなかった。

スタイアとダッツは折れた槍を纏めると互いに礼をして下がった。

「痛たた。ダツさんなら本気で叩くんだもんなあ。だから嫌なんですよ」

スタイアは叩かれた肩をぐるぐると回し、痛みに苦笑する。
アーリツシュがそのスタイアの肩を叩いてにこやかに微笑む。

「さて、じゃあ次は僕とやろうか？」

「うえええ？ちよつと休ませてくださいよお？」

そう言いながらもスタイアは笑っていた。

シルヴィアやタグザは真剣に訓練に取り組んでいたが、スタイアらの楽しそうな顔を見るとどこか自分たちが場違いな場所に居るような気になってきた。

まるで、子供が遊ぶように槍や剣を交えている。

「楽しそうだな」

そう声をかけたのは彼女らではなく、第七騎士団のオズワルドだった。

訓練用の木剣を下げて整えられた髭を撫でていた。

「どうにもうちの若い者は萎縮してしまつてな。バルツホルドの三騎士に相手願えればと思つたのだが」

スタイアは目を細め、オズワルドを見つめた。

オズワルドは人の良い笑みを浮かべて木剣を放った。

「スタイア、君は槍より剣が得手と聞く。どうだ、少し見せてはくれまいか」

「いやいや、僕なんかとてもとても。ここはうちの騎士団長が手を合わせるのが筋というもので……」

スタイアは木剣を受け取りはしたものの、丸い背中をさらに丸めて頭を掻いた。

アーリツシュは木槍を担ぐと目を細めて笑った。

「オズワルド騎士団長の指名だ。許すよ。むしろ、僕の方こそ鉄鎖解放戦争の英雄とリヨウンの剣が交わるのを見てみたい」

オズワルドの目が細められた。

「……リヨウンの剣、剣聖アマガツオの剣か？」

「孫弟子というのものはばかられるくらい不精のもので、リヨウン師の名前を出されるのも恥ずかしいくらいですよ。本当にアっちゃんは性格悪い」

「バルツホルド単騎駆けの実力見せてもらおうか」

オズワルドの顔から笑みが消えた。

スタイアは笑みを崩すことなく、木剣を持ち直すとのろのろとバルツホルドの前に立った。

「……シルヴィア、これは実は大変なことになったのではないか？」

タグザは準騎士に騎士団長が指名して訓練を挑む事態にようやく気がついた。

「スタイアが曲がりなりにも勝ってしまえば第三騎士団の名誉に大きな傷がつくし、かといって不様な負け方をすればともすれば聖

堂騎士団にいらぬ誹謗が来るのではないか？女を抱えて腑抜けになつたなどと……」

「……アーリツシュ騎士団長はなればこそ、スタイア隊長を推したのですよ。彼なら負けても騎士団の名は傷がつかない。女性関係に元々だらしないスタイア隊長であれば負けたとしても、聖堂騎士団が誹謗されることは少ないから。ですが……」

「そうか！流石、アーリツシュ隊長だ！そこまで考えて……スタイア！お前などオズワルド騎士団長にボコボコにされてしまえ！」

嬉々として歓声を送るタグザに対して、シルヴィアは気が気でなかった。

先程のダッツを対峙した時と違い、完全に無気力となったスタイアの剣の切っ先が揺れている。

スタイアが剣を振るうところを見たことのあるシルヴィアは決してスタイアが負ける気でそこに立っている訳では無いことがわかったからだ。

合図もなく、無造作にオズワルドが木剣を振るった。

その瞬間、空気が熱を帯びた。

ヨッドヴァフ王立騎士団の正式な型にある正面打ち。戦場を走ってきたオズワルドが放てば基本の型であっても、すさまじい烈風を伴う剛剣となる。

スタイアはゆらめく木の葉のようにその剣を避け、切っ先を上げた。

正面打ちから、払い、突き込み、切り返しと撃ちつける滝のような連撃を前にスタイアは悠然とその剣を避け、払い続ける。

木剣が刃が打ちつけられるたびに爆ぜた木っ端がスタイアの目を打つ。

見開かれたスタイアの目は熱量を持った大気を引き回すオズワルドの剣を追うことを止めない。

大気を切り裂いて伸びるオズワルドの剣がスタイアの肩先を掠め、

引き戻される前にスタイアの木剣がそれを受け止める。

木剣が火を噴いた。

摩擦が木っ端に火となる熱量を与え、爆発音に似た剣撃の音が響き合う。

その場に居た誰もが己の手を止め、二人の剣に見入っていた。

「……英雄の剣、流石ですね」

スタイアの笑みが獰猛さを帯びる。

「英雄の剣といえど、とどのつまり人を殺す剣でしかない」

オズワルドの剣がスタイアの剣を跳ね上げ、あいた胸元に雷撃に劣らぬ突きが繰り出される。

大きく身を屈め、払った剣がオズワルドの突きを絡め取り、逆にオズワルドの胸へと切っ先を奔らせる。

オズワルドが肘をぶつけ、激しく打ち合わされた骨同士が重く響いた。

激しく、速く、幾重にも剣を交わしながら二人はそれでも話していた。

「剣が泣いております」

「見えるのか？声が」

「風水森山、これすべてが囁き歌う。何故、人の剣のみが語れぬ道理がありますかね？」

「明快。されど、人は泣かずとも戦い死ねるさ。お前は戦場を去ったのか」

「疲れるでしょう、いつまでも」

ふっと笑ったスタイアの顔が寂しげに見えた。

オズワルドはその笑みを消すように裂帛の気合いと共に剣を叩きつけた。

疾風のようなスタイアの剣が一転して羽毛のように軽く翻り、その剣を受ける。

空気の爆ぜる音がして、木剣が回り、宙に飛んだ。

「参りました」

スタイアは手から離れた剣を振り切った姿勢のまま、そう告げた。オズワルドの剣はスタイアの額に当てられたまま、しっかりと静止している。

オズワルドは厳しい顔のまま、寂しげなスタイアの顔を見つめ続け、呟いた。

「……結局、我々は何の為に戦ったのだ？」

「自由……でしょうかね」

「俺も、お前もそれでも剣を捨てずにいられるのだな」

「そうですね、存外、もてあましたりします」

オズワルドは苦笑し、剣を引いた。

「スタイア、俺の元に来い」

周囲が騒然とする中、スタイアは頭をぼりぼりと掻いた。

「いやあ、どうにも僕は上司に面倒かける人らしく、なんとか準騎士でアーリッシュ卿に使ってもらっている次第でして」

「スタさん、端的に仕事なんかしたくないと言えはいいいじゃないか。腕は立つが仕事はしない。第三騎士団に送ったところで迷惑しか掛けない」

アーリツシュがスタイアの後を継ぎ、オズワルドの前に立った。

「いや……そういう人間が居ないと俺もサボる口実が作れないかな？ハッハッハ」

オズワルドはそう苦笑するとアーリツシュの肩を叩いた。

「やれやれ、ダッツといいスタイアといい、卿のところには優秀な騎士が多いな。羨ましい」

「オズワルド卿、それは自分の部下の名誉を傷つける贅辞です。

必死についてきてくれる部下に失礼です」

「戦場で生き残るのはいつだって、自分で生きようとするものだよ」

寂しそうにそう告げたオズワルドにアーリツシュは言葉を返せなかった。

シルヴィアにはその言葉の意味が理解でき、オズワルドがいくつもの戦場で友人や部下を失ってきた人間であることを知った。

スタイアの下にいた頃、非道とも呼べる方法で生き抜くことを教えられた身であるからこそ、生き抜く気が無い者は死ぬという意味を理解できる。

運という無情な神のふるいにかけられ、ふるいの網にしがみつくのはいつだって自分の力だ。

誰かに依っては得られるものではない。

正午の鐘が鳴り響き、訓練を止める号令があちこちであがる。

「そろそろお昼だ。一旦休憩して、午後から部隊訓練を行う。装備の点検を怠るな、以上」

シルヴィアがスタイアを探すが、スタイアは既に木陰でラナが開くバスケットからサンドイッチを受け取り頬張っていた。

どんなに悲しいことがあっても人は生きるために食べる。

日用の糧を得るために働かねば生きていけないのはマリナにとっても同じだった。

幸せなことなど何一つなく死んだアンネに悲しみを向ける暇もなく、マリナは店に出る。

「マリナちゃんはいつもかわういーなあ。おっかわり」

訓練の後、何軒もの店をシャモン、イシユメールと巡り、酔うだけ酔ったスタイアはマリナの店に転がり込んでいた。

アンネが魔物に殺されたことは知っていたがそれを話すことはしない。

余計に明るく振る舞うスタイアの気遣いがマリナには嬉しくもあった。

「スタさん、今日は騎士団の合同訓練日だったんでしょう？王城の王庭からわんわん聞こえてましたよう？」

「そうなんですよう。頑張りたくはないんですけど、ちいとばかり無理やつちゃってへっへっへ」

「強い男の人って好きですよ？」

「はっはっは、さんざっぱら負け超してきちゃってへこんでるんだけどなあ。誰かに慰めて欲しいなあ？」

「あら、じゃあ慰めてあげなくっちゃ」

「わんー」

「誰に負けちゃったのお？」

「あのねえ、あのねえ、第三騎士団のオズワルド騎士団長」

「あらー、騎士団長に」

膝の上に頭を載せるスタイアを撫でながらマリナは寂しげな微笑を浮かべた。

アンネと共に奴隷となった頃は、こうしてよく不安に泣いたアンネをあやしたものだっただ。

スタイアは気持ちよく酔った顔で笑った。

「まだ僕は飲めるですよ？」

「え？」

「塩水は吐くときにお客に出すもんでしょう？」

マリナは頬が熱く濡れているのにようやく、気がついた。

「アンネちゃん、いい娘だったのにねえ」

「スタさん……」

スタイアは笑みを消し、苦い顔で起き上がると杯を傾けた。

「……人の命なんざ、一山いくらだった頃と比べて、随分生きやすい時代にはなりました。がしかし、なかなか生きてくのは大変ですね」

「はい……」

スタイアはマリナに酌をするとワインを勧めた。

「他人事だから言います。忘れてしまいなさい」

杯を傾げるスタイアにマリナはただ、黙って頷いた。涙が止めどなく溢れてくる。

「ごめんなさいね、スタさん……私、甘えちゃって」

「男は甘えられるのも好きなんですよ。アンネちゃんは甘え上手でしたよ。一生懸命甘えてくるアンネちゃんは僕も、大好きでした」
「本当に……本当に……ごめんなさい」

スタイアは渋い顔で鼻を鳴らした。

「悪くも無いのに、謝るのはよしなさい。謝られる道理なんか僕にやありませんよ」

「はい……はい……」

周囲の喧噪はまるで二人のささやきを押し流すように響き渡る。
スタイアは大きな溜息をつくと杯をテーブルに落とした。

「アンネちゃんのお話をしましょう。死んだ事実を目を背けるくらいなら、一杯語って送ってやるのがせめてもじゃあないですかね？」

「そう、ですね……」

マリナはようやく笑った。

「あの子はウィルベリルの出身でしてね、十年前の飢饉の時に親に奴隷として売られたんですよ。男兄弟四人に女の子一人の末っ子でしたら、当時はしょうがない部分もあるんですよ。男なら力仕事を任せられるけど、女の子であればそうもいきませんから」

「……マリナちゃんも、そうだったんでしょうね」

「ですね。だから、余計同情しちゃったのかもしれないね。可愛くて仕方がなかった。だからですかね、私、早く一人前にしてあげないといけないって厳しく当たっちゃって……もう少し、優しくしてあげればよかったかもしれない」

マリナはそう言って、苦い笑みを浮かべた。

「……アンネちゃんね。前に言ってたんですよ」

「え？」

「三年くらい前ですか。アンネちゃん、病気になりましたね。風邪かと思ったら随分と厄介な病気だったそう。マリナちゃん、自分の身請けが決まって自由になれるのに大枚はたいて医者に診せたそうじゃないですか」

「そういえば……そんなこともありましたね」

マリナは言われて、ようやく思い出した。

「当たり前なくらいに、愛してたんですよさ」

じんわりと胸の奥に広がる暖かさに、また、涙がこぼれた。

不器用な慰めに、マリナは客として来るスタイアの別の面を見た気がした。

「僕も、そこで寝転がってるシャモさんも、似たような人生送ってたしてね。食い扶持が無い男の子が売られるのもまた奴隷で、それはそれで飯を喰ってける場所に行けるから、まあ、今思えばそれでも幸せだったりするんですよ」

杯に手を伸ばしたスタイアが苦そうにワインを舐めた。

「僕の親兄弟は、流行り病でみんな死んじまりました。貧乏でギスギスしていい家族とは言えなかったけど、それでも何ででしょうかね。生き残っちゃったのが僕のように売られた人間だったのは皮肉な話です」

「そうだったんですか……」

「死んでいった人の分、僕らはしっかり生きなきゃならないってのは重々くるしいですが、ほんの少し肩に乗っけるくらいならいいんじゃないですかね？」

「はい」

マリナは涙を拭いて、しっかりと頷いた。

「でも、意外でした」

「はい？」

「スタさんがいい男だったのを知らずに、アンネに任せっきりだったなんて」

「あら、実は僕、結構いい男だったりするんですよ？」

「ふふふつ、こんなことならもっと早くに手をつけておくべきでした」

苦笑を交わし、杯を重ねると二人はワインを煽った。

スタイアは革袋から銀貨を出して卓上に置くと、立ち上がる。

「……リバティベル、という酒場の噂がありましたね」

それは小さく、呟かれた。

「人の恨みを金で買ってくれるそうです。お代は……ヨッド金貨五枚」

「……スタさん？」

「いけないねえ……酔っぱらうとたわいもない話をべらべらしゃべっちゃう。ありもしないことをくっちゃべっていると夜中にフィダリーの悪魔に舌を抜かれちゃう。セトメント、セトメント！」

子供のおまじないを唱えたスタイアは元の酔っぱらいに戻っていた。

「おうい、シャモさん、イシュさん、次のおっぱいにいきますよ」

「おっぱいにいくぞー！」

「おっぱるどー！」

マリナは誰も居なくなった店を片付けると、暗い夜道を一人帰る。気落ちしていたここ数日に比べ、軽くなった足取りにマリナは溜息をついた。

明日から、また、頑張らなければならない。

死んだアンネの分まで幸せにならなければならない。
いつか二人で自分の店を持つと決めた夢を夢のままで終わらせてはならない。

小さな絵空事のような夢だが、それだけで、生きていける。
ツンと鼻に刺さる腐臭のする道を歩く足がほんの少しだけ、力強くなった。

巡回中の騎士とすれ違った。

軽く会釈をするが騎士は答えずに路地裏に入っていく。

その騎士の挙動がどこかおかしく、マリナは首を傾げた。

「……?」

なにげなくふらふらと後をつけたのがまずかったのだろう。
路地に入った騎士が手にしていたのは小さな、小瓶だった。
騎士はその小瓶の封を切ると、その場に置いて駆け去ってゆく。
マリナは訝しげにその小瓶を見つめる。

小瓶からは黒い霧が立ち上り、どこかで嗅いだような匂いがした。赤い、瞳が霧の中に輝いた。マリナの背筋にぞくりと冷たい汗が滲んだ。

「ひつ……」

あれだ。あの、魔物だ。

霧が集まり、鋭い爪を持った足を形成する。地面を蹴った足が霧を引いて迫ってくる。マリナは背を向けてその場を駆けだした。

「いやあぁっ！」

腐臭を引き連れ追いつがる魔物がマリナの脇を通り抜け、前に立ちはだかる。

「……コアア……クウルルウ……」

喉から唸り出る声は甲高く、鳥のそれを思い出させる。脳裏に焼き付いたアンネの最後が体を縛り上げる。その場に崩れたマリナは目を閉じた。

「いたぞ！こつちだ！」

魔物の背後から騎士達が白刃を携えて駆けて来た。魔物はマリナから視線を外し、背後に迫った騎士達に頭を向ける。訓練された騎士達はそれぞれが包み込むように魔物を包囲し、白刃を閃かせた。

黒い霧が散り、緑の体液が壁に叩きつけられる。腐臭のするその体液の匂いにマリナは酔いを戻し、路地にぶちま

けた。

「キュアアア……アアア……アアアアア！」

魔物は瞬く間に、切り刻まれ黒い霧の残滓を残して消えた。

「大丈夫か」

そう告げたのはオズワルド騎士団長だ。

マリナはその顔を覚えていた。

アンネを手厚く葬ってくれたのはオズワルドの指示だったからだ。
オズワルドの騎士の一人がマリナを抱え上げる。

「……先日の？」

「はい……」

震える声で告げるマリナは恐怖で体が動かなかった。

騎士の肩越しに別の騎士隊がやってくる姿が見えた。

「どうやら、終わったようだな」

遅参した騎士達を率いていたのはオズワルド卿だった。

その後ろに構える騎士の一人を見て、マリナは息を飲んだ。

先程、路地裏で小瓶を開いた騎士だったからだ。

「はい、今回は犠牲者を出さずに済んだようです」

そう答えた騎士の言葉が恐ろしく冷たく聞こえた。

「オズワルド卿、市街巡回等はもう我々に任せて下さい。近衛騎

士選抜も近いのですからもし何かあればと思うと……」

「私とて同じだ。今回こそ誰も死ななかったものの、お前達のいずれかが欠けてしまえば大きな損失だ」

「そうしてオズワルド卿が怪我でもされて選抜から外されてしまえばそれこそヨッドヴァフの損失ではございませんか」

マリナは身を固くしてその言葉をただただ、聞き流していた。

そして、一つの結論を得る。

それがふと理解できたとき、恐ろしいものを彼等のなかに見つけてしまった。

オズワルド卿が眉を潜める。

「……このお嬢さんは」

「ええ、以前の……」

いくつもの戦場を駆け抜けてきたオズワルドは危険に聡い男であった。

マリナの顔に恐怖とは別の感情が浮かんでいることを見るや、マリナを抱える部下に目配せする。

「夜道は危ない。お送りしてさしあげろ。二人でな」

「はい」

緊張した面持ちで答える騎士にマリナは恐怖を覚えた。

グリーブが石畳を叩く音を響かせ、散り散りに去っていく騎士団を見送ると、マリナを抱えた騎士はもう一人残った騎士とうなずき会々とマリナを地面に降ろした。

そして、おもむろに剣を抜きはなつた。

「な、なにをされるのですかつ！」

「殺すんだよ。知っちゃまずいことも世の中にはあるんだ」

騎士が冷たくそう言い切った。

「……運がなかったな」

マリナは逃げようとしたが、即座にその背後にもう一人の騎士が回り込んだ。

殺される。

そう、確信した。

「なあ、バルメイ、せつかくだ。楽しまないか？」

「それもありといえば、ありか。足の腱を切る」

騎士が下卑た笑みを浮かべる。

騎士の一人が剣を振り上げ、マリナに振り下ろそうとしたその時、騎士の分厚い甲冑を突き破り、心の臓を握った手が現れた。

「……え？」

騎士は自らの胸に生えた手が握っている自分の心臓を見下ろし、何が起こったかわからない様子で呟いた。

「仕事あがりの女郎をこますにや、いささか外道すぎやせんかね？」

体から離れたことに気がつかず脈動を続ける心臓を握りつぶし、シャモンは告げた。

崩れ落ちる相方に驚き、もう一人の騎士は後ずさる。そして、視界がぼんやりと霞む。

気がつけば指の先が砂のように崩れていた。

苦しいと思う暇も無かった。

体中の水分という水分を抜かれ、干からびた体は僅かな風で崩れ去る程、脆いものになりはてていた。

「欲望なくして繁栄は無い。だがしかし、過ぎたるは他を滅ぼし自らをも滅ぼす。フィダーイーは天秤を傾ける者をよしとしない」

彼を構成する水を球体にして手にしていた魔術師　イシュメイ
ルは呪詛を呟くように死体にそう告げた。

明るく知的な昼の顔とは違い、どこか残忍で冷淡な顔をしている。
人間とはとうてい思えないその冷めた顔にマリナは別の恐怖を覚えた。

「あの……シャモンさん？」

「やあやあ、驚かせるツモリはなかったんだがね。目の前にクソの詰まった肉袋があるとどうしようもなく掃除しなくなっちまう。
だからいつも汚いナリなんだろうな俺はぬ」

シャモンは厳しい目つきのまま笑うとマリナを立たせた。
マリナは自分に起きたことを理解しきれず立ちつくす。

「理解する必要は無い。覚えておく必要も無い。知らずとも生を全うすることができるのが凡人だ」

イシュメイは淡々とマリナにそう告げると背を向けて闇に溶け込む。

シャモンはその背中を見送ると苦笑しマリナに告げた。

「まあ、忘れるこつたな。覚えていたところで今日みたいに狙わ

れることになる。それも面白くあんめえ」

「……あの、一体、何を」

「人は自分の為に人を殺せる。あんたは殺されそうになったんだよ」

冷淡に告げたシャモンにマリナは言葉を失う。

「そういうこつた。まあ、帰りねえ」

だが、それでも絞り出した声は本心だった。

「……幸せになるべきだったアンネはその為に命を落としたのですか？」

マリナは震えていた。

「アンネはそれだけの為に殺されなければならなかったのですか？」

シャモンは面倒くさそうに告げた。

「幸せになるべき人間なんざ誰も居ない。幸せになる人間だけが幸せになるんだぜ？」

「ああ……」

「それが受け入れられないのは、幸せだったってーことだよ」

マリナはそれを理解できる自分を見つけ、どこか冷めてしまった。

「じゃあな」

シャモンはのろのろと歩き、その場を去った。
残されたマリナはじっと闇の向こうを見つめ、覚悟を決めた。

宵が更け、日も変わる頃になるとリバティベルも閑散とする。だが、リバティベルの灯りは落ちることはない。

ラナはゆつくりと流れる夜の時間を眠らずに店内の清掃に勤しむ。珍しくスタイアが椅子にもたれかかり、テーブルに足を投げ出してうつらうつらしていた。

こういう夜は、決まって客が来る。

「……あなたは酷い人です」

「ラナさんにはいつも、迷惑をかける」

ラナは静かにスタイアの隣に腰掛けるとスタイアにもたれかかった。

「あなたの女癖が悪いのは、いつものことです」

はぐらかそうとしたものを捕らえられ苦笑する。

「あなたは望んで人を殺めようとしてらっしゃる」

「……それが、必要であれば」

スタイアは小さいが、確かな重みを載せて答えた。リバティベルのドアが軋む。

小さな鈴が来訪者を涼やかに伝える。

暗く淀んだリバティベルに彼女は入ってきた。

スタイアは気だるげに背筋を伸ばす。

「……ここで人を殺してくれるという話を聞いてやってきました」

マリナは淀んだ店内に響く、凜とした声を上げた。

「髪を、切ったんですね」

「売りました」

スタイアは気だるげな瞳でマリナを見上げる。

静かな決意に満ちたマリナの双眸はスタイアの瞳を真正面から受けとめる。

「驚かないのですね」

「私はこれでも客商売を生業としておりますので」

「僕の方が修行不足ですか」

マリナは黙って金貨五枚をテーブルの上に並べていく。
スタイアは尋ねる。

「……誰を、殺して欲しいのですか？」

「オズワルド卿を殺して下さい」

「これだけのお金があれば自分を身請けできる。誇りを買いたい戻すこともできるよ？」

「貶められても、許せないことがあります」

マリナは静かに、そう吐き出した。

スタイアは黙って金貨五枚を受け取った。
スタイアが告げる。

「ラナさん、鐘を鳴らしておくれ」

「あい」

雨が降り出した。

乾期に入ったヨッドヴァフでは珍しい。

だが、乾期の雨がもたらす恵みを考えれば喜ぶべきものではある。オズワルドは夜半の街を巡りながら昔を思い出していた。

雨の降らない乾期は田畑の作物を殺す。

田畑が殺されればそこに生きる人も死ぬ。

だが、それでも国は瘦せ果てた田畑から税をもつてゆく。

喰えぬ田畑にいつまでもしがみついても死を順番に待っただけだった。

生きるために人は持てるものを手放す、それが、例え愛すべき家族であつても。

それは珍しいことではなく、オズワルドもまたその一人だった。

オズワルドは父や母が耕す土地から離れ、鉄で血を流す傭兵となり生きることとなる。

大きな戦があれば真つ先に戦場を駆けるのは傭兵だった。

生き方を変えても底辺に居る自分たちが国の為に血を流す。

いつしか、国を恨むようになっていた。

自らが変わるしかなかった。

変えられる自分が変わるしか、なかった。

ヨッドヴァフ三世の敷いた冒険者制度は騎士としての道を示した。剣を振るう稼業には変わりはない。

ただ、傭兵より面倒な人間関係がそこにあつただけだ。

「それがいかほどのものか」

「……騎士団長？」

「こんな夜だ。感傷的にもなるさ」

オズワルドは従う騎士に苦笑しながら告げたが、騎士は訝しむだ

けだった。

「騎士団長、風邪を引かれます。近衛騎士への士官の前です。ご自愛ください」

「うむ」

傭兵、即ち冒険者あがりというハンデこそあったが騎士としての道を順調に昇りつつあった。

戦場の厳しさを知らない貴族あがりの騎士達を出し抜くのは簡単だった。

戦場には正義も何も無い。死ぬか生きるかの現実しか、無い。

「鉄の前では何者も等しく、か」

遠くで鐘が鳴った。

時折、響く小さな鐘だ。

雨が道を叩く音にかき消されそうな小さな音色。

だが、それは強く響いていた。

部下の顔色が変わったのにオズワルドは気がついた。

「どうした」

「いえ……」

部下は一瞬言いよどんでから答えた。

「鐘の鳴る夜は外に出てはいけない。こつ、私の家内が子供に言い含めるのですよ」

「それは面白いな」

「褐色の幽霊が外を出歩き、誰かをニンブルドアンの門に誘うと」

ニンブルドアンの門は死後の世界へ通じる門のことだ。

神話の類を信じ切る程、信心深くは無いがオズワルドは気になった。

褐色の幽霊。

褐色という現実味を帯びた色が妙に、気になった。

「なんでもビリハム邸の襲撃があつた夜も鐘が鳴っていたとか」

「ならば、なおのこと帰る訳にはいかな」

オズワルドはそう苦笑してみせた。

そして、次には表情を引き締め部下に目配せする。

「……本日はウェストグローリーロード一帯に臨時警戒態勢を敷いております」

それが、今日の予定だ。

そこに魔物が放たれる。

「お前は、どう思う？」

オズワルドに問われ騎士は答えた。

「悪でしょう」

長年従ってきた騎士はオズワルドの意図を汲んだうえで断定した。

「意図的に魔物を放ち、国家を不安に陥れ、それを自らの手でもって駆逐する。そこに大義は意味を成しません」

騎士はそれでも続けた。

「ですが、勝った者のみが正義です。鉄の前には何者も、等しく」

騎士の瞳は汚濁も、欺瞞も全て飲み込んだ上で強い決意と希望を輝かせオズワールドを見つめていた。

「アカデミアに対する事後工作の手続きも終わっております。あとは、鉄を振るうのみです」

次第に激しくなる雨の中、オズワールドは空を見上げた。

「戦士の理屈だな。放て、どこまでも我々は戦士であろう」

アーリツシュは第三騎士団の詰め所で夜間巡回隊の指揮を執っていた。

ダッツがそれを揶揄して笑う。

「騎士団長自らが出るのかい？俺たちに楽させてくれよ」

「楽をさせてやるとも。何かあっても僕の後ろで黙ってみていてくれればいい。ただし、道中の監視は厳しくなるがね？」

軽口を叩き返すアーリツシュに頼もしさを感じ、部下達の間苦笑が広がる。

手早く鎧を纏うのは戦場に居た頃から変わらない。

長く使い込んだツヴァイハンダーを背負うとアーリツシュは装飾を施されたヘルムをかぶる。

そして、全ての準備を整えると槍を手にしたダッツの肩を叩く。

「ダッツ、感じるか？」

「珍しく弱気じゃねえか。平和なヨッドヴァフだぜ？」

「嫌な予感がする。第三騎士団のオズワルド卿が緊急警戒態勢を敷いた」

「戦場になる。だから、我らが騎士団長は女達を帰したんだろう？」

ダッツは磨き上げられたハルバードの穂先をランタンの光にかざし、笑った。

「……男にや子供は産めない。斬った張ったするのは男だけで十分だ」

遠く、遠雷のように鐘が鳴っていた。

ダッツが目を細める。

「鐘が鳴ったな」

「……ん？」

「スタイアは来ているのか？」

「いや、いつまでも来ないから迎えをやったが酔いつぶれて寝て
いると給仕の子が言っていたらしい。どのみち、そのような状況じ
や満足に戦えはしないだろう……どうした？」

「いや……」

ダッツは顎をさすると小さく肩を落とした。

「存外、今日は仕事にならんかもしれん」

空を覆う雲はやがて激しくヨッドヴァフに雨を降らせた。
煙る飛沫が霧を作り、石畳の間から泥が染み出す。

第三騎士団の騎士達はウエストグロウリィロードから走る小路に入り、市街の巡回をしていた。

このような雨の日に出歩く人など、いないにも関わらず。

「……団長もこんな日に一斉巡回をしなくてもいいのに」

「この雨だ。魔物も出ねえよ。さつさと終わらせて一杯やろうぜ」

騎士達は雫の滴る兜をそのままに空を恨めしげに睨んだ。

「団長がやるといった日にゃ、かならずツクから早く帰れねえか
もしれんぞ？」

「なら、いいじゃねえか。恩賞もらってそれで一杯ひっかけよう」

小路に設けられた広場に出た時、西の空を見上げる。

「……おい、あれ」

「あん？」

ウエストグロウリィの空が赤く輝いていた。

激しく降る雨の中、立ち上る黒煙。

人では無いものの咆哮が響いた。

ウエストグロウリィロードの中心、サンセットゲート広場にその
魔物は翼を広げていた。

狼の双頭は炎の息吹を零し、岩を連ねた尾を振り回す。

三対六足の足を持つライオンの胴体は並んだ二階建ての家屋をゆゆうと重さで挽き潰す。

露天商の屋台を燃やし、広場に面した家屋を前足で叩きつぶす。

「ティコア・ラ・モルガンディア……グレイデンヘルで眠っていたはずなのに」

サンセットゲートの中央にあるマルチネア大教会の屋根の上、ラナの赤い瞳がその魔物を寂しげに見つめていた。

「僕たち騎士の根っこは簡単なんですよ」

スタイアは鐘楼の上で呟いた。

「民の為に強くあれ。だが、それは決して民に理解されることは無い。だからこそ、わかりやすさが必要なんです」

褐色の外套をまとい、フードを深く被る。銀翼の兜のバイザーの先端が僅かにフードから覗き、炎を照り返す。

「だから、ああして魔物を使い、危機を作り、剣を取る」

眼下では二つ首の狼が炎を吐き、コウモリの翼を広げ、岩の尾を振り暴れていた。

オズワルドの第七騎士団が集結しこれと対峙していた。

「……ファイダーイーは決して、これを容認しない」

スタイアの背後、イシユメールが囁いた。

「スタイアが騎士の心得を語るたあ、世も末さね」

シャモンがスタイアの足下でしゃがみ込みながら手を合わせていた。

ユーロが鉄の鎖と棺桶を背にその長軀をたなびかせていた。

眼下では集結した第七騎士団がモルガンディアの魔物に対峙していた。

盾を揃え、槍を並べ、筒を開く。

「さて、まんずまず、斬りに行きましょうか」

スタイアは闇夜の中で不気味なまでに輝く白刃を携えて、苦笑した。

第2章 『鉄の理、英雄の果て』 7

モルガンディアの魔物。

ヨッドヴァフ王国の西に広がるコルカタス大樹林の奥地、アルバドス大空洞を抜けた先にある古代王国ニンブルドアを守護する魔物。オズワルドはその魔物を前に、部隊を指揮していた。

「第一部隊、第二部隊、盾横開けっ！第三部隊、突撃っ！」

盾を構えた部隊が横に開き、長槍を構えた部隊が割って魔物に突撃する。

長槍が何本も魔物の体に突き刺さり、魔物が雄叫びを上げて尾を振り回し、炎を吐く。

「第一部隊、第二部隊、前へっ！第三反転撤収！」

前面、頭上に盾を構えた第一部隊、第二部隊が前進し撤収してくる第三部隊を飲み込み炎や振るわれる尾から守る。

魔物は尾を振り上げ、真上から第七騎士団を叩きつぶそうとする。

「散開、集合ッ！」

まるで蜘蛛の子を散らすように部隊は広がり、叩きつけられた尾を避けると再び集合して盾の壁を作る。

「槍、構えッ！再度突撃隊形を取れっ！」

勝てる。

オズワルドは戦場の中で感じる高揚を抑え、自らも剣を抜く。

モルガンディアの魔物は羽をはためかせ空を飛ぶ。
距離を取り、狼の双頭が炎を口腔の中で渦巻かせる。

「弓隊撃てっ！」

空に逃げた魔物の翼に弓が打ち込まれ、地面にたたき落とされる。
落ちた先の石造りの家屋が潰され、行き場を失った炎が溢れ、隣家を延焼させる。

逃げ遅れた子供が這いだし魔物と第七騎士団の間に蹲った。
オズワルドは躊躇無く告げた。

「突撃、止めを刺せっ！」

騎士達は槍を構えて、疾駆した。

子供は一齐に走り出した騎士を見上げ、父の名を叫んだ。
モルガンディアの魔物が起き上がり、腕を振るる。

その間に割って入る者があった。

砕けた石道の破片が土砂降りの雨の中、砂塵を巻き上げた。
最前列の騎士達が吹き飛び、宙を舞う。

「……あれは」

オズワルドは不意の乱入者に眉を潜める。

子供を褐色のローブの中に抱え、モルガンディアのかぎ爪を片手で受け止め、もう片方の腕で巨大な槌を振るっていた。

「……褐色の幽霊」

「人を殺すが人の所業なれど、フィダラーを手に掛けるは古き盟約を違えられない。盟約をもって私はセトメントを行う。人は人の手に、フィダラーはフィダラーに」

燐とした女性の声だった。

その背後からもう一人、褐色のローブを着た人物が立った。

「オズワルド卿、その命、頂戴いたしあす」

雨の降りしきる中、おだやかな声で告げた。

手には鋼鉄でできた肉厚の剣が握られている。

オズワルドは直感した。

その剣士がほんの少し前に、自らの剣を理解した男であることを。でなければ、自分の前に出てくることは無い。

だからこそ、だ。

「……斬れっ！」

号令が響くや否や、散開した第七騎士団はそれぞれが抜剣し褐色のローブの剣士　スタイアに斬りかかった。

スタイアは駆け出すと自らに迫る騎士を三人、甲冑ごと切り伏せる。

肉厚の剣を目にも止まらぬ速度で振り払い、胴と下肢を断ち離し返す刃で背後から迫る騎士の胸を突き抜いていた。

「……今宵はいい、戦ができそうですね。オズワルド卿」

「この数に勝てると思うか？」

それは戦場を知るからこそ重みのある言葉だった。

「楽な方ですよ」

スタイアはそう呟いて騎士達の中に躍り込んだ。

槍を腕で払うとそよ風のように伸ばした切っ先で喉元だけを掻き切る。

距離を取ろうとする騎士に一瞬で肉薄すると力強く振るわれた剣で兜ごと頭をたたき割る。

連携を思い出した騎士達が盾を構える。

盾を構えて並び、壁を作る騎士達の突撃を真正面から横殴りの斬撃で切り伏せる。

後続に構えていた槍騎士達が啞然とした一瞬にスタイアは切り伏せた騎士の首を切り、力一杯蹴りつけた。

怯んで避けた騎士は次に懷に潜り込んでいる褐色の幽霊を最後の視界に焼き付け、頭を叩き割られて死んだ。

「……やれやれ、頑張るねえ今日は」

シャモンは闇から闇を走り、甲冑の騎士の首に腕をかけた。

スタイアに気を取られていた騎士は巻き付けられた腕に呻き、もがくが次の瞬間、あらぬ方向に首を曲げられことされる。

ごきり、と鈍い音がして騎士はその場にこと切れる。

騎士達の中で一人、大立回りをするスタイアを目の端に捕らえ鼻を鳴らす。

「風々流転、山賊か騎士か。やることはたいして代わりはしないわな」

四人に突き込まれた槍を剣の一払いで切り払い、返す刃で突き殺していくスタイア。

その間を黒い風となったイシュメイルが横切った。

腕から青白い光が伸び、大気の中を走る間に一本の氷柱となり騎士の首に打ち込まれる。

衝撃で横倒れになった騎士の首では既に氷柱は溶けて消えていた。

「……感傷にふけるな」

「嫌にはなるさ。人殺しだもん」

シャモンはイシユメールの脇を抜けると、彼の背後から斬りかかるうとした騎士の胸を力強く押した。

地面が揺れる程の衝撃が走り、ひしゃげた騎士の甲冑の中で肉の潰れる音がする。

「……コウコウの技か」

「正しくは江湖だ。どっちでもいいがね」

二人は縦横無尽に戦場を走り回り、騎士達を屠り路地へ消える。オズワルドが二人の姿を捕らえると舌打ちする。

「追うなっ！まずは一人の敵に戦力をあつめろっ！」

制止が届く前に路地へと追った騎士達は無惨な悲鳴を夜空に轟かせた。

その悲鳴をかき消すようにモルガンディアの魔物が吠えた。

咆哮が空を揺らし、騎士達を怯ませるがスタイヤは剣を走らせる手を休めない。

まるで彼の背中を守るようにモルガンディアの魔物の前にラナが立ちはだかった。

「ウツズ・スー・ガルファン・ニクス」

ラナの声にモルガンディアの魔物は僅かに動きを止めたが、再度、激しい咆哮を上げた。

ラナは僅かに俯くと、再度、モルガンディアの魔物を見上げた。

「……頼みましたよ」
「……はい」

スタイアに答えると、ラナはモルガンディアの魔物に向けて駆けた。
だした。

モルガンディアの魔物は紅蓮の炎を吐きだす。
炎はラナを飲み込み、黒煙を巻き上げる。

魔物はためらうことなくその炎の中に身を躍らせてラナを踏みつぶした。

だが、割れた石畳の下、ラナは白く細い腕を伸ばしてモルガンディアの魔物の爪を押さえていた。

モルガンディアの魔物の背後から鉄鎖が伸びる。

長い、長い鉄鎖がモルガンディアの魔物の首と胴に巻き付いていた。

鐘楼の上、屋根に足首から下を埋めたクロアールが太い腕に鎖を巻き付けて立っていた。

クロアールは屋根を踏み破り、鎖を引く。

モルガンディアの魔物によるめき、倒れる。

鎖を引いたクロアールの背中に背負われた棺桶の輪が鎖に通し、クロアールは力強く鎖を振り上げた。

棺桶を放り上げ、肩で激しく打ち付ける。

棺桶が鎖を滑り、モルガンディアの魔物へと奔る。

振り上げた鎖を振り下ろし、波が棺桶を追う。

鎖を辿り、真っ直ぐにモルガンディアの魔物の首に辿りついた棺桶を叩く。

棺桶が破れ、炸薬が破裂し槍が撃ち出された。

幾本もの槍がモルガンディアの首に突き刺さり、炎が溢れた。

ラナは苦悶の咆哮を上げてのたうち回るモルガンディアの魔物を見上げて僅かに涙を流した。

「どうか……許して下さい」

ラナはそう告げて、細いたおやかな手を頭上に掲げた。

白い腕に黒い紋様が奔り、大気が歪む。

紋様が生き物のように奔り手のひらに昇ると大樹がまたたく間に伸びるがごとく禍々しい斧を作る。

それはモルガンディアの魔物より大きく、教会の鐘楼で見下ろすユロアールの目線の高さまである斧だった。

「セトメント・セトメント」

騎士達が息をのむ中、ラナはその斧を振り下ろした。

二つに裂かれたモルガンディアの魔物は自らの炎に焼かれ崩れていく。

「……終わりました」

炎の中で振り向いたラナは寂しげにスタイアに告げた。

騎士の胸に剣を埋めていたスタイアは優しく笑う。

「ファイダーイーはファイダーイーに、人は人の手に」

スタイアはそう告げると、オズワルドに向き合った。

崩れ落ちる騎士の返り血に全身が黒く染まったスタイアは鼻を拭く。

鋼鉄の剣は血に染まってなお、炎を照り返し鈍色に輝く。

騎士達に既に戦意は無かった。

「……褐色の、幽霊」

「剣を取りなさい、オズワルド」

撤退を決意したオズワルドをスタイアは厳しく制した。
鐘楼の影に、炎の中へ、ユーロとラナの姿が消える。

ただ一人、黒煙に焼かれる空が零す雨の中、スタイアだけが残った。

だが、その場に居る誰もがわかっていた。

誰一人、生きて帰れることが無いことを。

それでも生きようとあがき、背を向けて走り出す。

オズワルド、スタイアが何度も見てきた光景だ。

迫り来る死の恐怖に背を向け、走り出し、狂気に駆られ剣を振るう。

そして、選ばれたものだけが生き残る。

「これが……戦場です」

散って消えてゆく騎士達の断末魔の悲鳴が遠く響く。

どこか遠くで鐘が鳴っていた。

スタイアはフードを取るとその素顔をオズワルドに晒した。

血と傷にまみれた白銀のヘルムのバイザーを上げて、スタイアは真っ直ぐオズワルドを見つめた。

「……戦女神のグロウリイ・ウィングヘルム……何故貴様がそれを」

「鉄鎖解放戦争……あなたは敵でしたね。今は無きウィルヘミナ・ティアリス卿に買われた剣奴。覚えてらっしゃいますか？」

「ティアリス卿？……千人斬のアスレイという少年の話を聞いたことがある。国王直轄の金獅子騎士団に一人走り壮絶な最期を迎えた聞いた」

「……代わりに、死んだ人が居たんですよ」

スタイアは苦笑した。

「自分が生きるために他人の命を踏みにする。それは当たり前のことです。それがわからないのは自分で生きたことが無いからです。生きるというのはそれくらいには厳しい。僕らは僕らを否定する人達にこう言います。『それは綺麗ごとだ』と」

オズワルドは剣を握りしめる。

「なればこそだ。私は進まねばならない。平和は戦士の生きる道を閉ざす。我々は戦場でしか生きて死ねない。狂いきった戦場で生き延びてしまった我々は剣を捨てて生きる術を知らない。今は、まだ。だが、いずれは人々は我々を責める日が来るだろう。そのときに我々はどうなる？ 私は彼等に生きる希望を、剣を最後に捨てるまで戦士であり続けさせねばならなかった……そのために踏みに行かなければならなかった」

スタイアは告げた。

「あなたは所詮、英雄であり、王となる器ではない」

スタイアは笑った。

「来なさい。王を斬ったりヨウンの剣、見せてあげましょう」

そして、くるりと手の中で剣を回し、切っ先を向けた。
オズワルドの腕がぎりぎりとなわみ、鋭い気迫が熱気となって空気を硬くする。

今にも爆発しそうな大気の緊張が雨すら蒸気に変えた。

スタイアは静かに息を落とし、やわらかく剣を後ろに引いた。しんしんと降る雨が剣にこびりついた血を洗い流し、磨き上げられた鋼鉄に静かに炎を照り返していた。

「ぬううう…… あああああつ！」

オズワルドは駆けだした。

奴隷解放戦争の英雄はその名に恥じぬ鋭い剣閃をスタイアに奔らせた。

一条の銀閃がスタイアの額に真っ直ぐに伸びる。

だが

オズワルドの剣が夜空に跳ね上がる。

スタイアの剣が深々とオズワルドの額に突き刺さっていた。

半ばから斬られた剣を手にオズワルドは苦悶の表情を浮かべたまま死んでいた。

スタイアは押し込み、切り払うと血を流しながら倒れるオズワルドに一瞥をくれた。

「金貨五枚…… それだけのために振るえばよかったんですよ。あなたは優しすぎた」

スタイアはフードを目深にかぶり、鐘を鳴らした。

ようやく、遅まきに駆けつけた騎士団がウェストグロウリーの惨状を目にした。

その先陣に立つアーリッシュは火炎に包まれたモルガンディアの魔物と惨殺された騎士団を見て息を飲んだ。

「あれは……」

褐色のローブを着た幽霊は雨の中、静かに路地へと消えて行った。

追おうとして、呼び止められた。

「アーリイ！こつちだ！」

ダッツがオズワルドの元で厳しい顔をしていた。

アーリツシュは倒れ伏したオズワルドの遺体の側に膝をつくと、割れたその相貌に僅かに眉を潜めた。

「何が、起こっている」

静かに燃える魔物の熱がアーリツシュの胸に確かな不安を灯す。ダッツは小さく、息をつくとアーリツシュに答えた。

「……わからん」

クロウフル・フルフルーはアカデミアの自室で小さく揺れていた。

ロッキングチェアが揺れるたび、きいきいと小さな音を立てる。ろっそくの頼りない火が揺れる中、まどろむ意識のまま呟いた。

「……老いたのだよ。私も」

うずたかく積まれた本の中、闇に目を細めクロウフルは呟いた。

「王になる英雄が見たかったのかもしれん。また、私一人では抱えることができなかっただけなのかもしれん。川が雨雲から滴る雨を山があつめたものであるように、ただ一つの事柄が存在するものではなく、それは全てあつて一つの事象でしかない」

クロウフルは背もたれに背を預けて小さく吐き出した。

「私はもう、永く生きすぎた。君に斬られるなら、本望だよ。スタイア」

闇の奥、血の臭いを隠すことなくスタイアは褐色のローブの中でクロウフルを見つめていた。

「あなたは生きなければならない」

「……事が公になればアカデミアの失墜だけではない。国そのものが危機に瀕する。なればその責は誰が負うべきかね？それはアカデミアの最高権威である私自らが負うべきだ」

スタイアは静かに告げた。

「逃げることは、許されない。死することで購える罪もある。だがしかし、あなたは大師星だ。あまなく人々を照らし導く星でなければならぬ。太陽が沈み、月を導き、また新たな太陽が地平から生まれるまで、人々を照らし導かねばならない」

「スタイア……お前は」

褐色の幽霊は静かにクロウフルに背を向けた。

「聖なる剣は納めるべき鞘を神に預け、夜明けを告げる鐘はニンブルドアンに向こうへと優しく導き、歡喜の歌を歌う。覚えよ。我々は未だ宵と朝が寄り添う暁に立つ。忘れるな。夜は死の訪れる時ではなく安寧の眠りを授けるものと」

クロウフルは重くなった体をそれでも引き上げ、身を乗り出す。

「スタイア……お前は全てを知って、なお……」

「失礼いたします。大師星」

身を翻したスタイアはそのまま、また闇へと消えた。

閑話 登場人物紹介等（前書き）

第2章段階で明らかになった人物、設定等を取りまとめます。

閑話 登場人物紹介等

登場人物

スタイア・イグイット

騎士団の準騎士でありながらリバティベルの店主。

赤い髪、曲がった背中、どこか飄々とした青年。

リヨウンの剣という剣技を扱う。

奴隷解放戦役の時に、奴隷側の先鋒として戦った過去を持つ。

戦役後はアカデミアにも在籍しており教授の一手手前までいったとか。

ラナ

リバティベルの女将。

銀色の髪、赤い瞳というヨッドヴァフでは見ることもない風貌の美女。

いつも不機嫌そうな謎の多い女性。

タマ

元、泥棒の少女。

自由闊達なリバティベルの看板娘。

幼いながらに利発で冒険者として自立する為、アカデミアに通う。

シャモン

リバティベルに入り浸る酔客。

ぼさぼさの金髪に褐色の肌を持つ気だるげな瞳が特徴。

皮肉めいた箴言を吐く温情家。

コウコの技という体術を使う。

アーリツシュ・カーマイン

第七騎士団の団長でありスタイアの良き理解者。
長い黒髪の上に、鋭い瞳を持つ凛々しい青年。
スタイアと共に大きな戦役に従事していたことがある。

ダッツ・ストレイル

第七騎士団の騎士長でアーリツシュとスタイアの親友。
冒険者あがりのがっしりとした体躯の豪放な槍騎士。
対魔物戦術に優れ、アーリツシュとスタイアと合わせて『バルツ
ホルドの三騎士』と呼ばれる。

フィルローラ・ティンジェル

聖フレジア教会の司祭。
膝の裏まで伸びた綺麗なブロンド、芯の通った目鼻筋のヨッドヴ
ーフでは指折り数えた方が早い美人。
教会と騎士団の業務統合の調整役をしている。

ダグザ・ウィンブルグ

聖堂騎士長の一人。
褐色の肌と金色の髪の活発で直情的な少女。
業務統合で第七騎士団に出向してきた。

シルヴィア・ラパット

聖堂騎士長の一人。
金髪の巻き毛と白い肌のどこか冷めた少女。
業務統合でダグザと共に出向してきたが、過去にスタイアの指揮
下で戦役に参加した経験がある。

ユーロ

教会の墓堀。

浅黒い顔とざんばらに伸びた黒髪、漆黒のコートの偉丈夫。

口数が少なく、結論から先に物を言うしゃべり方は人に誤解を招く。

イシュメイル

アカデミア時代のスタイアの同期。

学長の補佐をしており、飄々としてどこか頼りげの無い青年。

だが、暗殺者としてはどこまでも伶俐な表情を持つ。

クロウフル・フルフルー

アカデミアの学長で大師星の称号を持つ老爺。

スタイア、イシュメイルの師であり、今はタマにその知識を授ける。

深い知識と広い見識を持ち、多くの英雄の友でもある。

用語解説

リバティベル

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーンの外れにある冒険者達が集まる酒場。

ヨッドヴァフ王国

ヨルグン大陸の東側に位置する王制国家。

北にアブルハイマン山脈、東に大海洋、南にヨシュ砂漠、西にコルカタス大樹林が存在する。

グロウリイドーン

ヨッドヴァフ王国の首都

中央に王城グロウリイハイムを置き、東西南北に主要道路であるグ

ロウリイロードが延びる。

北に工業区、東に住宅街、南に繁華街、西に商業区と区分けされ、それらを高い城壁が囲う形となっている。

城壁内部はひしめき合うように立てられた石材の建物の間を石を敷き詰めて造られた道が縦横に走り、主要道であるグロウリイロードに通じる。

冒険者

奴隷制度が廃止され、広く技術解放を行った国の各機関から技術を習得し生計を立てている者の総称。

だが、正確には定職につけない浮浪者の蔑称の意味で使われることの方が多い。

奴隷

金銭で売買され、所有権を他人が持つ人間を指す。

現在でも非合法に取引を行っている者がおり、また、冒険者として自らを救済する術が無い者も奴隷として甘んじている。

グロウリイ・ウィングヘルム

ティアリス卿からスタイアに下賜された銀の意匠がこらされた兜。

フィダーイー

天秤を傾けることをよしとしない。

何かの意思でもって人を殺める。

セトメント

意味はわからないが、子供の悪魔除けのおまじない。

閑話 登場人物紹介等（後書き）

第2章読了ありがとうございます。

今のところはこんなところかと。

第3章から第5章まで完成し、現在の最終章である第6章中盤を今執筆中です。

（平成23年12月現在）

が、途中で余計に一章入れるかどうか迷っております。

一日一話ペースで頑張ります。

お気軽に評価や感想を下さい。頑張る力になりますので><b

第3章 『セトメント・セトメント』 1

アーリツシュ・カーマインは筆を走らせる手を休め、大きく息をついた。

騎士長執務室で遠慮無く休むダッツに目を走らせる。

「モルガンディアの魔物の出沒、これの対応に当たった第三騎士団は指揮官のオズワルド騎士団長以下全滅……そう聞けばなんの違和感も無い」

ダッツはぶつけどころの無い憤りを含んだ声で言った。

「だが、実際は違う。何者かの手によって殺された。その真相究明を求める声も大きい……ダッツさんのところにも？」

「ああ。だが、今はこういう状況だ。表立って動くわけにはいかねえだろう」

「意地悪な言い方をさせてもらっていいかな？」

「……ああ、構わねえよ」

「恩義のある人が死んだのに表立って動く訳にはいかないというのは、いささかダッツさんらしくないと、僕は思う」

ダッツはひとしきり天井を見上げ、大きな溜息をつくと肩を落とした。

「物わかりがいいツモリじゃあない。だけど、物事をわけて考えなきゃならん分別もあるつもり……いや、言い訳だな。結局は天秤にかけて選んだら、こっちを選んだんだよ。だけど、分別があるってことにしといてくれや」

ダッツはアーリイから背を向けた。

アーリイはこれ以上追求しても口を開くことはないだろう友人に大きく溜息をつく。

目下のところを片付けねばなるまい。

机の上に広げられた編成表に目を落とす。

「乾期を迎えたコルカタス大樹林から現れる魔物の掃討。騎士団と冒険者の混合編成でこれらに当たらなければならない」

「厄介な仕事を押しつけられたモンだな」

深い溜息を落とすダッツに、アーリイは苦笑で返す。

「時代が時代だ。騎士が被害を被るのであればそれが本分であるから問題は無い。がしかし、掃討に参加する冒険者にまでその意識はまだ浸透してはいないだろうさ。本格的な掃討戦になるとなれば必ず犠牲は出るだろうさ」

「新兵よりタチが悪いんだよ冒険者ってのは。冒険者あがりの俺が言うから間違いはねえよ。冒険者の口減らしが目的だったバルツホルドたあ訳が違う。調練するこっちの身になって欲しいぜ。とはいっても、責任を取らされる人間に言うモンでもねえか」

アーリイは再度苦笑して見せると同じように溜息をついた。

丁度、そこへ市街の巡回を終えたダグザとシルヴィアが入ってきた。

「申告致します。タグザ・ウィンブルグ、シルヴィア・ラパット、午前の巡回を終えただいま帰所いたしました。取り扱いは2件、商店から装飾品を窃取しようとした盗賊の捕縛と、往来における冒険者同士の喧嘩の仲裁、それぞれ教会法務庁へ引き渡し裁断を受ける次第となっております」

「ご苦労、ダグザ騎士長、次からは口周りのクリームを拭いて入ってくるように」

アーリイにたしなめられ、ダグザは真っ赤になって口元を拭う。
小馬鹿にして笑うダッツにきつい一瞥をくるとダグザは続けた。

「……アーリッシュ騎士団長、コルカタス大樹林の掃討戦があるという風聞を耳にしました」

「ああ。編成は追って伝える」

「最前線を希望します」

「……僕の先手を打ったツモリだろうけど、編成権者は僕だ。意気に逸るのはいいが、未熟な部隊長の下で死ぬ部下はたまったものではないんだよ？」

アーリイが身を乗り出し優しげな笑みで告げると、ダグザは悔しそうに唇を噛んだ。

「編成は追って伝える。申告が終わったなら午後の巡回まで休めばいい」

「……失礼、致します」

憤然としながら立ち去るダグザを一瞥しダッツは鼻を鳴らす。

「なかなか厳しいお言葉で？」

「皮肉るなよ。嫌な気分だが事実だし仕方の無いことだ。バルツホルドの時は僕も君もスタさんに助けられたようなものだし、実際僕の部隊は後方での後抑えだった。本当の負け戦というのを経験したことのない人物に最前線は任せられないさ。なあ、シルヴィア騎士長」

タグザについてゆかず部屋に残ったシルヴィアはじつとアーリーの瞳を見つめたまま頷いた。

「差し出がましいようですが編成については聖堂騎士団の面々を中心に後方輜重に回し、冒険者とこれに当たらせるのが妥当と思います。ただ、それでは教会の面目が立たないことから私が選り抜いて前線に追従する人員を数人、配置したいと思います」

「あからさますぎるな。タグザのような不満を持たれるぞ」

「不得手ではありますが私が緩衝いたしましょう。本来、私とタグザはその役割を期待されているはずでしょうから」

「助かる……が、いいのか？自分が下がることのできる機会を自ら無くすぞ？」

シルヴィアはしばし逡巡してから述べた。

「つきましては、お願いがあります」

「なんだ」

「……スタイア・イグイット準騎士を伝令として聖堂騎士に貸して欲しいのですが」

「断る」

アーリーは即答した。

「スタさんは僕付きの当番兵として動いて貰う。聖堂騎士のお守りだけに専念させるわけにはいかない」

「でしょうね。ですから、そのお守りに随伴させていただきたいのですよ」

アーリーは眉を潜める。

シルヴィアはほんの少し眉を上げてみせた。

「フィルローラが君に伝えたのか？」

「あらましは聞いておりません。フィルローラ司祭も今回の掃討戦には随行することくらいですが……それだけ知れば十分かと」

アーリイは難しい顔で頷くと溜息を吐いた。

「問題は彼が承知してくれるかどうかということなんだが……」

シルヴィアはそこで苦笑した。

「……承諾は得ています。よりどりみどりだから、是非にと」
「彼らしい……が」

アーリツシュは呆れかえるともう、考えるのを止めることにした。
シルヴィアは溜息混じりに告げた。

「下半身で生きてるゲスですね」
「ああ、ゲスだ」

冒険者とは様々な技術を習得し、多種多様な依頼を受ける者達の総称である。

だが実態は、今日明日を食いつなぐ浮浪者の総称である。
急増した浮浪者対策として王室を通じ各組合が技術と仕事を提供を行い、これらのものに仕事を与える。

だが、必要な仕事より冒険者の数の方が多い状況でもあった。
少女はその酒場が冒険者の集まる酒場と聞いて、仕事について話が聞けるものと思ったのだが返ってきた返事は冷ややかなものだった。

た。

「コルカタス大森林の魔物掃討？やめときなさい。掃討といえば聞こえはいいですけど、実際は森の中で四六時中魔物に襲われるんじゃないかと思いつながら延々と歩くことになるんですから。大森林の全部が魔物の巣ですからね。遠征といっても死人を出しながらだらだら歩くですよ」

少女が尋ねた相手はこの店の店主だったようだ。

仕事中の騎士の装束で配膳をするその姿はどこか滑稽だが、荒事を主とする冒険者の中に置けば、違和感を感じない。

それどころか客の中には敬意を払うものもいるくらいであった。

少女は店主に尋ねる。

「森林を焼き払いながら進むというのはどうなのでしょう？」

「森林を焼く？冗談じゃないですよ。村を焼かれた人間が野盗になるのと同じで、すみかを追われた魔物は人里に降りて人を襲います。騎士団もバカじゃない。村を魔物に追われた人が野盗になるから、野盗鎮圧と魔物討伐と仕事がつ二つ増えるだけです。それより注文はどうします？」

「このような店には来たことがなくて……これで適当にお願いします」

少女が銀貨をテーブルに置くと店主 スタイアは苦笑した。

丁度その時だ。

「スタさんスタさん！見て見て〜！！」

ドアのベルをけたたましく鳴らしながらタマが飛び込んできた。白いなめし皮の鎧と膝の上で切られたズボンをはいている。

腰に吊しているのは細身の長剣であった。

「今度のお仕事は荒事だからね！ちよつと頑張ってみた」

年としては少女とタマは同じくらいの年齢であった。

少女も色々な冒険者を見るが、首にベルトを巻いて鐘を吊り下げているのははじめて見る。

「あの鐘は？」

「魔物除けですよ。魔物だって無差別に人は襲いませんよ。音がすれば当然、様子をうかがうし、たくさん人が居れば寄っては来ませんしね」

スタイアは少女にそう答えてタマの鎧の留め具を点検していた。

しつかりとした鞆を背中や腰に帯びさせ、それらがしつかりと固定されていることを見ると満足そうに頷く。

そして、腰に吊した長剣を取り上げた。

「これは持つモンじゃない」

「高かったのに！」

「モノは悪くは無いですがね。メリーメイヴは名槌ハイングの一人娘ですから」

「知ってるの？」

「僕の剣の研ぎ師をしてきてますからね。タマちゃんだって僕の跡をおっつけて会ってきたんでしょう？だけど剣は覚えるモンじゃありません。これを使いなさい」

少女の目から見ても、タマの長剣は業物に見えた。

細く、軽く、それでいて硬くしなやかで繊細な意匠がこらされている。

スタイアは腰に吊っていた短刀をタマに渡した。
切り結ぶには少々心許ない獲物ではある。

「森の中を歩く時、枝を払ったり仕留めた獲物を捌くくらいのこととはできます。逆にそれ以上のことをしようとはしないことです」

「でも、魔物に襲われたら戦わなきゃいけないよ？」

「大人の男の人が勝てない魔物なんですよ？タマちゃんに勝てる訳ないじゃないですか。そんなときは逃げるのが一番ですよ」

スタイアはそう言って長剣を鞘に納める。

「剣の奥義を教えましょうか？」

「あるの！？教えてくれるの！」

「先手で殺せ、手数で殺せ、ダメなら逃げる。そのためにみんな鍛えてるんですよ。タマちゃんみたいな子供が争って勝てる訳がない。僕とやりあってみます？」

タマはしばらく考え込んで首を振った。

「スタさんが言うこと、わかった」

「偉い子だ。奥へ行ってラナさんを手伝っておいで」

少女の目から見て、タマはスタイアにもの凄く懐いていることがわかる。

丁寧でありながら含蓄のあるスタイアの言葉には確かに愛情があった。

「……あの子も参加するのですか？」

「あれでアカデミアで学ばせてもらってますからね。魔物を学ぶために参加しなさいと師匠に言われたらしいです。冒険者とひとく

くりにされても楽な稼業じゃありませんよ」

少女は顔を歪めた。

騒然とする店内に少女が目走らせると腕自慢の荒くれ者がジヨツキを打ち鳴らし昼から喝采を上げている。

「今日は俺の奢りだ、飲め飲めっ！」

あちこちで彼を褒め称える喝采が沸き、喧噪が酷くなる。

「……ああいうものなんでしょうか」

少女にとって奇異とも思える行為にスタイアは苦笑して返す。

「命的にして稼いだお金です。貯めたところで明日には死ぬかもしれないのが彼等の身上ですからね。ああした使い方になるのは至極当然です。まあ、僕も人のことは言えた義理じゃないんですけどね？」

店の奥で店主を疲れた瞳で見つめる女性　　ラナが小さく溜息をついていた。

少女はもの珍しそうに彼等を見回すとグラスを傾けた。
雑なまでに甘ったるい果汁を口の中で転がすと、喉の奥に押し込む。

お世辞にも美味しいと言えたものではない。
そんな喧噪の中に場違いとも言える教会の司祭が姿を現し、少女は顔を逸らした。

「おんや、フィルさんじゃないですか」

「スタさん！これはあなたの仕業ですかっ！」

もの凄い剣幕で怒鳴りつけるフィルローラにスタイアは眉を潜め、彼女の手にあつた海草紙に目を落とす。

「うつひょう。第七騎士団長付きの聖堂騎士団引率、混成隊調整役ですか。可愛い子食べ放題のポジションじゃないですか。やったね」

「やったね、じゃありません！準騎士のあなたがどうして今回の遠征で私の直上になるのですか！アーリッシュ卿はスタさんたつての願いだとおっしゃってましたよ！」

「あんれま。通るとは思わなかったんだけどなあ。そこはそれ、日頃の行いがいいから神様もしかりと見ていて下さって私にご褒美として御利益を下さつたに違いない。そこはしっかり甘えて食べるだけ食べるどー」

「そんな神様がどこに居るんですかつ！不謹慎にも程がありますっ！先に申し上げておきますが私の居る間に聖堂騎士の純潔は汚させは致しませんからね！」

普段の大人しい様相からは想像できないくらいにフィルローラは激昂していた。

少女はちびりちびり果汁を舐めながらその様子を横目で見つめていた。

スタイアはどっかりと椅子に腰を降ろし、耳をほじくりながら編成表を改めて見直していた。

「なら、フィルさんが僕の相手をして下さいな。僕が他の子にちょっかい出せないくらい足腰立たないように頑張ってくださいねなんも問題ないじゃないですか。うつひょう」

「なっ！」

「それは冗談として騎士団はともかく、血の気が多い冒険者たち

の群れの中にうら若き聖堂騎士団を置けばつまみ食いされても文句は言えないでしょうさ。最悪、叩き斬って魔物にやられたって言い張りゃいいのが現実でしょうから」

フィルローラは言葉を無くし、憤怒に満ちた顔でスタイアを睨み付ける。

「まんずまず、そうならないように押さえのきく人間が必要だつたんでしょさ。ましてや、今回はやんごとなきお方が同道するというお話。まかり間違ってもその人に僕なんかがちよっかい出そうものなら教会にとっても面目が無いでしょうからね」

一転して、フィルローラの顔から血の気が失せる。

「あなたは……どこでそれを？」

「クロウフル・フルフルフーはアカデミアに居た頃のお師匠さんでしてね。今でも懇意にさせて頂いてますし。それにほら、フィルさんは気がついていないでしょうけど、やんごとなきお方がこちらにおわしますからね」

スタイアはそう言って少女の頭をぼんぼんと叩いた。

「知っておりながらとは……無礼じゃな」

フィルローラは少女の顔を見て、一気に蒼白になった。

「アルテツツア公……にございますか？」

スタイアは片目を瞑りフィルローラに声を落とすように示した。

「……まんとまず、ヨッドヴァフ三世の一人娘が昼間つからこんなガラの悪い店に出入りしてるとあっちゃお国問題ですからぬ」

「ガラの悪い店の店主が何をほざきおるか」

少女は鼻で笑った。

フィルローラは恐縮し膝を折ってかしづく。

「……恐れながらアルテツツア公、このような場所に入り浸り御身になにかあれば国家安寧はいかがなされますのでしょうか。犬を用意いたします故に」

「膝をつくな。時と場をわきまえよ」

少女　アルテツツアは尊大に言い捨てると膝を折っているフィルローラを睨み付けた。

フィルローラは急ぎ立ち上がると居住まいを正す。

「案ずるな。先程から手の者が店のまわりで息を潜めておる。私の身になんぞ起こせるとしたらその男くらいなものだ」

アルテツツアがあごでスタイアを示すとスタイアはいたずらめいた笑みを浮かべた。

「子供に手を出すほど僕も飢えちゃいないのでご安心を。外に四人、中に一人ですか？随分とまあ、念の入ったお散歩ですことで」

「なんだ、わかるか。レオ・ウォン・フィリツシュがお前を買うのがわかるな」

スタイアはその名前を聞いて露骨に顔を歪めた。

フィルローラはおろおろと二人の顔を交互に見渡し、記憶を辿る。

「あの、レオ・ウォン・フィリツシュとは……近衛騎士長のフィリツシュ卿のことでございますか？」

「他に誰が居る。私に声をかけられるものなのど、フィリツシュとお前の父、クロウフルのじじいくらいしかおるまいて」

「曲がりなりにも王女様ですからね」

スタイアはそう告げて店の中に視線を巡らす。

バカ騒ぎをしていた連中が、ほんの僅か、ほんの僅かだが静かになった。

「なかなか、腕も立つようだな」

「星の数よりパンの数って言いますからね。生き残るには強い人間に従うのが一番だという哲学は王女様でも理解しているでしょう」

アルテツツアは苦笑してグラスを干した。

「……この喧噪もただのバカ騒ぎではないということか」

「バカ騒ぎですよ。無粋な真似をされてもまた、興ざめするでしょうし営業妨害なんですよ。もし、本当に乗り込んでくるなら王女様の首を刎ねてしまえばいいわけで」

「スタイアさんっ！不敬ですっ！」

「フィルさん何を言ってるんですか。王女様がこんなところにいらっしゃるわけがないでしょうに」

スタイアはけたけたと笑うとアルテツツアの頭をぽんぽんと叩いた。

「……怖い男だな。私が仮にここで死ねば国がそれを許さないことまで知っているか」

「物事つてのは収まりたい場所に収まるものらしいですからね。さて、王女様。こちらら忙しいものでして用件があればお早めに済ませてくださると助かるんですが」

アルテツツアは不敵に笑う。

「一つは済ませた。直衛となる騎士の品定め。お前では間違いはあるまい」

「あんれま、お褒めに預かり身に余る光栄」

「もう一つは今回の遠征の実態を知ることだったのだが……存外、遠征自体が迷惑な話のようだな。貴様の言葉を借りれば物事は収まる場所に収まる、か？魔物を駆逐すること自体がかえって魔物による被害を増加させるのであれば適当に力を抜いてつつがなくというのが本音なのだろう」

スタイアは小さく溜息をつく。

「こりやまいった。タマちゃん並に頭がいい。今時の子供ってみんなこう頭がいいモンなんですかね」

「茶化すな。魔物がいくら増えたとはいえコルカタス大森林より出てこぬとなればわざわざ危険を冒して掃討する必要もあるまい。なれば何故、それを行わねばならん？」

スタイアはじつとアルテツツアの瞳を見つめる。

アルテツツアはその瞳を黙って真正面から受け止めた。

「……物事は収まりたい場所に収まる。だけど、人間は収めたい形に収めたい。危険を冒してでも得られる利益があればそれはいいがですかね？」

「どういう意味だ？」

「それを知るために今回の遠征にひつついて行くんでしょう？タマちゃんだって自分の足で調べようとしているんですよ？」

アルテツツアは鼻を鳴らし、鷹揚に頷いた。

「スタイア・イグイットか。色々と切れるな？」

「ありあとあんす。王族ともなるとうまいことをおっしゃるよう
で」

スタイアは軽く会釈をすると憤然とした様子で仁王立ちしている
フィルローラに視線を移す。

「わお、おっかない」

「……スタイアさん。教会までご同道願えますでしょうか？」

「お説教ですか？」

「どうやら私がしつぱりとお相手なしないと満足しないよう
でっ！」

否定を許さない威圧感を出しながらフィルローラはスタイアの耳
を引っ張っていた。

「ふむ、どうやらお邪魔のようだ」

アルテツツアは苦笑すると金貨を一枚カウンターの向こうに放る
と一人で店を出てゆく。

一瞬だけ目があったラナがじつと自分をみつめていることが気
になったが、何か言うようなことはしなかった。

「ラナさん、助けて下さいよぉ」

どこか嬉しそつににやにやしているスタイアが店から引っ張られていくのを眺め、ラナは大きく溜息をついた。

第3章 『セトメント・セトメント』 2

教会と言えばグロウリイドーンの東部にある聖フレジア大教会を指す。

国教であるマハヴェ教の教会だ。

そのはじまりは古く、ヴァフ民族の始祖ヨツドがアブルハイマンで神から啓示を受け、現在のヨツドヴァフに新天地を求めたことから始まる。

「がしかし、多くの宗教がそうであるように政権の権威を高める為に教典は使われている。唯一神であるマハヴェが多くの悪魔をなぎ倒す教典は他のどの神様、つまり、もともとその土地に根付いていた宗教を駆逐して、マハヴェが絶対であり、マハヴェの国であるヨツドヴァフが絶対であると教えるために使われたんだ。事の起りは土着宗教を改編して新しくできたヨツドヴァフの権威を高めるためのものらしいからね」

「あなたは教会で子供になんてデタラメを教えているのですかっ！」

連れ去られたスタシアを店に戻すために使いに出されたタマにスタシアは宗教のぶっちゃけ話をしていた。

「でも、スタさんのいつてることなんか納得できちゃうよ?」

タマは純真な瞳でフィルローラに抗議する。

「タマさん、このような信心の欠片も無い人が言うような話してマハヴェを軽蔑されては困ります」

「失敬だなあ。僕、それでも神官位は履修して巡礼司祭になれるところくらいまでは頑張ったんですよ？」

あっけらかんとして言うスタイアにフィルローラはこめかみを抑え、苛立ちながら言った。

「神官なら法力の一つでも使ってご覧下さいな。そんな分かり易い嘘を神の御前でよくぬけぬけと」

「マンフを十字に流し、第三二聖印から始まり第四八聖印までを奏せよ。その枢軸に神の慈悲である環石を配し、祈り、神の助力を乞いなさい。祝詞までは面倒だからいいですかね？」

フィルローラはスタイアが述べた法術に面食らう。

「……何故あなたが聖霊十字域の礼式を知ってらっしゃるのですか？」

「いや、だって神官でしたし。勉強しましたよ。環石は教会で管理してるからこそ使えませんが聖霊十字域は巡礼司祭にとっちゃ命綱みたいな法術ですからね。そりゃあ、練習もしましたさ。なんなら、ヨッドヴァフの歴史に関わるアルバルタ第三三節のゲマト解釈をそらんじましょうか？」

「できるんですか？」

「……星の巡りが七度瞬く間のことだった。予言者デルバイに導かれたヨッドの王はヨシュの砂漠を割る神が砂の海を渡る奇跡を見た。開かれたエイヴル・ヘーをその足で踏破しダイフの頂きでニザリオンの天使からグロウクラッセを預かり、鐘を得る。ダイフは言った。あなたがたは地の砂である。求め、そして、与えなさい。地にくら砂を積もうとそれは天の塔とはならない。鐘をならしなさい。それは、あなたがたの叫びである」

フィルローラは絶句する。それは口伝でしか伝わらない教典の節だったからだ。

スタイアは眼前で印を切ってみせると意地悪い笑みを浮かべる。

「スタさん凄いなだね！……でも、なんだろう、さっきの術式なんかおかしいよね」

タマはひとしきりスタイアに驚嘆してみせると、しきりに首を捻る。

「そうだよ、おかしいよね。なんでだかわかるかい？」

フィルローラは眉を潜める。

「おかしいことなど何もありませんか？」

「……この法術式の伝え方んだけど、マンフは『流し』、聖印は『奏せよ』」

「あ、わかった。神様には丁寧なんだけど、他にはそうでもないんだ！だけど、神様の慈悲である環石になんで丁寧じゃないのかわかって思ったからおかしいと思ったんだ！」

フィルローラは少し考えてみて、首を傾げる。

自分の知る術式を思い出し、確かにそのような法則はあったがいずれにせよ環石については神への敬意が払われていない。

「言われてみれば……私の知る全ての術式もそうですね」

「まあ、うん。それについて大司祭に尋ねてみたらえらく怒られてね。自分で調べようとして色んな人に声をかけてるうちにとっても可愛ういー子と神様の前で背徳的なことをしてしまったら神官

位を剥奪されてしまいました。フィルさん、興味ありません？」

「環石についてですか？」

「いや、背徳的な行為の方ですよ。もしご興味があれば僕、頑張っちゃいます」

「っ！結構ですっ！」

フィルローラは力一杯スタイアの頭を叩いたが、スタイアはにやにやと笑ったままだった。

タマはひとしきり笑った後、聖堂に掲げられたステンドグラスの前に吊された燭台を見上げる。

その中心には鎖で縛られ、吊された巨大な剣があった。

「ねえ、あれなあに？」

タマが指を差すのを見てフィルローラは一度咳払いし、優しい笑顔を作る。

「あれは聖剣グロウスクラッセ。偉大なるヨッドヴァファ一世がマハヴェの神託とともにあの一振りと退魔の鐘を授かりこの地にはびこる魔物を遙か地の底に封じ、この世界に平和をもたらした。先程スタイアさんがそらんじた一節に出てくる剣ですね」

「はてさて、どうですかね。あれをそのまま見るにアルガム金属を含む鋼鉄で作られたバステッドブレイドと呼ばれる種類の重剣です。おおよそ人間同士の戦争では用いられないけど、対大型魔物用の剣つてのは全部あんな形をしていますよ。魔物の中には虫みたいに硬い殻をまとうていたりして、それが鉄より固かったりすることもあるからね。剣の重さと長さで叩き斬ればおっきな魔物も一発で切り捨てられる」

「っ！スタイアさん、横から茶々を入れないで下さいっ！」

「僕は剣士として正しい事をタマちゃんに教えただけです。正

確なところを言えば剣としてのグロウスクラッセは初代ハイキングが槌を振るった剣です。名槌ハイキングは代々グロウスクラッセの打ち直しをしてるし、今のグロウスクラッセの華美な装飾はメリーメイヴが施したものじゃないですか」

「……どうしてあなたはそう、神を貶めようとするのですか」

「子供に嘘をつくもんじゃないですからね、神様の前で」

スタイアはいやらしく笑うとグロウスクラッセを見上げる。

「莊厳かつ華美な装飾は元のグロウスクラッセには無かったんだ。ヨッドヴァフ二世が即位した時に新たな時代を切り開くという意味で打ち直しを命じられた。そして二代目ハイキングが自ら装飾を施した。ヨッドヴァフ三世の即位の時は三代目ハイキングが自分の娘に装飾をやらせたらあんなにびかびかになっちゃったって話じゃないですか」

「そんな話、聞いたことがありません！」

「本人達の口から僕は聞きましたから。顔なじみなんですよ、ハイキングとは」

スタイアは腰の剣を軽く叩くと、苦笑してみせる。

タマはスタイアの腰の剣をしげしげと見つめた後に尋ねる。

「スタさんの剣もハイキングさんが作ったの？」

「うんにゃ。もとは対魔物用のツヴァイハンダーだったんですけどね。折れたり研ぎ減りしたりしているうちにこんなブロードソードのようになっちゃったんだ。メリーメイヴにたまに見て貰うくらいです……タマちゃんがたまーに僕の後つけてることくらいは知ってるんですよ？」

タマはそっぽを向いてとぼける。

フィルローラは頭痛のする頭を抑え、大きな溜息をついた。

「なんでこうなるのかしら……そもそも私はスタイアさんに王女に粗相の無いように言い含めるツモリでこちらに連れてきたはずなのですが」

スタイアは大きな欠伸をすると、途端に真剣な眼差しでフィルローラを見上げる。

「女性を中心に編成された聖堂騎士団が護衛となるなら王女にあらぬ噂も立たぬということなのでしょう？そのあたりについては分をわきまえてるから安心して下さいな」

フィルローラはスタイアに機先を制されるようで氣にくわなかった。

「あなたが言うと言説力がまるでありませんね」

「小便臭い子供を抱く気にはなれませんよ。フィルさんが相手ならともかく。グロウリイドーンから離れた場所で男がうろつくと王女の周りを歩けばそれだけで王女にあらぬ噂を立てられて足を引く張るのが王城の中の世界ですからね。聖堂騎士団はその立場を守るために合同派遣されるのでしょうか？女同士ではよもや間違いは起こるまい、てなところですかね」

「そ、そのとおりです」

「が、しかし、アっちゃんも心配してるように散歩に行く訳じゃないから、死人を出すのは控えたい。戦場を知ってて、調整もできる人間が間に立たなくちゃならない。実際、頼まれた僕の方もしんどいんですよ？」

「……それがあなたの仕事です」

「まあ、それを言われてしまえばかなわないんですがね。安心し

て下さいな。そのあたりは僕が頑張らなくてもシルちゃん僕を通じてどうしてもしますから。あの子はあれで腕も立つ指揮官としても優秀ですから」

スタイアは大きな溜息をついて遠くを見ていた。

「……問題は落としどころをどうするか、なのですがねえ」

フィルローラが眉を潜める。

「わかつちやいると思いますが、本音ではこの遠征に意味は無いんです。だけど、本音の本音のところを見れば通る筋も通らなくなる。そうなれば一悶着あるのは目に見えるんですが……」

「何を仰ってるんですか？」

スタイアはじつとフィルローラを見上げるが、フィルローラは当惑するばかりだった。

「まんずまず、頑張りますかね」

スタイアは苦笑を浮かべてそう零すと、重そうに礼拝用の長椅子から腰を上げ立ち上がる。

のそのそと聖堂を出て行くスタイアの後ろからちよこちよことタマが続く。

タマはフィルローラを振り返りながら、難しそうに顔を歪めた。

「フィルさんの言うてることは正しいことなんだと思う」

何を言われているのかわからなかった。

「でも、神様は私を助けてくれなかったよ。私を助けてくれたのはスタさんだった」

フィルローラは純真な子供の瞳を前に何も返せなかった。

「まだ、よくわかんないけど、多分、そういうことだと思う」

タマの言葉がずしりと、胸の奥を重くした。

ユーロとイシユメール、加えてシャモンの三人はリバティベルのカウンターの奥で、慣れない鍋を竈にかけていた。

「まあ、うん、ラナさんとスタさん、タマちゃんが居なくなるって話をシャモさんから聞いたからにゃこんなところだろうと思ったさ」

愚痴をこぼすイシユメールは煮えたぎった湯の中で踊るパスタをかき回しながらユーロに零した。

ユーロは巨大な肉の塊を切り分けながら、横目でちらりとイシユメールを見ると、再び剣のように巨大な肉切り包丁を振るった。

シャモンはちびりちびりと調理用のワインを舐めながら火にかけた鍋をふるっていた。

「だいたいよ。スタさんはラナさんが居ないと身の回りのことなんざ何一つできねえってんだ。仕方あるめえよ」

「それで男衆三人で台所にたつのかね？ 僕らはここの従業員じゃなくて客なはずだろう？」

イシュメイルはパスタを皿にもりつけながら、げんなりする。盛りつけたパスタにシャモンが鍋の中でいためた肉や野菜を手早くもりつけると、店の中からマリナがやってきて皿を受け取る。

「まあ、しょうがないじゃないですか、スタさんですもの」

「物わかりがいいのと分別があるのはまた別の話ですぜい？マリナちゃん。自分トコの店はいいのかい」

「主人には了解を得ております。少しの留守中くらい、ご面倒をみさせていただけなければ申し訳がたちませんので」

マリナは笑みを浮かべると皿を持って店の中へ戻っていった。その背中を見送り、シャモンはやるせない溜息をついた。

「まずもって、難儀な中、ご苦労なこつてす」

シャモンは小さく頭を下げるとまた鍋に取りかかった。

イシュメイルは小さく溜息をつく、シャモンに尋ねる。

「なあ、シャモさん。今のうちなら遠征そのものを止めることもできるんじゃないかい？まあ、僕が言うのもなんだ。もともと必要の無い遠征でしょうに」

「そうさな。無理な話ではあるめえよや。がしかし、どうしてこうして。ラナさんが自ら行く理由であればおまいさんやユーロの方が知ってるんじゃないかねえのかい？」

ユーロはざむ、と肉切り包丁を振り下ろしたままシャモンを一瞥した。

「気がつけばちっちゃな虫もスタさんについて行ったみたいだし、俺のような人間には手に余るよ。色々と」

シャモンは面倒臭そうにそう言つと鍋を軽々と振つて中の具を跳ねさせた。

丁度、その時にタマが厨房に顔を出した。

「ねえねえシャモさんシャモさん！見て見て！スタさんに買つてもらつた！」

タマが可愛らしい水筒をぶら下げて現れ、シャモンは相好を崩す。

「おお、おお、可愛いな。どれ、おっちゃんが後で弁当こさえてやる」

イシユメールはパスタをゆがく手を止めると屈み込み、タマの頭を撫でる。

「ふむふむ、せっかくだから色々勉強してくるといい！このコルカtas図鑑をあげよう。クソじじいのレポートは兄弟子の責任としてきつちり手伝つてあげるからな！」

背中のザックに分厚い図鑑を収めると、留め具をしつかりと確認してイシユメールはタマの頭をくしゃくしゃと撫でる。

じつとみていたクロアールは最後に小さな十字架を懷から取り出し、タマの首にかける。

「御守りだ。怪我をするな」

普段の無愛想からは想像できないような優しい笑みでタマを掲げると男衆三人が厨房でさぼっているのを見たマリナが溜息をつく。

「若いというのはそれだけで女の財産ですね。頼んでもないのに
ああやって贈り物を頂いて……ほらほら、皆さん、ちゃっちゃんと手
を動かして下さいな？注文がつかえてますので」

「へいへい」「」

第3章 『セトメント・セトメント』 3

遠征は予定通りに行われることとなった。

ヨッドヴァフから街道を西へ四日、遠征軍はアルゲンスミア平原に前駐の幕営を構える。

「まんず、いまのところはつつがなくですか」

スタイアは幕営の設置に取りかかる聖堂騎士団と冒険者団の面々を犬の上から遠巻きに眺めていた。

「ここで問題があるようでは話にならないだろうさ」

隣でアーリッシュが同じように黒い犬の上から遠征隊を眺めていた。

スタイアの前にはタマが抱えられており、タマはおっかなびつくり犬の背中にしがみついている。

「ねえ、スタさん。なんで騎士団はこんなに大きな犬を使うの？ 街に来る商人さんとかは犬じゃなくて馬を使うのに。それに、なんか犬として不思議な感じがするよ？」

タマは遠征隊の騎士団の多くが馬ではなく犬に騎乗しているのを見て、尋ねた。

「昔は騎士も馬に乗っていたらしいです。ですが、グレートハウル種の犬が発見されて調練されて以来、軍ではもっぱら犬を使うようになったんです。犬は調練すれば馬より騎士の言いたいことをわかってくれますし、長い距離を早く走れます。敵が近づけばその鼻

でいち早く察知してくれますし、何かと馬より便利なんです。それに割と人なつこいですからね」

スタイアは自分の犬の耳の付け根をこりこりと掻いてやる。

スタイアの犬がだらしなく口を開け、はっは、と舌を伸ばした。

「ネコはいないの？」

「ネコもいますよ？ただ、慣らすのが難しいので奇襲騎兵が使うくらいですね。俊敏で獰猛ですし、また夜目も利きますから頼れる相棒ではあるのですが……いかんせん、人にあんましなつかないの
で」

「スタさん、あたしネコがいい！」

スタイアは苦笑するとアーリツシュに向き直った。

「……いい教師ぶりだね。それくらい真面目に普段から仕事してくれると嬉しいものなんだが」

「まんずまず、階級にあわせて仕事したいので。それよりか、先程、第六騎士団の小隊が斥候として出たようですが……」

「今のところ問題は無いようだ。本隊の周囲に斥候隊を配置して魔物になるべく遠ざける。目的の集落までは二日はかかる行程だが、それまでには野営地を確保できるだろうさ」

「なるほど。さるお方がご到着する前に安全を確保しておくわけですか」

スタイアは僅かに目を細めた。

「それよりか、まだ日は高いとはいえ、君はテントの設営に行かなくていいのかい？暗くなってから設営するテントというのも面倒なモノだが」

「ああ、それならご心配なく」

スタイアが首を巡らせると、ラナが設営したテントの前で火をおこしているところだった。

「連れてきたのか。店は大丈夫なのか？」

「一緒に来たいと言ったのはラナさんですからね。店は常連に任せてきましたよ。まあ、潰れたら潰れたで騎士団の仕事を真面目にやればいいだけの話ですから」

スタイアは背中を丸めて、逃げるようにアーリツシュに背を向けた。

「スタイア」

「なんですかね？」

「君は不思議に思わないのかい？僕がどうして今回の遠征を受けたのか。王室の依頼であつても騎士団長権限で断ることもできた」

「そうなれば、別の騎士団が受けるだけでしょうに」

スタイアは苦笑してみせる。

「君はいつも僕の先へ行く。今もだ。僕は君の友として、君が負うものを分かつつもりだ」

アーリツシュは真っ直ぐとスタイアを見つめていた。

スタイアはしばらく宙に視線を泳がせたあと、照れくさそうに笑って手を振った。

「ありがとう。僕もアっちゃんとダツさんは友達だと思ってるよ」

聖堂騎士団の幕営の手前で犬を止めるとスタイアは手近な聖堂騎士を呼び止めシルヴィアを呼ばせた。

しばらくその場で待ちながら聖堂騎士達に視線を走らせているとシルヴィアが槍を携えてやってきた。

「スタイア隊長、お待たせして申し訳ありません」

「やあやあ、大分苦労してるみたいだね」

「はい、聖堂騎士団は主に街の警護を中心としていたのでこういった遠征はじめての経験で……」

「都会育ちはお花を摘むのも楽じゃないってね」

いやらしく笑うスタイアにシルヴィアは苦笑した。

「そういや、シルちゃんもバルツホルドの調練遠征のときには難儀してましたからねえ」

「おかげさまで」

「さるお方やらフィルさんあたりは大丈夫なのかい？四日目にもなると流石に体調を悪くするだろうからね」

スタイアがそう尋ねると、シルヴィアは遠く天幕から姿を現したフィルローラに視線を向ける。

「あらら、やっぱり」

二人に気がついたフィルローラはあきらかに顔色が悪かった。

「スタイアさん！こちらは聖堂騎士団の幕営です！男の方があまりうるうるしないでくださいまし！」

「心配して来てみたらこれですからね。フィルさん、ちゃんと花摘んでます？あんまり我慢すると体に毒ですよ？」

フィルローラは顔を真っ赤にして憤る。

「っ！スタイアさん！」

「……本当の話です。出るモン出るのが人間でしょうに。生き死にかかった戦場にそんなモン抱えられても迷惑なんですわ」

「あなたにそのような心配をつ！」

「仕事ですからね、さるお方につきましてはどうされてますかね？」

フィルローラは顔を青くしたり赤くしたり忙しい。

「流石にこの年齢となつて下の心配をされるものでもあるまい。大丈夫だ。何ならお前の前で見せてやろうか？」

装飾の施された甲冑を身に纏ったアルテツアがフィルローラの後から出てくるとスタイアに対し不遜に笑った。

スタイアは軽く一礼すると剣を掲げた。

「よい。お前宛に言葉を預かっている。壮健で何よりだな？心外だったよ。フィリツシュが買うのも領けるし……切れる刃物というのはやっぱり危険だな？」

「巡りがあればまた、お会いしようとお伝え下さい」

怪訝な顔をするシルヴィアとフィルローラを傍らにスタイアはそう返した。

「手短に尋ねる。聖堂騎士団の大部分は明日にでも帰路につく。

野っ原でクソもひれんようであれば致し方あるまい。これはお前の知ったることか？」

「私もそうなるとは思っておりまして」

「そうか」

アルテツツアはしばらく考え込むと、頷く。

「フィルローラ、第七騎士団から腕の立つ人間を数名、聖堂騎士団から二名、直衛を編成しろ。コルカタス大森林に入った斥候隊を追う」

「おたわむれを。御身に何か御座いましたら民が苦しみしょう」

諫めるフィルローラをアルテツツアは鼻で笑った。

「お前はただ頷けばいい。私のすることに口を挟むな。私の成したいように場を整えろ」

スタイアはぼりぼりと頬を掻くと所在なげに空を見上げた。

「うーん、まあ、さしでがましいようですがその必要は無いかと」

アルテツツアが怪訝な瞳でスタイアを見返す。

「おそらく、お察しの通りのこととなっておりますゆえ改めて検分される必要は御座いません。まあ、なんとかかんとか上手くいたします故」

「ほう」

アルテツツアは面白そうに笑った。

「少々、事後に一悶着あるかもしれませんが、その時はご助力願えれば助かります」

スタイアは背中を丸め、脇に手を入れると視線を泳がせる。

アルテツツアは剣を抜くと、スタイアの頬に当て無理矢理自分を向かせるとじっとその瞳を覗き込んだ。

苦笑して返すスタイアにアルテツツアは不敵に笑う。

「収まりたい場所に、収まる、か」

「あい」

アルテツツアは鼻で笑うと剣を収めた。

「面白い茶番じゃな」

気が気でなかったフィルローラとシルヴィアは機嫌良く笑ったアルテツツアにようやく胸をなで下ろしたが、スタイアだけはどこか嫌な顔をした。

アルテツツアは大きく溜息をつき、一度あたりを見回してから呟いた。

「幕営で日が暮れるのを待つのも退屈じゃ、私の相手になるような冒険者の一人や二人、見繕って参らせよ」

「僕のところの若いのをあとで参らせましょう」

シルヴィアは人選としては悪くはないと思った。

聡明で、冒険者としてスタイアの側におり、かつ、年齢も近いタマであればアルテツツアの相手を十分にこなすだろう。

「あと、フィルローラ」

幕営に戻るアルテツアにフィルローラはあわてて従う。

「教会の司祭たるものが兵達が命を賭ける戦場を途中で引き返す不様はゆるさん。野っ原だろうとどこだろうとクソだけはひっつけて。命令だ」

第3章 『セトメント・セトメント』 4

日が沈む頃になって、スタイアとダッツは具足を互いに改める。赤々とカンテラの光が照らす天幕の中で、二人は下鎧のチェインメイルの上からグリーヴやガントレットを装着する。

「ダッツさんには、面倒かけますね」

「いいつてよ。夜討ち朝駆けは冒険者あがりの十八番だろうに。俺あてつきり、てめえ一人で行くんじやないかと思つてたから手柄を取られるんじやねえかとひやひやしてたぜ」

「まんずまず、その手柄を潰しに行くようなモンなんですがね」

スタイアの後ろからラナが甲冑を着せ、鉄環をきつく結ぶ。

「犬で進軍一両日半なら、ネコを飛ばせば夜半にや間に合いましようし」

ラナから長剣を二振り受け取ると、スタイアは一本を背中に背負い、一振りを腰に吊した。

見れば、ダッツも手槍を二本、背中に背負い、長槍を携えている。

「それっばかしで大丈夫かよ。魔物相手に大立ち回りになりや敵の武器を奪う訳にもいかねえぞ？」

「なに、本当に必要な斥候隊を追いかけて叩き斬ればいくらでも替えはききますよ」

ダッツが苦々しい顔をする。

スタイアがヘルムを被り、顎帯を結び終わると真面目な顔付きで呟いた。

「ゆくとしましようかね」

天幕を出ると、そこには犬ではなくネコが寝そべっていた。

宵闇が迫り、太陽がコルカタス大樹林の奥に沈み、空に最後の赤々しさを残していた。

二人はネコの背中の鞍によじ登ると、手綱を取る。

「じゃあ、ラナさん、行ってきます」

天幕から見送りに出たラナは静かに頭を下げて送った。

「くれぐれも」

スタイアは優しく頷き、ダッツと一度顔を合わせるとネコの腹を蹴った。

夕日の残滓を追いかけるように二騎のネコが幕営の中を走り、コルカタス大樹林に吸い込まれてゆく。

うつそうと茂るコルカタス大樹林の中には最早、陽の光などなく、うつそうとした闇が広がっていた。

それでも僅かに視界が効くのは光でもって獲物を吊ろうとする草木や虫の淡い光がぼんやりとあるからだ。

まるで光の粒が浮遊しているようにも見える中、スタイアとダッツは音も無くネコを走らせた。

「犬の臭いがするな？」

「先遣隊でしょう。来ますよ」

ダッツの呟きにスタイアが返した次の瞬間だ。

木々の枝の間から、人の子供程の大きさの虫が羽を広げて飛びか

かっってきた。

三つの目が赤々と光り、鉄のような口に唾液を迸らせ一直線に飛翔する。

スタイアはそれを抜きはなした剣の一振りで切り裂くと後ろのダツツに目配せする。

次の瞬間だ。

地面に鬱そうと映える下草や木々の枝、あるいは木の虚の中から一斉に虫が飛びかかってきた。

二匹のネコが軽々と跳ねて回る。

スタイアのネコが縦に回り、爪と顎で虫を引きちぎる。

回りながらスタイアは剣を振るい三匹を打ち払う。

ダツツのネコは横に回り、スタイアのネコの下を抜けると尻尾と爪で虫を払い、大きく振るったダツツのハルヴァードが虫を中空で爆散させていた。

その一回の襲撃で虫達はすぐさま茂みの中に隠れ散った。走る勢いを止めることなく二匹のネコは疾駆する。

「手荒い歓迎だな」

「先客が失礼したんでしょう？第一印象は最悪らしいです」

ネコがグルナア、と唸り憤る。

「向こうもまるつきりバカじゃねえみたいだな。一気に気配がなくなっただけ」

「そうですね。あまり無体されても僕らも困りますからね」

興奮するネコの顎を撫でながらスタイアは首を巡らせる。

「しかし、ま。ダツさんに来て貰って正解でしたな。魔物討伐なら第七のダツツ、あるいは第六のマジシンってのも領ける話です」

「調子のいいこと言つなよ。実態を知ってるから俺を連れてきたんだろう?」

「ええ」

スタイアは少し、ネコの速度を落とすと語りはじめる。

「このところ国の乱獲が目には余るようです」

「仕方がねえよ。貧乏だったころはともかく、今のヨッドヴァフは栄えている。そうなれば、モノを作るのに魔術媒介、法術媒介が必要になってくる。魔物と動物の違いってのはそんなところだよ」

ダッツはちらりと後ろを見やると鼻を鳴らす。

「出てきな。犬にネコを追わせる無茶させるんじゃないよ」

がさりと下草をかき分け、犬に乗ったアルテツアが現れた。

「この国のものは全て私のモノだ。どう扱おうが構わぬだろう」

逆に驚いたのはダッツだった。

「な、なんでやんごとなきお方とやらがここにいんだよスタイア」
「!」

「ば、僕だつて知りませんよ!一応釘は刺してきたんですよ!」

アルテツアは狼狽える二人を面白そうに笑うと、抱えるように犬に乗せていたタマを見せる。

タマはにんまりと笑い二人に手を振った。

「じゃじゃーん。せっかくだから探検してくるってテツツアに言

つてみたら一緒に行くつて」

「タマちゃん！」

「だってフィルさんうるさくて退屈なんだもん」

スタイアは苦虫を噛みつぶしたように顔を歪めるとダッツに目配せする。

「ここで待ってて下さい」

「どこにいくんだよっ！俺一人でこの二人面倒見るとか無理だぞ！」

「本来面倒見るはずの人達も当然追ってきてるでしょうに！」

「ああっ！？」

スタイアは今来た道を取って返し、ややしばらくしてから一頭の犬を連れてきた。

その犬の背中には息を切らせたシルヴィアとフィルローラが跨っていた。

「姫様あつ！どついう無体でございますかっ！」

綺麗な髪に枝をつけたままフィルローラが息を切らせながら怒鳴る。

だが、アルテツアはうるさそうに耳の穴をほじるとスタイアを睨む。

「うつちゃって魔物のエサにでもしておけばよかったものを……つくづく世話好きな男よのうお前は」

「あつはっは、僕が食べる前に獣姦させるなんてそりゃあちよつともつたないんで」

「なら、私の望みを叶えてくれるならばこのような女、何度でも

股を開くように命じてやる」

「ひ、姫様っ！なんてことを仰るのですかつ！」

赤面するフィルローラに呆れる。

「フン、王家が下賜した神具グラシアルクルツスも携えず、戦場に出てくるなどもとより覚悟が足りない証拠だ」

「お、お戯れが過ぎます！あれは我が家が王家への忠節の証として下賜された神具にございます！このような遠征でおいそれと……」

「ならば後方で安穩とお前と同じ人が死ぬのを眺めるだけか？いい身分だな司祭。我は許さぬぞ？血は違えども、痛みは等しく平等だ。せめて兵の慰安ぐらいをしてみせねば誰が貴様等に血を流すものか。私が股を開けといったら、股を開け」

痛烈な罵倒にフィルローラは押し黙ってしまった。

「いやっほう！王女の命とあらばフィルさん食べていいですねー？へっへっへー」

沈痛な雰囲気茶化したのはスタイアの下品な笑いだった。

だが、そんなスタイアに構うことなくアルテツアはダッツを見た。

「それより、そこもとの話は本当か？」

「んあ？」

「魔術媒介、法術媒介に魔物が供されるという話しだ」

ダッツはじつとアルテツアの瞳を見ると小さく頷いた。

「……魔術にしる法術にしる媒介となる環石は魔物の体内で精錬

される。人間にはそれを作り出す技術が無いから魔物をひつつかまえて取り出すしかねえのが現状だ」

「何故、お前がそれを知っている」

「……俺はオーロードの商人の五男坊でな？実家の取り扱う環石の由来ってのが冒険者が取り扱う収集品を各ギルドが精錬して環石に替える実情だったのを知っていたし、冒険者になってもつぱらやってたのが魔物討伐だからな。まさか騎士になってもやらされるとは思っちゃいなかったが、いい加減、うんざりするくらいその実務は見てきたよ」

ダッツが苦々しく語る現実にはフィルローラは戸惑う。

シルヴィアが重々しく告げた。

「……では、今回の遠征の本当の目的はヨッドヴァフで足りなくなった環石を賄うための魔物の狩りだしですか。聖堂騎士団がついてきたのはその上前を教会に運ぶため。そう見るべきですね」

「騎士団と教会、王室でそのあたりについて調整がついてるんだろうよ」

「そ、そんな……魔物はマハヴェに仇成すニンプルドアから零れた悪意であるはずなのに……まさか……」

言葉を無くすフィルローラをアルテツアが鼻で笑う。

「そんなおためごかしを司祭ともあろうものが信じているとはな。お前の父もその実際を見させるために同道させたのだろうよ」

フィルローラは戸惑い、助けを求めるようにスタイアを見るがスタイアは苦笑で返した。

「それだけであれば話は単純なんですがね。そうであればダツさ

んも僕も、夜更けにみんなに黙って先駆けしようとは思わないですから」

「あ、あなたは何を知ってらっしゃるんですか？」

「お見せいたしますよ。だから、あなたも見せて下さい」

フィルローラはカラカラに乾く喉にようやく、唾液を飲み下し、スタイアの言葉を待った。

「フィルさんがうんこするところ」

殴り倒された頭をさすりながらスタイアはマントを毛布替わりにタマを抱えていた。

「おー痛い。まさかメイスで本気で殴られるとは思わなかった」

「あれはスタさんが、悪い」

タマがスタイアの懷で身じろぎしながら答えた。

少し離れた隣ではシルヴィアが焚き火に枝をくべてスタイアを見ていた。

「……勝手に追わせてしまい申し訳ありませんでした」

「仕方がないさ。僕の読みが甘かった。タマちゃんに姫様じゃ危ないとかそんなの関係無しに飛び出してくる。シルちゃんが気に病むことはないさ」

「しかし、スタイア隊長がやろうとしていたことの邪魔であつたことは間違いありません」

「いつだって物事が思ったとおり上手くいくなんて僕だっと思ってないさ。ことに戦であればどの戦場もそんなモノだったよ」

シルヴィアは俯く。

そんなシルヴィアとスタイアを交互に見た後、タマはスタイアに尋ねた。

「ねえ、スタさん。今度帰ったら、剣を教えて欲しいな？」

「なんでだい？」

「なんだか私スタさんの邪魔ばっかししてる……自分の身くらいは自分で守れるようになっておきたい」

「要りません」

そう答えたスタイアはどこか厳しかった。

「どうして？シルちゃんには教えたんでしょ？私にも教えてよ」

「……身を守るくらいの剣つてのはどのくらいの剣なんですかね？」

そう吐き出したスタイアはどこか辛そうだった。

「身を守る為、身を守らなければならない戦場というのには程度が無い。つまり、どこまでも剣を追求しなくちゃならない。なまじつか、剣なんか使えるから戦場に立てるようになってしまふ。いつまでも戦って、いつまでも人を斬らなくちゃならない。斬られると人は死んでしまうんだよ？」

タマは黙ってスタイアの言葉を聞いていた。

「いくつ殺しても助けなきゃいけない人もいる。だけど、斬れば人は死んでしまうんです」

その言葉の奥に、どうしようもない慟哭をタマは感じた。
シルヴィアが辿り着けずもがき、スタイアが苦しむなにかが剣にはあるのだとわかった。

「一杯、勉強しなさい。勉強して一杯、一杯、誰かのためになることをしてくださいな」

タマはスタイアの冷たい甲冑に鼻の頭をこすりつけるように蹲る。
スタイアはタマの背中にマントでくるんでやると、寝息が聞こえるまでさすってやった。

シルヴィアはそんなスタイアを赤く燃える炎越しにじっと眺め、しばらくしてから口を開いた。

「民を守るために強くあれ、ですか」

「強くなったところで自分が殺せる人が増えるだけです。シルちやんも適当なところで剣を捨てるのが一番ですよ」

「バルツホルドの戦の後でシャルロットを殺したのは、やはりあなただったんですね」

「……彼女だけじゃない。もっともっと、たくさん殺しました」

スタイアは揺れる炎の向こうで寂しげに呟いた。

「君もどうか、早く捨てて下さい。僕は君まで斬りたくはないですから」

その様子を毛布にくるまり、耳にしていたフィルローラはただ、黙って身を固くしていた。

第3章 『セトメント・セトメント』 5

夜が明けるより早く、夜営を片付けて四騎は駆けだした。

乾期のコルカタス大樹林は木々の吐く霧に蒸し暑さが加わりとても居心地のいいものとは言えないが、それでも誰もが不平を漏らすことはなかった。

「……第六騎士団の斥候隊だな」

先頭を走るダッツがそれにいち早く気がついた。

木々で組んだ檻を犬に引かせており、それらを守るように騎士が配されている。

檻の中には悲鳴のような雄叫びをあげる魔物が何匹も押し込められていた。

「虫獣種ばかりだが……ん？」

ダッツはその檻より鎖に繋がれて後ろを歩く布を被せられた者に目を走らせた。

「あれは……子供ですか？」

フィルローラがなんとはなしに素直な感想を述べると、スタイアとダッツは厳しい顔をする。

遅れてたどり着いたアルテツアが厳しい顔で騎士団の行列を見る。

「……まるで奴隷の搬送だな」

「あながち冗談ではありませんね。あの魔物は死んで我々人間のために環石を吐き出すわけですから……でも、グイン・ダフに手を

出したのは厄介ですね」

「仕方があるめえよ。魔物に地上は人間様のモンだとわからせる意味もある遠征だ」

「知らない、つてのは恐ろしいことですね」

「全くだ」

スタイアは淡々と告げるとダッツと目配せをする。

「ダッツさん、本隊に戻って部隊を率いて下さい、まず間違いなく大がかりな襲撃があるでしょうから」

「……どうするよ？」

「一つ、策を思いつきました。ダメもとっちゃダメもですが、仕方ありません」

スタイアとダッツ以外は状況についていけずとまどうばかりだった。

「おい、どういうことだ。答えろ」

「姫様。たとえば、敵国に自国の民が捕らわれたとあればいかがいたしましょうか。ましてやそれが王室のいずれかの方であれば？」

「国益にならねば捨て置くが、重鎮であれば国も動かねばなるまい」

「国境付近に敵が居るとなれば軍を動かしてみせしめることもするでしょうに」

アルテツツアは息を飲む。

シルヴィアは驚いたように目を見開く。

「スタイア隊長……まさか、魔物には知性があるのですか？」

「あるとも。パーヴァ、もうぞろ姿を見せてくださいな」

スタイアの声に応えるかのように虚空が揺れ、そこに小さな羽の

生えた人が現れた。

「しばらく静観していたがいささか手に負えぬようになってきたな」

「ひゃあっ！可愛いつ！」

タマが手を伸ばすが小人は羽をはためかせ、スタイアの肩に乗ると鼻で笑う。

「そこな少女とは久方ぶりだな？ビリハムの屋敷では大変だったろくに」

「あれ……ひよつとして……」

「そうとも。お前を連れ出したのは私だよ」

タマはが驚く。

いや、ダッツを含めた皆が一樣に驚いた。

「パーヴァさん、頼みがあります。ギングフ・レヴレダに先行して間違ったことをおこさないように伝えてください」

「グイン・ダフに手を出したのだ。今さらどうにもなるまい」

「まだまだ、諦めないよ僕は。だから、頼みます」

スタイアは苦々しく顔を歪めて小人　パーヴァに言った。

「まさか魔物……いや、魔族に知り合いが居たなんて驚いたな」

「それより……魔物が……どうして人の言葉を」

「広いでしょう？僕の友好範囲。魔族の女の子もなかなかいいですよ？これがほんとの魔性の女ってね」

スタイアは弱々しく笑うと小さく溜息をついた。

「冗談ばかり言ってられないや。ダツさん、騎士団の殿を頼みます。シルちゃん、君は姫様の護衛を。フィルさん、ちよつとばかり僕と来て貰えますかね？」

「はい？ 私が、ですか？」

戸惑うフィルローラの腕を掴み、強引に自分のネコに乗せる。
スタイアの力強い腕に抱かれ、フィルローラはどきまぎとする。

「……スタイア。それは私が行った方がいいのではないか？」

アルテツツアは試すようにスタイアに言った。
だが、スタイアは苦笑して断った。

「姫様は聡いですね。ですが、それじゃあ今度こそ收拾がつかなくなりそうです。収めるところに収めましょう、お互い」

スタイアは素早く剣を抜き放ち、アルテツツアの右足に突き立てた。

薄く、朱に染まった白刃を引き抜くと白い陶磁のような肌の上を真つ赤な血が滴る。

「な、なんてことをなさるんですかつ！」

「これで前駐へ戻る口実ができるでしょう？」

あわてふためくフィルローラと対照に、アルテツツアは痛みに顔を歪めるどころか平然として、不敵に笑った。

「なるほどな。わかった、ここは貴様に任せた。思うように致せ」「仰せのままに」

スタイアはダッツの槍と剣を重ね、きんつ、と打ち鳴らすと森の奥へとネコを走らせた。

腕に抱かれたフィルローラは早駆けするネコの速さにしつかりとスタイアの体にしがみついていた。

「なかなか、そそるシチュエーションではあるんですがね」

「軽口を叩いている場合ですかっ！」

「軽口を叩けなくなったら危ないと思って下さいな」

スタイアがそう告げた矢先、周囲からフィルローラでも理解できる程の殺気が溢れた。

魔物達が疾走するスタイア達に狙いを定めたのだ。

疾走するネコが錐もみしながら飛ぶ。

頭上に向けて振るい、地面を抉るようにスタイアの剣が走り、地上から血しぶきが迸った。

地中に潜み、機会をうかがっていた魔物をスタイアが地面ごと叩き斬ったのだ。

まるで、それを合図としたように四方から炎が放たれる。

追うように、魔物の群れが飛翔し、襲いかかってくる。

ネコの上でスタイアの体が激しく揺れ、振るわれた剣が炎を打ち払う。

剣が振るわれる度に異形の魔物が甲殻ごと断ち切られ青白い血しぶきを上げた。

目にも止まらぬ速さで迫る異形の魔物を次から次へと切り伏せ、スタイアは血路を開く。

剣風の中をかくぐつてきた三つ目の鼠がスタイアの肩口にがっしりと食いつき、うなり声を上げる。

スタイアはその鼠の胴体を食いちぎり、食いつく頭をそのままに胴体を吐き捨てた。

「スタイアさ」

「舌を噛みますよ」

次の瞬間、ネコが跳躍し木々の幹を蹴飛ばして走った。

コルカタス大樹林の高い木の枝の上を走り、大空へと跳躍する。

一瞬、一瞬だが、どこまでも広がるコルカタス大樹林の向こうに開かれた集落をフィルローラは見つけた。

追ってくる魔物の群れを切り伏せ、スタイアはただただそこへ向けて走った。

アーリツシュ・カーマインは激しく襲ってくる魔物の群れへの指揮で手一杯だった。

戦陣の先頭に立ち、犬を走らせ魔物の群れを引きつける。

犬が後屈に下がり、顎を開き魔物に牙を突き出すのと同時にクレイモアを横に大きくなぎ払う。

ざりざりと嫌な音を立てて羽や甲殻を叩きつぶす。

背後から迫る魔物に振り向きざまの一刀をくれて両断するや犬の腹を蹴り、再び走り回る。

その隣に木々の間を抜けて現れたダッツが並んだ。

「アーリイ！下がるぞっ！」

「いままでどこに居たっ！姫様がおられんっ！」

ダッツはアーリツシュに群がる魔物をハルバードで打ち払いながら森の奥を見る。

シルヴィアに抱えられたアルテツアの太ももには赤い血が滴っている。

「姫様は魔物に襲われ怪我をなされた。一旦前駐まで後退すると御下知だ」

「お前達は僕の知らない間に勝手に物事を進める！」

苛立ちを当てつけるようにアーリツシュは魔物に剣を振るった。切り伏せられた百足の魔物が飛び散り、血煙が舞う。

「おめえさんにやおめえさんのやるべき事があんだろう。だから、スタイアも俺も余計なことは言わねえんだ」

ダッツがアーリツシュの背後に迫った魔物にハルバードを打ち付けた。

頭を碎かれたトカゲがぐったりと動かなくなり、アーリツシュは冷静さを取り戻す。

「すまない。男の愚痴はみつともないものだっただ」

「撤収する。殿は任せろ」

「殿は僕が勤める。ダッツさんは他の隊を率いて下がってくれ」

アーリツシュはそういうと獰猛に笑った。

「最近、当てこすりのように苛々する仕事ばかりさせられてるんだ。少々、ウサ晴らしでもさせてもらおうよ」

第3章 『セトメント・セトメント』 6

鬱蒼と茂るコルカタス大樹林の中を抜け、スタイアとフィルローラを乗せたネコは集落に飛び込んだ。

追いつがる魔物がそこで翻り、森の中へと戻って行く。

息をつく暇もなく、集落の中から無数の矢が飛来してきた。

スタイアはネコの上で剣を振るい、矢を叩き落とす。

「ファンダ・ガルガッド・レグ・マイザッ！」

スタイアが耳慣れない言葉を大きな声で叫んでいた。魔術師が使う呪文に近いがそれとは明らかに響きが違う。

「ファンダ・ガルガッド・レグ・マイザッ！スグイーニ・パーヴァ・オサラナマッフ！ファイダーイー！」

次第に飛来してくる矢が少なくなる。

そして、矢が完全に途絶えた時、集落の奥から異形の人間が現れた。

四本の腕を持ち、五つの瞳でスタイアを見るその人物は静かに口を開いた。

「……ウツズ・ファイダー。何をしに来た」

「グイン・ダフを返し、そして、お願いをしに来た」

スタイアは満身創痍で息を切らせながらそう答えた。

「グイン・ダフは死ぬ。ギイングフ・レヴレダは戦をはじめ」

「人の軍の数は多い。森を焼かれてはたまりません」

「人間には関係の無いことだ。我々もまた、グイン・ダフと死ぬ」

淡々と答える異形の後ろに、魔物が続々と集まってくる。

それはフィルローラが見たことのないような魔物達だった。

それとして魔物とわかる肌の色だが、どれも人に近い形をしていた。

むしろ、伝承に残る精霊のような姿をしている。

スタイアはそれらに嘆願した。

「我はギイングフ・レヴレダの死を望まない！グイン・ダフの死を望まない！」

異形の人物は五つの目を細め、スタイアを見つめる。

「……イーの末裔には関係の無い話だ」

「人は人の手で、ファイダーイーはファイダーイーにて。我は古き盟約を知る者也」

「……シギイング・グリデラ」

「デインゴ・デインゴ・デイル・デインゴン」

スタイアが歌うように言葉を紡ぐと、異形達は手にしていた武器を収めた。

殺伐とした雰囲気が消え、フィルローラはようやく口を開く。

「……あの、スタイアさん。一体、何を」

「これからが、正念場です」

五つの瞳を持つ異形はスタイアに歩み寄るとフィルローラをまじまじと見た。

「ウッズ・ファー・ニルヴァー」

「ヨッド・スタイア。スタイア・イグイット」

「スタイア……スタイア……グイン・ダフのかわりにお前は何を差し出す」

「これを」

スタイアはネコの上からフィルローラを異形へと放った。

「き、きゃああああっ！」

「黙れ」

異形がその四つ腕でフィルローラをねじ上げ、そう脅した。

「ス、スタイアさん！こ、これはどういうことですかっ！」

「人質です。さすがにアルテツツア様だと何かあったとき取り返しがつかない。だけど、教会大司祭の親族であるフィルさんなら、もし、万が一がありましても国体を考えれば無茶はしないでしようし」

「ま、万が一ってなんですかっ！」

「いやあ、全部に下手こいてこちらさんの大事なお方に万が一があればその死んで貰うのに丁度いいかなって」

「あなたはそれでも騎士ですかっ！身をもって婦女子の盾となるべくが騎士のかくある姿でしようにっ！」

「国を憂う気持ちとして見れば大好きな人を人質に出す僕なんか騎士の鑑なんだけどなあ。それに……」

スタイアは異形の群れが静かに円を作り開いていく様子を見て、背中を丸めた。

「……グイン・ダフ個人のことはこれでいいとして、問題は彼等

に一時期、この集落から出ていつて貰わねばならないことを承知させることです」

スタイアはネコを降りると、円の方へ向けて歩き出す。

「ヤツクル・ガー・ゼネメネス・ファン・ドウルネ！スイン・ブルグ・ガ・ニーズ・ラグ・フェルメノアン！セトメント・セトメント！」

スタイアはそう声高らかに叫ぶと剣を抜きはなつた。

「……スタイアさんっ！？」

「強き者が強き者を従わせるのが彼等の道理。彼等がここを退くには力をみせねばなりません。僕一人で彼等全員をお相手します。くれぐれも巻き込まれて怪我など無いように」

五つ目の異形はじつとスタイアを見て、小さく笑った。

「……スタイア・イグイット。ナー・ナー・ハ・ブレンツ・リヨウン」

スタイアの周囲を取り囲むように異形達が集まる。

昼下がりのコルカタス大樹林の熱気を運ぶ、風が僅かに吹いた。

第六騎士団に所属するマギシン・ウアツパ騎士団長もいわゆる冒険者あがりの騎士だった。

「楽な仕事、ではあるな」

犬車に引かせた檻に傷ついた魔物を押し込み、それらを部下に引かせる。

最後尾に位置する場所で自分は全隊の状況を把握しながら、最も重要なものを警護していた。

麻袋を被せた魔物だ。

マギシン・ウアツパは魔物狩りを専門に行う冒険者だった。

ヨッドヴァフ三世が定めた収集品制度という、魔物の特定の部位を持ち帰り討伐の証としてそれに報奨を払う制度で食いつないできた。

収集された魔物の特定の部位は加工されて装飾品になったり、あるいは特注品の武器、防具の素材となる。

だが、その大半がアカデミアで研究に費やされ、その体液から魔術媒介、法術媒介を錬成するためであることを知るときには、正騎士の位を賜っていた。

騎士団としては魔物討伐の現状を知っているハンターが欲しかったし、また、魔物を相手にできる部隊の錬成をしたかった。

マギシンは大きな流れの中から現れたその意図を知り、自らが生きていく上でよく励んだ。

「第七騎士団には悪いことをしましたかね」

「警護も立派な仕事だろうに。うちの部隊じゃできそうにないだろうがね」

マギシンは冒険者上がりの騎士が持つ特有の明るさで部下達の苦笑を誘った。

「ですが……いいのですかね？」

部下の一人が恐る恐る尋ねる。

その視線は麻袋を被せられ、歩く魔物を見ていた。

「よくはないだろう」

マギシンは素っ気なく答えた。

「冒険者、その中でも魔物狩りを生業としてる者にとっちゃ、その土地の迷信ってのは決して疎かにしてはならない。たとえ迷信めいたものであってもその奥に潜む意図を正しく読み取れなければ代償は自分の命だ。グイン・ダフつつたか？それに手を出せば青き民の怒りが俺たちの体を真つ二つに割るだろうさ」

「ならば、なぜ？」

「仕事だからだよ。冒険者であれば危険なら退くこともできる。

「だけど、今じゃしがない騎士様だ。お上の命令なら従わなければならぬのが騎士の仕事だろうさ」

「従って命を取られちゃたまりませんって」

「だけどな？国ってのは人の集団だ。数は力だ。一騎当千の勇者だつて千百人相手にすりゃくたばるんだ。国ってのはそういう意味で便利なモンだ」

マギシンは苦笑してみせると部下の顔から不安が和らいだのを認めた。

そうして犬を歩ませると、どうやら隊の前方が進行を止めたのを確認する。

「どうした？」

「進路上に倒木が重なっており、犬車が進めません」

マギシンは近くの騎士にそれだけ聞くと即座に犬を走らせた。正しく現場を判断しようとする資質は多くの騎士達の共感を買っ

ている。

だが、その真意は本当に危険なことは自分が知っておかなければならないという冒険者の時からの習性であった。

隊列の最前線までくると、折り重なって倒れている倒木を見つける。

数人の騎士が必死に撤去作業をしているが山のように折り重なっている倒木は簡単に撤去はできそうにない。

「どうしますか？迂回しますか」

マギシンはそれだけで危険を察知した。

「周辺の警戒を密にしろ、襲撃がくるっ！」

練度の高い騎士達はそれだけで指揮官が何を言わんとしているかを理解した。

「進行を止めたのは魔物の罠の可能性ありっ！直ちに戦闘態勢を取れっ！」

伝令は指揮官の意図を正しく部隊に伝えていく。

騎士達が抜刀し、密集隊形をつくると、倒木の上にそれは姿を現した。

か弱そうな女性であった。

赤い瞳、銀色の髪、ヨッドヴァフの市民が着るアルメジア織のスカートを履いている。

ラナである。

マギシンはラナの容貌を一目見て、怪訝に眉を潜めた。

「ヨッドヴァフの人間……じゃあないな」

「異国の冒険者ですかね？」

騎士達が怪訝に思う中、ラナは倒木の裏から巨大な斧を振り上げた。

禍々しい斧は生き物のように走る青白い血管を脈動させ、刃を震わせる。

みちみちと音を立てて斧は血管を枝のように伸ばしやがて一本の筭のような形状を取った。

「来るぞッ！」

第六騎士団に緊張が走り、盾を構えるがラナはその筭を無造作に振り抜いた。

風より早く、音より早いそれは前衛に立つマギシン他、有能な騎士達をただの一振りで肉片に変える。

飛散した肉片と血糊が周囲の木々に飛び散り叩きつけられる。

「う、うわああっ！」

運良く、最後尾に位置していた騎士の腕が、構えた盾ごと消失し、痛みを思い出した彼の悲鳴が混乱をもたらした。

軽やかに倒木の山を飛び降りたラナが筭を叩きつけると地面が爆ぜる。

爆ぜた地面に押しつけられた騎士達が肉塊にかわり、土に埋もれる。

反動で軽やかに宙に舞うラナに、錯乱した騎士達の矢が放たれる。爆ぜた地面から舞い上がる突風が矢を絡め取り、ラナには届かない。

だが、もとより狙いはずれた矢の一本がラナの頬を掠め、赤い血を僅かに頬に滴らせた。

ラナは静かに視線だけ頬に向けるが、見ることが叶わず、再び彼等を見つめた。

散り散りに森の中へ姿を隠す騎士達の背中を見送り、悠然と犬車の傍らに降り立つ。

犬車に引かれた檻の扉が爆ぜ、中から魔物達が溢れ出した。

騎士達を追うように魔物達が森へと消えてゆき、やがて、凄惨な悲鳴が飛び交った。

「いささか私事にございますが、ご容赦なりません」

ラナの箒が青白く輝き、激しく震える。

横一閃に振るわれた箒が、森をなぎ払った。

第3章 『セトメント・セトメント』 7

フィルローラは自分が夢の中にいるのではないかと錯覚した。

のどかな昼の最中、神秘的なコルカタス大樹林の中に開けた野っ原の中、スタイアが長剣を手にし立っている。

その眼前には何百もの魔物がひしめき、うなり声を上げていた。それらが順番にスタイアの前に立ち、飛びかかり、斬り伏せられてゆく。

巨大な体軀からは想像もできない俊敏さで飛びかかる双頭の獅子の吐く炎と吹雪をかくぐり、振るわれた爪を腕でいなし、神速の突きを顎の下から二度、それぞれの頭に繰り出す。

途端に力を無くした獅子が地面に重々しい音を立てて崩れ落ち、スタイアは剣についた血糊を拭う。

もう既に斬り伏せた魔物は百を超える。

剣は切っ先が欠け、根本から曲がり、力を無くしたスタイアの手で千切られた布でがんにくぐりつけられている。

スタイアの甲冑は幾たびに魔物の爪や牙で穿たれる度に傷を残し、鋭いささくれを立たせる。

その間から流れる血が肩を、胸を、腹を伝い、太ももをぐっしりと湿らせ、暖かな陽光を照り返し、湯気を放っていた。

次の順番を待っていた灰色の巨人は三つの腕に巨大な棍棒をそれぞれ持ち、スタイアの前に立ちはだかる。

フィルローラが驚いたのは、その巨人が静かにスタイアに一礼をしたのだ。

スタイアは静かに腰を落とすと剣の切っ先をその魔物へ向ける。

巨人はそれを待つて棍棒を構えたのだ。

フィルローラは何度となくスタイアに声をかけようとした。

だが、何故だろうか。

そうして丸めた背中を自分に向け、震える膝で幾度となく立ち向

かつてくる魔物に剣を向けるスタイアを止められるとは思わなかった。

その頼りなく、いまにも崩れ落ちそうな背中にスタイアが何かを必死に背負っていることだけは理解できた。

同時に振るわれた棍棒を目にも止まらぬ速さでいなすスタイアの剣が中程から折れる。

棍棒がスタイアの腹に鈍い音を立ててたたき込まれ、スタイアの背中がはじめて地面に触れ、勢いよく転がる。

スタイアは転がりながら起き上がり、折れた剣を大上段に構えると、震える膝を伸ばして立ち上がった。

その口元からは血と、か細い息が吐き出されているが、赤く染まり、力強く噛みしめた歯がぎりぎりと言を立てていた。

よろよろと踏み出すスタイアに巨人が再度、棍棒を振るう。

「チエア アイアツ！」

裂帛の気合いを迸らせ、スタイアの体躯が疾風と共に掻き消える。巨人の膝を切り払って潜り、反転し跳躍、首筋にしがみつくと折れた剣で無理矢理にのど笛を掻き切った。

青い血を勢いよく喉から噴き上がらせて倒れる魔物と一緒に地面に倒れ込むと、スタイアはよろめきながら立ち上がり、次の魔物の前に立った。

それはフィルローラが聞いてきた騎士達の英雄譚とはほど遠い悲壮な背中だった。

雄叫びを上げる魔物を前に、弱々しく踏ん張り、申し訳なさそうに剣を構えるスタイアはそのいずれからともほど遠く、儚げだった。

次の魔物もただ一度の斬撃で斬り伏せたスタイアは静かに、静かに息を吐き出し溜息をついた。

「……しんどいなあ」

弱々しい苦笑を寂しげに浮かべてスタイアは震える腕を持ち上げて剣を構えた。

いつ根本から折れてもおかしくはない剣にすぎるように背中を丸める。

魔物達の雄叫びが一際激しくなる。

まるで輪唱するように吠えたと、魔物達がスタイアの前に道を空けた。

「グイン・ダフ、ラツサロッサ・ハガルグウン」

凜とした声が響き、魔物達の咆哮が消えた。

魔物達が開いた道を、灰色の肌を持つ少女を抱え、一人の女性が歩いていた。

フィルローラはその姿をどこかで見ていた。

ラナだった。

ラナは悠然と魔物達の開いた道を歩み、フィルローラの元へ来る。そして、フィルローラに目をくれることもなく五つ目の魔物にその少女を引き渡した。

「セトメント・セトメント」

五つ目の魔物はそう呟くと腕を上げ、ラナにひれ伏した。

静かに、そう、静かに魔物達が森の中へと消えてゆく。

それぞれが静かにスタイアに一礼し消えてゆくなか、スタイアはただ風に吹かれながら静かに震えていた。

朝起きて、夢と現実の狭間に居るような心地のままフィルローラはしずしずと立ち上がる。

ラナはようやくフィルローラをその赤い瞳で見つめ小さく一礼した。

そうして、静かにスタイアの前に立つ。

スタイアはまだ、剣を掲げたまま、次の魔物を待っていた。

「スタイアさんっ！」

スタイアは一度びくりと身を震わせるが、目の前に立つラナを見てゆっくりと全身の力を抜く。

糸の切れた人形のように地面に倒れ込んだ。

「スタイアさんっ！大丈夫」

フィルローラがスタイアに駆け寄ろうとするが、そのスタイアの傍らにそっとラナが膝をつき抱きかかえた。

蹲り、子供のように怯えるスタイアをあやすようにラナが陽光の中で抱きかかえる。

フィルローラはその光景にしばしば目を奪われた。

まるで子供をあやすかのように傷ついたスタイアの額を撫でるラナの物憂げな顔が美しく、まだ、夢の中に居るような心地であった。目の前に広がる光景が美しければ美しいほど、何故か胸の奥が締めつけられる。

フィルローラは吐き出した息にようやく現実を覚え、のろのろと歩み寄った。

ラナの膝の上で細い息を吐くスタイアは擦れる声で囁いた。

「フィルさん……先い、戻って下さい」

「何をバカなことを。その怪我では命に関わりますよ」

血で汚れた顔にいつものように冗談を言う笑顔でスタイアは言った。

「だって、男の子ですから」

ラナの膝の上からのろのろと頭を上げ、地面に座り込むと、空を見上げながら大きな溜息を落とした。

そうして、自分が斬り伏せた魔物達の亡骸を見て頭を垂れた。

「まんず、まず、ごめんよう」

そんなスタイアにフィルローラは静かに顔を伏せて一礼すると、黙って立ち去る。

何故、や、どうして、等の疑問はいくつもあつた。

だが、それでも、今はそれしか、できなかった。

騎士団の撤退が完了したのは夕刻だつた。

大樹林の外の前進駐屯地に全部隊が引き上げる頃には陽が西の空に赤やけを作っていた。

汗だらけになったアーリツシュは自分の直轄部隊の点呼を終えると、ダッツを呼び、各隊の状況を把握するため伝令を走らせた。

その傍らでスタイアの姿が無いのを知ると、失礼を承知の上でアルテツアが傷の手当てを受ける天幕を尋ねた。

天幕の中ではシルヴィアがアルテツアの細い足に包帯を巻いているところだつた。

「なんだ。最近の騎士は子女に対する礼節も知らんのか」

「肌を露わにしている子女の寝台を尋ねるのは夜に限るとでも申せば、彼のように振る舞えるのでしょうかね？」

アーリツシュは苛立ちを隠そうともせずアルテツアに詰め寄

った。

「それは魔物による傷じゃあない、刀剣による傷だ」

「遠巻きにはよくわかるまい。たとえばもしそうだとしたら、私はひよつとすると貴様の友人の首を刎ねなければならぬだろうよ」

「姫様は初の戦場で血の臭いに酔っておられる。軽率にそのようなことを口にしないでいただきたい」

アルテツツアはしばしアーリツシュを睨み、鼻を鳴らした。

「誠実で朴訥だというのは嘘のようだな。貴様の箴言、胸に止めておく」

アーリツシュは少女ながらいささか聡すぎるアルテツツアに確かな王族の器量を見た。

「……姫様、いかようになされるおつもりか」

「貴様は全て知った上でそう我に尋ねるか？」

「知らずとも察することはできるでしょう。私の友人の命がかかっているのです。私は私の名誉にかけて彼を助けねばならない」

アルテツツアは鼻で笑う。

「あの軽薄な男のことだ。適当なところで尻を捲っているやもしれんぞ？」

「ありえない」

「……何故、そう言い切れる」

「僕が彼の友人だからです。戦場で得た友とはそういうものです」

アーリツシュはそれだけ告げると、続けて尋ねた。

「して、彼は今どこに？」

「おそらく魔物の巣窟だろう。一人で先駆けして全滅させるツモリだ」

「それならばフィルローラ司祭が居ないことはおかしいですね」

アルテツツアは苦い顔をする。

「カマをかけられるのは嫌いだ。教えてやる。スタイアは魔物の集落に直談判をしに行ったのだよ。こちらが魔物の要人を生け捕りにしたことで相手を引くに引けない状況にしまった。そうなる前にフィルローラを人質に時を稼ぐツモリだ。お前の友達とやらは何も知らない子女を人質に取る酷い男だということが理解できたか」

「僕が彼の立場でも、そうするでしょう」

アルテツツアは鼻で笑う。

「できるか？お前に」

「……これより、第七騎士団はフィルローラ司祭の奪還に向けて強行軍をかけます。その裁可を得たく参上した次第です」

アルテツツアが僅かに驚いた。

「多くの血を流すぞ？」

「人は痛みでしか学べぬというなら、真っ先に血を流してみせましょう」

淀みなく言い切ったアーリッシュにアルテツツアは侮蔑の表情を消して答えた。

「アーリツシュ・カーマイン卿に命ずる。直ちに第七騎士団を率いてコルカタス大森林に存在する魔物の集落を襲撃せよ。手段は問わない」

「御意」

丁度、その時だ。

聖堂騎士のタグザが天幕にあわてて飛び込んで来た。

「急報にございます！撤退中の第六騎士団が何者かに襲われ半壊した模様です！さらに冒険者隊の一部が逃走、離反して略奪行為を……アーリツシュ卿？」

「……そういう、ことが」

アーリツシュはぎりりと悔しそうに奥歯を噛みしめる。

アルテツツアはしばし沈思黙考した後、一人、得心のいった様子で頷いた。

「いささか事態が混迷してきたようだな？どうする。第七騎士団でもって侵攻を行うのであれば裁可するが？」

アーリツシュは瞳を閉じ、大きく息を吐くと答えた。

「いえ。我々は冒険者離反による混乱を抑えるために尽力いたしましょう」

「奴の手の上で踊るか？」

「……道化を任されたのであれば演じきってみせねば格好もつきませんよ」

アルテツツアは小馬鹿にするように鼻で笑う。

「バカにされていると知ってもか？」

「自分と彼は友人です。私は彼の求めるものを演じきってみせませよ。最後の、最後まで」

アーリツシュは悲壮なまでの覚悟を秘めた面持ちで重く、そう答えた。

アルテツアは急に真面目な面持ちになり口を引き結ぶ。
そして、最後につけくわえた。

「思うように致せ」

グロウリイドーンの片隅に位置するリバティベル。

冒険者の集まるこの酒場に店主が戻ってきたのはそれから四日後だった。

「店主が戻ってきてても店番から抜けられないってどういうことだよ」

ラナとタマが忙しく配膳する横で、帳簿をめくるシャモンが陰鬱そうに呟く。

「しーがないでしーに！がつつり怪我しちゃってるんだから。それよつか厨房の手が足りてないからシャモンさん入って！」

「俺あ客だぞ？」

「そんなことはツケ支払ってから言ってちょーだい！利子取るよ？」

「……利子なんて言葉あ一体どっから覚えてくんだか」

シャモンはぶつくさと文句を垂れながら厨房に入る。
厨房ではクロアールがむっとりとしながら鍋を振るっていた。

「お前さんも大変だな。遠征が終わって懐具合が暖かくなった連中がバカみたいに騒ぎやがる。留守番連中の気持ちも汲んで貰いたいモンだぬ？」

「……許さないだろうし、許されるものではない」

「だよなあ」

「行き過ぎた行為への報復は必ず行われる。人が、死ぬ」

シャモンはようやくクロアールが結論から喋る男であることを思い出し、大きな溜息をついた。

ぼりぼりと不衛生な頭をかきむしり、ぼつりと呟く。

「どうしたもんかねえ……」

「収まるべきところに、収まる」

苛ついた表情でシャモンは吐き捨てる。

「……棺に死体をいつも納めてるお前さんが言うと言得力あるわな。スタイアの奴もかつちり埋めてくれや」

「それが、仕事というものだろう」

冒険者の集まる酒場リバティベル。

そこに、店主の姿は、無い。

第3章 『セトメント・セトメント』 7（後書き）

第3章これにて終了。

ご感想、ご評価などくだされば励みになります。

閑話 登場人物 用語解説（前書き）

人物は新規にアルテツツア、パーヴァリア・キルを追加。

用語には聖剣グロウクラッセ、退魔の鐘を追加。

スタイア・フィルローラを更新。
セトメントを更新。

閑話 登場人物 用語解説

登場人物

スタイア・イグイット

騎士団の準騎士でありながらリバティベルの店主。

赤い髪、曲がった背中、どこか飄々とした青年。

リヨウンの剣という剣技を扱う。

奴隷解放戦役の時に、奴隷側の先鋒として戦った過去を持つ。

戦役後はアカデミアにも在籍しており教授の一手手前までいったとか。

魔物にも通じている側面を有する。

ラナ

リバティベルの女将。

銀色の髪、赤い瞳というヨッドヴァフでは見ることもない風貌の美女。

いつも不機嫌そうな謎の多い女性。

パーヴァリア・キル

通称パーヴァ

身長が人の10分の1くらいのサイズしかなく、背中に透き通った羽を持つ魔物。

人語を話し、スタイアらに手を貸し、ビリハム・バファアからタマを助けた。

フィダーイーに属し、セトメントを行う。

タマ

元、泥棒の少女。

自由闊達なリバティベルの看板娘。

幼いながらに利発で冒険者として自立する為、アカデミアに通う。

シャモン

リバティベルに入り浸る酔客。

ぼさぼさの金髪に褐色の肌を持つ気だるげな瞳が特徴。

皮肉めいた箴言を吐く温情家。

コウコの技という体術を使う。

アーリツシュ・カーマイン

第七騎士団の団長でありスタイアの良き理解者。

長い黒髪の中に、鋭い瞳を持つ凛々しい青年。

スタイアと共に大きな戦役に従事していたことがある。

ダッツ・ストレイル

第七騎士団の騎士長でアーリツシュとスタイアの親友。

冒険者あがりのがっしりとした体躯の豪放な槍騎士。

対魔物戦術に優れ、アーリツシュとスタイアと合わせて『バルツホルドの三騎士』と呼ばれる。

アルテツツア・ヨッドヴァフ

ヨッドヴァフ・ザ・サードの長女。

ヨッドヴァフ・ザ・サードの血縁は現在、彼女しかおらず実質王位継承権を持つ。

金髪碧眼、白い肌と典型的なヨッドヴァフ民族の特徴を色濃く持つ少女。

幼くして、王の器量を持つ。

フィルローラ・ティンジェル

聖フレジア教会の司祭。

父親は教会でも有数の実力者である。

膝の裏まで伸びた綺麗なブロンド、芯の通った目鼻筋のヨッドヴ
アフでは指折り数えた方が早い美人。

教会と騎士団の業務統合の調整役をしている。

ダグザ・ウィンブルグ

聖堂騎士長の一人。

褐色の肌と金色の髪の活発で直情的な少女。

業務統合で第七騎士団に出向してきた。

シルヴィア・ラパット

聖堂騎士長の一人。

金髪の巻き毛と白い肌のどこか冷めた少女。

業務統合でダグザと共に出向してきたが、過去にスタイアの指揮
下で戦役に参加した経験がある。

ユーロ

教会の墓堀。

浅黒い顔とざんばらに伸びた黒髪、漆黒のコートの偉丈夫。

口数が少なく、結論から先に物を言うしゃべり方は人に誤解を招
く。

イシユメール

アカデミア時代のスタイアの同期。

学長の補佐をしており、飄々としてどこか頼りげの無い青年。

だが、暗殺者としてはどこまでも伶俐な表情を持つ。

クロウフル・フルフルフー

アカデミアの学長で大師星の称号を持つ老爺。
スタイア、イシュメイルの師であり、今はタマにその知識を授ける。

深い知識と広い見識を持ち、多くの英雄の友でもある。

用語解説

リバティベル

ヨッドヴァフ王国首都グロウリイドーンの外れにある冒険者達が集まる酒場。

ヨッドヴァフ王国

ヨルグン大陸の東側に位置する王制国家。

北にアブルハイマン山脈、東に大海洋、南にヨシュ沙漠、西にコルカタス大樹林が存在する。

グロウリイドーン

ヨッドヴァフ王国の首都

中央に王城グロウリイハイムを置き、東西南北に主要道路であるグロウリイロードが延びる。

北に工業区、東に住宅街、南に繁華街、西に商業区と区分けされ、それらを高い城壁が囲う形となっている。

城壁内部はひしめき合うように立てられた石材の建物の間を石を敷き詰めて造られた道が縦横に走り、主要道であるグロウリイロードに通じる。

冒険者

奴隷制度が廃止され、広く技術解放を行った国の各機関から技術を習得し生計を立てている者の総称。

だが、正確には定職につけない浮浪者の蔑称の意味で使われるこ

との方が多い。

奴隷

金銭で売買され、所有権を他人が持つ人間を指す。

現在でも非合法に取引を行っている者がおり、また、冒険者として自らを救済する術が無い者も奴隷として甘んじている。

聖剣グロウクラッセ

100年前に国を開いた際に、初代ヨッドヴァフが携えていた聖剣。

長大な対魔物用バステッドブレイドで幾度か打ち直されたことがある。

退魔の鐘

聖剣グロウクラッセとともに初代ヨッドヴァフが携えていたもの。
詳細は不明。

グロウリイ・ウィングヘルム

ティアリス卿からスタイアに下賜された銀の意匠がこらされた兜。

ファイダーイー

天秤を傾けることをよしとしない。

何かの意思でもって人を殺める。

セトメント

意味はわからないが、子供の悪魔除けのおまじない。

ファイダーイーにおける執行者としての意味合いを持つ。

魔物の言語が語源だが、約束、に近いニュアンスを持つ。

第4章 『死者の王国 愛憎の楔』 1

ヨッドヴァフ首都グロウリイドーン。

かつてこの国には金銭で身上を売り買いされる奴隷という制度があった。

物質的な豊かさは同時に精神の豊かさを産み、人の尊厳を踏みにじる制度は終焉を迎える。

それは一つの成熟を迎えたといってもいい。だが、しかし。

それは数多くの軋轢を生んだといっている。

ヨッドヴァフはこれまで奴隷という人種があつて成り立つ社会を構築していた。

奴隷を保有する側は奴隷の労働力があつて成り立つ生業を、そして、奴隷の側は労働力を提供することで生活の保障を得ていたのだ。制度の廃止の勅令はそれまでの慣習に無頓着なまま行われ、彼等の生活を無視して、苦況に追い込んだのだ。

保有する側は、まだいい。

いつの世も富める者はその財産を無くしたとて、最低限の生活はできるだけの蓄えは保有している。

奴隷が無価値となつて破綻したとはいえ、自由意思で残る奴隷を正式に雇用し経営体制を見直せば元のようにはいかなくても巻き直しはいくらでもできた。

持てる者は持てる者のままでいれるのが人間の社会というものの実体である。

一番の被害を被つたのは奴隷達である。

今までの雇用者の元での生活を断たれた奴隷はまやかしの自由を手に入れ喜ぶが、その実体は自らの価値を自らに求めなければならぬ厳しい現実さらされより厳しい現実の前に引き立たされることとなる。

雇用し、金銭を払うに値しない奴隷は解雇される。

若い奴隷ならば、いい。

生き方を定める年齢に至らない奴隷であれば新しい雇用先に挑戦して再度、自分の身を立てることができる。

だが、年を過ぎた、あるいは若すぎる奴隷には時代の変化についていくだけの体力や、あるいは見識が不足していた。

そうなれば行き場を失った奴隷は自らが生きるために略奪に走るしかなかった。

盗賊や山賊に身をやつし、行商や小さな農村を襲い食料を奪う。

奴隷を失った領主は自らの領地の不和の平定に奔走し、増える山賊や盗賊の討伐にまで回す手がなかった。

だが、時代はここに幸運にもヨッドヴァフに一つの試練を与える。魔物の増加という自然現象だ。

コルカタス大樹林やヨシユ砂漠、アブルハイマンといった辺境に生息する魔物が増加し、近隣の農村に被害をもたらしはじめたのだ。つまり、これらに対応する武力の需要が高まったのだ。

ヨッドヴァフ・ザ・サードはこれらの問題と需要を一気に片付けるために冒険者制度を制定した。

騎士団、教会、アカデミアで保有する対魔物戦術のノウハウを広く開放し、浮浪者と化した奴隷達をその対応に当たらせる。

討伐した魔物の一部を国税を利用し特定の商店やギルドで買い取らせ、その報酬とする収集品制度でさらに、冒険者制度を確たるものとする。

小さな問題はいくつもあったが、その手際はあざやかであった。まるで、こうなることがあらかじめわかっていたかのような鮮やかさであった。

奴隷を失った事による民衆の不満や不安を一手に魔物という対外的恐怖に押しつけ、かつ、肥大した雇用問題を解消し新たな経済の流れを作る。

ヨッドヴァフ・ザ・サードはこの時点では優れた王であった。

グロウリイドーンの片隅にある、冒険者の集まる店リバティベル。

「というのが、まあ、冒険者のあらましだな」

珍しく、シャモンがタマに勉強を教えていた。

タマは木の板に慣れない羽ペンでたどたどしく字を書きながらシャモンの話を書き留めていた。

「シャモさんってびんぼーそうだけど、何でも知ってるんだね」

「びんぼーそうってのは余計だよ。本当に貧乏なんだから」

隣でエールを煽っていたイシユメールがけらけらと笑う。

「うるっせえよ。金があつたって使わなきゃ意味が無いだろう？」

「貯めるという発想が無いのが冒険者がいつまでも貧しい理由だ」

「アホ。明日死んじまえば、今日使っちゃまった方がなんぼかマシだろうに」

惘然とするシャモンをイシユメールは小馬鹿にしたように笑う。

だが、タマはそのやり取りの中にも冒険者と、富裕層の明らかな違いを感じた。

今まで浮浪児であつたタマにはシャモンの感性の方が当たり前であつたからだ。

安心して眠れる寝床があり、雨風をしのげる屋根があり、暖かい食事を得られる今の状況だからこそ、貯蓄ということを考えられるのであり、明日にはどうなるかわからない浮浪児だった自分は腹を満たすためにその日得られたものを費やしていた。

今日貯蓄できるのであれば、明日も貯蓄できる。
その次の日も貯蓄できるとなればやがて人は富を築く。

「……そっかー、だから、シャモさんはびんぼーなんだ」

「うるっせえタマ公。ンなこたあどうでもいいんだよ。金で買えない幸せっつーのも、あー、なんだ。世の中にやあ一杯あるんだよ」

「一杯あるなら少しくらい分けてもへーきだね。それちょーだい？」

言い訳がましく言うシャモンが面白くてタマはからかってみたりする。

タマの予想したとおりに困った顔をするシャモンを見て、イシュメールは笑った。

「こんなダメな大人になっちゃあいけないぞ？」

「ひでーな。一緒に飲み歩く仲じゃあないか。マリナちゃんに言いつけっぞ。イシュがつれねー奴だって」

「そういや、あれからしばらく行ってないな。マリナちゃんの踊りは見ていて胸が熱くなる」

「何言ってやがんだ。熱くなんのは股ぐらじゃねえか。よっくりバティベルでも踊ってくれっからお前も最近こっちに居着くようになっただわな」

「わかるかい？」

「わかるとも」

二人は下品に笑い、タマは溜息をつく。

「ダメだこの大人たち……」

エールを煽りはじめたイシュメール達を放り、そろそろ店の手伝

いをしようと思ったタマは木板を抱えて店の奥のラナの元へ向かう。
今日は珍しく客が居なく、仕事らしい仕事もないのだがそれでも
なにかをしなければならぬと思えばのことだった。

店の奥ではラナがなにやら不思議な動きをしていた。

「ラナさん……」

なにやら魚を捕ろうとしているようにも見えるし、あるいは、狼
の真似をしているようにも見える。

やにわにモップを手取るから掃除でもはじめるのかと思ったら、
振り回しはじめ、槍を振るうようにも見えるが、それにしてはど
か不器用なものにも見える。

要するに、意味がわからなかった。

モップが天井をがこん、と叩いたところになってラナはタマの存在
に気がつく。

「ねえねえ、何してるの？」

ラナはもの凄く不機嫌そうな顔でタマを睨んだが、タマはそれが
ラナの照れた顔であることを短い付き合いではあるが知っていた。

「踊り」

「ああ……」

タマは理解した。

最近、客の多い日に注文を待たせている間など、マリナが踊りを
披露していくものだからその影響を受けたのだろう。

なにせ、娼婦として色々な技術を身につけたマリナだ。

蠱惑的で扇情的な踊りは客への受けはすこぶるいい。

「うん……わかった。でもやめたほうがいいよ?」

ラナは不機嫌な顔のままタマの言わんとしることを理解して咳払いをする。

そして、おもむろにおさんどんをはじめて軽い食事を作り出した。タマはそれが照れ隠しなのだと理解するのに数秒を要した。

ラナはタマが何かを言う前にサンドイッチを手早く拵えるとバスケットに詰めて手渡す。

「スタイアに」

「ああ……うん。お昼ご飯ね。届けてくる」

遠征中に大怪我を負ったスタイアは向かいの海洋亭の一室で療養している。

いつもはラナが持つていくのだが、それをタマに託すあたり相当恥ずかしかったのだろう。

それを思うとタマはいてもたってもいられなくなった。

タマはラナからサンドイッチを受け取るとにんまり笑う。

「じゃー、スタさんに教えてくるね?」

ラナは言葉に詰まる。

「いつてくるーねー? くっふふー」

ラナは無表情になって驚きを伝えるが遅かった。

とてとと走り出したタマはもう既に店の外に居なくなっていた。その様子をしっかりとカウンター影に潜んで見ていたシャモンとイシユメイルは啞然とした表情でラナを見ていた。

「こりや珍しいモンが見れたぞイシユ。踊るラナさんなんて真面目に働くスタイア並に珍しい」

「ああ、ラナさんが踊るなんて明日は槍が降る。帰って宿舎の屋根部屋に居る人間を避難させなきゃいけない」

あまりにも酷い言いぐさにラナはとうとう、泣きそうな顔になってしまった。

第4章 『死者の王国 愛憎の楔』 1（後書き）

書きためた分に無い章を追加していきますので若干、更新が遅れるかもしれません。

第4章 『死者の王国 愛憎の楔』 2

騎士団が遠征を終えて帰ってきた後のユーロは忙しかった。

聖フレジア教会から離れた場所にある墓地で、遠征で死亡した騎士や冒険者の墓を昼夜を問わず掘ることとなった。

葬儀を終え、皆が遠征で倒れた者の死を悼んだ後、ようやく墓掘である彼等に落ち着いた時間が与えられるようになる。

土と腐肉のすえた匂いを全身から発しながらユーロは墓穴を一人で掘る。

運悪く工作中に死亡し、幸運にも死体が搬送されたハンターの墓だ。

墓に入れるのは僥倖なことである。

棺桶も、墓石も無料ではない。

体裁を整えるのであればそれなりの金銭が必要になってくる。

そのハンターは幸運にも死を悼む者がおり、また、その者がそれだけの金銭を出してくれたからこそ墓標に名を刻むことができたのだ。

ユーロが墓穴を掘る横で一人の少女がじっと、その様子を見つめていた。

ユーロは少女の顔を僅かに眺めると、少女はそんなユーロに目もくれず掘り出される土をじっと見ていた。

よくない瞳だと思った。

それは死を前に、悲哀に心を逃がす目ではなく、死を真正面から受け止める瞳だ。

ユーロの友人であるスタイアの瞳と良く似ている。

「かまわずに、どうぞ」

少女はそう告げるとユーロを促した。

ユーロは黙々と穴を掘り、正午の鐘が鳴る頃にようやく墓穴を掘り終えた。

少女はその間、ずっと墓穴を見つめたままだった。

ユーロは死体の納められた棺桶を引きずり、墓穴へとゆっくり降りる。

小さく胸の前で十字を切って黙祷を捧げると、仕掛け人形のように黙々と穴を埋め始める。

ユーロが土をかける間も、ずっと少女は黙っていた。

泣くことは、無い。

泣くのは心が痛いからだ。

その痛みを受け止め、何をしなければならぬのか。

ユーロはようやく、少女の姿が冒険者のそれであることを知る。生粋の冒険者であれば仲間の死を見ない者は居ない。

仲間の死を前にして、泣いていられるのはそれが、安全で、泣くことを許される状況であるからだ。

生き延びなければならぬ冒険者は、まず、仲間の死を前に自分が生き延びるためにどこまでも冷静に、そして、冷酷に考える。

ユーロが少女に見た瞳はそんな瞳だった。

「死者に引きずられると、死ぬ」

少女はようやく、そう、ようやく現実の熱を思い出す。

ユーロは自分の欠点を思い出し、顔を歪めるが少女は墓堀の横顔を追うように見つめその言葉の意味を探っていた。

「あの……」

「弔いが済めば、忘れる方がいい」

言つべき言葉は他にあるのだろうが普段、人と喋ることの無いユーロは上手に言葉を操れない。

スタイアのように何も言わずとも、言いたいことを理解してくれる人間を相手にしていればこのような苦労は無いのだろうが、いささかその少女はユーロとは面識も、また理解も浅かった。

少女は迷いを断ち切るように頭を振ると墓堀に言葉を返した。

「忘れては生きていけないでしょうね」

少女が何かを決心したのを知り、ユーロは自分が余計なことをしたと、深く悔やむ。

あくまで自分は人の死を送る者であり、人に関与してはならない。そのことを思い出したときには既に遅く、少女はじっと自分を観察していた。

「……冒険者、あがりですか？」

「そういう時も、ある」

人手がある場合、荷役冒険者としてパーティという単位の冒険者の旅団についていくことはあった。

偶然、ではなく、リバティベルに通うからこそ必然的に熟練のパーティについていくことが多かった。

ユーロはその点、冒険者としては濃密な時間を過ごしてはいた。

少女の経験というのがどれほどのものはわからなかったが、少なくとも、その年齢に比例した水準のものではないことは伺えた。

だからこそ、少女はユーロの所作から冒険者として優れた技量を見出し、頭を下げるのに不自然さを感じはしなかった。

「私のパーティは今度の仕事で全滅しました。優秀な冒険者が居る場所を、教えて下さい」

ユーロは黙ってやり過ごそうとした。

だが、いつまでも自分の後をついてくる少女のしつこさを見て、諦めざるを得なかった。

「ハンターだな」

「はい」

魔物を何日も追いつけるハンターの根気を、人の身であるユーロが避けるのは容易ではないのだ。

「ユーロだ」

「リムローと申します」

リムローと名乗った少女は、ユーロから見ても優秀な冒険者だった。

ほんの、そう、ほんの短いこのやり取りの間にユーロの癖を既に見抜いていた。

ならば、いいのかもしれない。

そんな安直な考えでユーロは少し遅れた昼餉に取りに、いつもの店に赴いたのだ。

短い期間であるが、休暇が貰える。

そう思うとどこか気持ちが軽くなるのをダッツ・ストレイルは感じていた。

遠征から帰ってきてみれば市中での魔物騒動があり、それが終わればまた遠征とこのところずっと働き通しだった。

戦場に立てる人間が平和になるにつれて減っていくため、どうしようもないということを理解してはいたが、それでも任せられ続ける人間は疲れるのである。

大概の場合、任せる人間は任せるだけ任せて人が摩耗し、擦り切れ、死んでからその人の死を悼むことで自らの精神を救済し、忘れ、また平然と同じことを繰り返すのだが彼等の指揮官は幸運にも同じ戦場に立つ騎士であつた。

「しつかしま、普段から働いていねーのに休暇たあね」

「いやいや、真面目に働いたからその分休まないといけないってことでしょうに」

海洋亭の一室で療養するスタイアを見舞いにきたダッツはベッドの傍らの粗末な椅子を軋ませ、その体躯を載せながら林檎の皮を剥いていた。

「それに、休みつて言つたつて遊びに行ける訳じゃあないんですから僕だつて辛いんですよ？」

「サボリが多いから罰が当たつたんだ。自業自得だろうに」

ダッツは大きな手に似つかわしくない可愛い兎を刻むと更に並べていく。

手際よく皮を剥かれた林檎を口に放りながらスタイアは痛そうに笑う。

「まあ、そうなんでしょうね。ですが、ダッツさんもせつかくの休日でしょうに。オーロードの実家に顔を出してきたらどうですか？」

「お前さんのそういうところが嫌いだよ。家を飛び出してきたんだ。今更どのツラ下げて帰れてんだ」

ダッツはそう言つてテーブルナイフを皿に置くと、窓から店の方を眺めた。

ユーロに連れられ見慣れない冒険者の少女が店の中に入っていく

のを見送り、大きく溜息をつく。

「放蕩息子が正騎士長になって部隊を率いているなら立派な出世でしょうに」

「それでも、会いたくねえんだよ」

乱暴に吐き捨てるように答えるダッツの過去を問いただした事は無い。

「……まあ、僕は両親と言える人も居ないからそう思うだけなんでしょうねえ」

どこか、寂しそうにスタイアが呟くがダッツは決まってこう答えた。

「居ないから幻想を持てる。親なんざ、子供のことを思っているように見えて、その実、子供のためにといいながら、子供を理由に自分を満足させてるろくでもねえモンだぞ」

ダッツは言いながら、それがいつまでも子供であると自覚していた。

だが、両親を否定しなければ今の自分まで否定しなければならないから、それだけはしたくなかった。

そこまではスタイアも知る由は無かったが、それでもダッツの言葉に頷けるだけの経験は積んできたから、何も返せなかった。

「で、休暇はどのようにして過ごすんですかね？」

「あんだよ。邪魔だって言いたいのか？」

「いやぁ……せつかくの休みに友達とはいえ、野郎のところに入り浸るなんて正直信じられないですから」

「友達甲斐のねえ奴だな。せつかく見舞いに来てやってんのに」
「……今、冗談で言ったツモリなんですが本当に行くところ無いんですかね？」

「ねえよ。じゃなきゃお前のところなんか誰が来るかよ」

スタイアはげんりしながらダッツを見る。

ダッツはスタイアが何故そのような反応を示すのかわからず困惑する。

「いや、普通、こう休みが取れたら転がり込めるような場所があったりしないんでしょうかね？」

「あるわけ無いだろう。仕事で遠征ばかりしてんだぞ？どこにそんなもの作る余裕があんだよ」

「いや、余裕が無くてもそこは頑張りますよ普通。よしんば無かったとしても行きつけの酒場の娼婦を抱きに行くとか、そういったの無いんですか？僕も給料貰ってますけど、そういった遊びできるくらいには貰ってるでしょうに」

「そんなところに行ったことなんざねえし、商売女は抱いたことねえよ」

スタイアはまるで珍しい生き物を見るようにダッツを見る。

ダッツが真面目だというのは知っていたがそこまでとは知らなかった。

「信じられないです。ちんちん生えてるんですか？」

「失礼だぞ。風呂場でちゃんと生えてるのみただろうに。自慢じやねえが立派だよ」

「立派でも使わないと意味が無いんですよ？おしっこするだけの道具じゃあるまいし」

言ってスタイアは他人のことだが哀しくなった。

「いや、俺だって未経験じゃあないんだぞ？そりゃあ、そのなんだ。色恋だって色々やってきたし、それで痛い思いもしてきたし、美味しい思いだってしたわけだが、それでもよお？金払ってまで遊ばせて貰うのも、なんか虚しくねえか？」

スタイアはひとしきり考えると、唸る。

「まあ、なんですか。飲みに行きましょう」

「お前その怪我で行くツモリかよ」

「男にはやらなければならぬ時があるんです。友の苦境は僕の苦境でもあります。苦楽を共にし、アレするのがやっぱり友だと思っくんですよ」

「楽しか一緒にする気ねえくせに何言ってやがんだ？お前」

ダッツはスタイアを小馬鹿にして鼻を鳴らす。

丁度、その時、海洋亭の主人であるミラが部屋によろと杖をつきながら入ってきた。

「大の男が昼間っから何をバカなことをくっちゃべってんだい。耳が腐るから口を閉じておくれ」

「あんれま、ミラ婆さん」

ミラと呼ばれた老婆はしわくちやの顔を不機嫌そうに歪めていた。ミラは無くした片足の義足を古い床板におぼつかないままにつきたてながらスタイアのベッドに寄るとじつと睨み付ける。

「お前さん、また飲みに行くツモリだったろう」

「そんなことは……いえ、まあ、ほんのちよっと」

「バカたれめ。酒は百薬の長だとかぬかすんだろうけど怪我人は大人しく喰っちゃ寝してなくちゃダメなんだよ。死んで治るのはバカだけだ」

手ひどいミラの暴言にスタイアは頭を下げる。

手練れのダッツといえどこの老婆には逆らえなかった。

ミラはかつて、一流のハンターとして名を馳せており、足を負傷して現役を引退したものの、死線を潜った数ではダッツやスタイアに負けてはいない。

安住の場所で齢を重ねても、その鋭さは、変わらない。

「お前さんもお前さんだね。こんなバカを相手にしてないで暇な仕事でもしてくりやいいじゃないか」

「いや、休暇だからここに来ただぜ？俺は」

「働くことしかない男に暇なんて与えたってロクなことに使いやしないんだ。だったら働く方がいいに決まってる」

「そりやないだろう？」

ダッツが情けない声を上げた。

「じゃあダッツ、尋ねるけど、こんなのを見舞うのが有意義なことでだって言えるのかい？」

「ミラ婆さん、そりやないでしょうに！」

今度はスタイアが情けない声を上げた。

だが、リバティベルを訪れる熟練の冒険者達の宿を預かる主はそんなスタイアに鼻を鳴らすとじつとダッツを見つめた。

「店に顔を出しな。お前さんが行くべき仕事があるよ」
「まっさか」

ダッツは苦笑する。

「匂いがする。間違いないね」

ミラはよろよろと窓辺に寄ると、店の中に立つ少女の背中を静かに見ていた。

第4章 『死者の王国 愛憎の楔』 3

リムローの言葉はリバティベルの喧噪を一気に叩きつぶした。

「ニンブルドアの門を潜れるパーティを募集します」

彼女の第一声はことによれば、駆け出し冒険者の戯言にも取れたが、リバティベルに集まる冒険者はそれが戯言でないことがわかるくらいには人を見ることができる。

そうでなければ、駆け出し冒険者の妄言で自分が命を落とすからだ。

だからこそ、誰しもが押し黙った。

「……お嬢ちゃん、本当に言ってるのか？」

「はい」

口を開いたのはシャモンだった。

シャモンは苦々しく顔を歪めて顎をさする。

「お嬢ちゃんや。貫目が見れない程おじちゃんも野暮じゃあねえが、ニンブルドアンというのがどんな場所か、知らねえ訳じゃあねえだろう？」

「ええ、知っております」

「死んだ人間に会えるってのあ、嘘だぜ？」

リムローは押し黙る。

イシュメイルはふむ、と長い髪をかき上げるとローブの裾を引き寄せる。

「ニンブルドアか。死者の闊歩する王国。ヘルゲイズの谷に広がる闇の海の底、亡者の王ユラフロアルガンが支配する場所。古代王国の史跡で数多くの冒険者が挑む。それには理由がある」

イシユメールは興味深そうに聞いているタマに向き直って続ける。

「まず、稀少環石の採掘。ニンブルドアを潜った先に居る魔物は全てが圧縮された環石を精製する。市場に出回ることの少ない稀少環石はそりゃあ、高値で取引される」

「だが、その分、危険度も折り紙つきだ」

シャモンが苦々しく告げる。

「ニンブルドアから先は魔物の領域だ。数多くの冒険者が金欲しさに挑むが決して、行きたがらない理由がここにある。あそこの魔物は分類化できない」

イシユメールは頷く。

「そう。理由はわからないがニンブルドアの向こう側の魔物は次に訪れた時には全く別の魔物が闊歩している。だからこそ、ニンブルドアの魔物の収集品はアカデミアでも高値で売買される。これはニンブルドアに赴く利益だ。だが、それで生じる不利益がなにかわかるかい？」

「対策が全く立てられないということです」

リムローは淀みなく答えた。

シャモンは皮肉げに笑う。

「それだけわかれば上等だ。運良く自分たちの能力でどうにでも

なる脅威なら一攫千金さね。だが、ひとたび間違えれば失うのは自分の命だ。そこまでして銭が欲しいかと聞かれればみんな答えは一緒だ。行きたくねえよ」

「それでも、行かなければならないのです」

シャモンは身を乗り出し、リムローに指を突きつける。

「それだ。それが厄介なんだ。言つたろ？ 貫目がみれない訳じゃねえ。つまり、てめえさんは何かしらの目的があつて行くんだ。一攫千金なら適当に石拾いして帰つてくりゃいい。だが、そうじゃないと話は別だ」

「わかっています。その目的を達するまで帰れない。そんな自殺行為に付き合うのは御免だと仰りたいのでしょうか？」

リムローはそこまで言うとき大きく溜息をついた。

「そういうこつたな」

「……なら、せめて、これが何かわかる場所へ連れて行って下さい」

リムローは帯革に吊したバックから小さな石版を出してシャモンらに見せた。

シャモンは眉を潜める。

横からのぞいたイシュメールも厳しい顔をした。

「……古代の魔術文字だね」

「ですが、ヨッドヴァフ王国の紋章にも似ています」

石版、といっても手のひらに載る小さなものだ。その紋様は確かにヨッドヴァフの紋章と酷似したものだった。

「こいつをどこで拾った」

「……ニンブルドアに赴いた師の遺品です」

タマはそれを横から覗き込み、首を傾げる。

「ヨッドヴァフはもとオールドに首都があつて、そこからずっと東へ東へと他国の侵略から逃げてきて、今の場所に首都を置いたんだよね？ニンブルドアって確か、ヨシュ砂漠やアブルハイマン、コルカタスからしか行けないはずだからおかしいよね？」

「ふんむ」

シャモンは石版を受け取り、手の上で回し、ひとしきり眺める。

「……経過年数は六十年弱、ヴァストニアン鉱石を加工した石版だ。紋様は青銅の混ざった油脂で描かれている。時折、こんなもんが古い史跡で見つかるがそれと良く似てるっちゃ似てるが……いささか新しいな」

シャモンはリムローに石版を返す。

リムローは大事そうに石版を受け取ると、鞆に納めた。

シャモンはその様子を眺めて、小さく溜息をついた。

「ギルドに持っていきゃ、それなりの値段はつけてくれるぞ？」

「それなりの値段でした。ですけど、私にはそれ以上に価値のあるものです」

リムローはそれだけ告げると、最早、この場所では望みが叶えられないことを悟った。

「どうやら、私は皆様の貴重な時間を無駄にしたようです。獲物が動きを止めた一瞬も、ただ待ち、耐える時間も同じもの。失礼を致しました」

リムローは別の冒険者に頼もうと既に決断していた。

熟考と素早い決断は似て異なる。

それができない冒険者は、すぐに、死ぬ。

「待ちな。お嬢ちゃん」

シャモンはリムローを呼び止める。

リムローは面倒くさそうにシャモンを振り向く。

だが、どこまでも冷徹なシャモンの双眸にリムローは懐かしさと恐怖を覚えた。

「……お前のお師匠さんは教えてくれてはいなかったようだな？ 打算で動く人間は即ち、お前の打算に納まる人間でしかない。それ以上を望むのであれば、誠実さこそ心意を貫く針となる」

リムローはシャモンの箴言を噛みしめると頷く。

「……失礼しました。私は、私が何者かを皆様に告げていなかったですね。リムロー。名字はありません。ビガーズの鎖の一つです」
「鎖つてことは……弟子か。師匠の痕を追うのか？」

鎖、とは元々奴隷が自分を仕込んでくれた人との繋がりを表す言葉だ。
冒険者、と呼び方が変わっても未だその隠語は廃れることはない。

「はい。師が師で、私が私であるために、越えねばなりません」

リムローはそれだけ言うと、小さく溜息をついた。
シャモンはバリバリと頭を掻くとイシュメールとユーロを見渡した。

イシュメールは苦笑し、ユーロはいつもと変わらずに佇む。
丁度、その時、のろのろと店のドアを開けて入ってきたダッツが
リムローやシャモンらを見渡し、眉を潜める。

「なあ、ここに仕事があるって聞いて来たんだが本当にあのか
？」

タイミングが良すぎると言えば、良すぎたのだろう。

ラナは冒険者ギルドへの正式な依頼として本件を取り扱う。

リバティベルはただ冒険者がたむろする酒場ではない。

場合によっては依頼を冒険者へ仲介することもある。

鍛冶ギルドや教会、騎士団からの依頼は冒険者ギルドを通じ、ヨツドヴァフ内にあるギルドを通じ冒険者へ依頼される。

だが、冒険者ギルドの実態としては多くの仕事を捌くのに事務所をいくつも構えるよりはこうして、彼等が集まる酒場や宿に幾ばくかの報酬と引き替えに業務を代行してもらう方が経費も安く済み、また、早かった。

ラナは必要な書類を手早く書き込むと、それをシャモンに手渡した。

「どれどれ……ああ、冒険者ギルドの常時依頼の案件に参加する形にしたのか」

「じょーじいらいー？」

タマが横からシャモンの書類を覗き込む。

「冒険者ギルドに依頼を頼むとなると、銭がかかるんだよ。まあ、冒険者ギルドで働いている人の飯代だな。だけど、冒険者ギルドはニンブルディアの調査について常にパーティを探しているからそれを受けたって形にしたんだ」

「そうなるかどうか？」

「本来はリムローから銭を貰って仕事するのが、冒険者ギルドから銭を貰う形なんだ。ようするに金がかからないってことだ」

「……あ、そうか、教会やアカデミアが調査の依頼をお金払って頼んでるから常に依頼があるんだ！」

タマはシャモンの話の途中で合点がいったらしく、ひとり納得していた。

リムローは自分より僅かにしか年の変わらない少女を見て眉を潜める。

子供にしては明晰な頭脳を持っている。

だが、冒険者特有の緊張感がまるで欠如している。

「パーティはダッツ、俺、イシユメールにユーロ、リムローにタマ？おい、タマ公、なんでおめーさんの名前がここにあんだよ！」

「ラナさんに頼んだ！」

「嘘つけ。ラナさんが許すはずねえだろ？」

「実はねー、踊りのことまだスタさんに言っていないの。それにマリナさんやみんなに言って、広めてあげないといけないかなって思ってるって言ったら、シャモンさんから離れないって約束で許してくれた」

シャモンがラナを睨むが、ラナは不機嫌そうに、そしてゆっくりと目を逸らした。

シャモンは依頼に赴く前にどっと疲れたような気がしてタマを睨み据えた。

「……おめーさん、今から俺達が行く場所がどんなところか知っててついてくるのか？新米連れていける程、ヤワなところじゃねえんだ」

「秘密の小袋！スタさんがくれた御守りがある！」

タマは懷から小さな袋を取り出す。

握り拳くらいの大きさの袋で、ぎっしりと中身が詰まっている。

シャモンは鼻をひくつかせ、それが何かを理解すると眉を潜めた。

「なんだそりゃ？そんなモンが御守りになんのかよ」

「ヒント！ヨッドヴァフは魔物を退治して今の場所に首都を構えたけど、昔はオーロードに首都がありました。何故でしょー？」

シャモンはイシュメイルを見るがイシュメイルは首を傾げる。

「僕を見たってわからないよ」

「同じお師匠さんから学んでるんだろ？」

「失敬な。僕は不真面目なんだぞ？」

「胸張って言うことじゃねえぞ」

シャモンは大きく溜息をつくともう一度、書面に目を落とした。

「しっかしまあ、見事にむさ苦しいパーティだな。前衛にダッツ、俺、ユーロ。後衛にリムロー、イシュメイル、タマか」

タマは胸を張る。

「私前衛でもいいよ！」

「おめーはミソツカス扱いだよ」

「ミソツカス？あ、知ってる！こないだスタさんが作ってた茶色くて酸っぱい牛のクソスープに使うんだ！あれの白いカスを言うんだよね！」

「……ちなみにそれをクソミソ一緒に言うんだ。おめーは員数外だよ荷役でもやってくれ」

「うん。元々そのツモリで行くからね。私は私で欲しいものがあるし」

「欲しいもの？」

「ムギユルスの茎。怪我に効くお薬を作るのに必要なんだ。スタ

さんに早く治ってもらいたいし」

危ないとか、そういう事はタマには問題じゃあなかった。ただ、大事な人が居て、その人に良くなって貰いたい。それだけで無理をいつてついてくるというのだ。

きっと、自分に言えばなんとか取ってきてはやれるのだろう。だが、命に関われば自分は当然、逃げてしまう。

そうなれば自分はこの少女に言い訳をしなくてはならない。それは、恥だ。

だからこそ、タマは自分で行くのだろう。

シャモンは顔をしわくぢやにして、泣きそうになるのを堪えた。その横でリムローが難しい顔をしていた。

「……できれば、教会の処置術を扱える修士が欲しいところですね」

処置術とは一時的な傷の治療である。

根本的な治療には至らないが、しばらくの間、通常通りに活動できるように傷を応急処置し、また、痛覚を意識から取り除く神術のことを指す。

ユーロが微笑を浮かべる。

「できる」

「え？あ……ユーロさん、あなたが処置術を使えるのですか？」

「最後は埋める」

リムローも流石に意味がわからなかった。

ダッツは頬をぽりぽりと搔く。

「……あー、治癒術も使えるし、死んでも最後は墓に入れてやる

つていう彼なりのジョークだろ？」

「慣れないことは、もう、しない」

ユーロはまた愛想も何もない表情に戻った。

今までことの成り行きを見守っていたダッツだが、即席とはいえ大丈夫なのかと心配してしまう。

「そんなことより、取り分は人頭割りの六皿でいいのか？」

「うんにゃ、タマは含めない。俺が一杯で、残りは店に盛ってくれ」

皿、とは報酬の取り分を指す。

総額を人数で割った単位を一皿として、それが一人前に与えられる報酬である。

だが、それに至らない半人前等に使われるのは一皿の半分、一杯という単位になる。

これも冒険者が元々奴隷だったころの名残である。

一人前はちゃんとした皿にありつけるが、使えない奴隷は水しか飲めない。

「いいのか？」

「仕方あるめえよ。しょっちゅうタダ飯喰わしてもらってんだ。

こういう時に返してやらにやいかんだろくに」

シャモンはタマの頭をくしゃくしゃと撫でると背中を力強く叩く。

「おう、決まったんならさつさとそれ持ってギルド行って来い。

タマ公、リムローについて行け」

「はい」

ヨッドヴァフの西区にその建物を構える冒険者ギルドは人で溢れていた。

日常の小さな問題から、魔物退治や山賊討伐といった大きな仕事、果ては稀少鉱石の採掘や高山植物の採取まで様々な仕事の斡旋を行っている。

だが、実際に仕事を受けるのはリバティベルのような代行業者が居る場所の方が多く、ギルドでは主に教会、騎士団、果ては王室から依頼される仕事の受諾と発信、そして、報酬の引き渡しを主な業務としている。

リムローは書類を受付に手渡すと、正式に受諾されるのを待合いの粗末な椅子に腰掛けてタマと待っていた。

本来、こういった業務は代行業者が行うことになっているのだが、急ぎ出発したい場合や、特段の事情がある場合、そして、秘密の依頼である場合はこうして依頼を受けた冒険者が書類を提出しに来ることも希にある。

リムローは何度か、こうして冒険者ギルドに足を運んだことがあるし、もっぱらそういった仕事は末席である自分の仕事であった。書類が受諾され、正式に認可されるには少々時間がかかる。

その間、リムローは冒険者ギルドに出入りする人間を観察して時間を潰す。

商会ギルドの使用人が環石の買い付けにきている横で、教会の司祭がなにやら依頼文書を提出している。

その横では王城の兵と思われる者が封書を渡していた。

自分と同じように事務処理の時間を潰すアカデミアの学士が分厚い書物を読みふけている。

普段と同じようによく見れば、何かが違う。

その違和感を感覚で受け止め、リムローはそれが何故かを考えていた。

だが、その思考は中断される。

「リムローさんですね、ニンブルドア調査の件、受諾されました。ギルドマスターが面会したいそうです」

冒険者ギルドの受付が受諾印の押された書類を持ってリムローの元に来た。

普段ならば、カウンターに呼びつけられて終わるのだがギルドマスターが面会を求めているとなると話は別だ。

「わかりました、面会します」

「では、三階の執務室へ願います」

リムローはタマを連れて待合いホールを出る。

タマはとてとリムローの後について歩きながら尋ねる。

「ねえねえ？こういうことって普通の場合、あるの？」

「え？」

「私、よくここに書類を持ってくるけど、みんなそのまま帰るよ？」

リムローはそういえば、この少女がリバティベルの雑役をしていることを思い出す。

それであれば少女がここを出入りしているのも頷ける。

問題は、雑役しかしていない少女がこうして自分たちが呼ばれることに違和感を確実に持ったことだ。

「普通は無いの。でもね、緊急の用件や特別な用件がある場合、ギルドマスターから特別に頼まれることがあるの。サブオーダーって言うのかしらね。でも私たちはいつも副食って言ってるわ」

「パンより美味しいってこと？」

リムローは舌を巻いた。

この少女は副食の隠語に隠された意味すら看破していた。

「そうよ。依頼の内容より手間がかからなかったりして、報酬も労力の割には高いからそう呼ばれるの」

「ふーん」

タマは頷きながら難しい顔をしていた。

リムローはタマの素性を知らないが、これだけの洞察を有しているならば良い冒険者になるだろうことを予感した。

疑問は知識を産む。知識は積み重ねれば知恵となる。

溜めた知識を経験が磨き上げれば、それは血肉となり自らを助けるからだ。

「でも、おかしいよね。ニンプルドアの調査ってそれなりに難しい依頼でしょ？それなのに副食を出すってなったら相当難しくなるんじゃないかな」

「……そうね」

リムローはそう返事をしながらも、タマの洞察に目を見張っていた。

これは、冒険者が持つべき大事な素質である。

危険へ対する嗅覚。

リムローは考えもなくギルドマスターへの面会を受諾したが、ギルドマスターと面会してしまえば一介の冒険者である自分では断りづらいものがある。

副食を断ることもできる。

だが、それ以降の仕事で障害が出ることもあるからだ。

ニブルドアへの調査という難度の高い依頼に添えられる副食の内容を想像しなかった自分より、この少女は危険に対して敏感だったのだ。

新米に、熟練者が遅れを取ることをない場所で遅れを取った。

「もし、本当に危なければ断るから大丈夫よ」

「スタさんが言ってた。本当に危険なら近づいちゃダメだって」

「まだ、依頼すら聞いてないから大丈夫よ？ありがとうね」

スタさんというのが誰かはリムローには知る由が無かった。

だが、タマのいい師であることは理解できた。

その言葉はかつてリムローの師、ビガードが教えてくれたものでもあつたのだ。

自分には、もう、標となる人は居ない。

自分の力で生きていかなければならないのだ。

だから、こそ。

「話だけ聞いて、命は取られないでしょう？」

タマの頭を優しく撫でるとギルドマスターの執務室へと赴いた。

だが、この時、タマの忠告を素直に聞いていれば将来は変わったのかもしれない。

彼女は目を逸らしていたのだ。

新米の冒険者に、危険への嗅覚で劣った自分が、彼女より優れることを見せてやりたいという自尊心に。

冒険者ギルドのマスター、サステナ・スリイジは妙齡の婦人だった。

先代のギルドマスターからその運営のノウハウを叩き込まれ、かつ、自身も生粋の冒険者であった。

もうすぐ四十に届きそうな年齢ではあるが、二十代のような若さを保っていた。

全身から溢れる情熱が、力強く、彼女をいつまでも若くしていた。若い冒険者が身に纏っていたいれば豪奢に過ぎて滑稽に見える衣装も、彼女の場合であれば、その風格と風采に合致していた。

銀狐の毛のマフラーにシーサペントの紋様が入った紅のドレスにその成熟した身体を包み込んでいる。

だが、ホワイトサーペントの革でしつらえられた帯革に吊した長剣と短弓はそれぞれ使い込まれており、また、彼女の服装のデザインも決して、それらを扱う動きを疎外することの無い、洗練されたものだった。

さらに、見る人が見れば、それが長く、実用に耐えられるものであることも押し伺える。

華美でありながら、実用的。

冒険者ギルドのマスターを名乗るのには十分な風格を備えていた。だからこそ、サステナは人を従えるには強い力が必要であることを知っていた。

「ニンブルドアの奥にある邪教徒の集落の偵察をお願いしたいの。証明として邪教徒の紋様の入ったローブを剥ぎ取って来て欲しい」

サステナは二人の少女にそう告げた。

何人もの冒険者を相手にし、また、人より恐ろしい魔物を見てき

たサステナには彼女たちが冒険者としてどれくらいの力量を持っているのか既に把握していた。

だからこそ、彼女たちを使いに出したパーティの力量も推し量れた。

それは話を聞く側のリムローにも理解できた。

瞬時に、パーティの力量と、提示された依頼の難易度、そして、最も最悪な事態を想定した対処方法と、報酬の量。

「……確実な返事はできませんが」

サステナはその不明瞭な返答を肯定として受け取った。

この少女は魔物相手には優秀なハンターではあるのだろう。

だが、人間相手にはいささか経験が足りないようだ。

「近く、教会で邪教徒を殲滅するために巡回司祭隊がニンブルドアンに赴くの。邪教徒がどれくらいの人数で、どれほどの規模で存在しているのか。可能であれば武器や使役している魔物の数もお願いしたいの」

畳みかけるようにサブオーダーの必要性を語る。

相手の思考を必要性に誘導してやることで、彼女が持つ真意ははぐらかすためだ。

事実、リムローの思考も必要性に合わせて自分たちがどれほどの成果を求められているのかを計算する方向に向けられていた。

だが。

タマはじつと横でサステナの顔を見つめていた。

サステナはその様子を見て、それ以上言葉を継ぐのを辞めた。

言葉は他人を操ると同時に、相手に余計な情報を与えてしまうからだ。

「お嬢ちゃんのような新人さんがこういう場所に来るのははじめて?」

とりとめもない挨拶ではぐらかしてみた。

「うん、そのマフラーふかふかして気持ちよさそうだと思って」

場に似合わない少女の屈託の無い感想にサステナは苦笑する。

少女らしい、素直な感想だった。

サステナは警戒心を与えない為に、自分の襟元に巻き付いている銀色の毛のマフラーを撫でてみせた。

「これ、ね。シルヴァリアフオクシバットのマフラーよ。アブルハイマンを越えてニヴァリスタ、そして、その更に北にあるグレイシアの友人が贈ってくれたものなの」

話を完全に別の方向に誘導してやる。

サステナはほんの少し、タマの相手をしてやることにした。

「随分と遠くから、贈ってくれたんですね」

「ふふ。一度、危険という濃密な時間を共有した友人はどれだけ経つても友人でいられるのよ? わざわざ海路を経て贈ってくれたもので私の手元にくるのに半年はかかったみたい。それでも何かを贈りたいって思ってくれる友人はいいものよ?」

「陸路でも時間はかかるよね?」

リムローとサステナは怪訝な顔をする。

「時間がかかれば、邪教徒は増えたりするんじゃないかな? ニンブルドアに居る邪教徒ってのがどんなものかわからないけど、それ

でも、ニンブルドアに入っただけで警戒されちゃうんじゃないかなって思ったの」

サステナはタマが何を言いたいのか、理解した。侮っていた。

だが、タマは自分の容姿が与える印象を利用し、先に話した必要性の不自然な部分と、他愛ない世間話を強引に繋げて、サステナの意識に強烈な横槍を加えて揺すぶったのだ。

だが、リムローはそれを理解できずに狼狽えた。

「……お嬢ちゃん、良く気がつくわね？」

「お金と、時間と、労力は価値で繋がっているって、スタさんが教えてくれた」

それ以上、攻めてこず、はぐらかす危険への嗅覚も上手である。とても、年齢相応とは言えないものがある。

「でもね、だからこそ、あらかじめどれくらいのものか理解できていれば、時間をかけずに攻めれば危険を減らせるということもあるのよ？」

「ふーん」

タマはそれ以上、興味を失い部屋の中を眺めた。

話の流れについていけなかったリムローは狼狽えながらも、ギルドマスターの次の言葉を待っていた。

「……あなたたちを少々、見くびっていたわ。サブオーダーの報酬に銀貨三百枚を加えさせてもらうわ？ 優秀な冒険者は、いくらでも友人にしておきたいからね？」

サステナは少女のようにウィンクしてみせるとリムローの緊張を解いた。

リムローはタマを苛立ちの混じった瞳で睨むが、タマはそれより壁にかけられたヨッドヴァフのタペストリーの方に興味があったようだ。

リムローはタマから視線をサステナに戻す。

「……サブオーダー、受諾しました。ですが、成功失敗の要否は問わないで欲しい。我々は生きる為に副食を食べない選択もしなければなりません」

「当然ね」

サステナは不敵に笑うと、タマを引いて部屋を出るリムローの背中を見送った。

完全にリムローが居なくなってからサステナは呟いた。

「……私の記憶に違いなければ、彼女はフィッダ・エレを見たパティに名前があったはずね」

どこからともなく、声が答える。

「そのためのサブオーダーか……だが、納めきれるものか」

「あの小さな女の子、未恐ろしいわ。どんな化け物の鎖か理解できない」

「外壁沿いに立つリバティベルという酒場の連中だ」

「ああ……」

サステナは小さく、頷いた。

彼女はその店にまつわる色々な噂を聞いていた。

「時代が産んだ怪物達が集まる店ね。正直、あんな子が居るなんてぞつとしないわ……サブオーダーもどれだけ意味があるか」

声の主は静かにサステナの背後に立つと告げた。

「……天秤は傾けてはいけない。盟約は護ろう。ゆめゆめ忘れるな。お前もまた、分銅の責を持つものだということを」

そうして、気配は静かに消えた。

サステナは忌々しげに鼻を鳴らすと毒づいた。

「……アサシングルド。忌々しい連中ね。だけど、全てが思い通り上手く行くことなどは決してないということを知りなさい」

それは、リムロー達の知らない場所で静かに動き出していたのだ。

サブオーダーについてリムローがシャモンらに話したところで、彼等の対応は適当なものだった。

「副食なんざ、喰えれば喰ってやりやいいじゃねえか。そんなことよつか、どうやってニンブルドアへ行くかが問題だよ」

ニンブルドアへ至る道はいくつか、存在する。

有名なものとしてコルカタス大樹林のヘルゲイズの谷。

これは神話にも存在する程、有名なルートである。

コルカタス大樹林を横断してその果てにあるヘルゲイズの谷を下る。

その最下層にあるグリパニヘルの洞窟を抜ければニンブルドアンの門がある。

魔物がひしめくコルカタス大樹林を抜け、人が下ることを想定されていないヘルゲイズの谷を魔物の襲撃を躲しながら下る。

無論、落ちれば人間などひとまりもない危険なルートだ。

もう一つはヨシユ砂漠から至るルート。

砂嵐吹きすさぶヨシユ砂漠には多くの史跡が埋もれている。

その史跡のいくつかから、大空洞と呼ばれる地下洞窟を抜けニンブルドアンの門を潜る。

だが、そこには巨大な魔物が生息し、また、定期的に吹く砂嵐が人の残した痕跡の事如くを吹き飛ばす。

行けるかどうか、不確かなまま延々と砂漠を行軍することもままある。

そして、最後に存在するルートがアブルハイマンからのルートだ。アブルハイマン山脈に存在する洞窟のいくつかから大断層グレイグレイルを降りることでニンブルドアンの門へと至る。

だが、磁場の狂った坑道で彷徨えばそこで苦しみながら死ぬこととなる。

「いずれのルートでも問題ねえよ」

シャモンはそう言い切った。

リムローにはその言わんとしていることが理解できる。

ニンブルドアンの門に至り、ニンブルドアへ至るということはそれだけで危険なことなのだ。

そこに、人間の想像する危険は意味を成さない。

どれを選んだとしても変わりはないということだ。

「だが、確実に至るならコルカタス大樹林のルートだな。こちらは他のルートと違って行き方がハッキリとしている」

イシュメイルはそう進言した。

確実にニンブルドアに至るには危険であっても行き方がはっきりしているのはコルカタス大樹林のルートであるのは間違いない。

ユーロは皆が決める内容に黙って従うツモリだ。

黙々と荷車に皆の荷物をタマと一緒に運び込んで居る。

唯一、ダッツだけが顎に手を当て渋い顔をした。

「コルカタス大樹林はこの間の遠征で魔物が殺気立ってるから、正直、行きたくないってのが本音だな」

「それならばアブルハイマンのルートで行くか？運を頼みにヨシユ砂漠をほつつき歩くよりかはマシだろう。君の休暇もそれほど長いものではないだろうし」

「アブルハイマンか……うーん」

ダッツは自分の知るルートを考え、どちらがいいのか悩む。

彼等の話を聞いてリムローはふと疑問に思う。

「あの、皆さん、ひょっとしてニンブルドアへは行ったことがあるんですか？」

「ほう、このお嬢さんは自分のパーティの力量を勘違いしておられる」

イシュメイルはリムローをからかうように笑った。

「こう見えても、僕は大師星クロウフルの愛弟子さ。ダッツ騎士は何を隠そうバルツホルド三騎士の一人。ましてや第七騎士団の正騎士長様だ。年季が違う」

シャモンは面倒臭そうにユーロを見た。

「まあ、俺もユーロもニンブルドアは未経験じゃあねえよ」

驚くりムローを振り返ってユーロは苦笑した。

「……そんな……ニンブルドア経験があるってだけで冒険者としては一流ですよ」

「だろーな。だが、どんな一流でも死ぬときゃコロっと死ぬんだ。お前さんのお師さんだって一流だったろ？ だけど、まあ、そんなもんなんの自慢にもなりやしねえよ」

シャモンはそう言い捨ててダッツに視線を巡らせた。

「なあ、正騎士長。こういうときや出し惜しみして欲しくねえんだが」

「いや、出し惜しみしてる訳じゃあないんだ。だが、いずれにせよ危険だっつうことは変わらんからな」

「じゃあ、コルカタスでいいさね。秘密のルート、あるんだろう？」

にんまりと笑うシャモンにダッツは苦笑する。

リムローは目を見開いて驚く。

「まさか……噂とばかり思ってた……」

「秘密のルート、っつーよりなんだ。割りかし安全に行ける自分達しか知らないルートってのは普通、誰にも教えないから秘密のルートつつわけだからな。ま、副食の邪教徒のあとでも追っかければいい道が見つかるやもしれんがな」

シャモンは意地悪く笑う。

リムローは高鳴る胸を押さえて、ダッツに向き直った。

「あの……教えていただけなのでしょうか？」

だが、ダッツの顔は渋いものだった。

「そういうルートを教えれば乱獲されて自分の手取りが減るからっていうのが理由だとまかり通ってるが、正しくは違う。いずれにせよ危険だから安全だと教えてやると、お前さんみたいなのが間違っ
つて突っ込んで死ぬからだ」

ダッツは淡々と語ると、肩をすくめてみせた。

「事実、俺が知ってるコルカタスとアブルハイマンのルートのいずれも普通に行くのとは違う危険さを持っている。だが、まあ、確実に時間を短縮できるという意味ではいいのかもしれないがな」

ダッツは自分の槍の予備をタマに預けると、溜息をついた。

「アブルハイマンのルートはグレイハウンドの巣窟だ。さらにプレストロードが門を守護している。谷下りするよりか厳しいんだ」

「コルカタス大樹林の方は、どうなのですか？」

「……こっちの方はブラックドラゴンが守護している」

リムローは絶句する。

ドラゴンは魔物の中でも指折り数えた方が早い程の強敵だ。

強靱な肉体、灼熱のブレス、そして立つことすら困難となる咆哮。

「だが、こっちは洞窟だからな。空に飛ばれない分、楽ができるさ。翼の無い鳥は二本足の獣でしかないって言うだろ？」

それでも面倒くさそうに呟くダツツにリムローは頼もしさを覚えていた。

準備を終えたタマが荷車の上に座り、退屈そうにしていた。

「ねえねえ！まゝだゝ！早くいこー？」

新米の脳天気な声がどこまでも羨ましく思えた。

荷車はリバティベルで貸し出しをしているものであった。

馬や犬、ネコに繋げて使える汎用の荷車であり、ただ荷物を運ぶために作られたもので乗り心地は考えられていない。

だが、それでも六人程のパーティともなると探索地の付近まではそれなりの行程となる。

グロウリイドーンを出た彼等は街道をそのまま西へと向かう。

先日の遠征と違い、大所帯での移動ではないことから二日もかからずコルカタス大樹林へと至れるだろう。

途中、農村での一泊も考えたがなるべく早く森へ突入する準備を取りたいことから彼等は夜営をして距離を稼ぐことに決めた。

ずっとパーティで末席であったリムローは夜営等の準備には自信があつた。

「なにぼさつとしてんだ。ちゃっちやと飯、喰っちまえ」

幕営の設営から炊事まで四半刻すらかけぬ早さであつた。

とても、男所帯とは思えぬくらいにリバティベルの面々は手慣れていた。

「なんだか、申し訳ないです」

リムローは結った髪を揺らしながらふると首を振る。

「ま、他のパーティに混じるってのはこんなものだ。慣れる」

ダッツはシャモンの作ったスープを飲んで眉を潜める。

「……なあ、これ、スタイアが前に作ってたクソスープじゃねえか？」

「お前もミソクソー緒にするクチかよ。こりゃあ俺のお師匠さんが教えてくれたミソジュウってスープだ。豆から作ったミソって練り物に出汁とった湯に混ぜたら後は何ぶちこんでもいい簡単で身体にいい飲み物なんだぞ？」

「致命的なまでにパンに合わないぞコレ」

「本当はムスビメシと喰うモンだからな」

言ってシャモンは乾いたパンをスープの中に突っ込むとくちやくちやくと混ぜる。

皆が不平を漏らしてはいるが、リムローはこの味が密かに気に入っていた。

後で、作り方を聞いておこう。

ユーロはそんなリムローを見て微笑を浮かべた。

「今なら、喋っても大丈夫だ」

「え？」

ユーロの言葉はいつでも唐突である。

「ニンプルドアへ行く、理由だ」

「あ……」

リムローは気がつく。

少なくとも、命を共にするパーティに隠し事はしてはいけない。なぜなら、疑心は信用を蝕み、ここぞという判断を鈍らせる。

自分より格段に経験を積んでいる冒険者の中で甘えていたが故に、忘れていた。

「すみませんね……気を使っていたいて」
「我々も、それくらいには弱い」

墓守はそう呟き、リムローの隣に腰掛けた。

リムローはどこから話せばいいのか迷ってしまう。

だが、優しい墓守はずっとリムローの隣で黙って耳を傾けていた。

「ニンブルドアで私の師は最後を迎えたんです。それは冒険者として、よくある最後なのだと思います。いずれ、私も……そう思っていました」

ユーロはかつて、じっと自分が掘る墓穴を見つめていたリムローを思い出す。

「ですが、だからこそ、その死を乗り越えなくてはならないんです。その事実から目を背けて、安穩に生きることのできるのでしょうか……」

「理解、できる」

ユーロはリムローに答えた。

「慢心と安心が曇らせた瞳は現実が作る嵐を見つけれなくなる。それが傍らに来た時、どうしようもないと身を任せるしかなくなる。それは、生きるか、死ぬかを自分ではなく常に他人に預けることだ」

リムローは饒舌に喋るユーロに僅かに驚いた。

ユーロは幕営の前に焚いた焚き火に枝をくべると小さく溜息をついた。

リムローは俯くと呟いた。

「だからこそ、自分の全てをもつて勝てない現実を見ておきたいんです」

ユーロはリムローの頭を少しだけ撫でる。

身を強ばらせるリムローだが、やがて、安心したように力を抜く。遠く、耳を傾けていたダッツやシャモンが食べ終わった飯の食器を片付けると、立ち上がる。

「さて、夜も来るから寝るとしましょうかね。哨戒のクジ引くベ
ーな」

翌日から彼等はコルカタス大樹林に突入した。

荷車から必要な荷物だけをタマが背負い、他は荷車と一緒に最も近隣の村に預けた。

乾期の終わりとはいえ、鬱蒼と茂るコルカタス大樹林は蒸せる湿気に満ちていた。

鳥とも虫ともつかない嘶きが辺りに響き、時折、茂みを揺らす。腰まで鬱蒼と生えた茂みをかき分けながらの行進は骨を折る。

「歩き慣れないと辛いモンだからぬ」

シャモンは道なき道を悠々と歩きながら後ろで息を切らせている後衛を笑った。

「フィールドワークは僕の専門外なんだよ！」

「黴臭い本だらけの場所よりかはなんぼか健康的だぞ？」

「健康的なら女の子の居る場所がいい……」

長いロープに引っかかる枝を払いながら進むイシュメイルは既に息があがっていた。

だが、その隣を歩くリムローはその倍以上は疲れた様相を見せていた。

「イシュ兄、わたしおんなのこ」

「大人の美女がいい」

「だって、リムお姉ちゃん」

タマの冗談に返せるだけの余裕が無い。

荷物を背負い、体力が無い事で言えばタマも同じはずなのだが、どうしてかこの少女は疲れることなく森の中を歩いていて。

「……疲れないの？」

「シャモさんの歩き方をマネしているとそんなに疲れないよ。あんまり、大きく足を開かないでシャモさんが踏み固めてくれた場所を歩くとらくちんらくちん」

リムローとて森の歩き方は熟知しているツモリではあった。

だが、タマは疑うことなく最も経験の豊富であろうシャモンの歩き方を盗むことで、荷役でありながらもリムローより上手に森を歩いていたのだ。

前衛三人で後衛を囲むように陣形を組みながら行進する。

その辺りの指揮はダッツではなくシャモンが率先して行っていた。経験で言えば、騎士団で魔物討伐を多くこなすダッツが行う方がいいのだろう。

だが、ダッツは何も言わずに年配のシャモンが行う指揮に従っている。

「タマ公、疲れてねーか？おんぶしてやってもいいんだぞ？」
「だーいじょーぶだもん！」

からかいながらも進行速度を一定に保つよう促せるのは年の功か。シャモンは先頭をゆらゆらと歩きながら、まるで背中に見があるかのように後ろからついてくる彼等に適切な指示を飛ばしていた。

「ユーロ、もそつと後衛と距離を取れ。圧をかけろ」

言葉の中には意味を理解できない単語も飛び交う。

リムローは弓を背に、彼等についていくので精一杯だった。

「リムロー、弓に矢をつがえろ。つがえたまま歩け」

シャモンに言われ、リムローは弓に矢をつがえる。

鋼鉄の合板でできた弓は引き絞るのにも相当な臂力を必要とする。僅かに溜まってきた疲労に、ほんの少し、指示に従うのが遅れた。

「やれやれ。来たぜい」

シャモンの姿が掻き消えた。

それからの一瞬に、リムローはついていけなかった。

彼等は何も言葉を交わさず、後衛である自分の側に駆け寄ったのだ。

「……アヴアラヴァスタオサラマナツフ……リヴ・ファイア」

弓に矢をつがえるより早く、イシュメイルが詠唱を終わらせていた。

周囲に円を描くように炎が走り、森を焼く。

ウィングサーペントのように中空を走った炎が円を描くと、その炎は次の瞬間に爆ぜていた。

爆風が鳥獣種の魔物を吹き飛ばす。

リムローは姿の見える魔物に矢を射込もうとした。

「待て」

それより早く、ダッツが犬を走らせていた。

最後尾に犬でもって殿を勤めていたのはどの距離からでも前衛に戻るからだ。

即座にシャモンと並んだダッツは槍を大上段に構え、魔物の襲撃に備えていた。

ほどなく、藪を分けて虫獣種の魔物が連なって沸いた。

「ダッツさん、背後をよろしく頼みますわ」

「わかった」

リムローらの頭上を飛び越えて、ダッツは再び殿へと戻る。気がつけば、虫獣種の魔物に囲まれていた。

「そんな……気配は全く」

「何をいつてるんだい？ここは彼等の住処だ」

慌てるリムローと対照的に、イシュメイルは余裕だ。

「まあ、見てるといいさ……焼き出してやるから」

彼等を取り囲む虫獣種が一斉に回り出した。

黒く、禍々しい渦となり、羽の交差する音が耳障りな音を立てる。熱を持った風が彼等に送られ、やがて、半球状のドームを形成す

る。

イシュメイルが詠唱をはじめようとすると、虫達は一斉にドームを開く。

シャモンが走ったのはその瞬間だった。

厚くなった虫の群れに飛び込み、拳をゆっくりと振るう。

大気がバシン、と弾けた。

弾けた大気に巻き込まれ、魔物達がばたばたと地面に落ちる。

「武器も持たずに……」

リムローはシャモンが暗器を隠しているものと思いこんでいた。

冒険者の中には知性的な魔物に武器を悟られることを嫌い、暗器を使う者も少なくはない。

だが、シャモンはただ己の身体一つで飛び込んでいったのだ。

虚空を打つ腕が鞭のようにしなる。

衝撃が大気の上で弾け、揺らめく波紋を産む。

その波紋に吞まれた魔物はたちまちその波紋の中で歪み、ぱんっ

！と乾いた音を立てて熟れた果実のように弾けていった。

それだけではない。

流麗に、風のように舞うシャモンの身体に魔物は触れることすら叶わず、緩やかに伸ばされた腕に絡められるように抱かれ、一カ所に集められる。

「ホウワンハッパシヨ……ってね……破っ！」

シャモンは一カ所に集めた魔物の群れ一度だけ弄び、地面に叩きつける

気合い一閃、抉れた大地が魔物を呑み込むと、青白い血を吸った。背後ではダッツの槍が重々しく森を薙いでいた。

力一杯振るわれた槍が茂みを破裂させ、その影に隠れていた魔物

を蹴散らす。

槍の先から放たれた衝撃が魔物の群れを呑み込み、断ち斬る。

「こんなものかな」

イシユメールの両腕には炎が生まれていた。

零れた炎が地面を焼き、涼しげな顔で立つ魔術師はリムローの顔をいたずらめいた笑みで見るとその炎を地面に叩きつけた。

地面の中に潜るように消えた炎がやがて、ユーロの前で噴き上がる。

ユーロは腰に巻いた鉄鎖を腕に絡めて、じっとその炎を見つめていた。

「撃て」

ユーロに言われて、リムローは自分がすべきことを思い出す。

次の瞬間だった。

大地を割って炎を纏った三首の巨大な虫が甲高い悲鳴を上げながら姿を現した。

トリクルプルルス。

地中に巣を作る巨大な虫の魔物。

コルカタス大樹林で多く目撃され、小型の虫獣種を従えて人を襲う魔物だ。

群れで遅う小型の虫獣種に注意が向かった人間の足下からその腕で抱き込み、強靱な顎で喰い殺す。

地面の中という人間の追うことのできない場所に逃走することから討伐例はあまり多くは無い。

ユーロはトリクルプルルスに向けて、自らの腕に絡めた鎖を放る。胴体に巻き付いた鎖が軋みを上げて引っ張られる。

だが、大地に根を下ろしたように踏ん張るユーロにトリクルプル

ルスは地面の中に逃げる事ができず、土だけを不様に掘り続けた。

「撃てと言った」

「は、はい！」

リムローはようやく自分の役割を思い出す。

準備時間の少ない、打撃力としての後衛という役割を。

重ね合わせた鋼鉄の合板がしなり、勢い良く矢を吐き出す。

風を切り、ごう、と唸る鉄の矢がトリクルプルスの瞳を貫いた。

「シャギャア……アアアオウ」

甲高い悲鳴を上げて、青白い体液を散らすトリクルプルスはやがて逃げることを諦め、ユーロに向かって突進してくる。

人間三人程はあろうかという巨体を土中に瞬時に隠す節くれだつた腕は、コルカタス大樹林の巨木をなぎ倒しながらユーロに振るわれる。

ユーロが真つ向からその腕を受け止めると、足下の地面が衝撃で割れた。

リムローは信じられないものを見る思いで、だが、次の矢をつがえていた。

「遅いさね」

そのリムローの傍らを駆け抜け、シャモンがトリクルプルスに駆け寄る。

その頭上をダッツの犬が飛び越え、次の瞬間、リムローは自分の常識を覆される信じられないものを見た。

ダッツの犬が木々を蹴り、振るわれたハルバードがトリクルプル

ルスの頭殻を断ち割る。

残像を残すほどの早さで周囲を回りながら、シャモンの拳が、足が、トリクルプルルスを叩き、穿つ。

「ギヤアア……オオオン！」

一拍遅れて魔物の身体が爆ぜた。

頭部を無くし、全身の甲殻の間から青白い体液をまき散らしながらトリクルプルルスが地面に崩れ落ちた。

リムローはつがえた矢の放ちどころを無くし、息を飲む。

「まあ、こんなもんか」

ダッツは打ち倒した魔物の前で息を荒くしている犬をなだめながら小さく溜息をついた。

傍らにしゃがみ込んだシャモンは魔物の死骸をぺたぺたと触り、顎を撫でる。

「……持つて帰るにや、少々、かさばるわな」

「仕方が無いだろう。このまま放置しよう」

イシュメイルはいささか名残惜しそうにトリクルプルルスの死骸を見つめていた。

「え、でも……」

リムローがおずおずと声をかける。

ダッツは面倒くさそうにぼりぼりと頭を掻きながら先に答えた。

「それでも相当な討伐報酬にはなるだろうよ。だけど、ま、ニン

ブルドアへ行くことを考えたらここで引き返すのは少々、痛手なんだ」

「ですけど、金貨一枚にはなりますよ！」

「だがね、これを運んで戻ってくるころには魔物達は俺たちを確実に殺そうとするだろうさ。ニンブルドア程ではないがコルカタスだって相当危険な場所なことくらい、リムローだってわかってるだろ」

ダッツは森の奥を眺めながら、そう呟いた。

リムローが同じ方向を見つめると、確かにざわつく森が見えた。トリクルプルルスはおそらくこの一帯の縄張りを治めていた長なのだろう。

それが倒されたことで、それを倒した相手というのを見極めながら、新たに空いた縄張りを占有しようとする魔物の動きが見える。

「しかしま、なかなかいい動きをするモンだな。暴れる魔物の目を射貫くなんて芸当、狙ってできるものじゃあない」

リムローはそう言われても素直には喜べなかった。

なぜなら、自分より遙かに高みにいる冒険者に褒められたところで、それは称賛ではなく慰めであるからだ。

シャモンはそんなリムローの気持ちを汲んだのか、皮肉げに笑う。

「まあ、精進するこつた。それよっか、進もうかね。夜営するまではその秘密のルートとやらの入り口くらいにはつきたいからぬ」

二度目の襲撃は無かった。

この冒険者達はコルカタスを熟知しているとリムローは思った。

ダッツの知る秘密のルートまではそう時間をかけずに到着できた。コルカタス大樹林の中にぽっかりと口を開けた洞窟だった。

入り口は小さく、粘土質の入り口を潜り、しばらく行くとこつこつとした岩場となる。

松明が無ければ進むことすら難しいくらいに洞窟の中は暗かった。

「ふむ、自然形成された岩盤洞窟とは言い難いね。魔物が生活する為に掘った洞窟といったところか」

「だろうさね。今日はここいらで夜営でもしようかぬ」

だが、それ以上の行進を止め、シャモンはそこで夜営を行うことを決めた。

「まあ、それが妥当だな」

ダッツはその判断に従い、タマと夜営の準備に取りかかる。

松明を灯すと、不気味な岩肌が露わになる。

その頼りない灯りの中で焚き火を起こし、彼等は夜営の準備に取りかかった。

「ねえ、なんで今日はここで夜営するの？」

リムローが聞けずにいた疑問を、タマは正直にぶつけていた。

「魔物が掘った洞窟ってことはこれだけの洞窟を作れる魔物が居

るってことだよ。そうなるといくら何でもそいつ以外とは出会うことは無いから、沢山の魔物がひしめき合ってる外で夜営するよりか安全なんだ」

ダッツが丁寧に教える。

「でも、その魔物にひつついて生活する魔物も居るんじゃないの？」

「だからこそ、小さい魔物が出てきたら即座に引き上げればいいんだ。危険だからこそ、安全だという逆の発想も秘境を探索する上では必要なんだ」

「そっか……危険なのは人間だけじゃなくて魔物も一緒なんだ」

タマは自分なりにその考え方を咀嚼し、知識を積み上げている。リムローは何もできずにただ、彼等のやり方を眺めているしかできなかった。

「お嬢ちゃん。どうだい、独り立ちできるんじゃないかって思ってたそれを挫かれた気持ちってのは」

夜営の準備には参加せず、一人、持ってきた酒をあおるシャモンにリムローは返す言葉が無かった。

シャモンは手頃な岩場に寝そべると、クツクツと笑う。

「変な自尊心は持ちなさんな。自尊心は己を強くする原動力だが、それだけでわたれる程、生き物の世界ってのは甘くはない」

ちやぽん、と妙な形の容器から酒が揺れる音がした。

「至らねば乞い学べ。生きているうちに覚えなければならぬこ

とはいくらでもある。自らのみで立つて歩けると驕るなかれ、我らは兄弟の鎖に繋がれているからこそ、風雨に耐えるものと知れ……なあってな」

シャモンはタマを見て手招きをする。

夜営の準備を終えたタマはシャモンの傍らに來ると、酒を受け取り口に含む。

「……げええ」

酒の味になじめないタマが心底苦そうな顔をする。

「おめーさんにゃ、まだ相伴は無理か」

「こんなもの飲む人の気が知れないよお」

タマは酒をシャモンに突つ返すと、その背中の上に座った。

シャモンはひとしきりタマの頭を撫でると、もう一度リムローに向き直る。

「お師さんの後を追うのはいい。だが、死人に拘り続けるとヘルゲイズに足を引つ張られるぞ？」

「十分、わかっています」

「わかっちゃいないね。生きている人間は死人の先を歩くモンだ。いつまでも後ろを眺めてちゃ、それ以上先にはいけないだろうよ」

リムローはシャモンの言いたいことがわからなかった。

「何が……言いたいのでしょうか。師の後を追うのはいけないことなのでしょうか？」

「捨てられるはずがあるめえよ。お前さんが刻んできた生き様は

お師さんあつてのものだ。だけど、死人に捧げるんじゃないやねえよって
言ってるんだ。ちったあ頭使ってくれよ。生きているうちだけだぜ
？頭使って考えられんのは」

悪態をつくシャモンに苛立ちを覚えるが、タマはにこにこしながら
リムローを見ていた。

「シャモさんは素直じゃないんだモンねー」
「うるっせえよタマ公」

リムローはそこではじめて、それが不器用な、シャモンなりの優
しさだと気がついた。

自分は、危ういのだ。

トリクルプルスを相手にした時もそうだ。

彼等の動きに全くついていけなかったのではない。

余計な思念が、彼等の動きを見ることを邪魔していたのだ。

その余計な思念の発端が師匠の死と、自分が一人でもやっていけ
るのかどうかという不安から来るものと既に、彼等は見抜いてい
た。

「死者に引きずられると、死ぬ」

呟いてみて、それはユーロの言葉であることを思い出す。

冒険者の実感としてその言葉を理解できたとき、リムローは素直
に頭を下げた。

「ご心配、おかけしました」

「心配なんざしてねえよ。どこで誰が野垂れ死のうが俺の知った
こっちゃねえ。だけどユーロの仕事を増やされても飲み相手が居な
くなるから困るだけだ」

本当に素直ではないシャモンの言いぐさに、リムローは苦笑した。

「だがま、不審っちゃ不審だわな」

「え？」

「……その石の板だよ」

シャモンはリムローの腰の鞆を顎でしゃくる。

「ニンブルドアで見つけたものだというのがいささか新しい。そいつはそう問題じゃねえ。後から誰かが持ち込めばいい話だ。それよっか、ニンブルドアで死んだお前のお師さんの遺品が持つて帰られているって話が不思議なんだよ」

「それは……その時一緒だったパーティの方が……」

「そいつは今、どこで何してんだ？」

リムローはその質問に答えられなかった。

師を失った悲しみに暮れ、その時のパーティメンツがどうしているかなど気にも止めていなかった。

「……わかりません」

「まあ、お師さんが死んでそれどころじゃない話もわかるわな。だがね？普通、遺品つつたら、もそつと縁のあるモンを拾ってくるんじゃないのか？」

「言われてみれば……」

リムローははじめて、疑問に思う。

「考えることを止めるな。どんなに苦しくてもだ。考えることをやめた途端、お前さんの世界はお前さんに何も教えてくれなくなる

ぜい」

含蓄のある言葉に、リムローははじめてシャモンの師がどんな人なのか気になった。

「……度々、ありがとうございます」

「礼を言われる筋合いじゃあねえよ」

「いえ、師を失って一人で生きていかなばならないと氣負っていました。シャモンさんの師は既に……」

「お師さんは……まあ、どっかで生きてるのか、あるいはくたばったか……もう、随分と年だったからな」

どこか言いづらそうにシャモンは顔を歪める。

いなくなつた師について語りたがる人間はそう、居ない。

それは、言葉にしてしまえば大切な何かを失ってしまうからだ。

「どんな方だったのですか？」

「元氣な婆さんだったよ。アブルハイマンの炭坑奴隷をしている時の奴隷長で、右も左もわからん俺を仕込んでくれた。冒険者、なんて言われるようになる前の人間だぞ俺は」

はぐらかすシャモンにリムローは微笑を浮かべる。

「だからこそ、お前さんみたいなのを見ると危なっかしいのがわかるんだ。そんな石ころに振り回されるくらいだと、簡単に死にじまうぞ？」

「はい。肝に、命じておきます」

素直に返されるとは思っていなかったのか、どこか齒がゆそうにシャモンは顔を歪める。

夜営の準備が整い終わると、シャモンはそのそと身体を起こして腕を捲った。

「さあて、おじさんがメシでもこさえますかね」

「今日は、私が炊事をします。クソスープは評判悪いみたいなので」

日の光の差し込まない洞窟の中では朝になったことがわからない。だが、ダツツにしろシャモンにしろ熟練の冒険者達は自らの身体にいつ行動を起こせばいいのか刻みつけていた。

朝でも、夜でもない。

身体が求める時に、動く。

眠そうなタマを起こし、手早く夜営を片付けると一同は緊張した面持ちで洞窟を進む。

「……魔法つてのは本当に便利なのだが」

発光する球体を掲げながらイシュメイルはぼやく。

「松明の代わりなんざそうそうできる人間はいねーよ」

「松明の代わりをやりたがる人間もいないからね」

イシュメイルが魔法で作った光が洞窟をぼんやりと照らし、その光を頼りに彼等は進む。

洞窟で灯りをつけずに進む方法も彼等は知っていた。

だが、灯りをつけて進むメリットとデメリットであればメリットの方が大きいことからそちらを選んだのだ。

「魔物が来ない」

ユーロがまた、結論から喋り、リムローは苦笑した。灯りを堂々と掲げて進む人間を警戒し、魔物は襲って来ない。ダッツは犬に周囲を警戒させながら先頭を進む。鼻の効く犬はいち早く危険を察してくれる。

「近いな……」

ダッツが鼻をひくつかせ、怪訝な顔をする。

リムローは同じように鼻をひくつかせるが何の匂いも感じられない。

だが、ほんの少し歩けば、リムローの鼻でようやく拾える僅かな異臭を感じた。

「……火山の匂い、でしょうか」

「硫黄のような匂いだね。だが、正確には違う。これは岩が焦げる匂いだ」

岩を焦がす匂いがするというのはどういう状況か。

それを考えた時、リムローは心臓が早鐘のように高鳴るのを感じた。

だが、決して焦ってはならない。

跳ね上がり、竦む気持ちを腹に収め、張り詰め、それでいて緩まない最も理想とするテンションに納める。

その様を見たユーロは微笑するとリムローの頭を撫でた。

どこか余裕さえ浮かべているユーロやイシュメイルにリムローは緩んでしまいそんな自分のテンションを保つのに精一杯だった。

「タマ公、リムの後ろに下がれ」

「うん」

怖いもの見たさなのだろうか。

シャモンのすぐ側を歩いていったタマはじつと暗闇の中に目をこらしていた。

だが、素直に立ち止まり、リムローが来るとその後ろを少し離れてついて歩く。

先頭のダッツの脇を固めるようにシャモンとユロアールが立つ。

「え……」

それは唐突に目の前に姿を現した。

巨大な、門。

それはそう表現するのが適切だった。

螺旋を描く紋様に彩られた巨大な支柱に乱暴に穿たれた爪痕が複雑だが、精緻な紋様を描いていた。

その紋様の各所には環石が埋め込まれ、淡く輝いている。

その周囲の岩は黒く、焦げており、火の粉が燻り、舞っていた。

「これが……」

「ニンブルドアン」の門だね。ここから先は人の領域を越えねばならない。魔となり、全ての境界を曖昧にできる者のみが生き残れる世界だ」

イシユメールの声が、どこまでも冷たかった。

次の瞬間、咆哮が響いた。

「試される」

ユーロが呟くと同時に、門が揺らいだ。

大気が揺らぎ、景色が歪む。

歪んだ景色の向こうから、それは雷光を伴い、現れた。

「ブラック……ドラゴン！」

双頭の頭を持ち、二つの尾を持つ巨大な魔物だった。

人の十倍の大きさはあろう。

三つの赤い瞳を煌々と輝かせ、先の割れた舌をちろりと覗かせる。二つの禍々しい腕の先には凶暴な鈍色の輝きを放つ爪が伸び、炎を吹いている。

短く畳まれた翼を広げ、黒い竜は彼等を咆哮で威嚇した。

「来るぞッ！」

ダッツの号令とともに各自が散開した。

ドラゴンの炎のプレスが後衛のリムロー達に向かって放たれる。

岩を燃やし、走る炎をリムローは跳躍して避ける。

タマをローブの中に隠したイシュメイルの姿が掻き消え、はるか上空に姿を作り浮遊する。

「ガングライア・ソルニル・ヴァンヘイル……太古の水の記憶、降り注げ！」

イシュメイルは瞬時に印を切り、中空に水を産む。

水は濁流となって虚空からいくつも落ち、それが焼けた岩の上で蒸気となる。

熱された岩盤は人の歩ける場所ではない。

攻撃と防御を同時に行うドラゴンはまさしく、最強の魔物という風聞に恥じない知性を持っていた。

だが、イシュメイルはその牽制すら利用し、ドラゴンを牽制した。

その蒸気の中をダッツ達が走る。

「正面ッ、一番槍は任せろッ！」

ダッツの犬が水の上を跳ね上がりドラゴンの眼前まで跳躍する。
ハルヴァードが銀の軌跡を残し、双頭の竜の目を一つ、叩き潰した。

「ギヤアア……アアアアアアア！」

咆哮が洞窟を振るわせ、岩壁に亀裂が走る。

リムローは弓に矢をつがえると、弦を引き絞る。

正面のダッツにドラゴンの注意が行っている間に、火力を集中させなければならぬ。
屈み込み、限界まで引つ張った弦で狙うべきは頭頂部の瞳。

ダッツのハルバードでは届かない、更に奥にある脳を狙う。

蒸気が視界を遮り、水柱が射線を塞ぐ。

その中で激しく暴れ回る頭に狙いを定めるのは困難だった。

だが、リムローの手を離れた矢はごう、と音を立てて真っ直ぐにドラゴンの額に瞳に突き刺さる。

深々と突き刺さった矢に確かな感触を覚え、リムローは浮かれる。

「そこに脳は無いっ！避けろっ！」

イシユメールの忠告が遅ければリムローは今頃、灰すら残らずに溶けていただろう。

即座に跳躍し、離れたその場をドラゴンのブレスが溶かしていた。

「抑える」

ユーロの腕に巻かれた鎖が放たれる。

真っ直ぐに放たれた鎖はドラゴンの首に巻き付くと、ユーロはその鎖を力一杯引いた。

がくん、と下がった首の位置には既にシャモンが駆け込んでいた。

「いい位置さね」

シャモンはにやりと笑う。

リムローは次の瞬間、信じられないものを見た。

シャモンが鼻の先を軽く撫でた。

「よつと……」

どこか、優雅で静かなその挙動はまるで風の中の花びらを捕まえるようなゆるやかさだった。

だが、その撫でる手を追うようにドラゴンの巨体がぐるりとひっくり返ったのだ。

ユーロが引く鎖が激しく引つ張られる。

ユーロはその力に逆らわず、宙に飛んだ。

黒いコートの中から長い鉄の杭を手にとると、直上から落下しながらその杭を背中に打ち込んだ。

撓んだ腕が、その杭をさらに押し込み、ユーロは呟いた。

「まず、一つ」

青白い血に混じって白いどろりとした体液が噴き上がっていた。シャモンが回したドラゴンの首が激しい絶叫を上げて事切れた。だが、地面でのたうつもう片方の首は生きている。リムローはそのような魔物を知っていた。

「脳が……二つある！」

「ご名答」

シャモンはそう答えながら、立ち上がるドラゴンの身体を駆け上がっていた。

ドラゴンは再びブレスを吐こうと顎を開いていた。

喉の奥に炎が螺旋を描くが、その顎を下から力一杯蹴り上げていた。

爆ぜた炎がドラゴンの頬を貫き、零れた炎が血を焦がし、青い蒸気上げる。

地面を走るダッツが犬を回転させる。

何度も何度も横転させ、ダッツはハルバードに遠心力を与える。

「どお……りゃああつ！」

竜巻のように回り、激しく振るわれた戦斧はドラゴンの硬い鱗を断ち割り、脛から下を両断した。

バランスを崩したドラゴンが膝をつき、ユーロがもう片方の足にしがみつく。

みちみちと音を立てるドラゴンの足にユーロの腕が巻き付き、撓む。

撓んだ腕に血管が浮かび上がり、盛り上がった背筋がみしみしと音を立てる。

ぎりぎりと締め上げられた腕の中で、ドラゴンの足が僅かに変形していた。

ユーロを引き剥がそうとドラゴンが爪を振るうが、その爪は途中に割って入ったシャモンが足で抑えていた。

ごきり、と音がした。

甲高い悲鳴をあげてドラゴンが地に倒れ伏す。

苦しそうにもがくドラゴンの首の付け根にダッツは揚々と駆け寄

るとハルバードを高々と振り上げる。

振り下ろされると同時に、青白い鮮血とどろりとした白い脳症が飛び散り、ドラゴンは動かなくなった。

赤い瞳が力を無くし、黒ずんでいく様を見て、リムローは大きく息を吐いた。

その傍らに降りてきたイシュメイルはタマを地面に降ろすと額に僅かに浮いた汗をローブの袖で拭う。

「……これが宿命とはいえ、か」

どこか寂しそうに呟くイシュメイルを怪訝に思いながらも、リムローは倒れたドラゴンに駆け寄った。

ハンターであれば誰しもが憧れる称号がある。

ドラゴン・ハンター。

自分の力ではない。

だが、紛れもなくそこに横たわるのは最強の魔物と謳われるドラゴンなのだ。

「やるねえ、ダッツ正騎士長」

「飛んでなければどうともなるさ。だが、いい物を見させてもらったよ」

ダッツはユーロを見上げると、苦笑する。

ユーロは怪訝な顔をするが、何も言わなかった。

タマは横たわるドラゴンの傍らに寄ると、ぺたぺたとその鱗を触り訝しげに周りを見て回った。

「……これが、ドラゴンかあ」

タマはどこか真剣な面持ちでドラゴンの死骸を観察していた。

はじめは好奇心で見ているものだとしムローは思った。

だが、じつとその死骸を見つめる瞳がどこか危うくてしムローは訝しむ。

それを心配したシャモンがタマの頭を撫でる。

「タマ公……魔物を知る、ということがどういふことかわかる必要はねえぞ」

「大丈夫。死人に足は引かれないよ。私は強く生きるから」

どこか、暗い響きを持ったタマの声にしムローはこの少女もまた、人に言えない闇を抱えているのだと知る。

「タマちゃん？」

「……強いつてのはきつと、それだけじゃないと知ってるから」

タマの小さな呟きに、何が混じっているのかはわからない。

だが、しムローは確かにこの少女の負う重みの片鱗を感じた。

シャモンはそんなタマの背中を見ながら、小さく溜息をつくとしムルドアンの門を見上げた。

ドラゴンの死骸から広がる青白い血を吸い上げ、紋様が光を放つ。

青い環石が脈打ち、輝くとその扉はゆっくりと軋みをあげる。

イシュメイルはどこか、嬉しそうに呟く。

「さあ、しムルドアだ。生者なき死者の王国によつこそだ」

秘境と魔境の違いは、何であろうか。

秘境については冒険者の間で、定義がある。

人跡未踏の地や、それに準ずる土地。

アルプハイマン山脈の奥地や、ヨシユ砂漠、また、コルカタス大樹林は秘境である。

だが、冒険者でも足を踏み入れてはいけなさと忠告される魔境とは一体何でもって秘境と分かつだろうか。

ニンブルドアへの扉を開いた時、冒険者の価値観はことごとく崩れ去る。

重く、鈍い空気が血と刺激臭を運び、硫黄の匂いがそれを包む。

突き刺さる熱気が大気を歪め、噴き上がるマグマが柱となって広大な洞窟の天井を支えていた。

いくつも伸びる回廊のような岩場が孵化を終えた昆虫の卵の残骸のように広がり、いくつももの階層を作る。

どこまでも広がる広大な洞窟の中、リムローはそこが死者の国と呼ばれる理由を一瞬だけ、考えてしまった。

いくつも答えがあった。

それは、いずれも正しかったのだろう。

だが、そんな逡巡はすぐさま押し流され、リムローはニンブルドアが定めたルールに従わざるを得なくなる。

リムローはその時、はじめて冒険者として、人として越えてはならない線を越えてしまったのだと悟った。

「何なんですかっ！ここはっ！」

半狂乱になって叫びながら、リムローは弓に矢をつがえ続けていた。

その傍らではダッツが槍を振るい続け、シャモンが残像を残して暴れていた。

イシュメイルは多重に呪文を詠唱し、最早何を口走っているのか理解できない。

迸る雷光の中をユーロが悠然と杭を繋いだ鎖を振るい、それらを相手にしていた。

「これが、ニンブルドアだよ。魔物が魔物を喰らい、淘汰し、洗練する魔物の聖地」

どういう技術かはわからない。

呪文を詠唱しながらイシュメイルが答えた。

その間にも雷光に焼かれた魔物が爆ぜ、青白い血を散らし環石へと姿を変える。

だが、その環石にすぐさま矮小な魔物が集まり、喰らい、瞬時にその姿を成虫へと変える。

それらの虫が互いに互いを喰らい、生き残り、人ほどの大きさになった魔物が新たな獲物としてシャモンらに襲いかかる。

だが、その横からカマキリのような魔物が長い鉈でその虫を貫き喰らい、自らの糧としたがそのカマキリもまた別の魔物に喰われた。喰われた魔物の残骸が解け、そこに付着していた微少な卵が一斉に孵化し親である魔物の身体の破片を、まるで、奪われるのを防ぐように喰らいあげ、一気に成虫へと変貌を遂げる。

「気持ち……悪い」

リムローの呟きに、イシュメイルは苦笑してみせた。

「ここには生きている暇が無い。地上と隔絶されたニンブルドアは独自の生態系を持つ。我々なんかが及びもつかないサイクルで生

と死が繋がり、最早、生と死の境界線が無い。そうして淘汰と洗練を繰り返し、次に訪れる時には同じ魔物は二度と見ることはなく、そして、強力なものへと進化している」

イシュメイルはどこか懐かしげに語る。

リムローは三本の矢を同時に放つ。

扇状に放たれた矢が衝撃で魔物の群れを散らす、死んだ魔物の死骸から生まれた魔物が死骸を食い散らかしながらさらに、迫る。

自分の持てる全ての技が、生物の業の前に無力であることを知る。だが、シャモンやダッツはその中にありながらもその生を繋いでいた。

ダッツの槍が幾重にも振るわれ、魔物を近寄せない。

シャモンに至ってはその魔物の中を駆け抜け、一匹の野獣となつて四肢を振るっていた。

濃密された闘争の中に、人という獣が混じり、渡り合っていた。背面から迫る魔物を振り向くことなく振り払った槍で叩き伏せ、死骸から沸き上がる魔物を犬の足に踏ませるダッツにしろ、目にも止まらぬ早さで魔物の心臓を抜き出して潰し、死骸を遠くへ蹴り飛ばすシャモンにしろ、リムローの目からは最早、人の領域を越えていた。

「これが……ニンプルドア」

師が越えられなかった人の領域。

イシュメイルは微笑む。

「まだまだ、こんなものではないさ……シャモンさん！下がろう！人の身でアミノチャージャーを意識的に行えば、身体の疲労も尋常じゃないはずだ。動けなくなれば、喰われるぞ」

彼等はイシュメイルを中心に囲むように再び隊形を取ると、喰らい合いをしている魔物達から離れた。

どつという訳か、魔物達はイシュメイルの側には寄ってこない。

「シンハツハーキイでも数には勝てねえな。やっぱり」

「……瞬初発勁を知ってる騎士だとは思わなかったよ。スタイアの野郎だな？勝手に人に教えるさりやがって」

息を切らせながら吐き出したダッツにシャモンが悪態をつく。

だが、視線は静かに息を吐き出し整えるシャモンの様子を追っていた。

「だがま、その様子じゃあ勝手に盗まれたモンなんだろう」

「あんたがこれの使い手だとは思わなかった。驚かされるよ全く」

「だが、覚えておくといいさ。これは魔物の業だ。人の身で扱えば身を蝕む。勁の練り方を間違えれば、自分に殺されることもある」

「だろうさ。俺も死ぬかと思った時が何度かある」

リムローはダッツのような人間でも、まだ、先にある領域を追い求めて先達を観察していることを知る。

イシュメイルは二人を眺め、ふむ、と一人頷く。

「魔物の行っているアミノ酸の圧縮過給を人の身でやるとはね。

しかも瞬間的に。人間であれば急激に消耗した場合、筋疲労もそうだが体内での生成バランスを崩して死にかなないものなのだが……」

「何を言ってるかわからんが技だよ。魔法つてのが魔物の技を応用したものであれば、人だってそういう技をマネてもおかしくはあるめえさ……しかしま、スタイアもスタイアですんごい秘密を知ってるモンだぬ。ニンブルドアでこうしてくっちゃべれるなんてはじめてだわ」

シャモンはイシュメイルの傍らに居るタマを見て、大きく息を吐いた。

タマは自らの水筒の中にスタイアから貰った御守りを浸し、目を見開いて佇んでいた。

ほのかに、潮の香りがする。

「これが……ニンブルドア」

見開かれたタマの目には、その異様な光景がしつかりと刻まれていた。

絶え間なく進化を繰り返す魔物は最早、尋常なものではない。

高速で空を飛ぶ植物が六首の蜥蜴を食い散らかし、伸ばした蔓が叫びを上げて毛の無い鳥に食われていた。

「タマ公、惑うな。魔道のはじめは惑うことから始まる」

「うん。私は、決して許しはしないから」

そう呟いたタマはなんとか息を飲むと、震える手で水筒をしつかりと握っていた。

「……そいつが俺たちの命綱だ。落とすなよ。ホレ、持ってきてやった」

「うん」

シャモンは緊張して動けないタマのポシェットに青く輝く棒状の環石をねじ込んでやる。

茎のように見えなくてもない。

「ムギユルスの茎、だね」

「うん。ニンブルドアの魔物の体内で形成される器官で高密度の環石が入ってるの。これを三日間、人の血に浸し、すりつぶすことで霊薬が作れる。売れば結構な値段がするんだけど……」

タマの視線の先には魔物達の血の渦が広がっていた。

「……この中で生きて帰れるとは思わないわ」

リムローはそれがどれだけ価値のあるものか、理解できてしまった。

霊薬を作るために、命を危険にさらさなければならぬ。

とてもではないが、自分には得ることのできないものである。だが、しかし。

こちらを視界や感覚器に捕らえる魔物も居る中で、襲ってこない不思議はリムローには幻覚を見せられているのではないかと不安でたまらなかった。

タマが抱える水筒にひたされた布袋が揺れる。

「……それは、一体なんなの？」

「海」

答えたのはユーロだった。

口下手なユーロに代わり、イシュメイルが苦笑しながら説明した。

「正しくは海塩を水に溶かしただけの代物だ。だが、スタさんはいい発想をしている。ニンブルドアの魔物がよもや海を恐れるとはね」

「海……ですか？」

リムローは怪訝に思い、イシュメイルを見上げる。

答えたのはタマだ。

「あのね……魔物は海には生息しないの。この地域で人間が最初に辿り着いたのはオーロードの海岸付近で、そこに国を造った。ほんとうだったら畑とかを一杯つくれる平原地に行きたかったんだけど、そこには魔物が多かったから。でもね、それは逆に海の付近には魔物が少なかったってことなんだよね。となると、海には魔物を近寄らせない何かがあるんじゃないかってスタさんは知ってたんだ」

リムローは舌を巻く。

それはどのハンターでも知らない事実であつた。

イシュメイルがさらにかみ砕いて説明する。

「正確には海にも魔物は存在する。魔物と認識されてはいないがイカやタコ、貝類なんかも正しく学術的に分類するなら魔物となる。自然に発生しえない動物、というのが魔物の定義だが、そんなものは存在しない。だから、アカデミアの先端学術では血液中に青銅分が多く含まれる動物を魔物と呼ぶようにしているんだ」

シャモンが首を傾げる。

「本来、海水は水分が殆どで僅かな塩分を有するだけのものだろうだが、その塩分の中に多様な岩石の成分が混在するくらいだ。それが、なんで魔物を退けるんだ？」

「おそらくの話だ。地上の魔物は人間と違い汗をかかない。体内に溜まった熱は熱咆と呼ばれる器官を通じて永久に溜められる。この熱は出産や排卵の時、ドラゴンなどであればブレスを吐く際に使用され、大量の熱量を内包している。海水に触れた魔物はおそらく皮膚を通じて浸透した塩分に含まれる物質を熱咆に運び、その機能を著しく狂わせるのだろう。そうなれば溜まった熱量が暴発し、木

っ端微塵に砕け散るからだと思う」

イシユメールの説明に今度はダッツが首を傾げた。

「海を見たことのない魔物がどうして海を恐れるんだ？」

「生物にはもともと危険を回避しようとする習性があるんだよ。優れた戦士が危険に聡いのと全く同じだ」

彼等にわかりやすい言葉を使い説明したイシユメールだが、それでも苦しそうな顔をしていた。

「だが、この策が通じるのはニンブルドアの一部分だけだ。この奥にはそんな常識を覆す、本当の『魔物』が存在する」

ユーロは静かに頷いた。

「グリパニヘルの河を渡る。お前の師は、そこで死んだ」

第4章 『死者の王国 愛憎の楔』 9

グリパニヘルの河。

ニンブルドアの奥にあるマグマの大河だ。

焼けた洞窟の岩の上にはいくつもの魔物の死骸が転がったまま、放置されている。

からからに乾いた魔物達の骨がいくつもの死を連想させる。

「ユーロさん、私の師がこの先で亡くなったとはどういうことなのでしょう？」

ユーロはじつとグリパニヘルの河の先を見つめ、段階を経て喋る整理をする。

「死ねば、腐る」

自分でも要領を得ないと思う。

だが、リムローは静かに言葉を待っていていた。

「……腐敗は段階を経て、行われる。だが、ニンブルドアはそれを許さない。腐敗する間もなく、全身を喰われ、死体は残らない」

それはリムローにも理解できた。

「だが、お前の師は墓に埋めるべき身体を持って、死んだ。ならば、死体の残るこの先で死んだはずだ」

それがいいいたいではなかった。
だが、普段、言葉を使わないユーロにとってはこれが自分で説明

できる限界であつた。

不幸なのはリムローがそれを理解してしまったことだ。

「……シャモンさんの言うとおり、不審ですね」

そうではないのだ。

「このような場所で例えば、誰か一人でも死んだとしたら、その死体を抱えるというのはそれだけで大変に危険を伴うはずです……なのに、なんで……死体があることが必要であつたから？それなら……私に何故この石版を？」

リムローは思考の渦がどこまでも疑問を投げかけてくるのを留められなかった。

それが危険な状態であることは理解している。

これから先の危険を想像しなくてはいけない。

だが、自分が既に巻き込まれている危険を想像してしまう。

マグマのはるか上に広がった環石が網目状に広がった橋を渡る。

熱気が痛みを伴い肌が焼ける。

水を被りたい衝動にかられたが、貴重な飲み水を失う訳にはいかなかった。

環石の橋を渡り終えて、足を踏み出す。

リムローや経験の全く無いタマにでさえ、それは感じられた。

背中の熱気が心地よく思えてくる程の、怖気がした。

生物の本能が生きること命じるのであれば、そこに立つことは即ち、引き返すことを本能が命じていることに他ならない。

「……地獄の二丁目とは良く言ったモンだと思うがね」

そう言うシャモンの声も強ばっていた。

そこは生き物ではなく、死した魔物が死んだままに闊歩する場所であつた。

「ここから先は海水なんかものともしない魔物が居る。ここまでくるともう、生き物の常識は通じなくなる。リム、タマ、離れるなよ?」

眼前に広がる窪地には、死した魔物の群れがあつた。

それらは死して即座に孵化した自分の子供に身体を食べさせることなく、死したまま自らが産んだ子供を食していた。

かろうじて、竜の原型をとどめている魔物が居る。

腐肉から骨が突き出し、そこに首の無い子供の竜の姿があつた。

だが、子竜は喉を必死に腐肉に突き立て、親竜の肉を喰らおうとしている。

ぼこぼこふくれあがる身体から突き出た骨が大きくなり、親竜と子竜はやがて境界を無くし、一体の何か訳のわからない魔物へと変貌を遂げる。

「死者の……王国」

「ニンブルドアの本当の狂気はここからはじまる」

イシユメールは呟く。

「グリパニヘルの河から先は、生きる時間が短いとか、死んでもすぐに、とかいう概念すらない。もはやそれが生物であるのかどうかもわからない。生物を形成する末端の一番ちいさなもののすら一つの自我を持ち、より強く、より強くなるために他を取り込む。そこに形は無く、生きていると定義することすら、難しい」

「本当に、悲惨なのはアレさね」

シャモンは融合する竜のさらに奥に居る魔物を示した。

「あれは……人、なんですか？」

「ニンブルドアに来た冒険者の末路だよ」

二本の足で立ち、二本の腕と頭を持つていれば人間であるといえれば人間であろう。

魔物にも、本当に人間に近い形をしたものは居る。

だが、それは明らかに元が人間であるとわかる魔物だった。

「あれは……」

タマは嫌な記憶を思い出す。

ビリハム・バファアの屋敷の奥で見た、あの魔物。

人の首をいくつも持ち、異様なバランスで伸びた腕は朽ちた武器を手にしている。

だが、コウモリや甲殻、異様に伸びた口などが最早、原型が何かすらわからない代物にしていた。

「タマ公。ビリハムのことは今は考えるな。てめえが死ぬぞ」

「う、うん……」

シャモンは厳しい声音でそう告げると、ゆっくりと歩を進める。

広大な窪地に闊歩する魔物達の間接器を探り、その探知圏外を進む。

リムローは見たこともないような巨大な環石が柱のように立つのを見たが、誰もが採掘を試みない。

「下を見てみる、下手に手を出せば喰われる」

気がつけば、その下には魔物が静かに息を潜ませて獲物が来るのを待ちかまえていた。

岩盤のようないびつな瞳をリムローに向け、しずかに佇む魔物にごくりと唾を飲む。

恐怖にひりつく喉がからからに渴き、水筒から僅かに水を口に含むと気を取り直し、先達に続く。

先をゆくシャモンらに遅れぬようについていくと、リムローは信じられないものを見た。

「来たぜ？これがニンブルドアだ」

切り立った谷の上に、自分たちは居た。

その谷の向こうには城があった。

人が住まうような、城である。

だが、その意匠や門などのつくりは明らかに魔物の出入りを考えたものである。

「なんで、こんなモノが！」

「お前さんの持つてる石版ってのはおそらく、あそこにあったんだろうさ」

温い風が吹き上げる。

死者の王国ニンブルドア。

その王城がそこには確かに、存在していた。

魔物の量は城に近づくにつれて多くなっていた。

「巨大な魔物はまだ、いい。だが、小さい魔物に気をつける。こ

こでは大ききなんて強さの目安にならん。小さい奴ほど、強い」

シャモンは一行にそう忠告すると城を目指して歩いた。
先程の場所と比べて幾分、魔物の姿形に統一性が見られてくるようにはなつた。

「……あれは、モルガンティア？」

「の亜種だぬ。こないだヨッドヴァフで暴れた奴よつか凶暴さね。不用意に近づくんじゃねえぞ」

だが、その危険度について言えば先程の訳のわからぬ魔物の方が大分マシなようにも思える。

青い環石の森を抜けると、間もなくニンブルドアの城へと到着できる。

ニンブルドアの城はその全てが環石でできていた。

「なんなんですか……あの城は」

「死者の城。ニザリオンへ至る聖域を守護する死者の王ユルグロード・ニザが住まう城。神話で聞いたことくらいはあるだろう？」

イシユメールが教えるが、リムローは首を傾げる。

「ない」

答えたのはユーロだった。

「……口伝一九九章は、教会でも失伝している」

「おっと、そうだったのか。それは失敬」

リムローは訝しげにユーロを見る。

教会ですら失伝している口伝を何故、一介の墓堀が知っているのだろうか？

「ここまで来れば、大丈夫だ」

ユーロはそう言うと、勝手に夜営の準備を始める。
シャモンはその様子を見ると顔を歪めて溜息をついた。

「まあ、気持ちはわからんでもないが……夜営なんざできるかね？」

「もうすぐ、夜だ。夜は安穩をもたらすものだ」

ニンブルドアには日の光など差し込みはしない。

環石の放つ青い光が照明の代わりとなっているだけだが、ユーロは確かに夜の気配を感じていた。

シャモンは辺りを見回し魔物の気配がしないことを確認すると溜息をつく。

「なら、従うかね」

リムローは環石の樹木に登り、その城の異様を眺めていた。

冷気にひんやりと輝き、青白い光沢に彩られたその城はさきまでの恐怖に造られた幻想のようにも見える。

「死者の……国」

僅かだが、安穩とした時間が与えられたリムローはポシエットから石版を手にする。

唯一、残された師の遺品に思いを馳せる。

師が何を見て、何を思い、このニンプルドアで果てたのか。定まらない自分の行く末を思い、リムローは溜息をついた。

「……眠らないのか？」

声をかけたのはダッツだった。

「あ……ええ、寝付けなくて」

「だろうさ。こんな場所で寝られる神経が信じられない」

ダッツはそう言って、タマを抱えて盛大に鼾をかいて寝ているシヤモンを見て溜息を零す。

リムローはクスリと笑う。

「お師さんのことを考えていたのか？」

「ええ……」

「……よくはわからんが、愛されてはいたんだろうさ」

ダッツは気だるげに息を吐き出すと、リムローの座る枝に立った。リムローはよくよくダッツを観察し、自分が少しだけ勘違いしていたことに気がつく。

「……ダッツさんは、冒険者なんですね」

「正騎士長なんて肩書きがあるから色眼鏡で見られるけど、今、ヨッドヴァフで戦える騎士っていったら冒険者あがりの叩きあげばかりだよ」

「……師となるべき人が、居たんですか？」

ダッツは苦笑して答える。

「居たさ。人は一人で一人前になれるモノじゃあない。何でも一人でできると思ってる奴はガキだよ。まあ、俺も……俺のダチもまだまだガキだがね」

「男の方はいつまでも子供だという話を聞いたことがあります。私は……嫌いではないですよ。そういうところ」

ダッツは苦笑してリムローの額を小突いた。

「年上の男を一丁前に口説こうとしてんじゃねえよ。そんな話をする奴あ同じくガキなんだ。そう言った奴のツラあ拜んでやりたいモンだぜ」

「先日、死んだばかりです」

「……悪い」

バツが悪そうに顔をしかめるダッツにリムローは苦笑した。

「大丈夫です。死人に足を引つ張られるようなことは、もう、ありません」

「そうか……」

そう言ったダッツはどこか寂しそうな顔をした。

「……どうされたんですか？」

「いや……お師さんのことを思い出してな。死んでから大分経ったが、未だに至れずにいると思うとな」

「ダッツさんの師はどのような方だったのでしょうか」

「全ての師がそうであるように……いい人だったよ。両親と違って……本当に俺を愛してくれた」

リムローはなぜだか胸が熱くなった。

「両親から与えられるものを当たり前と思っていた俺をブン殴ってくれたし、俺なんかのために無理をしてくれた。恨み言を言ったこともあったっけなあ。それでも、厳しくしてくれたのは……俺が一人になっても生きていけるように愛してくれたんだろっさ」

懐かしむように語るダッツの顔を見て、リムローは不覚にも涙を流した。

「……おいおい、どうしたんだ？」

「いえ……なんでも……」

「お前さんのお師さんも当たり前前に愛してくれたんだろっさ」

リムローはとうとう、嗚咽を零してしまう。

奴隷解放戦線を経て焼かれた村で、リムローは孤児となった。

奴隷として売られたはいいが、奴隷解放令でもって何も知らないまま世の中に放り出された。

生きて行かなくてはと冒険者になってみたはいいが、何をすればいいのか全くわからなかった。

偶然、荷役を探していたパーティに嫌がられながらもついていったのだ。

それが師であったビガードとの出会いである。

ビガードは荷役としての自分に容赦はなかった。

働きが悪ければ、食べる物も減らされた。

だけど、決して、そう、決して教えることを拒まなかった。

奴隷を経て冒険者になった世代のビガードは自分が誰かにされたように、当たり前のように技を教えたにすぎない。

父親というものがなかったリムローがそれでも慕情を抱くのに時間はいくらもなかった。

早くに両親を亡くしたリムローがそれでも甘えられるのは、ビッグ
ドしかないかったのだ。

「ふぐ……うう……」

零れる涙が、止まらない。

生きていける技を覚える頃には、人としての師を理解しはじめて
いた。

越えようとその背中を追いかけた。

いつまでも先を行く師を追いつけて、ここまでやってきたのだ。

「お師……様あ……」

だが、最早、自分の足で歩かねばならないのだ。

行くべき道を失った彼女は、戦火に焼かれたあの日の少女へと戻
っていた。

父と、母と、兄弟の焼かれた腕をじっと見つめていた少女となん
ら変わりはないかった。

心細く、どうすればいいのかわからなかった。

だけど、それでも前に進まなければいけないことは理解していて。
だからこそ、こんなところまで来てしまった。

もう一度、師と仰いだ父の背中の中の温もりを思い出せると、死者
の国へ。

遅れてやってきた悲しみに、震える胸が熱かった。

「……なあ、リム」

「はい……」

泣きながら、リムローはダッツを見上げた。

「先を歩く人も居る。だが、隣を歩く人も居るんだ」

ダッツの言葉にリムローは震えた。

「生きて帰ったら、友を作れよ。それがお前の力になる」

ダッツはわしゃわしゃとリムローの頭を撫でると鼻を鳴らした。
リムローは泣きはらした顔に弾ける笑みを浮かべて頷いた。

「はい」

「ようし、じゃあ、寝ろ。大丈夫だって。寝込み襲うようなことはしねえから」

精一杯の面白くない冗談が、とても、暖かった。

「おそらく、今日が最後の探索だ」

「はい」

携行する食料や装備品の摩耗を考えると、あと二日は滞在できるだろう。

だが、不測の事態を想定するとなればそれは多少、心許ないものである。

だからこそ、今日で打ち切ると明言することで意識の統一を図る。帰りの行程として安全な行程ではない。

今でこそ、緊張が疲労を押し隠すが確実にそれは彼等の体と意識を蝕む。

リムローは弓を背負うと夜営の撤収を済ませて先を歩くシャモンらに追従した。

「リムお姉ちゃん、はいこれ」

とてとてと近寄ってきたタマがリムローに袋を手渡す。

「これは？」

「環石。少しくらい持って帰らないともつたいないよ」

無邪気な笑顔で笑うタマにつられてリムローも笑ってしまう。

リムローは袋の中にある高濃度環石の量を見て、しばらくは生活できる稼ぎになると見積もる。

そうすると、自然に顔がほころぶ。

「いい顔だ」

ユーロが苦笑していた。

「あ、いえ……その」

「服でも買うといい」

リムローは顔を染めて視線を逸らしてしまう。
奇しくも同じことを考えていたとは言えない。

「……死者の王国の最深部だ。気持ちを切り替えていけ」

先に行くダッツがそう告げ、リムローは自分がニンブルドアに居ることを思い出す。

開け放たれた環石で作られた水晶の扉を潜ると、そこには幻想的な光景が広がっていた。

赤い環石などは見たことがなかった。

それらがまるで咲き誇るように中庭に花壇を作り、城への道を彩る。

風が吹くたびに赤い粒子が舞い、赤い星空を作る。

魔物すら近寄らない城の門を潜ると、そこには目を疑うような光景が広がっていた。

「これは……」

薄く、青白い水が波紋一つ無く城のホールに敷かれていた。

その中心に環石でできた精緻な塔が建てられ、塔の上には雲が浮いていた。

何の目的で作られたかは理解できない。

だが、それは理解できないからこそ彼等の意識を引いたのであってその束縛から解放されれば彼等はその異様さに気がつく。

階段が、あった。

「なんで……こんなものが？」

階段が、あるのだ。

イシュメイルは静かに城の中を見渡すことなく告げる。

「……生物の中で唯一、高度な知恵を持ち広大な生息域、そして発達した社会系統を持つ形がある」

言おうとしていることは、ここまで踏破してきた彼等には理解できていた。

「なら、魔物の形も行き着けば、人間と同じになるってこと？」

タマの疑問にイシュメイルが苦笑した。

「一つの形としてね？……だから、人の使う規格の階段なんかがあるんだ」

愕然とするリムローの横でシャモンが大きく溜息をつく。

「魔性の女つてのを抱いてみるのも悪かぁねえが……」

「あまり、気持ちの良いモンでもねえな」

ダッツは顔を歪めてそう吐き捨てた。

よく見れば、塔の中には人の形をした魔物が居た。

体毛こそ無く、まだ完全な人の形を成してはいない。

だが、そこには明らかに人と同じ姿をした魔物が成長していた。

「……いつまでも見ていても仕方あんめえ」

シャモンは意を決すると城の中に足を踏み入れた。

波紋が広がり、青い水面が赤く染まる。

城が静かに振動し軋みをあげる。

塔が明滅をはじめ、虫の鳴き声のような澄んだ音が響き渡る。

「……来るぜ？」

シャモンは一言だけ添えると、波紋すら立てずに水の上を滑った。その冷たい殺気はリムローですら感じられた。

まるで沸き上がるようにそれらは城の柱の影から姿を現した。

漆黒のローブを身に纏ったそれらは外観から察するに人の形をしていた。

いや、人と縁のある者なのだろう。

それぞれ、手には人が作り出した、鉄の剣を携えている。

「フィッダ・エレ」

イシユメールが忌々しげに呟いた。

馴染みの無い単語に、一同が怪訝な顔をする。

だが、イシユメールはそんな一同に構うことなく、姿を現した黒衣の集団に吠えた。

「フィダーイーは古き盟約に従い、セトメントを果たすッ！主なきニブルグライムにて貴様達は何をしているッ！」

怪訝な顔で振り返るシャモン。

「おい……イシユメール」

「答えよ！ニザリオンの聖域を荒らす不届き者め！フィツダの誇り無きエレよ！」

黒衣の集団はイシュメールの言葉に何も返さなかった。ただ、携えた剣を眼前に立て、静かに身を引くと一斉に襲いかかってきた。

尋常ではない速度だった。

矢のように放たれた黒衣の集団は一瞬でシャモンの側まで駆け寄ると、剣を振り抜きざまに駆け抜ける。

そのまま背後のダツツに斬りかかり、ダツツは僅かに身を捻って甲冑でその剣を滑らせるのが精一杯だった。

弾けた鉄が火花と、澄んだ音を立てた。

呆然と立ちつくすリムローに黒衣の襲撃者が迫る。

眼前で振り上げられた剣を、呆然と見上げるしか無いリムローは確かな死の手応えを感じた。

「……ッ！」

それでも体は反応した。

鋼鉄の合板でできた弓を前につきだし、剣を受け止めようとする。だが、剣は弓を押し、そのままリムローが纏う革の鎧を引き裂いた。

一拍遅れて、焼けるような痛みが押し寄せてくる。

「かはっ……はっ……」

水面に倒れ込み、青い水が赤く染まっていくのがわかった。誰かが自分を抱えるのがわかった。

「お前は、死なない」

ユーロはそう告げると黒衣の襲撃者に向き直った。

襲撃者は跳躍し、ユーロの頭上で錐もみしながら反転するとその背中に剣を振るう。

だが、ユーロの足下にぶらりと垂れ下がった鎖が、まるで意思をもっているかのように跳ね上がると襲撃者を打ち据えた。

ユーロが腕を上げると、跳ね上がった鎖が横凧に襲撃者を叩こうとする。

だが、襲撃者は黒衣を閃かせ、何度も宙返りをしながら跳躍しその鎖を避けた。

その向こうではシャモンが徒手で三人と渡り合う。

目にも止まらぬ早さで振るわれる剣を、幾重にも残像を残し水面を滑り避ける。

背面から心臓を抜き出そうと突き込まれる腕を襲撃者は同じように残像を残して避け、剣を繰り出す。

ダッツは襲撃者の剣を槍で捌くので精一杯だった。

だが、その剣が肩口に閃き、高々と血が昇る。

片膝をつき、水面が激しく跳ねる。

槍が激しく振るわれる。

突き込めば正面に、振るえば円弧に。

衝撃が槍から生じ、襲撃者の黒衣を薙ぐ。

襲撃者の黒衣が衝撃に切り裂かれ、そこから青い血が噴き上がった。

黒衣の向こうでミリミリと音を立てて傷ついた体が再生される。

だが、傷を負ったリムローの目を引いたのはそんな事実ではなかった。

はだけた黒衣の向こう、青白い体躯の胸に刻まれた刺青【タトゥー】。

ヨッドヴァアの紋章。

黒衣の襲撃者には、確かにその紋章が刻まれていた。

タマは最早、生き残れないと覚悟した。

せめて、スタイアにムギユルスの茎を届けられればと思う。

だが、シャモンを振り切った黒衣の襲撃者が自分に向かってくるのを見てそれが叶わないと知る。

「セトメントを果たします」

それは、唐突にやってきた。

青い光が爆ぜ、視界が染まる。

薄く赤く染まった水面に青い環石の塔の影が重なり、紫紺の道ができあがる。

紫紺の道が淡く輝き、青い燐光が泉のように沸き上がる。

沸き上がった燐光は互いに螺旋を描き、絡み合い、そして激しく輝く。

気がつけば、そこに人が立っていた。

「フィダー・イー」

少女であった。

どこまでも白い布を纏い、白銀の髪をなびかせ、紅の瞳を静かに開く。

彼等は言葉を失った。

死者の国の静寂を統べる王城に彼女は鈴の音を響かせ、佇む。

深紅の瞳が彼等を憎しみではなく、親しみを込めて向けられていた。

「……ラザラナット・ニザの愛したイー……グイン・ダフは、古きセトメントのままイーとなる」

景色が一転する。

城の内壁の環石が明滅すると、全ての光を奪い去る。

淡く輝く紫紺の道に、星が広がり、天上の光が全てを包んだ。

彼等は言葉も無く、彼女の前に立ちつくす。

「ニザリオンの扉へは、未だ、至らず。力なきイーを統べる御旗がやがて、汝らに試練を与える。その時、ニンブルドアは汝らと袂を分かつ。それがイーである為の盟約である」

星々の瞬きが過ぎ去り、陽の光で燃え上がる大地が現れる。

それらを背に、少女は告げた。

「力なき赤き鉄の血の民よ。紫紺の姫は告げた。汝らは強さを繋ぐ。だからこそ、ニザリオン・ラザラナットは汝らに寄り添う。だからこそ、力なきグイン・ダフはイーの暴虐を許す。良き友が痛みを受け入れるのと同様に」

少女はどこか寂しげに呟いた。

遠く、遠くから広がる光が意識を呑み込む。

その中で、彼等は消え入るような少女の声を聞いた。

それは、どこまでも哀しげだった。

「それが、私の決めたセトメント」

ブルゾナの木はコルカタスにしか、生えない。

グルマグの蔓を幹に巻いたブルゾナは特有の広い葉を広げ、日の光を浴びていた。

朝焼けに燦るコルカtas大樹林の冷気が肌を冷ます。

熱を持つ傷に、木々の放つ蒸気に載った冷たさが心地よい。

吐き出した息が震え、リムローは自分が今まで夢を見ていたのではないかと錯覚する。

「……なんだったんだ……今のは」

ダッツが呆然として、呟く。

その槍の先には切り払った黒衣が絡まり、風に僅かに揺れていた。シャモンは腕を組み、じつと虚空を見つめていた。

「さて、ね」

どこか思うところがあるようにも見えるが、問いただせる雰囲気ではなかった。

気がつけば、イシユメールとユーロの姿が無い。

「ねえ、シャモさん……ユロさんとイシユ兄がいないよ？」

「大丈夫だろうさ。心配する方がバカを見る」

「でも、ひよつとしたら……」

「濁水痰魚、清水に戻らず。本来はかくあるべきなんだろうさ」

そう呟いたシャモンは腕をほどくと、リムローを抱えた。

「……手ひどくやられてるな」

「大丈夫です」

強気に答えたリムローだが、腕に違和感があった。

「大丈夫な訳ねえよ。毒の仕込まれた剣なんざ受けやがって」

シャモンは手早くリムローの鎧を外すと腰に吊した容器から酒を口に含むと、手早くリムローの酒を吹きかけた。

「痛っ！」

「我慢しろ」

シャモンは袖からいくつかの丸薬を手にとると、それらを手のひらの上に載せて叩いて潰すと粉末状にする。

それを自らの口に含めると、リムローの肩口に吸い付いた。

「ひゃ」

シャモンの舌が傷口をなぞる。

丸薬は毒に自らが冒されないようにするための予防でもあり、また、毒を吸い出した傷口の悪化を防ぐものでもある。

シャモンはひとしきり毒を吸い出すと自らの外套を破ると応急の包帯を作り、それでリムローの傷を塞いだ。

その隣ではダッツが自分で傷の手当てをしており、タマが手伝っていた。

「応急措置が済んだら引き上げる」

ダッツが怪訝な顔をする。

「ユーロとイシユメールはどうするんだ？」

「戻れなければ死ぬ。それだけだ」

リムローは背筋が寒くなる。

タマがどこか恨めしいような目でシャモンを見ていた。

「タマ公、そんな目で睨んだってどうしようもあるめえよ。止めやしねえぞ？お前が一人でニブルドアに行つて探してくるのは自由だ。どの道、今の状態で探しに行ける訳もねえ。俺たちですら下手をすればここで命を落とす」

それはどこまでも冷静な判断だった。

反論はできない。

従うしかない。

皆が悲嘆に暮れる中、それは姿を現した。

「ひどいな」

ユーロだった。

その後ろにはイシユメールも居る。

「ああよかった。小便している間に置いてかれたらどうしようかと思つたよ」

シャモンは呆然として、それから、苛立ちを隠せずに頭を振る。そして、唸るように二人を睨みつけると吐き捨てた。

「……小便して死んでこいこの野郎！しんみりしちまつたじゃねえか！」

第4章 『死者の王国 愛憎の楔』 11

ヨッドヴァフまでの道中は取り立ててアクシデントに見舞われず、戻ることができた。

「……サブオーダーになるのでしょうかね」

途中、ダッツの犬が引く荷車の荷台でリムローは黒い布を弄んだ。それはダッツの槍の穂先に引っかけかかっていた襲撃者の黒衣だった。現実味を帯びない死者の国へ赴いた確かに残る証は、逆に生きていることが幻に思える。

「そこは交渉の腕次第だろうさ。適当に話を盛るンだよ。コツは本当三割の嘘七割。自分がその光景を見た信じ切ることだな」

ダッツはそう言ってぼんやりと空を眺めていた。

「……随分と詳しいですね」

「そりゃ、昔、大分盛ったからな」

街道に出てしまえば、最早、安全であった。

のどかな日差しの中、どこか気の抜けた彼等はそんなとりとめもない話をしていた。

考えるべきことは沢山あった。

「真理が無くても世界は回るかね」

「君が言った台詞だろうに」

シャモンはどこか面白くなさそうに御者をしていた。

そんなシャモンをからかうようにイシュメイルが苦笑していた。
隣で同じく御者をしているユーロは終始無口だった。

「ふんふん すんすんすん」

適当にリズムを口ずさみながら浮かれているのはタマくらいのものだ。

いや、正しくは彼女も考えてはいるのだろう。

だが、多くの冒険者がするように生きていることを素直に喜ばなければならぬ。

「おう、タマ公。上機嫌じゃあねえか。金の使い道でも考えてンのかね？」

「うん」

このような生活を繰り返せばいつかは死ぬ。

だから、得た物は使えるうちに使ってしまった方がいい。

次も生きて帰られる保証が無いのだから。

「あ、グロウリイドンだ！」

しばらく帰ってないようにも思える。

とりあえずは腹一杯食べて、暖かいベッドで眠りたい。

そう思うと、何故だか無性に、リバティベルを思い出すのだ。

リムローが冒険者ギルドに呼び出されたのは、報告を終えて数日後であった。

副食の報告も済ませ、審議に入ると言われたきり、音沙汰が無か

った。

だが、リムローとしては副食を貰えなくても十分なだけ、稼いでいた。

金貨五枚と幾ばくかの銀貨があれば、年を越すまで何もしなくてもいい。

だが、壊れた弓や古くなった防具、そして、新しい場所に馴染む為にその蓄えを使おうと考えると、もう一仕事なくてはいけないかもしれないと考える。

少し、簡単な仕事で慣らそう。

そう考えていた矢先に、副食が渡されるという話があったのだ。

サステナ・スリイジは焦っていた。

だが、その焦りを見せるほど幼くは無い。

冒険者ギルドの長として、無事に仲間が戻ってきたことを表面上は装い、彼女の話を聞いていた。

「……以上で報告を終わります」

再度、報告を求められたリムローは少し、盛りすぎたかと心配した。

しかし、元々ニンブルドアなど多くの人間が行ったことすら無いのだ。

ましてや最深部にある城の話など、誰が信じようものか。

だが、サステナはそれを疑う素振りすら見せず、彼女が証として見せた高濃度の環石と赤い環石を眺め、満足そうに頷く。

リムローが換金できずに取っておいたものだ。

高濃度の環石は通常使われる魔導具には使用できず、もっぱら研究用にアカデミアや王室が買い取る。

だが、その買い手への繋ぎが無いリムローにとっては高価なのが持てあます宝石と同じようなものであった。

「それが事実だとしたら、大変ね」

サステナは小さく溜息をつき、厄介事を抱えたと心底思う。

ニンブルドアに行く冒険者の多くが、生活に窮し、あるいは、一攫千金を夢見る大馬鹿者のいずれかだ。

かつて自分も挑み、その現実の前に退いた経験がある。

だからこそ、サブオーダーまでちらつかせて本格的に探索をさせたのだ。

サステナはヨッドヴァフの紋章が入った石版を手にとり、改めるように尋ねた。

「これは、本当に買い取らせてもらっていいのかしら？」

「はい、構いません」

淀みなく応えるリムロー。

未練が無いといえば、嘘になる。

だが、未練を引きずっていても前にはすすめはしない。

だからこそ、手放すことを決めた。

「わかったわ……なら、買い取らせてもらうわ？ニンブルドアのものであれば欲しがる買い手は多いでしょうし」

しかし、サステナにとってこの石版はまた、別の意味を持つ。

銀貨を渡す手が震えていることを悟られないようにしながら、サ

ステナは平静を装った。

「ニンブルドアの奥に、まさか城があるなんて思わなかったわ」

「教会の口伝に、その内容が記されているらしいですね」

リムローとしてはとりとめもない会話のつもりで返したのだが、

サステナはその裏に潜む真意をじっくりと探っていた。

「調べてみるのも、面白いわね」

「失伝しているという話ですから、骨が折れるかもしれませんね」

苦笑するリムローにサステナは悪意が無いことを知る。

だが、それでも油断はできない。

「でも、正直助かったわ。邪教徒の本拠地がニンプルドアの奥地に存在することがわかっただけでも対策が立てられた。巡回司祭隊が無事、邪教徒を殲滅してその長を捕らえることに成功したのもあなたたちのおかげよ？」

リムローはこれが副食が遅れた理由かと推測した。

ならば、存外、冒険者ギルドのマスターは信頼できるのかもしれないと思う。

結果が出て、はじめて副食が正しかったとわかればその信義に応えて報酬を支払うべきだ。

働きに、見合った報酬を。

冒険者の鉄則を守ったギルドマスターは信用できるとリムローは単純に考えてしまった。

だが、リムローが副食の話を書いたように、サステナもまた話を盛ることについては得意とされていた。

年季が、違うのである。

サステナはその話をリムローに振り、どこまでこの少女がこの件に関わっているかを計ったのだ。

これから予想されるであろう後始末を考えれば、その手間は少なければ、少ない程いい。

ましてや、手間が増えれば増えるほど、別の面倒が重なるからだ。

「副食は新しい皿で届けておくわ？これからはどうするツモリ？」

それは新しい仕事の斡旋だろうとリムローは察した。
事実、サステナもそのツモリであった。

「しばらく、休もうかと思っています」

ニンプルドアは相当、堪えた。

しばらくは英気を養おうと思った。
友達を、作ってみようと思っていた。

「残念ね」

サステナはそう言う肩をすくめる。

それで話は終わりなのだと思したリムローは軽く一礼をして部屋
を出る。

その背中を見送り、サステナは小さく、そう、小さく告げた。

「……………永遠にお休みなさい？」

しばらくぶりに懷が温かくなっただと思えば、また、寂しくなった。

「シャモさんどんなお金の使い方してるの？」

ツケを支払ったばかりで、またツケで飲ませてくれと申し出たシャモンに流石にタマは呆れてしまう。

「いやあ……その、なんだ。穴の空いた財布にゃ金は貯まらんって言うだろう？まあ、そういうこった」

バリバリと頭を掻くシャモン。

確かに依頼料の貰いは少なかったが、現地で採掘してきた環石の量を考えれば、相当の額を持っているはずではある。

リムローですら年を越そうと思えば越せるのだから、それをすぐさま使い果たしてしまうのは逆に一つの才能ですらある。

タマは大きな溜息をつく。

「働かざるもの喰うべからず」

厳しい給仕に救いを求めるようにシャモンはラナを見上げる。

ラナは小さく溜息をつく。タマに向かって顎をしゃくり、何か用意するように告げた。

タマは信じられないといった素振り。首を左右に振るとシャモンを見上げる。

「スタさんはラナさんのヒモだけど、シャモさんは私のヒモだね？」

「おうおう、それでいいってや。美人になったら嫁に貰ってやんよ」

「断る！」

けらけらと笑うシャモンにタマは鼻息を荒くして拒絶を示した。

いつものようにエールをたかるとシャモンはそれを煽りながら店内をぐるりと見回した。

いつもと変わらない喧噪がやけに心地良い。

だが、その喧噪の中に見慣れない人間が居るのを知ると怪訝に思う。

「ねえ、シャモさん」

「……わかってらい。しばらく様子を見ておけ」

その客は一見すれば他の冒険者と変わりはない。

その所作や物腰から冒険者であることは間違いないのだろう。

だが、仕事を探す訳でもなく、申し訳なさ程度に飲み食いしなげらずと店内を見回しているのだ。

「初めての店なら、ありえるっちゃありえる」

だが、シャモンはここ数日、入れ替わり立ち替わりこのような客が居ることを知っていた。

それは無論、タマも同様である。

「ラナさんやスタさんに言っただ方がいいかな？」

「言っただところでラナさんは何もしねえよ。スタは今、動けねえだろ？おっちゃんに任せておけ」

シャモンはそう言ってタマを安心させるとその冒険者から目を逸

らした。

やがて、その冒険者はひとしきり飲み食いを終えて勘定を済ませると店を出て行った。

その冒険者と入れ替わり入ってきたリムローがシャモンを見つけにこやかに微笑む。

「やあ、ご同輩。元氣そうだね」

「ええ、おかげさまで」

リムローは最近、ちよくちよくと顔を出し店に金を落としていく。店の常連に顔を覚えてもらうのと、次の仕事にありつくための下準備だ。

「副食の皿も届いたから、しばらくは安泰です」

「そうか、そいつは僥倖。はした金だが、それでも金は金だからな」

シャモンはそう言って立ち直ったリムローを見て苦笑する。

これならば、大丈夫か。

だが、心配事は別にある。

「おめえさんの周りで最近、変わったことはねえか？」

「変わったこと、でしょうか？」

その様子では何も無いのだろう。

シャモンはひとしきり思案すると、頭を振った。

「いや、何もなければいいんだ」

「何かあったんでしょうか？」

「どうにも年を喰うと取り越し苦労をしちまうようになるのさ」

シャモンはリムローの頭をこしこしと撫でる。

そうしてしばらくしていると、小さな子供が店に入ってきた。襤褸を纏った貧相な子供だ。

子供はシャモンにそそくさと近づく。

シャモンは外套の袂から銅貨をいくつか掴むとカウンターに放った。

ラナは慣れたもので、手早く食事を作ると少年に振る舞った。

「シャモさん！自分ののはツケで人には奢っちゃうんだ！」

「こんなことばかりしてるから貧乏なんだぬ。俺は」

タマが呆れて怒鳴るがシャモンは苦笑するだけだ。

少年は火の通った食事を食べるのは久しぶりなのだろう。

シャモンの膝の上でがつつくように掻き込む。

「……ソウシュ。やはり、ソウシュがおっしゃった通りでした」

少年は飯をかき込む手を休めることなく、小さな声で呟いた。

「冒険者ギルドは、アサシニングルドと繋がっております」

それはシャモンにしか聞こえない、小さな声だった。

「ファイダーイーか」

「おそらくは、アカデミア……教会も」

「して？」

「……冒険者ギルドはニンブルドアの秘密を独占して利を得ようとしております。その為の口封じの前段階と見るべきかと」

シャモンが少年の頭を撫でると、少年は口を嚙み、再び食事に熱中した。

リムローは厳しい顔を作るシャモンを怪訝に思い、尋ねる。

「あの、シャモンさん？」

「……なあ、リム。こいつは余計なことかもしれねえ」

そう呟いたシャモンはどこか怖かった。

「自分と違うものについては、人は理解が早いんだ。だがね、自分と同じだからこそ理解できないってことの方がおつかねえんだ」

「……シャモン、さん？」

「人を魔物と思え。いや、人間なんざ魔物よつかタチが悪いんだ……悪辣で、残忍。そして、てめえが生きる以外にも平気で他人に痛みを押しつける」

リムローはシャモンが伝えようとしていることを必死に理解しようとした。

シャモンは迷うように、そして、確かな意思を持って告げた。

「そんな魔物をこの店は金貨5枚で殺してくれる」

それが、どんな意味かを考えてしまった。

だが、シャモンは頭を振ると酔った様子で大きく息を吐いた。

「酔っぱらいの戯れ言だ。忘れられるなら、忘れちまえ」

シャモンはそう言ってリムローの尻とも、腰とも言えない場所を叩くと苦笑した。

そして、誰にも見られないように顔を伏せて獰猛に呟いた。

「確かめにやあ、なるめえ」

ひとしきり思案した後、シャモンは席を立つと店を後にしようとする。

立ち去り際にカウンターの向こうにしまっている酒瓶をちゃっかりと懐に入れる。

「ちよつと！どこいくの？」

「懺くせえところだよ」

アカデミアは本来、一般人の来訪をよしとしていない。

だが、冒険者制度により学士の資格を得た者はそこで学ぶ為に一部分だけの開放を許される。

当然、学吏や教授になれば開放される箇所は多くなる。

「だが、君のような人がこうして顔パスで入ってくるのはよろしく無いなあ」

イシユメールは苦笑しながら自室にシャモンを招き入れ、酒を煽っていた。

「いいじゃねえか。お前さんだって雑務に追われてンだろ？こうでもしねえと、ゆつくりできねえんだろうさ」

「ふむ、まあ、それもその通りか」

イシユメールは苦笑してみせるとシャモンが真面目な顔を作った。

「……なあよ？俺とお前は別に友達でもねえ。だけど、親しくあろうとは思っ。そうなると、隠し事は互いにしたくはねえんだよね？」

「ふむ」

イシュメイルは普段、人には見せないシャモンの真摯な態度を前に酒を煽る手を休めた。

「何事もそうではあるが、噂っていうのは一人歩きしまうモンなんだよ。例えば、褐色の幽霊なんかがいい例だ」

シャモンは自らも酒を煽り、語り出す。

「人々は口々に噂をする。鐘の鳴る日には幽霊が出る。人が死ぬと。だが、その実態は違う。それと同じことだと俺は思っている」

イシュメイルはそれだけを聞いて、シャモンが何を言いたいのか理解した。

「ファイダーイーか」

「……ああ。俺達のやっていることは言っしまえば他の国で言えバアサシンの仕事だ。報酬を得て、人を殺す。その倫理は今も問わん。だが、この国ではファイダーイーと呼ばれ、始末を行うことをセトメントと呼ぶ。そこには何の意図があつて行われているのか」

「……一般的には天秤の調整だ。世の中がうまく回るためには、力を持ちすぎたものや平穩を乱す者を人知れずに排除する。そういう需要も確かに、存在はしているからな」

「だがね、その奥にある真意は別だろう？」

イシュメイルは面白そうに微笑んだ。

「ふむ、真理が無くても世界は回る。これは君の台詞だったはずだが？」

「だが、真意は知っておかなくちゃ、友達づきあいではできねえよ」

シャモンはそう言って酒を喉に押し込む。

空になった瓶を放り、イシュメイルの私室のワインを適当に見繕って上部を折る。

イシュメイルはそんな様を見ながら苦笑すると続けた。

「それは、コウコソウシュとしての言葉かね？」

シャモンは酔いの回った気だるげな、それでいて鋭い瞳でイシュメイルを見返した。

「そうだ。アサシングルド、ファイダーイーのニザ・イシュメイルに尋ねている」

イシュメイルはどこか冷淡な笑みを浮かべてシャモンと対峙した。

「鉄鎖開放戦役の後、冒険者にもなれず浮浪の輩となった奴隷を纏め上げた者が居た。それらは浮浪の身なれど身を寄せ合い、いくつもの目と耳を使い、ヨッドヴァアの全てを掌握する群草の輩」

「数は力だ。だが、方向の無い力は離散する。俺達はそれを奴隷解放戦役で知った。だから、我が師は初代宗主として江湖を纏め上げた」

そこには普段の様子からは想像できない一人の首領の姿があった。床にどっしりとあぐらをかき、酒を煽るシャモンにはいつもの浮浪者ではなく、多くの者を纏める風格があった。

「だが、その真意は単純だ。力なき者が寄り添い、生きるため。それ以上も、それ以下もねえ。自らに仇なす敵が現れれば力を集め、それを打ち倒す。また、力なき者があれば寄り添い生きていくことをする。さて、ファイダーイー。お前さんがたは一体、何の為にセトメントをしている？」

「天秤を傾ける分銅を選び分ける。それがファイダーイーの果たすべきセトメントだ」

イシュメイルはそう答えて、シャモンと相対した。
イシュメイルの朗らかな笑みはどこか残忍に歪んでいた。

「だが、この答えでは君は納得しないだろう。そうとも、全ての言葉に意味があるようにファイダーイー、セトメント。それぞれに意味がある。私はこれから君に生物学の講義をしてさしあげよう」

イシュメイルはそう言つて椅子に座ると語り出す。

「君も知るように、魔物には知性がある。知性の高い魔物は意思の伝達に言葉を用いる。それは生物が持つ、最も純粹で高度な意思の伝達方法である暴力とは違い、お互いの妥協を互いに傷つくことなく得る為にだ。そこで、君に尋ねよう？言葉というのはどうすればできると思うかね？」

「俺に学は無い。が、しかし、農耕が人の言葉を産んだという話は聞いたことがある」

「それは当たらずとも遠からずだ。農耕が産んだのは余力だ。生きる以外に生物が余力を傾けることができるようになった時、文化が生まれる。余力は生物の数を増やす。そうすればその数を力とするために社会が生まれる。人という動物はそれが顕著ではあるがね？」

イシュメイルはまるで人を見下すようにそう告げた。

「文化を担う一端に、言葉というツールが存在する。一つ概念を音、あるいは象形でもって表す手法のことだ。さて、人が人の言葉を操るように、魔物は魔物の言葉を操る。ファイダーとは、セトメントとは、そして、ニザとは人の言葉に置換してどのような意味を持つか君は知っているかな？」

「ファイダー……いや、フィツダは魔物の総称だ。イーとは隣人、仲間。ニザとは力ある者を示す。そして、セトメントは……誓約」

イシュメイルはほう、と感嘆の息を漏らす。

「コウコソウシュともなれば博識だ。だが、今、このヨッドヴァフではファイダーイーはアサシングルドの総称、セトメントは始末、ニザはその意志決定を下す者として知られている。では、尋ねよう。それは間違いと言い切れるか？」

「学は無いと言った。そこに意味があるのであればそれは否定はできません。俺たちが言う皿も食器ではなく、報酬の受け取り分だからな？」

「そうとも、そうして言葉は一人歩きをはじめ。様々な意味を持ち、様々な意図を持って使われる。元にどのような意図があったのかは最早、関係は無くなってくる。人が行うセトメントは人に対して行われている。君が知るべきはその真意だ。そこを辿れば、いつかはやがて辿り着く」

イシュメイルは嘲るようにそう告げる。

シャモンは大きく息を吐くと、立ち上がった。

「それは少なからずとも、お前さんの真意と合致するののか？」

「人はそれぞれに思惑を持つ。僕らが求める真意と、彼等が望む真意は違う。だが、その為に行われる行いには、相違は無い」

シャモンはそれだけ聞くと、席を立った。

「彼女を助けようとするのかい？」

「……荒野開闢、草集いて流るる水に森とならん。あの娘は、未だ一人で生きる術を持たない」

「優しいな」

「それが、人の強さだ」

シャモンはそう言つて背を向けた。

イシュメイルはふむ、と頷き、一瞬だけ逡巡した。

それは彼が告げるべき真実ではないのかもしれない。

「フィツダ・エレは放たれた。凶刃は閃いた」

「……なに？」

シャモンは振り返り、驚いた顔でイシュメイルを見る。
イシュメイルはどこか哀しそうな顔で告げた。

「隣人は、悪意を持って我々を利用する」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5915y/>

誰が為に、鐘は鳴る。

2011年12月27日19時46分発行